DRAGON QUEST

ドラゴンクエスト

モンスター物語

DRAGON QUEST

ENIX

カバーイラスト：中沢数宣
カバーデザイン：水野敏雄

ドラゴンクエスト

モンスター物語

CONTENTS

ARMOR KNIGHT
呪いのブラックメイル
40

STONEMAN
金色のストーンマン
6

BOMB ROCK
爆弾岩・故郷への旅
60

MUD HAND
無限増殖の謎
18

MIMIC
宝箱に潜む恐怖
68

METAL HUNTER
謎のメタルハンター
24

MUD DOLL
泥人形の秘密
74

KILLER LYCANTO
キラーリカントの栄光
32

モンスター物語

アレフガルド小劇場 155

GOLEM
メルキドの守護神ゴーレム 84

アレフガルドの歴史
魔王軍団の編成 167

BABY SATAN
悪魔族出世双六 96

モンスターワンポイントレッスン
植物系の魔物とは？……23
人間が産みだした魔物……67
怪しい宝箱の中身……73
泥人形は役立たず？……83
はぐれメタルとまだらくもいと……143

CHIMERA
合成魔獣異聞 106

SLIME
スライム年代記 112

アレフガルド

五つの大陸と無数の島々からなる広大な世界。

精霊神ルビスによって創造された神秘の領域。

この地には人間以外の様々な生物が棲息(せいそく)している。

人間とほとんど変わらない知性と感情を持つ者……

頑固(がんこ)だが信義に厚いホビットたち

そして人嫌いではずかしがりやの妖精の一族。

だがこの世界を一度でも訪れたことのある者にとって、

最も印象的な生き物……

それは数百種にのぼる異形の魔物たちだろう。

人知を越えた生命力を秘め様々な能力を備えた彼ら、

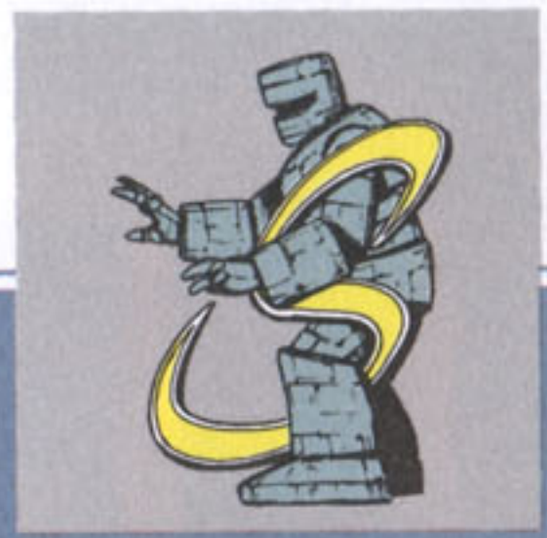
怪力、そして凄まじい破壊力を持つ魔力、人間にとって最悪にして最大の脅威。

だが、このアレフガルドに暮らす人々はそんな魔物たちの中に

時として人間以上に人間らしいなにかを見ると言う。

ここで語られる幾つかの物語はそんな魔物たちの隠された一面であり、

未だ知られざるもう一つの伝説である。



STONEMAN

金色のストーンマン

ストーンマン

それは今から数百年前、ラルス十六世の御代のお話です。

ラダトームの街の対岸に位置する竜王の居城　その大広間では今まさに作戦会議が開かれんとしていました。

「陛下にはご機嫌ななめのようじゃの……」

「当然じゃろう。刺客として差し向けた魔物の大半は倒され、おまけにラダトームの姫まで奪い返されたんじゃから」

魔物たちがヒソヒソと言葉を交わしている通り、竜王の機嫌は最悪でした。ロトの血を引くと自称する若者のため配下の魔物たちは次々と敗れ、その上せっかくさらったローラ姫まで奪い返されてしまったのです。姫を閉じ込めた迷宮の警護をしていたドラゴンがやられたことも、竜王の血圧を上げていました。

「エーイ！　我が眷族ともあろうものが、ふがいない！」

竜王も最初に勇者が現れたときは、たかをくくっていたのです。

「フン。たかがこわっぱ一人ではないか。我が軍勢の前にはひとたまりもないわ。ま、せいぜい頑張ることだな」

と、鼻で笑っていたのです。しかしもう事態はそんな生易しい状況ではありません。

竜王の方が「せいぜい頑張らねば」うっかりすると「ひとたまりもない」ってなことになりかねません。

「かく成る上は誰でもよい。ロトの勇者という若造の首を取って来た者を、余の後継者としようぞ！」

一瞬、広間にざわめきがひろがりました。竜王の後継者ということは、うまくすればこのアレフガルドの支配者です。

「必ずやこの大魔道めが」

「なにを言うかこのダースドラゴンが」

我も我もと魔物たちは広間を出て行きました。

「クソ！　なんという欲の深い奴らじゃ。今まではあの若造恐さに隠れておった者まで勇んで出て行きおったわい」

竜王はため息をつきました。ところが……

「誰じゃ？　まだ誰ぞおるのか？」

広間の一番隅、大きな柱の陰にいたのはストーンマンでした。

「おまえは行かんのか？　わしの話は聞いたであろう」

竜王はストーンマンに尋ねました。

「アレ皆いない。会議終わったのかな？」

どうもよく分かっていない様子です。

「いいかストーンマン……」

竜王もストーンマンがのんびりしているのはよく知っています。噛んで含めるようにゆっくりと今の話を繰り返しました。

「分かったであろう？　さァ、おまえも早く行くがよい」

「それで、その勇者って何者なんだ？」

チュドドーン！　ついに竜王の堪忍袋も緒が切れました。目から怪光線、ではなく全身から電撃がほとばしります。ギラ、いやいやベギラマクラスの電撃呪文です。もっともストーンマンの身体にはさして影響はないようですが……。

「エーイ勇者と言うのは余に仇なす人間じゃ。余の思惑を次々とぶち壊す憎き小僧じゃ」

「分かった。俺そいつやっつける」

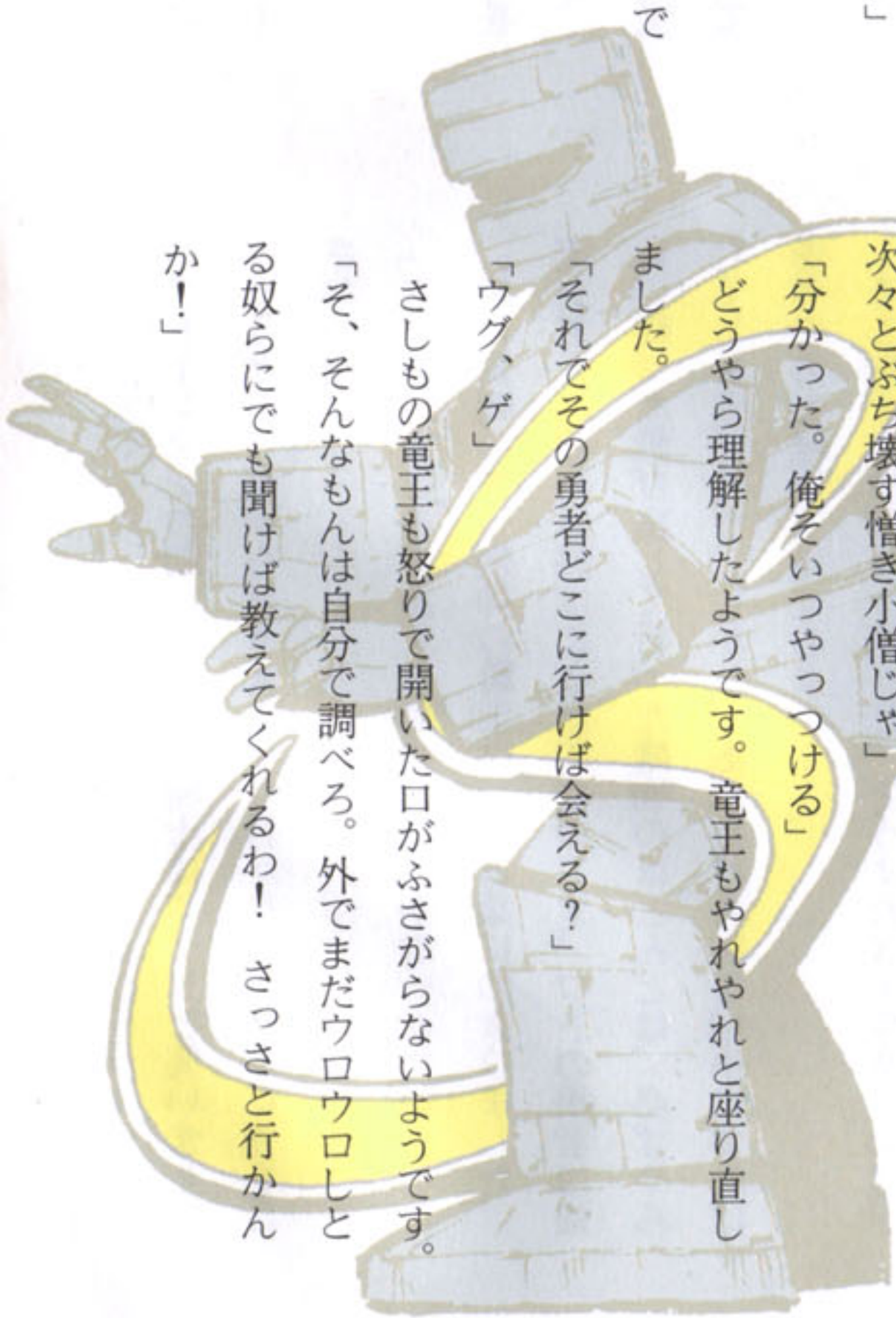
どうやら理解したようです。竜王もやれやれと座り直しました。

「それでその勇者どこに行けば会える？」

「ウグ、ゲ」

さしもの竜王も怒りで開いた口がふさがらないようです。

「そ、そんなもんは自分で調べろ。外でまだウロウロしとる奴らにでも聞けば教えてくれるわ！　さっさと行かんか！」



ゴーッ！　あまり腹を立てたので、竜王の言葉はすでに火炎に変わっています。メラ、いえいえメラミかメラゾーマ程度の威力がある炎が、広間を荒れ狂いました。

「分かった。それじゃオレ行く。さようなら陛下」

ストーンマンはそう言うと、ペコリと頭を下げて広間を出て行きました。今の炎の影響もほとんどないようです。

「ウーンあいつもなァ、アレでもう少し頭が良ければ呪文の一つも覚えられるだろうに。マ、ソレが無理ならせめてもうちょっと素早ければ、ロトの勇者とて歯がたつまいに」

竜王はそう一人でつぶやきました。

そんな竜王の声がストーンマンの耳にも届きました。もっとも彼には言葉の意味を全部理解することは出来ません。ただ、「素早ければ」と「勇者も歯がたたない」という二つのフレーズだけがしっかりと記憶されました。

ズシン、ズシンと城を出ると外にいたのは死神の騎士、一人だけでした。

シャーコ、シューコ。死神の騎士は手にした巨大な斧（おの）を一生懸命砥石（といし）で研（と）いでいました。

「アレ？　ほかのみんなはもうロトの勇者のトコへ行ったのか？」

ストーンマンの問いに死神の騎士はニヤリと笑いました。

「そうとも、だからおまえも早く行かないと誰かに先をこされるぞ」

「フーン、ところであんたはなんで行かないんだい？」

鋭い質問です。死神の騎士は一瞬言葉につまりました。実を言えば彼の思惑はこうだったのです。ロトの勇者は強い。従って飛び出して行った魔物のほとんどは、必ずやられてしまうだろう。しかし、あれだけの数を相手にすれば勇者の方も無傷ではすむまい……。

「そこをオレ様がバッサリと。そうすれば次期竜王の座が……」

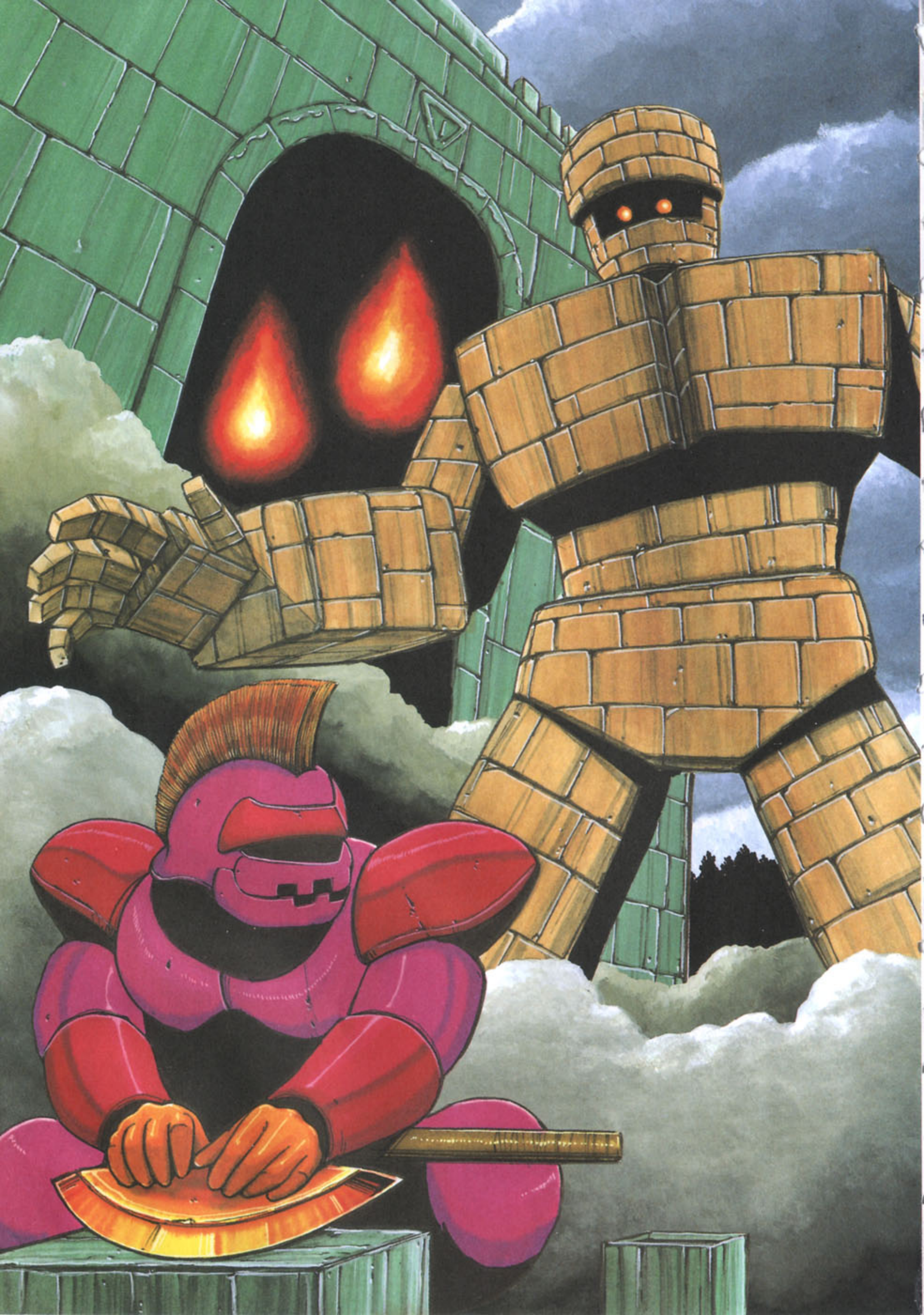
さすがに死神の騎士は悪知恵に長（た）けています。

「ところで死神の騎士よ。あんたはとっても物知りだ。どうやったら素早くなれるか教えてくれないか？」

ストーンマンの突然の質問に死神の騎士も面食らいました。

「ハハーン、こいつ陛下に何か言われたな……」

他の魔物ならうまく言いくるめて勇者のところへ行かせるのですが、相手はお人好しのストーンマンです。さすがの死神の騎士もだますのは気が引けました。

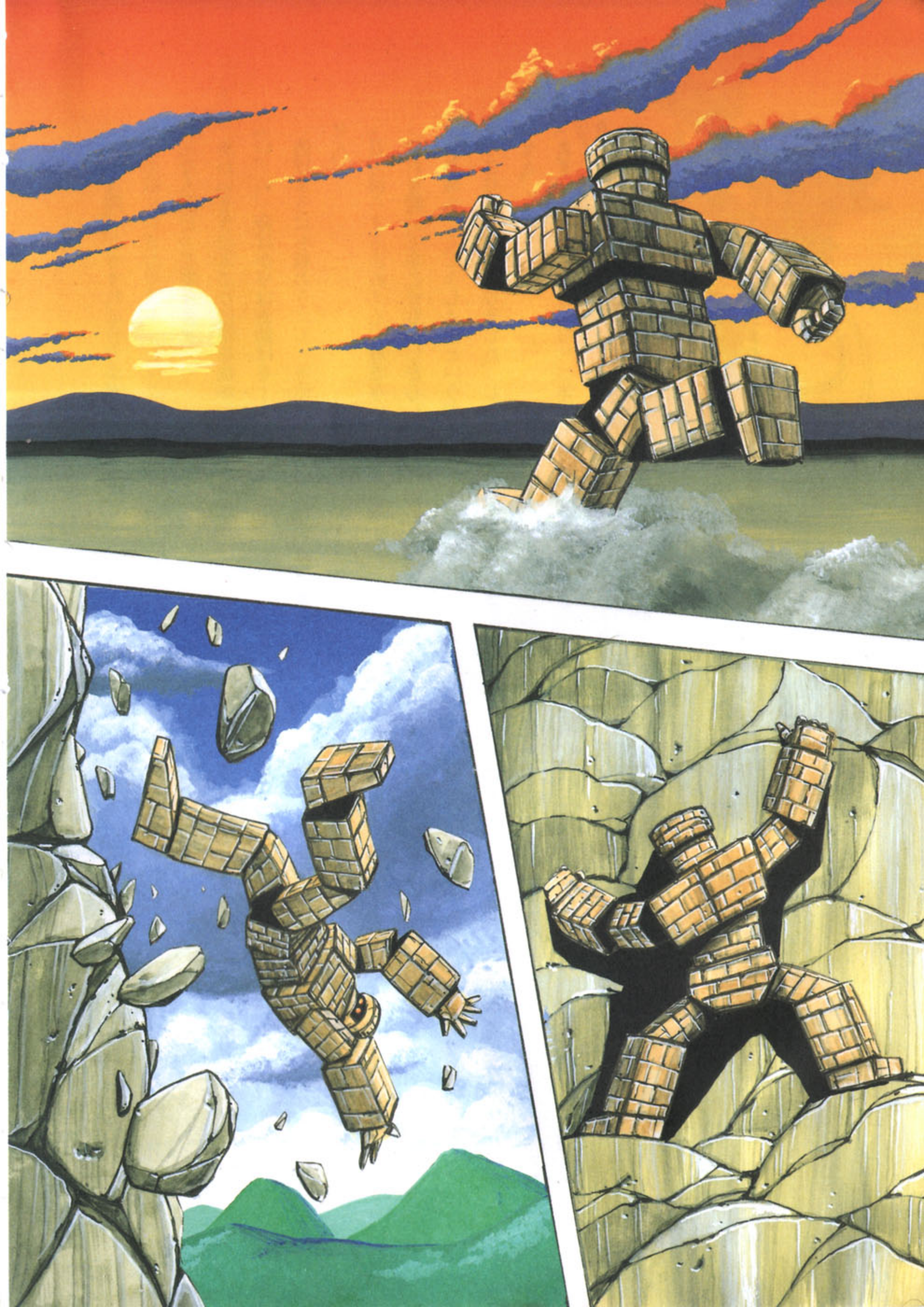


「素早くなるって簡単に言うがな……」
確かにこれは難しい問題です。素早さの種を見つけろ、と言ったってストーンマンには無理でしょうし、仮に伝説の星降る腕輪なんてモノがあったとしても、彼の太い腕には合いっこありません。
「やっぱり地道に特訓だな」
キッパリ。死神の騎士が答えました。
「トックン？　それってどこにある？」
「違う、違う。特訓てのはな。厳しい修業をすることだ。野山を駆け回り足腰の鍛練をすれば、おまえだって今よりは素早くなれるはずさ」
「分かった。ありがとう」
ペコリと頭を下げてストーンマンは歩き出しました。ズシン、ズシン。
「大丈夫かな？」
見送る死神の騎士も不安そうです。
やがてストーンマンは、アレフガルドでも一番高い山の麓にやって来ました。この山も竜王が出現した数百年前は火山となって荒れ狂いましたが、今はおちついています。
「この山登る。きっと素早くなる」

ストーンマンは見上げるばかりの断崖を登り始めました。
ピシ！　ガラ！　ズシーン！
落っこちてしまいました。
「オレ目方重い。だから落ちた。目方減らす」
上出来です。今まで彼がこれ程論理的に考えたことはありませんでした。しかし……
「目方、どうやれば減るだろう？」
ダイエットなんてモノとは無縁の生活をしていたストーンマンには、体重を減らす方法は分かりません。
「ウーン。困ったな」
あまり困ってもいない様子で走り始めました。ズシン、ズシン。
勇者を倒す、素早くなる、特訓、と続いたストーンマンの思考に、体重を減らすというフレーズが加わりました。しかしいったいどうやれば良いのでしょう？　ストーンマンはともかく走ることにしました。
と、運よくと言うべきか折悪くというべきか、一人の木こりが通りかかったのです。ロトの勇者を倒すため、腕に覚えのある魔物がほとんど森を出はらってしまったので、久しぶりに木を切りにきたのでした。

「コラ人間。どうすれば目方が減るか教えろ」
目の前にいきなりストーンマンが現れてそう言われれば、どんな人間だって驚きます。
かわいそうに木こりは腰を抜かしてしまいました。
「い、い、命ばかりはお助けを……」
逃げようにも戦おうにも、身体中から力が抜けて動けません。
「目方減らす方法教える。殺さない。オレ約束守る」
それを聞いて木こりも少し安心しました。しかし魔物が体重を減らしてどうしようというのでしょうか？
木こりは返事に困りました。しかし答えない訳にはいきません。
「まず一つには食事を減らせば体重も減りましょう。後は身体を動かすしか……」
死神の騎士の言った通り、やはり運動を続けるしかないようです。
しかし食事を減らすとは……だいたい減らすにも増やすにも、ストーンマンは生まれてこのかた食事なんかしたことがありませんでした。
「分かった。もう行け」
ストーンマンの言葉に木こりは喜んで立ち上がると、凄い勢いで走り去りました。
「速い、うらやましい……」
どんどん小さくなる木こりの姿を見送って、ストーンマンはつぶやきました。
「オレ重い。コレどうやらなおらない」
ストーンマンはそう考えると、少し悲しそうな顔をしました。

しかしこの程度でめげるストーンマンではありません。
「ともかく特訓する。特訓すれば素早くなる」
思い込んだら命がけです。ストーンマンはさっき落ちた山肌を再び登り始めました。一回、二回、落ちては登り、登っては落ちました。切り立った岩は意外にもろく、ちょっと気をゆるめると崩れてしまいます。
でも段々と高い所まで登れるようになっていきました。
そしてそんな事を繰り返すうち、ストーンマンの関節は少しずつ滑らかに動くようになっていきました。
「ウーン。なんだかオレ素早くなった」
ほんとうは少しばかり違うんですが、ストーンマンはそ



う考えました。確かに関節が楽に動くのも素早さのうちかも知れません。

「ヨーシ、今日はこの山、最後まで登る」

ある日麓に立ったストーンマンはそう決心しました。すでに特訓を始めてからひと月以上が過ぎていました。普通の魔物なら今まであれだけ高い場所から落ちれば、死ぬか大怪我をしているはずですがストーンマンは元気でした。

「よいしょ。こらしょ。どっこいしょ」

ストーンマンは強靱な四肢を突っ張って険しい山を登って行きます。いつもなら引き返す高さまでたどりついても登るのをやめません。

「この調子なら上まで行ける……」

ストーンマンは頂上を見上げてそう思いました。ところがもうちょっとの所に、ひさしのような岩が出っ張っています。

「あの岩、邪魔だ」

しかしどうすることも出来ません。

ストーンマンは少し考えた末、横に移動することにしました。ひさしのような岩もどこかで途切れているはずです。ホーラやっぱりそうでした。岩の切れ目から頂上が見えます。ストーンマンは再び登り始めました。ところが……

ピシ……「アレ？」

グラ……「オヤ？」

バラ……「ワ、ワッ！」

なんとしたことでしょう。突然ストーンマンがつかまっていた岩肌が崩れ始めたのです。

彼は気がつきませんでしたが、この辺りの岩は火山の噴火のとき溶岩が固まって出来たものだったのです。煮えたぎった溶岩には当然、かなりの量のガスが含まれていました。そしてそのガスは、気泡として岩の中に残っていたのです。中に小さな空洞がたくさん混じった岩がもろいのは当然です。そして……

「ウワーッ！」

ストーンマンの身体はまっさまに落ちて行きました。たとえベギラマやメラゾーマに耐えられるほど丈夫なストーンマンでも、この高さから落ちたらひとたまりもないでしょう。ところが……

ドップーン！ ストーンマンの身体が落下したのは堅い地面ではなく、ドロドロした泥の上でした。横に移動したために気づかなかったのですが、彼は毒の沼地の上に来て

いたのです。
「た、助かった」
安心したのもつかの間です。今度は身体がドンドン沈み始めたではありませんか。
「し、沈む、沈む……」
ストーンマンは必死で手足を動かしました。幸い息をする必要のないストーンマンにとって、毒の沼はさして恐ろしくはありません。もし彼以外の魔物であれば、沼地の毒気でとうに死んでいたことでしょう。しかし、身体が沈んでしまっては……ストーンマンは焦りました。
「こ、こんなとこで沈んでしまったら勇者退治出来ない……」
ストーンマンは必死に腕を伸ばしました。アレ？　何かが手の先に触れました。ストーンマンは全力でその何かにつかまりました。どうやら沼地に残った枯木のようです。
「うぉーりゃーっ！」
気合いをかけて身体を引き抜きます。
ズボッ。音を立てて巨体が沼から持ち上がりました。特訓の成果です。以前のストーンマンだったらこうは敏捷に動けなかったところです。

フワッと身体が浮きました。勢いが良すぎて沼から出たストーンマンの身体は、空中で一回転すると……
ここで両足から華麗に着地出来れば凄いんですが、ストーンマンには無理な注文です。
ズサッ！　こんどは乾いた地面の上に落ちました。
「た、助かった……」
ところが安心するのはまだ早いようです。堅い地面だと思ったのに、また身体が沈むではありませんか。
「ワワワワ、沈む。また沈む」
毒の沼地ですっかり泥まみれになったストーンマンには見えませんでしたが、彼が落ちたのは流砂だったのです。サラサラと流れる砂は泥以上にとらえどころがありません。もがけばもがくほど、ストーンマンは沈んで行きました。
ここでもストーンマンの岩石で出来た身体が幸いしました。なんと言っても彼は呼吸する必要がないんです。そうでなければ窒息死してしまっていたでしょう。
「アレ？　足がつくぞ……」
やがてストーンマンは、何かしっかりした物に足の裏がついたのを感じました。
「あ、歩ける、歩ける」

今度はストーンマンの体重が命を救ったのです。普通の魔物や人間ならとても沈みっこない流砂の底まで、彼はもぐってしまったのでした。

ズズッ、ズズッ。重い砂を掻き分けて、ストーンマンは流砂の中を移動し始めました。そのうちなんだか地面に角度がついて来たようです。それも段々と上に向かって。

「出られる。このまま進めばきっと出られる」

ストーンマンはそう信じて歩き続けました。おなかが減ることも眠くなることもないストーンマンです。どこまでもどこまでも歩きました。そして……

ザザーッ。砂の中からストーンマンの巨体が太陽の下に出てきました。なんか流砂を抜け出したのです。

「ここ、どこだ？」

ストーンマンは辺りを見回しました。けれど顔一面に泥と砂がついていて目がよく見えません。それになんだか周囲が妙にキラキラしています。

「なんか光っている。キレイ……」

なんと光っているのはストーンマン自身の身体でした。あの流砂の底には砂金がたまっていたのです。毒の沼地のベチャベチャした泥が全身についた状態で、砂金の中を抜けたのです。いまや彼の身体一面には、砂金がついてキラキラと光っていました。

「オ、オレ光ってる。オレ綺麗」

ストーンマンはなんだか嬉しくなりました。

「特訓した。素早さあがった。流砂に落ちた。身体、綺麗になった。勇者やっつける」

ともかくストーンマンはそう考えました。

ゴシゴシと顔を擦ってみると、やっと目についた砂金がとれました。周囲は遙か遠くまで砂、砂、砂……どうやらどこかの砂漠のようです。

「あ、あんなとこに街ある。勇者倒す手始めにあの街壊す」

ともかくそう考えたストーンマンは、地平線の彼方に見える街に向かって歩き始めました。じつは彼が知らないのも無理はありませんがあの街、ドムドーラはとうの昔に竜王の配下に襲われ、廃墟となっているのです。

ズシン、ズシン、どうも変です。

「あれ？　歩くの遅くなっている何故だ？」

あれだけ特訓したはずなのに身体がなんだか重く感じられます。

ストーンマンにもうすこし物事をじっくり考える頭があ

れば、謎はすぐに解けたはずです。
関節に泥がつまり、さらにその上から砂がついたのです。動きが鈍くなって当然です。彼が重たい身体を引きずるように、ドムドーラを目指して歩き続けていると……
ドドドドッ……
遙か西の方角に砂ぼこりが立ちました。
「ン？　なんだアレ……」
振り向いたストーンマンに近づいて来たのは、十数頭の馬に乗った男たちでした。
「見ろヤローども！」
「ウォー、ゴールドマンだぞ！」
男たちが口々に叫びます。彼らは旅の隊商でした。
「人間、殺す！」
ストーンマンは騎馬の群れに向き直りました。
「お宝じゃ！　金塊じゃ」
「みんなぬかるなよ。こいつをしとめれば、この前の赤字なんぞ一発で帳消しだからな」
この隊商の一行は、メルキドの街で大損してラダトームに向かう途中だったのです。そんなとき、歩く金塊とも呼ばれるゴールドマンを発見したんですから……

もちろんいま目の前にいるゴールドマンが、ただのストーンマンに砂金がくっついたモノだなんて分かるはずもありません。
「投げ縄じゃ。ロープをかけろ！」
「足だ！　足を狙え！」
縄が飛び、槍が飛び、騎馬はストーンマンの周囲をグルグルと回りました。
「うるさい人間め!!」
ストーンマンは怒って騎馬を叩き潰そうと腕を振り回しましたが、思うようにいきません。
「クソー、覚えてろ！」
そうこうしているうちにも人間たちの猛攻は続きます。ストーンマンはとうとう逃げ出しました。くやしくてくやしくて涙が出て来ました。
「オレ、特訓した。素早くなったはず。なのにこんな連中にも勝てない」
ストーンマンは自分が情けなくなってきました。
ストーンマンは泣きながら、どんどん走りました。さすがにしつこい隊商の連中も、追うのをあきらめました。
でもストーンマンにはそんなことはもうどうでもよかっ

たのです。

「オレ駄目な魔物。アレだけ特訓したのに……」

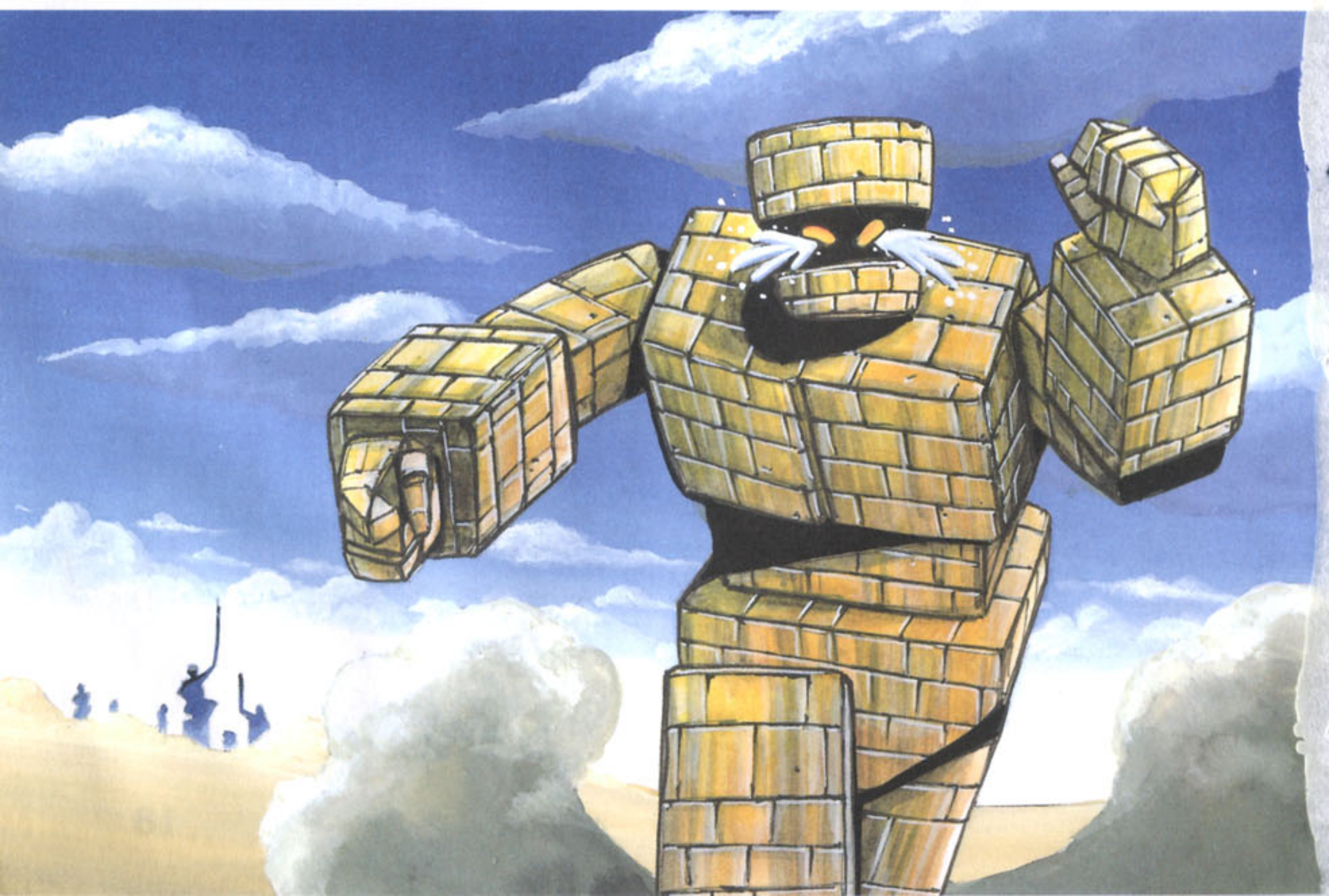
彼にもプライドがありました。そして、そのプライドはいまひどく傷ついていたのです。

「オレ、あきらめない。もう一回特訓する。今度はもっと高い山、登る」

ストーンマンはほとんど意味なく立ち直りました。彼には挫折（ざせつ）というものがなかったのです。もっとも他の要素もあまりないのですが……。

やがて長い長い歳月が流れました。ストーンマンに特訓をすすめた死神の騎士も、そして竜王さえも勇者に倒されました。

竜王の城にいた魔物たちも、世界のいたるところにいた怪物たちも、皆勇者の手によって倒されました。そしてまた歳月が流れました。アレフガルドは長い平和の時を迎えていたのです。もしあなたが冒険心に満ちた若者で、アレフガルドでも一番険しい山に登るようなことがあれば、もしかすると高原を走ったり、山肌を登ったりするゴールドマンを見るかもしれません。だがもしそんなことになっても、どうか彼をそっとしておいてやってください。



MUD HAND
無限増殖の謎

マドハンド

「ちょっと！　これは一体どういうことですか!?」

ベラヌールの町――――

半分白髪頭の町長が、旅の三人組を前にカンカンになっていた。

「あなたがたは三日前、胸をはって確かにこう言いましたよね。『奴らはぼくたちが倒しました。もう大丈夫です』って。いったいどこが大丈夫だと言うんです!?　今日また、子供が襲われたんですよ！　これじゃあ、何のために高いお金を払ってあなたがたをやとったんだかわかりゃしない！　いったいどうしてくれるんです!?　えっ!?」

町長の険悪な視線が三人に注がれ、中の一人・リーダー風の少年がゆっくりと口を開いた。

「……お話はわかりました、町長。ぼくたちもプロです。どんな手違いがあったにせよ、受けた仕事は最後までやり遂げるのが筋というもの。いくぞ、みんな」

立ち上がった少年の後について二人の仲間・魔法使いの少女と僧侶の青年も部屋を出ていく。

この三人組、実は流しの魔物ハンターである。ベラヌー

ルに寄った際、町の北に出没するマドハンドの退治をひきうけ、三日前りっぱにその役を果たした――はずであったが……。

「……倒したマドハンドがなんでまた現れるのよ」

と、ベラヌールの町はずれで魔法使いが言う。

「このあいだ、確かに全部やっつけたと思ったんですけど……」

不思議そうな顔をして、僧侶。

「ま、どっちでもいいじゃん。今度こそ完全にヤツらの息の根を止めればいいだけなんだからさ」

戦士の少年はそういうと、腰の剣をスッと抜き、身構えてみせた。

そして、問題のマドハンド出没地点。

戦士が足を踏み入れると……

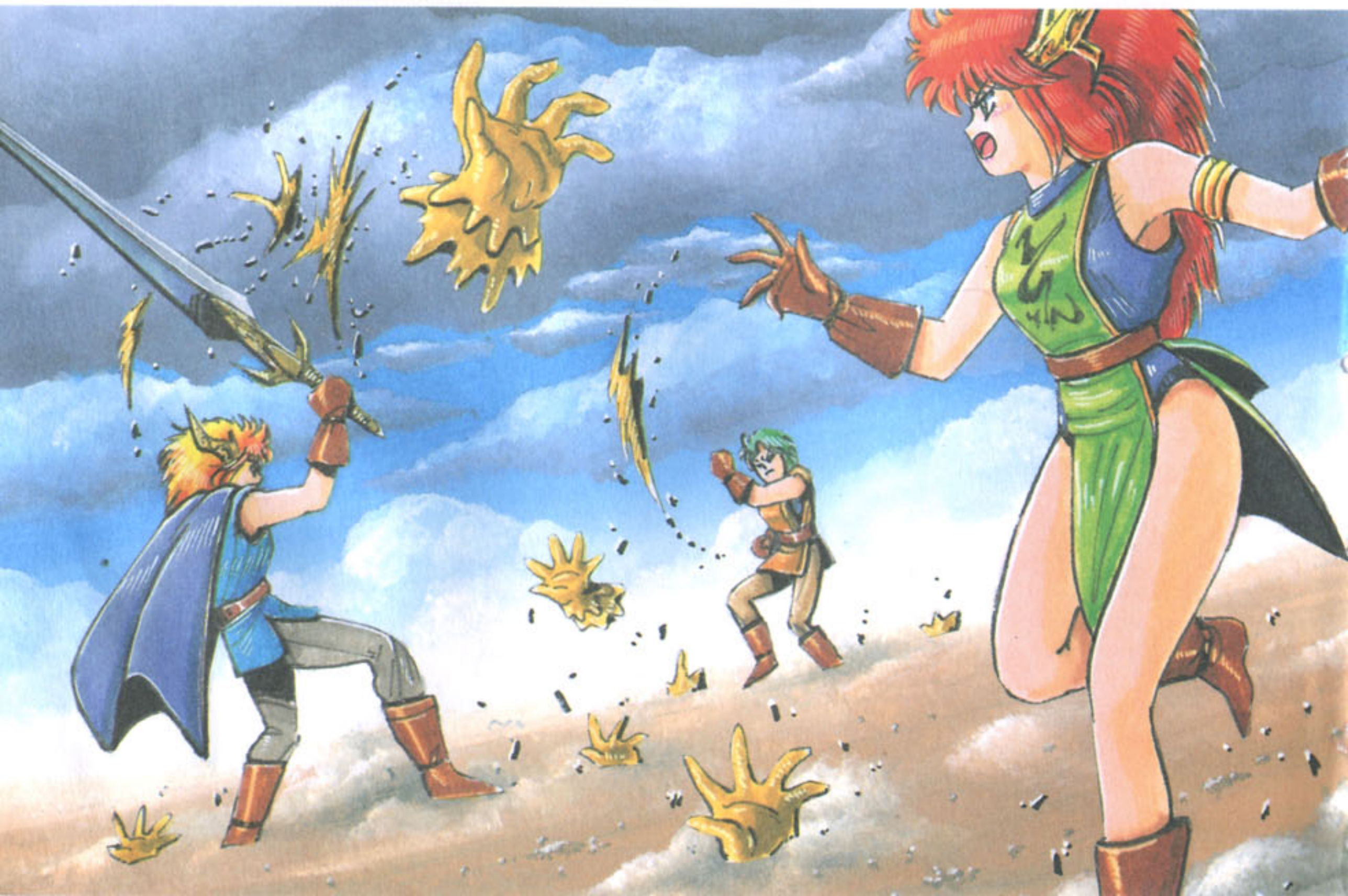
マドハンドが現れた！

「よーし、みんな、ガンガンいこうぜ！」

ズカ！ バギ！ ドガッ!!

バギ！ メラ！ イオラ!!

ものの数分で辺りのマドハンドは一掃されてしまった。



「今度はダイジョブね。あ、でも念のため……イオナズーンッ!!」

ダメ押しのイオナズンをかけて、一行は意気揚々とベラヌールへ引き上げる。

「いや～、ありがとう、ありがとう。まあ君たちは知らんと思うが、マドハンドというのは、我々にとってかなり厄介な魔物なんだよ。ブラッドハンドと違って奴らは本来草食でな。食べるために人間を襲うことはあまりないんだが、なにせ、ああやっていきなり地面から生えてくるだろう？　お陰で畑が穴だらけになってしまうんだ。それにヤツらと来たら、まるで、海か何かのように畑を移動して荒らしまわるし……。気がつくと、畑の大根が一本もない……なんてこともあってね。ま、なにはともあれ、よかった、よかった」

帰ってきた三人を見て町長は大喜び。

「しばらくはこの町でゆっくりしてくれたまえ！」

二日後――――

「大変です、町長！　マドハンドが現れました!!」

「なぁんだとぉ!?　すぐにあの三人を呼べ!!」

すぐさま三人組が町長の前に召し出され、再びマドハンド退治を命じられた。

「またぁ～!?　これで三度目じゃない？」

「まぁまぁ、おさえて、おさえて。三度目の正直って言うじゃないですか」

「とにかく今度こそ奴らを徹底的に叩き潰すゾ！」

「おーっ！」

ズガバキ！　ボス！　ドシャ！

ちゅどーん！

辺りのマドハンドを前より念入りに一掃し……。

「さー、もうこれなら大丈夫だろう。マドハンドめ、出てこられるもんなら出てきてみやがれ」

戦士の捨てゼリフに触発されたのか、わずか一日後の深夜……。

「うわぁ、マドハンドだぁー」

通りすがりの商人がマドハンドに襲われ、身ぐるみはがされたのだ。

そして翌日……

「くっそー、一体どうなってンだマドハンドってのは？」

宿屋でその知らせを聞いた三人は呆然として顔を見合わ

せた。
「倒しても倒しても死なないなんて……」
「ともかくもういっぺん現場に行ってみましょう」
僧侶の言葉に二人はゲッソリした表情で腰を上げた。

そして再び……
ズガバキ　ベキゴキ
ちゅどーん
と、今までならここで引き上げるところだが、
「いったんこの状態で様子を見ましょう」
「そうネ、きっと何か秘密があるはずですもんネ」
三人は、マドハンドの出没地点のそばの木陰に隠れて様子を見ることにした。
そして一時間ばかりたつと、まるで辺りを探るように地面から一匹のマドハンドが姿を見せた。
「マ、また出て来やがったゼ！」
「どっから来るのかしら？」
「なんとなく今やっつけたヤツより小さいんじゃありませんか？」
僧侶の言葉通り今度出現したマドハンドは、今までのモノに比べ一回りほど小さいようだ。

「クソーッ、こうなったらオレが引きずりだしてやる」
ところが力自慢の戦士がどう頑張っても、マドハンドを引き抜くことは出来なかったのだ。
「なによコレ？」
「どうなってるんでしょ？」
「おまえら見物してないで、コイツの下がどうなってるのか地面を掘ってみてくれよ」
「ヤーヨ、なんであたしが土いじりしなきゃいけないのヨ」
「まぁまぁ、いくら力持ちでもズーッとつかまえてる訳にはいかないんですから」
「まったくもう……」
ブツブツ言いながら二人は地面を掘っていった。
「なんだこいつは？」
「キャー、気持ち悪い！」
地面の下にあったもの……
それは不気味な球根状の塊（かたまり）だった。
「クソッ！　こいつが本体か」
「見て！　小さい手が生えかかっているワ」

三人は全力でマドハンドの本体を攻撃した。

「メラゾーマ！」

「バギマ！」

二人の呪文が同時に炸裂し、戦士の剣が真っ黒焦げにな

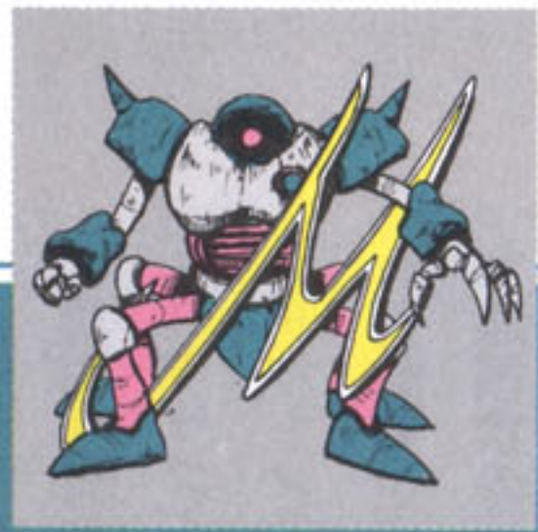
つた本体を切り裂いた。
「離れてて、とどめを刺すから……」
魔力を秘めた杖を構えて魔法使いが言った。
「ベギラゴーン！」
ドカーン！
大爆発。
球根状の本体は木端微塵にふっとんだ。
「やったあー！」
「これでもう安心ですネ」
三人は意気揚々と町に引き返すと町長に報告した。

そのころ、ありとあらゆる魔法でバラバラになった本体の破片は、ピクピクと動き出していた。
大き目の破片からはまるで腸のような器官が伸び、小さな破片からは植物の髭根のような器官が伸びていった。
地面に潜った無数の器官は、ミミズのように地下を這っていく。
やがて柔らかく養分に富んだ場所にたどりついたソレらはゆっくりと増殖を開始し……。

モンスターワンポイントレッスン その1

植物系の魔物とは？

マドハンドとよく似た魔物にブラッドハンドがいます。この二匹、どこが違うか分かりますか？
実はマドハンドは草食、ブラッドハンドは肉食なのです。もともと植物系の魔物のこの二種類。最初に誕生したのはマドハンドでした。
畑を荒したり穀物を輸送しているキャラバンを襲ったりしていたのですが、いつの間にか肉の味を覚えたモノが出たのです。植物の中に虫を食べる食虫植物というのがいますが、彼らの場合も、より栄養値の高い動物を狙うようになったのです。
身体の構造は両方ともほとんど同じですが、球根状の本体はブラッドハンドの方が一回り大きいようです。
同じ植物系の魔物のウドラーや人面樹といっしょで火や電撃には弱いので、見つけたらバギかベギラマで手の形をした触手を刈り取り、手早く穴を掘って本体を殺してしまいましょう。そうしないと、また、すぐ増えてしまいます。



METAL HUNTER
謎のメタルハンター

メタルハンター

琥珀色の光りが四方の壁にぼんやりとした影を映している。部屋の中央に置かれた大きな紫檀の机の上でランプの炎が揺らめいていた。

「また落盤か……？」

机に向かっていた悪魔神官、デヌスは足許から伝わってくるわずかな振動に顔を上げた。ここは、凍てつく寒風吹き荒れる台地。ロンダルキアにあるハーゴンの神殿である。窓の一つもないデヌスの部屋は、三方が天井まである本棚に囲まれていた。死者の書、魔法大全、ネクロノミコン、魔法圏の理論と応用、などなど。様々な魔道書が並んでいる。机の上には、大小数個の水晶球と、邪神の降臨を描いたボロボロの羊皮紙が置かれていた。やがてバタバタという足音と共に、デヌスを呼ぶ声がした。

「デヌス様！　悪魔神官様！」

扉を開けて入って来たのは地獄の使いだった。

「何事じゃ？　また落盤か……」

悪魔神官は椅子を立つと振り向いた。この神殿の下では今、ロンダルキア台地とその下の平原を結ぶ地下通路の建設が、急ピッチで進められていた。世界制覇を目指すハーゴンにとって最初の目的、大神殿の建造は八分通り完成し、

この地下通路が出来ればすぐにでも軍勢を動かせるのだ。
「それが、今度の落盤はいつもと様子が異なりまして……」
地獄の使いはどう説明してよいのかわからぬらしく口ごもった。
「南最深部の現場なのですが、落盤で崩れた場所に異様なモノが……」
「ともかく行ってみよう」
デヌスの言葉に地獄の使いはホッと安堵の息をもらした。
落盤現場はロンダルキア台地から数えて七階下、ペルポイ平地とほぼ水平面にあたる場所だった。ここの工事が終われば、台地と下の平地を結ぶ地下通路は完成するのだ。
「敵の侵入に備えまして各所に落とし穴を造っておりましたところ……」
現場についたデヌスに、この階の責任者である妖術師が報告した。背後にはオークキングやバーサーカー、そしてヒババンゴといった力自慢の魔物たちが控えている。
「いきなり足許の地面が陥没しまして、しかも下には自然のものと思われぬ空洞があったのです」
見れば土砂の積もった地下道の奥に、ポッカリと大きな穴が口をあけていた。
「あの穴の下にか？」
デヌスの問いに妖術師はうなずいた。
「ともかくご自身の目でお確かめください。私には判断がつきかねます」
部下にうながされた悪魔神官は床の穴を覗き込んだ。既に穴の周囲の土砂や岩塊は魔物たちの手で取り除かれ、何本かの松明が中を照らしている。
「確かに入ってみなければ分からぬな……」
急ごしらえの梯子を降りたデヌスの後から、部下の魔物たちが続いた。
「こ、これは……」
悪魔神官は目の前に広がる巨大な空洞と、そこに立ち並ぶ異様な物体に言葉を失った。
壁、そして床や天井。いや、そこにあるすべての物がデヌスが今まで見たことのない金属で造られていた。厚く積もったほこりを払うと、鏡の様な光沢を放つ床が露になる。
「なんだこの建材は、繋ぎ目一つないゾ！」
床の石畳を敷く仕事をしていたオークキングが叫んだ。
確かに床には繋ぎ目が一つもなかった。まるで溶けた金属

を流し、それが冷えて固まったかのようだ。
空洞全体の広さは上、すなわちハーゴン配下の魔物たちが造っていた階とさして違わないようだが、天井は遙かに高かった。カンテラを向けると前後の壁がまるで鏡のように光を反射する。そして何より不思議なのは、無数に並んだ奇妙な物体だった。
「なんだこいつは！」
「生き物なのか？」
魔物たちが口々に言った。
それは見ようによっては生き物とも思われる不思議な形をしていた。高さは人間の大人の背丈程で、全体がずんぐりと丸みをおびている。腰にあたる部分からは、いやに細い昆虫のような足が四本生えており、腕の先には人間と同じように五本の指を持つ手がついていた。首はなく、頭に相当する部分が肩の位置から胸にかけて迫り出している。顔らしい場所には鼻も口もなく、大きな目が一つだけついていた。全体の材質はこの場所と同じように、見たこともない金属だ。
「人形、あるいはヨロイ……のようにも見えますが？」
地獄の使いがつぶやくように言った。確かにデヌスも一瞬、鎧ではないかとの印象を受けた。だが、鎧だとすればいったいどのような姿の生物が身に着けるというのだろうか？　魔界や人間界、そればかりか天上界にも、このような姿をした生物はいないはずであった。
「生き物とは思えませんが……」
地獄の使いがそう言いながらそのモノの胸に触れた。
「デヌス様、ここになにやら記号のようなモノが！」
地獄の使いが指さした場所には、細かい浮彫で文字の様な図形が並んでいる。そしてその下には様々な色をした豆粒程の硝子の突起が七つと、その突起よりやや大き目の金属の突起が二つ付いていた。記号は博学で知られる悪魔神官、デヌスにとっても初めて見るものだった。
fullautomatic. assaultmachine
「しかしこの突起の方はいったい……」
地獄の使いがそう言いながら右端の金属突起に触れた。だが謎の物体は何の反応も示さない。
「なんだこの木偶人形は？」
オークキングが槍で胸にあたる部分をドンとついた。
ガラガラガッシャーン！
騒々しい音がしてソレは仰向けに引っくりかえった。

するとその弾みで金属の右手が握っていた剣が勢いよく外れ、オークキングの足に当たった。

「このやろう！」

魔物は腹立ちまぎれに動かない物体を蹴り上げる。

「イテテ」

だが、悲鳴を上げたのはオークキングの方だった。

「デヌス様。コイツおそろしく固いですヨ……」

部下の言葉に悪魔神官はその場にしゃがみ込むと、懐からナイフを取り出し謎の物体の胸に当てた。

キーッ！　切っ先が金属をこする耳障りな音が響く。

だが、鋼鉄のナイフを使っても引っ掻き傷一つつけることは出来なかった。

「いったいこの金属は？」

祈禱師の一人がそう言いながら、同じようにナイフを突き立てる。だが、いくら力を込めても結果は同じだった。

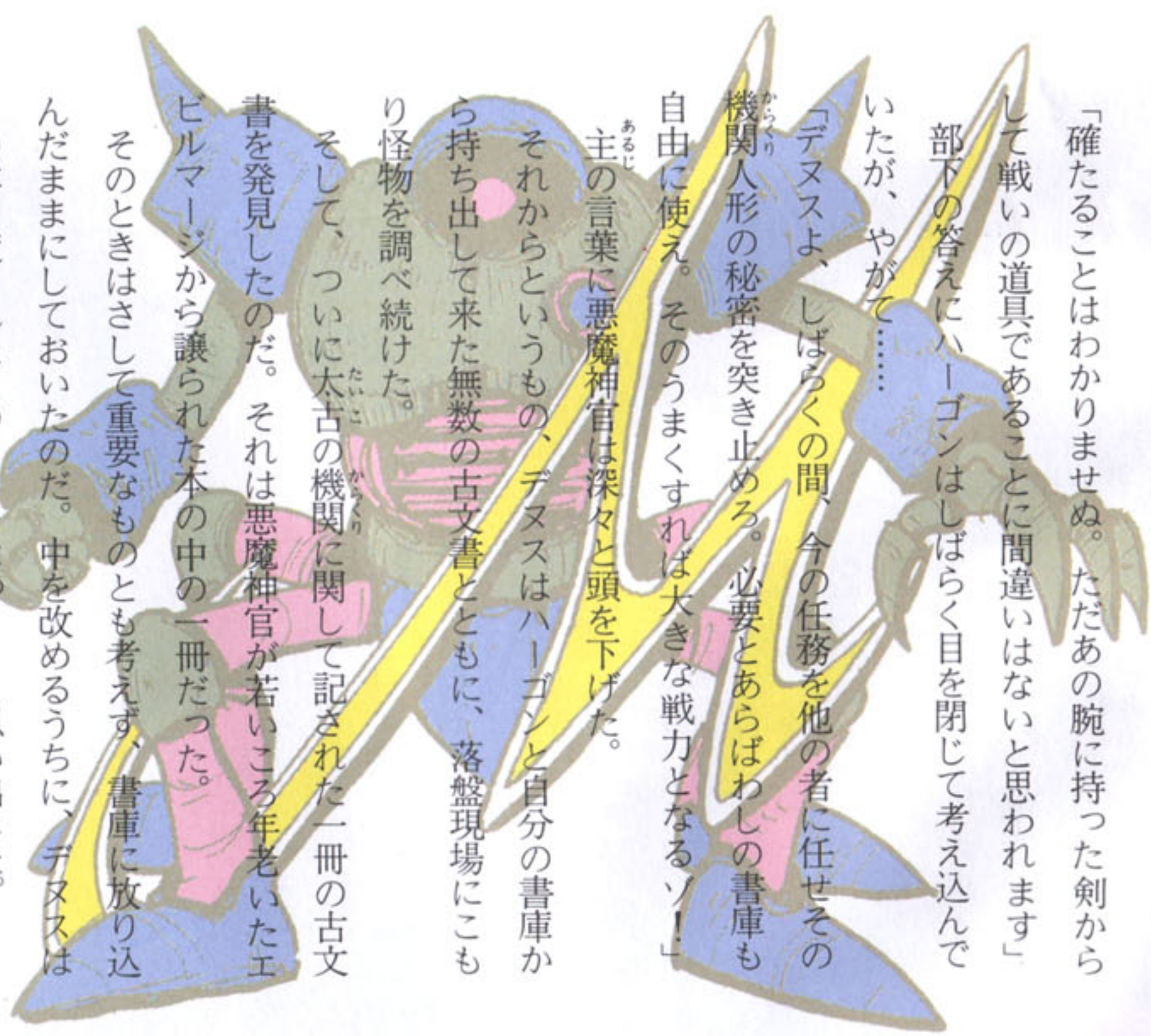
デヌスはオークキングたちにその物体をうつ伏せにさせると、真剣な表情で調べ始めた。背中には、金属の螺子で止められた大きな蓋がついている。

「こ、これは……」

四本の螺子を外し、中を覗き込んだ悪魔神官は言葉につ

まった。かなりの厚さのある胴体の中には、見たこともない機関がギッシリ詰まっていたのだ。
色のついた何本もの鉄線。まるで時計の中身のような細かい歯車。首と腕の着け根には、直径の違う数枚の円盤を重ねたような仕掛けが入っている。何より奇妙なのは胴体の中央、人間なら胃袋がある場所に納まった金属球だった。
子供の頭ほどのその仕掛けからは透明な糸が何本も生え、他の機関に繋がっている。機関仕掛けの兵士か……。
デヌスは内心、未知の技術によって造られたこの物体に言い知れぬ恐怖を感じていた。鋼鉄より頑丈な身体のこの怪物が、もし動き出したら……？
「今よりこの場所は立ち入り禁止とする。何人もわしの許可なくして近づいてはならん」
そう部下たちに命じたデヌスは、ハーゴンの元に赴くべく梯子を登っていった。

かがり火に照らされた巨大な邪神の像の前で、デヌスは大神官ハーゴンへ、謎の機関について報告していた。
「それで、おまえはソレを何だと考えているのだ？」
話し終わった悪魔神官にハーゴンが尋ねる。



「確たることはわかりませぬ。ただあの腕に持った剣からして戦いの道具であることに間違いはないと思われます」
部下の答えにハーゴンはしばらく目を閉じて考え込んでいたが、やがて……
「デヌスよ、しばらくの間、今の任務を他の者に任せその機関人形の秘密を突き止めろ。必要とあらばわしの書庫も自由に使え。そのうまくすれば大きな戦力となるゾ！」
主の言葉に悪魔神官は深々と頭を下げた。
それからというもの、デヌスはハーゴンと自分の書庫から持ち出して来た無数の古文書とともに、落盤現場にこもり怪物を調べ続けた。
そして、ついに太古の機関に関して記された一冊の古文書を発見したのだ。それは悪魔神官が若いころ年老いたエビルマージから譲られた本の中の一冊だった。
そのときはさして重要なものとも考えず、書庫に放り込んだままにしておいたのだ。中を改めるうちに、デヌスはその本を渡された日のことをはっきりと思い出した。
「これらは太古の歴史をしたためた百数冊の一部じゃ。だがどうも普通の記録ではないらしい。あまりに断片的すぎて、わしには理解することが出来んかった……」

老いた魔道の使徒は確かにそう言っていた。そして機関仕掛けについて記された本も、元々は十数冊からなるものだったらしいのだ。それが長い年月の間に散り散りになり、今や残っているのはこの一冊きりだという。

「これだ！　どこかで見た覚えがあると思ったが、まさかわしの持っていた本だったとは」

デヌスは自分のうかつさに舌打ちをすると、古文書を読み始めた。

それは想像以上に骨のおれる作業だった。使われている文字だったし、中には、全部があの機関の胸の浮彫と同じ字のほとんどはデヌスにはなじみの薄いラダトームの象形文字で書かれているページもあった。そのうえいたるところに、四巻の三章を参照、といった注意書が入っているのだ。まるで巨大な迷路に入り込んだような気分で、デヌスは解読を続けていった。ときには他の古文書の記述を参考とし途中何度も挫折しそうになりながら、悪魔神官は信じられない程の辛抱強さを発揮して古文書を解読していった。

そして数ヵ月がまたたく間に過ぎた。

「そうか、遂にあの機関の秘密を突き止めたか！」

デヌスの知らせに、自ら地下へと赴いて来たハーゴンは興奮して叫んだ。

「して、いったいこの怪物の正体は何だったのだ？」

大神官の質問にデヌスはゆっくりと語り始めた。

それはハーゴンも知らぬ遙かな昔の出来事だった。数百年、いや千年以上も昔。魔界より降臨した大魔王ゾーマはこの世界を、アレフガルド全域を支配したという。だがその野望は、異世界より現れたロトと呼ばれる人間によって打ち砕かれたのだ。配下の魔物を蹴散らし、自らの居城に迫って来るロトに対抗すべくゾーマは、特殊な魔法陣を使って新たな手勢を召喚した。

「それがこの機関の怪物だというのか？」

信じられぬといった表情のハーゴンに、デヌスは大きくうなずいた。

「詳しいことはわかりませぬ。この古文書の残りが手にはいりますればその辺りの事情も明らかになりましょうが、この一冊で分かったのは、ゾーマなる魔王が通常の魔法陣とは異なった方法を用いたということのみでございます」

最強の力を誇った怪物も、強力な呪文を操る魔物もロトの前には歯がたたなかった。焦った大魔王は、かつて何人

も試みたことのない方法で勇者ロトを倒せる魔物を呼び出そうとした。

「小しゃくな人間めらが……。かくなるはおまえたちの想像もつかない魔物を、我が配下として召喚してくれるわ」

ゾーマは通常、魔界とこの世界とを繋ぐ魔法陣の配列を変えて、誰も知らない異世界との境界線を越えたのだ。だが勇者の行動は素早く、やっと召喚した機関仕掛けの怪物を立ち向かわせる間もなくゾーマは滅び去った。

「この本に記されておりましたところでは、異界の怪物を操るのに必要なあるモノが、手に入らなかったとか……」

そしてこの怪物はゾーマが滅んだ後、逃げ延びた配下の手によってこの地に隠されたのだ。そしてゾーマの配下たちがついに発見出来なかった、機関を操る秘密とは……

「こヤツの中で脳に相当するのが、腹のまん中にある球体でございます。そして神経になるのがこの細い糸なのです」

デヌスがつまみ上げたのは半透明のか細い糸だった。

「ゾーマたちはこヤツの頭脳に当たる機関に新たな記憶、人と戦うための記憶を与えることが出来ませんでした。それはこの糸を作ることが出来なかったからです」

球体から無数に生えた糸は、それぞれが特定の情報を伝

えるために他の部分と繋がっている。この機関の真の創造者が与えた命令以外のことをさせようとするなら、糸を繋ぎ変えなければならないのだ。そしてあらかじめ機関の中に入っていた糸だけでは、新たな命令を与えるには長さが足りなかったのである。ゾーマとその配下たちに同じ糸を作るだけの時間はなかった。

「おまえには作れるのか？」

ハーゴンの問いにデヌスはニヤリと笑った。

「作ったのではございません。発見したのです。我々が雨露の糸と呼んでおりますモノこそ、この怪物の神経に使われております糸と同質のモノ。雨露の糸で頭脳にあたる機関を繋ぎ変えました」

悪魔神官は誇らしそうに言うと怪物の肩に手をやった。

デヌスの言葉にハーゴンは満足気にうなずくと、玉座を立った。

「ゾーマか……」

独り言のようにつぶやく口元にはゾッとするような薄笑いが浮かび、その双眼は遙かな昔を見つめている。

「のうデヌスよ、わしより他にこの世界を支配出来る者などおるはずがなかろう」

ハーゴンの言葉にデヌスは平伏すると言った。

「大魔王とやらも無駄なことをしたものでございますな」

そして悪魔神官は機関仕掛けの怪物に向かって叫んだ。

「志なかばにして倒れし大魔王よ、おまえが呼び出した異界の怪物は無駄にはせん。わしが立派に役立ててみせるぞ。大神官ハーゴン様の軍勢としてな！」

デヌスは、殺人のために新たな生命を与えられた機関仕掛けの怪物を見下ろして宣言した。

悪魔神官が胸の突起を押すと前とは異なり、機関仕掛けの怪物はギーンという金属音をあげて反応した。

頭についた単眼に明かりがともり、長い眠りから目覚めた異界の怪物は、新しい主人の前で雄叫びを上げる。

「ワハハハ、頼もしいヤツよ」

ハーゴンは上機嫌で機関仕掛けの怪物を見つめていた。

新たな命を得た怪物の単眼が、一層まばゆい光りを放ち、デヌスとハーゴンの顔を不気味に照らしていた。

KILLER LYCANTO
キラーリカントの栄光

キラーリカント

灌木がベキベキと音を立てて折れた。寝ぐらに戻っていた鳥たちが、恐怖におののいて飛び立ち、騒々しい羽音が辺りにこだまする。

日はもう西の地平に向かって傾き始め、北の湖に浮かんだ街には明かりが点り始めている。

ここは水の都リムルダールの南。連なる山脈に隔てられた鬱蒼とした森の中である。

と、もう一度枝の折れる音が響き巨大な影が姿を見せた。

それは巨大な灰色の魔物だった。身長は大人の男以上あるだろう。フッサリと生えた毛は艶やかで、全身の筋肉はたくましく盛り上がっている。

だが、その目はどこか空ろでこの魔物にふさわしい精気に欠けていた。焦点が定まらず、知性のきらめきも見あたらない。

魔物。巨大な熊の怪物であるキラーリカントは、ヨロヨロとおぼつかない足取りで森の中を進んで行った。たわわに実った果実や沢山の木の実にも、何の興味も示そうとはしない。

やがて灰色の怪物は小さな泉にたどりついた。冷たく透んだ水をガブガブと飲みほしたとき、キラーリカントの目

に初めて光が戻った。キョロキョロと周囲を見回した魔物は、やがて大きなため息をついた。
「オレだけになっちまったのか？」
フッと我に返ったようにキラーリカントがつぶやく。振り向けば彼方の山の稜線に松明らしい明りがチラチラと動いていた。
「馬鹿な人間たちめ、並みの獣ならともかく、このキラーリカント様がいつまでも同じ場所をうろついているわけもないワ」
魔物の言葉通り、山狩りをしていた人間たちは、やがてあきらめて街に引き返し始めた。松明の光がゆっくりと集まり尾根沿いの道を降り始める。彼らはリムルダールと近くの村々から集まって来た男たちで、昨日からずっとキラーリカントの群れを追い続けていたのだ。
「まったくゾーマ様が亡くなってからというもの、奴ら好き勝手なまねばかりしおって」
キラーリカントは忌々し気に言うと北西の空を見た。本来ならその方角には、大魔王ゾーマの居城がそびえ立っているはずであった。
だがこのアルフガルド全域を支配し、遠く異世界まで覇権を打ち立てようとしたゾーマは、既にこの世になかった。半年前。突如としてこの地に現れたロトの勇者に滅ぼされたのである。
「クソッ！　あいつらさえ来なければ……」
キラーリカントは、一度だけ目にした勇者とその一行を思い出して身震いした。
あの日。彼らリムルダール近郊に配置された魔物たちに、ゾーマからの命令が伝えられたのだ。
「小しゃくにも大魔王様に歯向かおうとしている人間がおる。そ奴らはまもなくこの地に来るであろう。良いか！手柄を立てる絶好の機会ぞ。その人間どもを倒した者には恩賞は望みのままじゃ」
伝令としてやって来たエビルマージの言葉に、キラーリカントと仲間の魔物たちは狂喜した。
「ゾーマ様に伝えてくれ。勇者とやらはこのスカルゴンが倒すとな」
「何を言うか！　手柄はこの骸骨剣士が……」
そしてもちろんキラーリカントの一族も、満を持して勇者の一行を襲ったのだ。
だが、結果は見るも無残な敗北だった。怪力を誇る怪物

も、数を頼みに押し寄せた魔物も、強大な魔力で挑みかかった魔族たちも、すべてが勇者に倒されたのだ。

このキラーリカント自身も、勇者と行動をともにしていた賢者の魔法で大火傷を負い、すんでのところを逃げのびたのである。

そして勇者たちは大魔王の城へと攻め込み、ゾーマは倒された。それからと言うもの人間たちは、生き残った魔物を容赦なく狩りたて始めたのだ。

そして今日の昼間。リムルダール近くに潜んでいた彼ら、最後の生き残りのキラーリカントは、十数人の人間たちに発見されてしまったのだ。

「ほんとうにオレだけになっちまったんだナ……」

キラーリカントは悲しげに首を振ると、もう一度つぶやいた。たとえどこまで逃げ延びたとしても、一匹になってしまってはもう子孫を増やすことも出来なかった。

「このまま、このまま老いさらばえて死ぬのを待てというのか？」

キラーリカントは悔し紛れに、足許の小石を蹴飛ばした。

コーン！　遠くで木の幹に当たったらしい音が響く。

と、その時。キラーリカントは異様な気配を感じて身構えた。人間でも、また彼の知っているどの魔物とも異なる気配だった。

「誰だ？」
キラーリカントは低くうなると周囲を見回した。
暗く冷たいゾッとするような気配が、キラーリカントの前で固まりつつあった。
「悔しいか？」
闇の中から不気味な声が尋ねた。年寄りのようでもあり、また小さな子供のようにも聞こえる不思議な音声だった。
「何者だ？　正体を現せ！」
キラーリカントの叫びに闇の中の気配はククッと低い声で笑った。
「威勢だけは良いようだナ？」
声の主はからかうように言うと言葉を続けた。
「どうだ、このワシと取り引きをせんか？　ワシに力を貸すならおまえの恨みを晴らしてやってもよいゾ」
「オレの恨みを晴らすだと？　貴様にそんな力があるのか」
「ある！」
闇の中の気配はキラーリカントさえたじろぐような気迫で答えた。
「ゾーマは死んだ。このままでは人間どもはますます増長し、いずれこのアレフガルドからありとあらゆる魔物がいなくなることだろう。だがまだすべての望みが断たれたわけではない。間もなくこの地に新たな魔王が降臨する。ゾーマなどよりずっと凄まじい力を持った魔王がナ……」
「新しい魔王だと？　それはいつのことだ。いつになったらその魔王がやって来るというのだ？」
キラーリカントは興奮して叫んだ。
「まだ先の話だ。少なくともおまえの命のある間のことではない。だからこそ……」
謎の気配はキラーリカントさえその気になれば、新たな命を与えようと約束した。今の肉体が、灰色熊の魔物としての肉体が滅んでも、新しい魔物としての生命を与えるというのだ。
「おまえの命は後わずかだ。その上、キラーリカントの一族はおまえを除いて皆死んでしまっておる。たとえワシの力を持ってしても、滅びたすべての仲間を蘇らせることは出来ん」
そして声は確信に満ちた調子で断言した。
「だがおまえの怨念を、人間どもを憎む心を使って、新たな魔物を産み出すことは出来る。後はおまえの決心しだい

だ……」

相手の言葉にキラーリカントは即座に答えた。

「力を貸してくれ。人間どもに復讐出来るならどんなことでもする！」

「分かった！　ならばこの後、最初に出会った獣におまえの血と肉を食らわせるのじゃ！」

そう告げると闇の中の気配は、一瞬にして消えてなくなった。キラーリカントの周囲には、静まり返った森が広がっているばかりである。

「今のは……今の声は？」

魔物は信じられぬ面持ちで辺りを見回した。すると……

ガサッ、突然、木立が動いた。

「誰だ？」

その声に答えるように、下草を踏み分けて現れたのは一頭の狼だった。四肢は強靭で金色の毛並みは艶やかだ。そして、不思議なことにその金色狼はキラーリカントを恐れるふうもなく、魔物の前に座ったのだ。

「なるほど、そういうことか……」

突然現れた若い獣を見て、キラーリカントはさっきの声が告げた意味を理解した。

「確かにこいつなら、新たな魔物となるにふさわしいかも知れんナ……」

そう言うなりキラーリカントは、その鋭い爪をおのが胸に突き立てたのだ。皮が破れ肉が裂け、真っ赤な血が灰色の毛皮を伝わった。

「さア！　オレの肉を食え。オレの血をすすれ。そしてキラーリカント族の怨念を受け継ぐのだ！」

肉を引き裂き、爪はドクドクと脈打っている心臓に達した。

そして巨大な灰色熊の魔物キラーリカントは、ドウと音を立てて地面に倒れた。

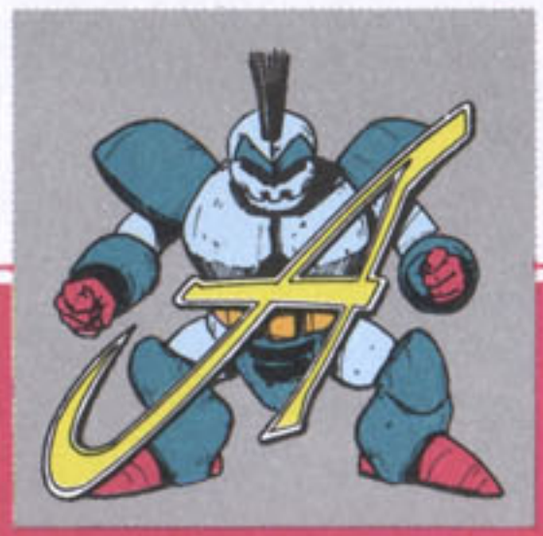
金色狼は素早くキラーリカントの死骸に飛びついた。鋭い牙で分厚い皮を引き裂き、ガツガツと肉をむさぼり始める。

そして魔物の心臓を狼が飲み込んだ時、凄まじい電撃が辺りを照らし出した。

数十もの雷が一度に落ちたような電光は森を照らし、魔物の死骸と狼を照らした。

電撃が横たわる魔物の死骸を直撃し、灰色の巨体は金色に染まった。

そして次の瞬間。
キラーリカントの死骸は蜃気楼のように薄らぎ、怪しげな霊気へと変化していったのである。
不気味な霊気は龍巻のように狼の身体を取り巻き、電光は蛇のように金色の毛皮にまとわりついた。
「オオーン！」
雄叫びが木々を震わせ森中に響き、そしてまるでそれを合図にしたかのように電光も霊気も消え去った。
静寂が戻ったとき、泉の傍らには全く新しい魔物が立っていた。
身体はキラーリカントより二回りほども大きかった。
二本の後足でしっかりと立ち、鋭い目は自信に満ちている。
泉に映る自分自身を見て、金色に輝く魔物は満足そうにうなずいた。
そして魔物はゆっくりとした足取りで森の奥へと消えて行った。
――一族を増やすために。
――新たな魔王を待つために。
以来アレフガルドにおいて、キラーリカントとは灰色熊の魔物ではなく、金色に輝く狼の魔物の名称となったのである。



ARMOR KNIGHT
呪いのブラックメイル

鎧の騎士

砂漠の魔物

闇の中、ひんやりとした夜の冷気に囲まれて戦士は目を覚ました。

百歩ほどの距離から何かが近づいて来る。

戦士の研ぎ澄まされた神経はその動きを、ほんのわずかな殺気を敏感に感じ取り危険を告げたのだ。

「魔物か？」

戦士は剣の柄に手をやると迫りつつある何かに向かって身構えた。

場所はアレフガルドの南西、ドムドーラの街に近い砂漠のまん中である。

「大サソリか骸骨、せめてその程度の相手であってくれれば良いんだが……」

音をさせぬようゆっくりと剣を抜き、鞘を砂の上に置く。正体不明の敵はわずかずつだが確実に近づきつつあった。眠る前には赤々と燃えていた枕元の焚き火はすでに熾になり、燃え残った枝にわずかばかりのオレンジの光が宿っている。

戦士の名はグレイ。主を持たない一匹狼である。彼は弟、

アンガスの婚礼に出席するためドムドーラに向かう途中だった。たった一人の肉親である弟、アンガスはドムドーラの執政官、フィドス子爵に仕える士官だった。今このアレフガルドの地は、三カ月前、突如出現した竜王と名乗る異形の魔物のため、かつてなかった程の混乱に陥っていた。

凄まじい天変地異に続いて突然、巨大な城塞とともに姿を現した竜王はアレフガルド全土の領有を宣言したのだ。国王ラルス八世は討伐軍を催し、全国から集まった幾万もの軍勢は魔物の城が出現した小島へと進撃した。だが最初の攻撃は人間側の完全な敗北に終わってしまったのだ。首都ラダトームの港を埋め尽くす程の数を誇った軍船団は、空からの魔物の攻撃と竜王の城から放たれた電撃に炎上沈没し、ほとんどの兵士が海の底へと消えて行った。そしてわずかに生き残った者たちも竜王の城が出現した島に上陸するやいなや、待ち構えていた魔物たちの餌食となったのである。

グレイの弟、アンガスは第二次討伐軍に参加するため、まもなくドムドーラを離れなければならなかった。婚礼の儀式はそのまま出征の宴になるだろう。

グレイ自身はアンガスとともにラダトームに行き、そこでラルス八世の軍に志願するつもりだった。いまやグレイのような戦士ばかりでなく武闘家や騎士、魔法使いや商人までが志願兵としてラダトームに集まりつつあった。

「来るな……」

グレイは剣を持つ手に力をこめた。闇の中で金属の触れ合う小さな音がする。

「さまよう鎧か？」

グレイはその気配から敵の正体を想像した。

「いやな相手だ」

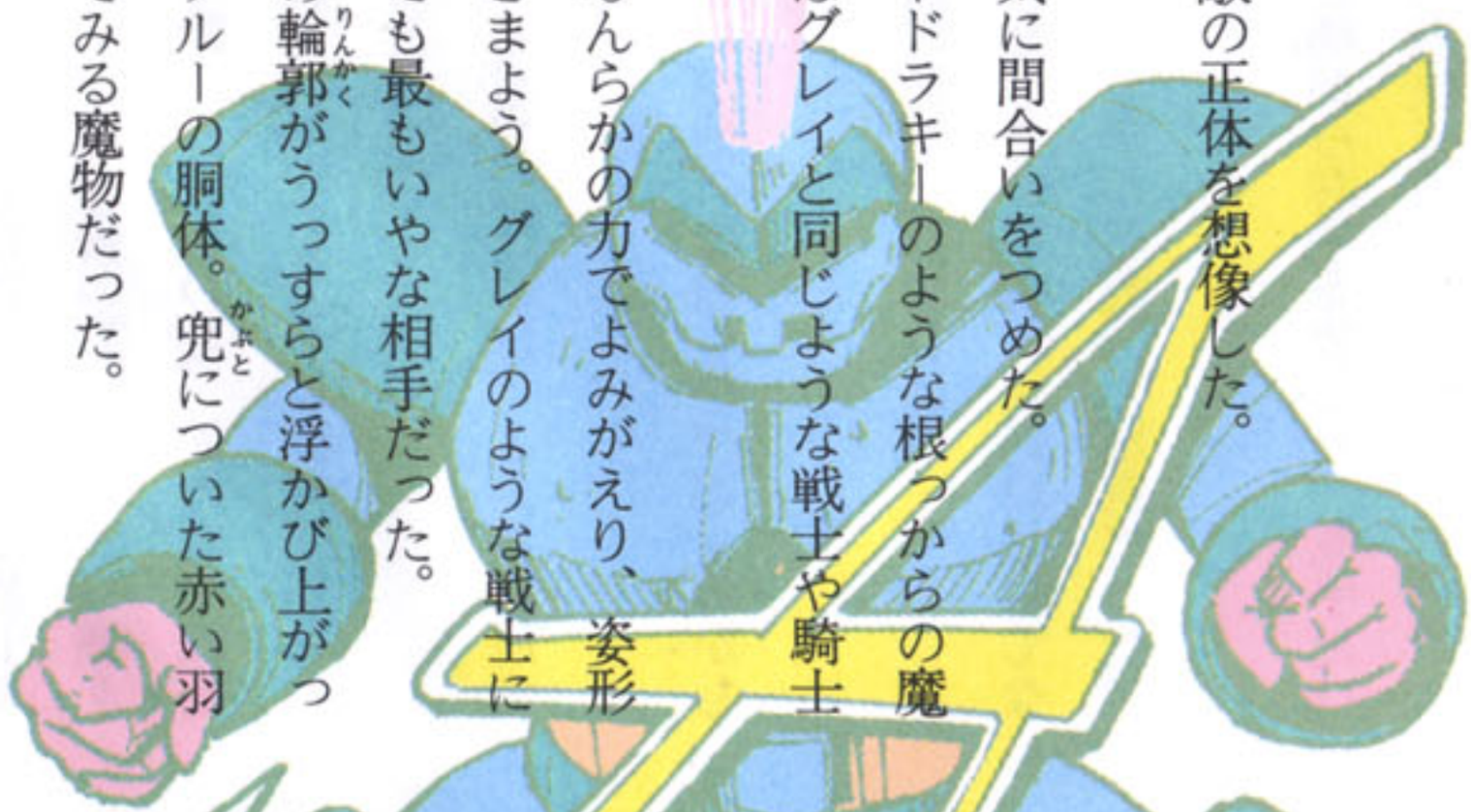
彼はそうつぶやくと一気に間合いをつめた。

さまよう鎧はスライムやドラキーのような根つからの魔物ではない。元をただせばグレイと同じような戦士や騎士なのだ。

戦場で死んだ者の魂がなんらかの力でよみがえり、姿形は昔のままで魔物としてさまよう。グレイのような戦士にとって、数ある魔物の中でも最もいやな相手だった。

やがて闇の中から相手の輪郭がうっすらと浮かび上がって来る。鮮やかなマリンブルーの胴体。兜についた赤い羽飾り、敵はグレイが初めてみる魔物だった。

「なんだこいつは？」



いぶかしがりながらもグレイは攻撃に出た。剣が空を切る鋭い音が闇を震わせた。敵は思いがけない人間の奇襲に一瞬ためらったが、すぐに巨大な戦斧を構えなおすと切りかかって来た。

ギーン！　剣と斧のぶつかりあう金属音が響き、薄黄色の火花が飛び散る。

「できる。かなりの腕だ……」

グレイは初めての敵の意外な素早さに、今度は慎重に間合いを計った。

「こいつも竜王の手先か……」

中段に構えた剣の切っ先を少し上に向け相手の出方を窺う。敵もすぐには攻めかからず両手で握った戦斧を正面に構え様子を見ていた。

どうやら相手もグレイの腕のほどを見極めたようだ。

「まずいな。長引けば不利だ」

グレイにとって当面の敵であるこの鎧の魔物は、さして恐ろしい相手ではなかった。手強いには違いないが決して負ける相手ではない。グレイの腕は長い放浪のなか、様々な魔物や盗賊団との戦いで鍛えられていた。彼の名は戦士仲間だけでなく王侯貴族のあいだでもつとに高く、雇いたいという申し出が各地からとどいていた。

最もよほど腕に自信のある者でなければ、こんな場所で野営するはずもなかった。

彼が恐れたのは、この戦いが他の魔物を呼び寄せるかも知れないという事だった。

「もしこいつがさまよう鎧の仲間だとすれば……」

相手の特徴を考えて戦わなくては魔物には絶対に勝てない。それは彼が永年の経験から学んだ戦士の知恵だった。

「いっぱい食わしてやるか……」

グレイはそうつぶやくと柄から右手を放した。左手だけで剣を構えながら同時に三歩程後退する。戦士の右手が胸の前で不可思議な印を結んだとき、鎧の魔物もまた戦斧から片手を放した。相手もグレイと同じような印を結ぶと呪文を唱える。

「マホトーン！」

地の底から響くような魔物の声が闇を震わせた。

「かかったな！」
戦士の身体が砂を蹴って跳躍する。その瞬間、敵も自分が相手のトリックにかかったのを理解した。さまよう鎧を始めとする甲冑族の魔物は呪文による攻撃に非常に弱い。中でもラリホーの呪文を使えば、まず間違いなくこの手の魔物を眠らせることが出来た。グレイが印を組むのを見た敵はラリホーの呪文を恐れ、機先を制してマホトーンを唱えたのだ。
だがグレイ自身、ほとんどの戦士たちと同じように呪文は全く使えなかった。そして高度な呪文を唱えるためには、かなり集中力が必要であり精神的にも相当に消耗する。
グレイの目的は相手に全く無意味なマホトーンを唱えさせることにあったのだ。
ガキーン！　空中から振り下ろされた剣に戦斧を弾き飛ばされた鎧の魔物は、慌てて武器を拾おうとした。だが次の一瞬、着地したグレイは敵の胴体をなぎ払っていた。
「どうやら多少無理をしても、今夜中にドムドーラに入ったほうが良さそうだな」
グレイは拾い上げた鞘に剣をおさめると東に向かって歩きだした。

大魔道カトゥサ

鎧の魔物を倒したグレイがドムドーラを目指して砂漠を歩き始めたころ、遙か離れた竜王の城から彼の姿を見つめる者があった。竜王の側近、大魔道カトゥサである。

邪悪な魔力を身につけたこの男は、戦いの一部始終を水晶球を使って眺めていたのだ。

岩をくりぬいて造られた真四角の空間。中央に置かれた祭壇には不気味な邪神の像が祭られ、その前では青白い炎が揺れている。

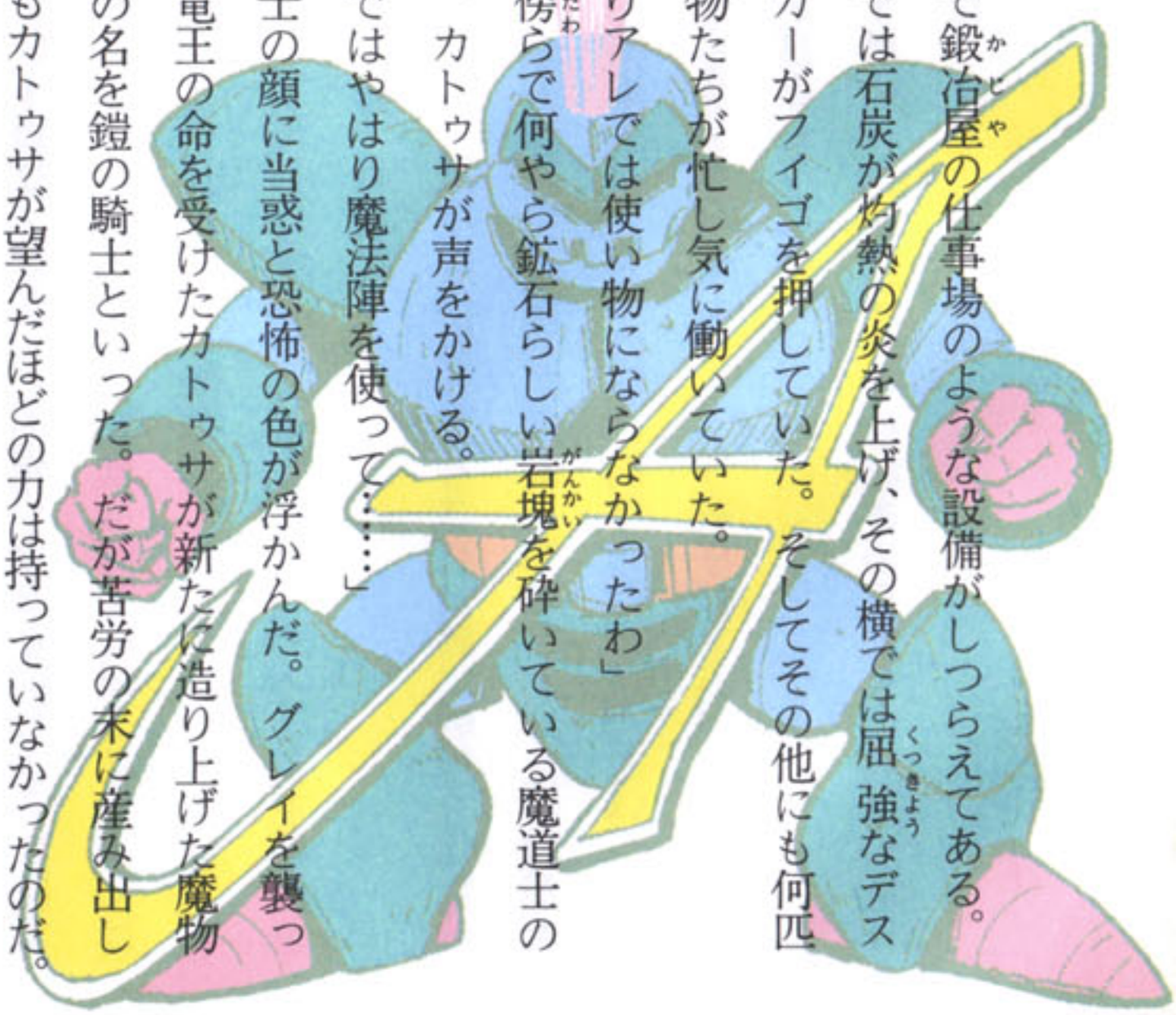
ここは竜王の城の三階にあるカトゥサの部屋である。大魔道は自分の生み出した魔物が、人間の戦士を相手にどの程度まで戦えるかを観察していたのだ。

「やはりこの程度では無理か……」

カトゥサは忌々しげにいうと手にした杖を軽く振った。同時に彼の姿はその場から消え、城の最下層にある大広間に転移した。

そこはカトゥサが先程までいた部屋の数十倍はありそうな巨大な空洞だった。

床の片側半分には大小三つの魔法陣が描かれ、反対側に



はまるで鍛冶屋の仕事場のような設備がしつらえてある。炉の中では石炭が灼熱の炎を上げ、その横では屈強なデストーカーがフイゴを押していた。そしてその他にも何匹もの魔物たちが忙し気に働いていた。

「やはりアレでは使い物にならなかったわ」

炉の傍らで何やら鉱石らしい岩塊を砕いている魔道士の一人に、カトゥサが声をかける。

「それではやはり魔法陣を使って……」

魔道士の顔に当惑と恐怖の色が浮かんだ。グレイを襲ったのは竜王の命を受けたカトゥサが新たに造り上げた魔物で、その名を鎧の騎士といった。だが苦労の末に産み出した魔物もカトゥサが望んだほどの力は持っていなかったのだ。

「しかし元々あの魔法陣は陛下がラダトーム攻撃のために……」

魔道士の言葉を無視してカトゥサは魔物の一人に何事か命じた。魔道士はあきらめたように首をふり、手にした鉱石を炉の中に投げ入れた。デストーカーはフイゴを押す手に力を込め、炎がさらに強くなった。

するとそこへカトゥサに命じられた魔物が、灰色の鎧を持ってやって来た。色こそ違えグレイを襲った魔物と全く

同じ形の鎧だった。

アレフガルド征服を狙う竜王が、新たな魔物の製作をカトゥサに命令してから、すでにひと月が過ぎていた。だが計画は予定通り進展せず、やっと出来上がった試作品の鎧から造った魔物も、いましがたグレイによって倒されてしまったのだ。

今、大魔道カトゥサは竜王が新たな手勢を呼び寄せるために造った魔法陣を利用して、鎧の騎士を完成させようとしているのだ。

たとえ無断で魔法陣を使用しても、魔物の製作が成功すれば竜王は満足するだろう。だがもし失敗すれば……。

カトゥサの直属の部下である魔道士は、その時の竜王の仕打ちを想像して恐怖に震えた。

カトゥサは法衣(ローブ)の裾をひるがえしてその場を離れ魔法陣の前に立った。描かれた不可思議(ふかしぎ)な古代文字と邪悪な文様を見て満足気にうなずく。そして、手にした杖を上げ何事か呪文をつぶやきはじめた。

「暗黒の邪神よ。闇と死の支配者たちよ。時と空間の淵を越え我が要求にこたえん！」

カトゥサはそう叫ぶなり杖の先端を魔法陣に向けた。稲光にも似た電光がほとばしり、魔法陣の中心から黒煙が立ち上(のぼ)る。

「お召(め)しにございますか？」

黒煙の中から現れたのはメラメラと燃え盛る炎の怪物、フレイムだった。その姿はほぼ人間の形をとっているものの、実体はなく全身これ熱の塊である。

「おまえたちにちと頼みたい仕事があってな。準備が整うまでその場にて待つのじゃ」

全部で十匹のフレイムに大魔道はそう告げると隣の魔法陣に向かった。同じように呪文を唱え杖を振りかざす。すると今度は薄緑の煙とともに青白い魔物の一群が出現した。新しく現れた魔物を見てフレイムたちが一勢にうなり声を上げる。

出現したのはフレイムと正反対の性質を持つ怪物、冷気の魔物、ブリザードであった。

同じ精霊(せいれい)族でありながら二種類の魔物は全く反対の属性を持ち、したがって仲が極めて悪いのだ。そしてカトゥサは魔物たちを待機させたまま先程の鎧を、三つ目の一番大きな魔法陣の中央に置かせた。左右からフレイムのオレンジ色の炎と、ブリザードの青白い冷光に照らされた大魔道

の顔に不気味な笑みが浮かぶ。

「よいか、まずフレイムが魔法陣の中へ入り力の続く限りこの鎧を熱するのだ。次にわしが命じたらブリザードが素早くフレイムと入れ替わり一気に冷却するのだ。よいな？」

二種類の魔物は一瞬驚愕して身体を震わせた。カトゥサの命じたのはまさに命賭けの行為であった。もしフレイムとブリザードの身体が少しでも触れ合えば、魔物たちは一瞬にして消滅してしまうだろう。そして危険度はブリザードの方が数段高かった。フレイムはタイミング良く身をかわすだけでいいわけだが、灼熱した鎧にじかに触れなければならないブリザードのダメージたるや、想像を絶するものがあるはずである。

カトゥサは鎧にかけた呪いと魔力を、魔物の放つ熱と冷気によってより強力に定着させようとしていたのだ。一つ完成すれば、後はさして苦労なく量産することができるはずである。

「よいか、この仕事が首尾よくいけば、陛下にとりなし直属の軍団として召し抱えてやろうぞ。みな死力を尽くすのじゃ！」

フレイムとブリザードにとって大魔道の言葉なぞどうでもよかった。出来ることなら魔物たちはすぐにでも魔界に戻りたいと考えていたのだ。だが魔法陣を使って召喚された以上、主であるカトゥサの命令は絶対である。

魔物たちは覚悟を決めると大魔道の合図を待った。

ドムドーラ

弟アンガスはドムドーラの街の入り口まで出迎えに来ていた。

「よくこの時間に着くとわかったな？」

「実は見張台の当番が俺の部下なのサ。兄さんらしい人影を見たら連絡するよう言ってあったんだ」

そう言ってアンガスは背後の塔を指さした。石と煉瓦で築かれた塔の上で弓を持った兵士が手をふっている。

確かにあの塔の高さなら砂漠からやって来る者を、相当早く発見出来るだろう。

「ハハハ、それにしても兄さん、ちっとも変わってないネ。もっと老けたかと思ってたヨ」

「バカ言え。オレとおまえは四つしか違わないんだゾ」

再会を喜ぶ二人にアンガスの後ろにいた少女が声をかける。

「サァ、サァ。こんなところにお兄様を立たせとくわけにはいかないでしょ」

「オッそうだ。兄さん紹介しとくヨ。彼女がエリザ。そしてこの人が継父さんのドグルだ。でっかい武器の店をやってるんだぜ」

ドグルと呼ばれた中年の男がペコリと頭を下げる。

「ともかく家の方へどうぞ。明日の準備で今日は商売を休んでますから、ゆっくり出来ますよ。たいしたおもてなしも出来ませんが、あなたの泊まる部屋も用意してあります」

ドグルはそう言うと先に立って歩き始めた。

そして四人がドグルの家に向かう横を、完全装備の兵士たちが足早に通り過ぎて行った。みなアンガスとは顔見知りらしく気軽に声をかけていく。

「ここもだいぶ物々しい雰囲気になってるナ」

グレイの言葉に三人がうなずく。

「エエ、竜王とかが現れてからもう大変な騒ぎですワ」

「そうだ。兄さんもいっそここで仕官をしてしまわないかい？」

アンガスがそう言ったとき、ドグルの家が見えてきた。

ここ、ドムドーラで一番大きな武器屋を営む彼の家は、樫の大木に守られるように建っていた。

アンガスがグレイに自分の主である執政官、フィドス子爵への仕官を勧めたのも、もっともな話であった。竜王出現以来、アレフガルドの各都市は膨大な人的資源を失ってき

たのだ。地震は多くの街や村を破壊し、津波は幾つもの漁村を全滅させた。河の流れは変わり火山の噴火によって地形さえ変化し始めている。そしてラルス八世の催した討伐軍には、戦士や騎士ばかりでなく一般の市民も多数志願しているのだ。このドムドーラにしても現在、戦える男の三分の一が兵士として出陣してるのだ。今やどこの太守や貴族も、グレイのような自由戦士を召し抱えようと必死になっていた。

「あらためて礼を言いますよ。こんなときにわざわざオレの結婚式に来てくれて」

客間に通されたグレイの前に両手をついて、アンガスが神妙に頭を下げた。

「よせよ。どのみちラダトームに行くつもりだったんだから通り道さ。それよりこの街はまだたいした被害にあってはいない様子だが？」

「おかげさんでラダトームやリムルダールみたいに直接攻撃は受けてないんですがネ……」

飲み物をはこんで来たエリザと一緒に部屋に入って来たドグルが話し始めた。

確かにここドムドーラは直接の攻撃こそ受けていなかったが、見張りの報告では空を飛ぶ魔物の数は日増しに増えているらしい。討伐軍が敗退した以上今度は竜王が攻勢に出るだろう。各地の執政官が兵員の補充に躍起になっているのも無理からぬ話だった。

「ところで近衛の士官と言えば結構忙しいんだろう？　のんびりしてていいのか？」

「いやー竜王が現れてひと月ばかりは目茶苦茶忙しかったんだけどさ、今日と明日は婚礼の準備で休みをもらったんだよ」

グレイの質問にアンガスがそう答えたとき、店の表で誰かが呼ぶ声が聞こえた。

「誰かが砂漠で魔物に襲われているそうですワ！」

様子を見に行ったエリザの言葉に二人は急いで家を出た。

商人バーン

グレイたちがドムドーラの街の石造りの門までやって来たとき、すでに知らせを受けた何人かの騎兵が飛び出していた。

見れば砂漠の向こうから一台の馬車が走って来る。そしてその上空からは数匹のキメラが執拗な攻撃を繰り返していた。

「クソー、いままでは真っ昼間から出てくることなんかなかったのに」
アンガスが忌々しげにキメラをにらんだ。御者は必死にロバに鞭をあて、なんとか追撃を振り切ろうとしている。
「なんとか間に合ったな……」
グレイの言葉通り、猛スピードで接近して来る騎兵に気づいたキメラは、攻撃をあきらめ上昇した。馬を止めた兵士が矢を射かけると魔物たちはそのまま飛び去って行った。
「イヤー、どうなることかと思いましたよ」
汗まみれで馬車を降りた男はそう言って額を拭った。頭にターバンを被り紺色の布でマスクをしている。濃紺の上着は見たこともない生地で、腰の剣は三日月型の弧を描いた半月刀だ。彼がかなり遠方の土地から来たのは明らかだった。
傍らの馬車には大小の木箱が積み上げられており、それを引いて来たロバは恐怖と興奮にゼーゼーと息を荒くしていた。
彼の名はバーン。遠いルプガナの商人だという。竜王の出現を知ったこの男は、武器の売買で一山当てようとこのアレフガルドにやって来たと話した。
「ベラヌールに向かう交易船にのせてもらって来たんですわ。それで、この砂漠の向こうの入り江で自分だけ降りてラダトームに行こうとしたんですが……」
あまりに無謀な彼の話に、集まっていた街の人々の間から驚きの声があがった。
「何はともあれ命が無事だっただけ精霊ルビスに感謝しなされ……」
一人の老婆がそう言いながら、バーンにミルクの入ったカップを差し出した。
「かたじけない。本当にこの街のお陰で助かりましたわい」
バーンはそういうとミルクをうまそうに飲みほした。
「ときにバーンさんとやら、あんたは武器を売って一儲けするつもりだと言うが、この街にも武器屋は二つあるし、ラダトームだって……」
人の良いドグルは商売敵と知っても、警戒するどころか反対に心配しているようだ。グレイには義理の父となる彼のそんな性格も好ましかった。
「心配ご無用。マ、ともかくわしの持って来た品物を見てくれんかネ?」
魔物に襲われた興奮からやっと覚め、それでもまだ息を荒くしているロバの背をさすりながらバーンは言った。

街の執政官であるフィドス子爵の許可を得、バーンはさっそく店を広げた。場所はこのドムドーラの中央広場である。

「なるほどこいつはうまい品揃えだ……」

バーンが持って来た荷物を見てドグルが感心する。

それは戦士や騎士のための本格的な品でなく、女や老人にも扱える武器や防具だった。

力のない者でも引けるよう滑車を取り付けた弓。軽いが強力な毒を仕込んだ毒針。そして小ぶりのナイフ。子供用の聖水を飛ばす水鉄砲まである。どれもドグルの店のような専門の武器店では扱っていない品物だった。

「その毒針はいくらかの？　それならあたしでも使えそうじゃ」

さっきバーンにミルクを振舞った老婆が尋ねた。

「婆さんから金はとれんな。ミルクの礼だ。持っていってくれ」

バーンはそう言うと老婆に毒針の扱い方を説明しながら、懐から取り出した銀の煙管に煙草を詰めた。火打ち石で器用に火をつける。異国煙草の異様な臭いが辺りに広がった。

「どうだい兄さんもあのナイフを買ったら？」

「おまえこそ水鉄砲がお似合いだゾ」

グレイとアンガスがそんな冗談を言い合っている前で、バーンの商品は次々と売れていった。確かにいざとなったとき、それほど役に立つ品ではなかった。だが竜王の出現に不安をつのらせていた街の人々にとっては、たとえ気休めでも武器が必要だったのだろう。グレイはアンガスと軽口をたたきながらそんなことを考えていた。

街のほとんどの女や老人が何かを買って帰った後、グレイはバーンの後ろに妙に厳重に梱包された箱があるのに気づいた。

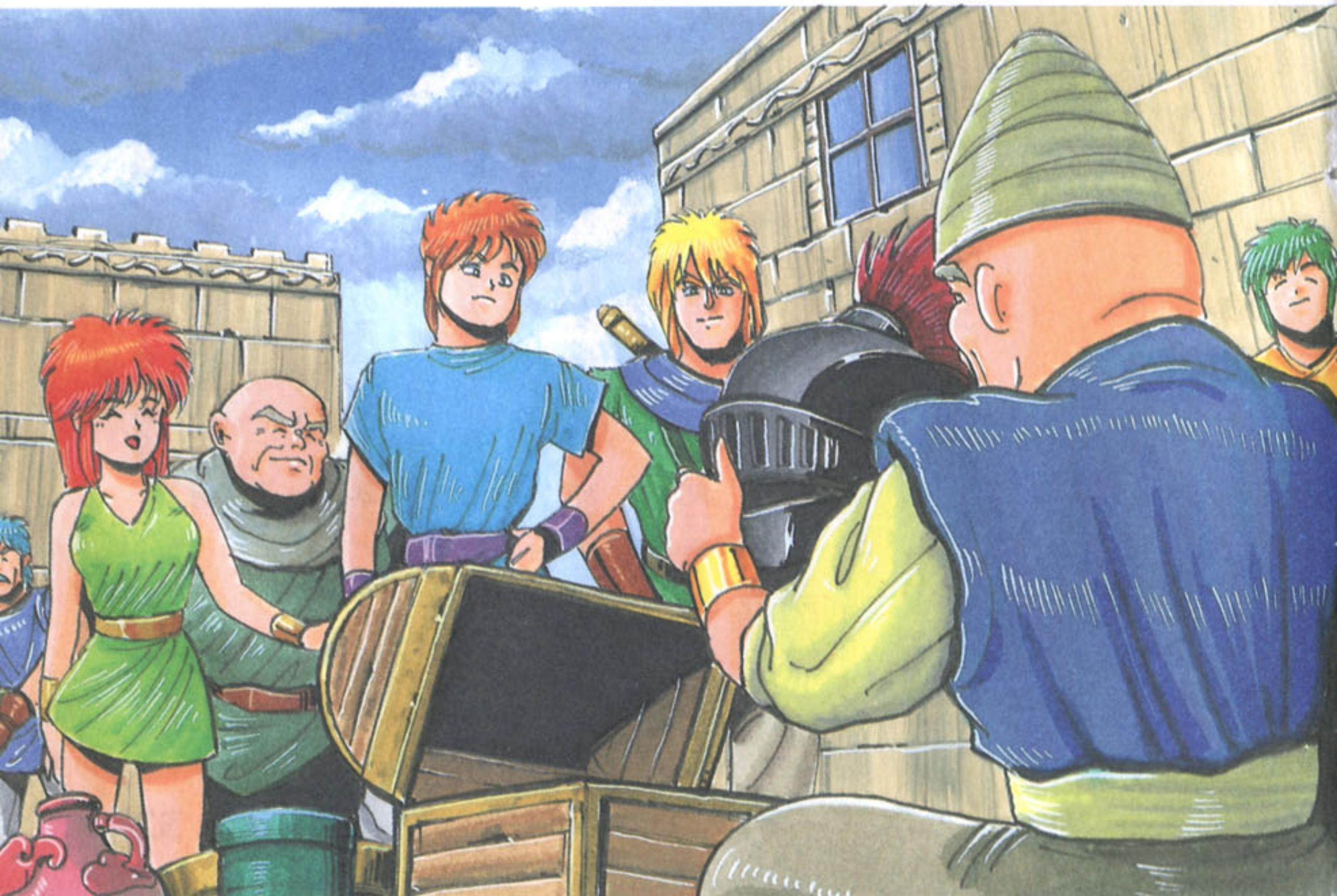
「それはなんだい？　子供用の鎧かい？」

やはり目をとめたアンガスの言葉にバーンはニヤリと笑うと、箱に手をやった。

「こいつはネ、売り物と言えば売り物ですが、今までの品とはちっとばっかしモノが違うんですよ。ご覧になりますか？」

好奇心にかられてうなずくアンガスの前に下ろされた箱には、呪文による封印まで施してある。確かによほど貴重

な物が入っているらしかった。
「しかしこいつは今までのモンとは値段が違いますよ」
バーンはそう言いながら箱の蓋を開けた。
「こ、これは……」
ドグルが声をつまらせる。
グレイとアンガスもポカンと口を開けて箱から取り出された鎧を見つめていた。
漆黒。まさにそう形容するしかなかった。艶やかな表面はまるで黒耀石のような光沢をおび、飾り一つないデザインはこの鎧が真に戦いの道具であることを物語っていた。今までの武器との釣り合いから見れば段違いの鎧だった。この鎧に見合う武器といえば光の剣かドラゴンキラーぐらいのものだろう。
「いかがですかな？　これは私が遠い異国で手に入れた鎧。どんな剣や戦斧も受けつけないブラックメイルです」
バーンは得意げに煙草をふかすとパイプの頭で鎧をたたいた。キーンと透んだ音が辺りに響く。黒い鎧はとてつもなく硬い金属で造られているらしい。
「それで値段は？　いったいいくらなんだ」
アンガスが魅入られたように尋ねた。



「兵隊さん、残念だがあんたの給金じゃ無理だと思いますよ」
バーンが口にした金額は法外なものだった。
「二万ゴールドか……確かにそのくらいはするよナ……」
がっくりと肩を落としてアンガスがつぶやく。グレイにしても思いは同じだった。この鎧を見た瞬間、彼は買えるものなら弟の結婚祝いに贈ろうと考えていたのだ。
「もらおうじゃないかその鎧」
突然、ドグルが言った。
「継父さん！」
「お父様？」
アンガスとエリザが同時にドグルの方を振り向いて何か言いかけたが、彼は片手を上げてそれを制するとバーンに話し始めた。
「この人は明日、うちの娘と結婚する。つまりわしの息子になるって訳だ。だが問題はせっかく一緒になった二人も、すぐに離ればなれになるってことなのサ。婿殿は近々、竜王を退治するための戦いに行く。わしは可愛い娘を結婚してすぐに後家にしたくはない。それに婚礼だけでも物入りなのにこの上、葬儀なんていったらますます金がかかっちまうからネ。婿殿、この鎧はわしからの贈り物。どうか無事に竜王を退治して帰ってきておくれ」
ドグルはそう言うとアンガスの顔を見て微笑んだ。

宴

ドグルの家は男たちの笑いと陽気な歌声にあふれていた。明日は久し振りの婚礼、竜王の出現以来沈みがちだった人々の表情にも明るさが戻っている。
「さァ今日はひとつ盛大にやりましょう」
アンガスの上司、近衛隊長のノブルがそう言いながらグレイの酒杯に葡萄酒を満たした。
ここドムドーラでは婚礼の前日、新郎は男だけの、そして新婦は女だけの宴を開くのが習わしだった。花嫁のエリザも今頃は二階で友だちに囲まれているはずである。
「継父さんにはえらい散財をさせちまったな」
アンガスが皿に盛られた羊の肉に手をやりながら言った。
グレイも普段はほとんど飲まない酒にすっかり良い気持ちになっていた。
「しかしバーンはなんでああ急いでラダトームに向かったのかな？　どうせなら俺たちと一緒に行けば良いのに」
ノブルが右手を上げて召使に酒の追加を頼みながら首

を捻る。バーンはドグルがブラックメイルを買うと、すぐに街を出てしまったのだ。

「きっとまた新しい水鉄砲を仕入れて戻って来るつもりなんですよ、あいつは。全く商人てのは、竜王だろうと魔物だろうと商売の種にしちまうんですからね」

新しい酒壺を受け取りながらアンガスが言い、ノブルがうなずく。

「えらい言われようだね婿殿」

ドグルが笑いながら言った。

「失言だったなアンガス。早いとこあやまっちまったほうがいいぞ。でないとあの鎧は……」

グレイが冷やかしアンガスが慌てて弁解を始めた。

「しかしすげえ鎧だよな。俺も貯えさえあれば買ったんだが……」

ノブルが思い出したようにため息をついた。確かにあれだけの鎧はグレイも見たことがなかった。

「無理、無理。隊長は俺たちより給料をもらっているくせに、いつもスカンピンなんだから」

隣の円卓から千鳥足でやって来た兵士がそう言いながら、グレイの前にあった酒瓶に手をやった。

「うるせェ！　俺様が貧乏なのは、いつも博打でおまえたち可愛い部下どもにほどこしてやってるからじゃねェか、ちっとは感謝しろ」

ノブルに背中をどやされた兵士は笑いながらグレイに酒をついだ。

「いい連中だ。確かにアンガスの言う通りこの街に落ち着くのも悪くないな」

グレイは冗談を言い合う近衛の兵士たちを見てそう思った。

かなりの広さがあるこの部屋も、つめかけたアンガスの同僚や友人たちでごった返していた。

二階からはエリザとその友人たちの笑い声が響いて来る。

「ほんとうはねぇグレイさん。竜王なんて化け物さえ出てこなければ、二人はもう祝言をあげていたんですよ」

ドグルはそう言いながら、新しい葡萄酒を自分とアンガスの杯についだ。

「ま、なにはともあれ明日は婚礼。めでたいこってす」

どうやらドグルは娘を嫁にやることより、息子が出来たことのほうが嬉しい様子だった。かなり裕福なドグルにとっても二万ゴールドという鎧の値段は、決して安くはない

はずである。グレイはたった一人の肉親であるアンガスのしゅうとが、ドグルのような人物ですっかり嬉しくなった。

深夜になっても客は誰一人席を立とうとはしなかった。使用人たちは忙し気に客間と調理場を往復し、宴(うたげ)はいつ果てるともなく続いていた。

アンガスはすでに酔いつぶれ、グレイも意識がもうろうとし始めている。

と、そのとき。店の表で悲鳴が聞こえた。

「魔物だ！　キメラだぞ！」

男たちがはじかれたように席を立った。

「起きろ野郎ども！」

ノブルが酔い潰れている部下の頭から水差しの水をぶっかける。

「五人ばかりここへ残れ。二階の娘たちと店にある武器を守るんだ。後は全員俺につづけ！」

あれだけ飲んでいてもさすがに近衛(このえ)の兵士たちだ。すぐにしらふに戻るとノブルの前に整列した。使用人たちも手に手に売り物の武器を持って戦いに備えている。

「あのオレは……」

アンガスが言いにくそうにノブルに声をかけた。

「おまえはここへ残れ。嫁さんと親父殿を守ってやれ。さァ、行くゾ！」

ノブルはそう言うと兵士の一隊を引き連れて飛び出して行った。

グレイは二階の守りをアンガスと二人の兵士に任せ、剣を抜くと武器類が並んでいる店に急いだ。襲って来たのはキメラを中心とする空の魔物たちだった。鋭いくちばしで店の戸を破り内部に侵入しようとしている。

「槍(やり)だ！　槍をかせ！」

グレイは渡された鋼鉄の槍で、正面の窓から突っ込んで来たメイジキメラに立ち向かった。

「ギャー！」

突き出された穂先に腹を串刺しされた魔物が悲鳴をあげ、緑色の体液が飛び散る。ドグルも弓を手に奮戦している。

「この調子なら夜明けまでには撃退できそうですネ」

となりで剣をふるっていた兵士がニヤリと笑った。

と、そのとき、二階から悲鳴が聞こえた。

「エリザだ！」

ドグルが叫び、グレイは後を兵士たちに任せ二階へ駆け上がった。

鎧の騎士

エリザの部屋に飛び込んだグレイの目に最初に映ったのは純白の花嫁衣装だった。壁にかかったそのドレスの前で、あの漆黒の鎧をつけたアンガスがうつ伏せに倒れている。

「エリザ、いったいこれは？」

「わからないんです。この部屋に置いてあった鎧をつけるって言うから手伝ったら、そしたら急に……」

アンガスの傍らにひざまずいたエリザが当惑して答える。倒れたアンガスはうめきながら床に敷かれたカーペットを掻きむしっていた。

「アンガスどうした？」

「しっかりしろ！」

駆け込んで来た兵士たちが口々に叫びながらアンガスを抱え起こした。その瞬間！

「ウガー」

ものすごい雄叫びをあげたアンガスが兵士たちに切りつけたのだ。

エリザが悲鳴をあげ、壁の花嫁衣装に鮮血が飛び散る。

「アンガス！」

駆け寄ろうとするグレイの前で三人の兵士たちが倒れた。立ち上がったアンガスは、まるで高熱にうなされたように身体を震わせている。

「アンガスしっかりしろ。正気に戻れ！」

グレイの言葉も全く聞こえぬらしく、アンガスはフラフラと後ずさった。そしてそのまま頑丈な鎧戸のしまった窓に体当たりしたのだ。

窓を突き破ったアンガスは地面に落ち、そのまま何事もなかったかのように歩き出した。

「いったいこれは……」

部屋に入って来たドグルがオロオロと尋ねる。

「エリザさんを頼みます！」

そう言い残したグレイは槍をドグルに手渡すと、後を追って窓から飛び降りた。

あちこちで悲鳴があがり罵声が飛びかうドムドーラの街を、アンガスはまるで夢遊病者のように歩いて行く。

「アンガス！　いったいどうしちまったんだ？」

追いすがったグレイがそう叫んだとき、辺りに不気味な高笑いが響いた。

「ワハハハハ、かかりおったな愚かな人間ども」

ふり返ると通りの反対側、教会の鐘楼に何者かが立っていた。紺色のマスク、濃紺の上着。それは昼間、漆黒の鎧を売った商人、バーンだった。

「わしは竜王陛下の臣、大魔道カトゥサ。ドムドーラのものどもよ、今こそ我が呪法の力を見るがよい。鎧の騎士よ、その真の姿を現せい！」

声と同時にバーン、いやカトゥサの身体から今までの衣服が千切れ飛んだ。後に残った黄金色の法衣が風にたなびき、手にした杖の先端から電撃がほとばしる。

その電光がアンガスを直撃した。すると真っ黒だった鎧の色があっという間に鮮やかなマリンブルーに変化したのだ。そこに立っていたのは昨夜、グレイを襲ったのと全く同じ魔物だった。

大魔道カトゥサは魔界から召喚した二種類の魔物、フレイムとブリザードを使い鎧の騎士を造るのに成功したのだ。

アンガスの手にはいつの間にか巨大な戦斧が握られている。

「アンガス……」

呆然と立ち尽くすグレイの前で、アンガスは手にした戦斧をまるで重さを確かめるように二、三度振ると、地の底から響くようなうなり声をあげた。

「アンガス……」

いつの間にか後ろに立っていたエリザが、フラフラとアンガスに近づいた。

「アンガス。おねがいよ、もとの姿にもどって」

エリザの瞳は涙でうるみ、声は震えている。

「あしたは……明日は結婚式なのよ」

そんなエリザに向かってアンガスは戦斧を構えると切りかかって来た。

「やめろアンガス！」

グレイは素早くエリザの身体を突き飛ばした。斧の切っ先が少女の身体をかすめ、アンガスはグレイの方を見た。そしてそのまま戦斧を振りかぶると攻めかかって来る。

「やめて！　お兄さんが分からないの？」

エリザの声も聞こえぬかのように、アンガスはグレイを目がけ切りつけた。最初の攻撃をなんとかかわしたグレイは、飛び退くと腰の剣に手をやった。

「やめて！」

エリザが叫んだ。グレイは唇をかむと剣を抜き放ち、そ

のまま跳躍した。アンガスも同時に地面を蹴って宙に飛んだ。二つの影が空中で重なり、激しい金属音が闇に吸い込まれる。

着地したグレイの後ろでアンガスがゆっくりと倒れた。そしてグレイの剣がつか元からボッキリと折れ、地面に落ちた。

「アンガス……」

「しっかりしてアンガス」

グレイの腕の中でアンガスはゆっくりと目をあけ身体を起こした。

「エリザ、にいさん。いったいオレは……?」

アンガスはうめくように言うとそのまま事切れた。

鎧が音もなく彼の身体から外れた。

アンガスの死を見届けたカトゥサは舌打ちすると杖を振りかざし、上空の魔物たちはそれを合図に一勢に飛び去って行った。

「聞け人間ども！　これより先、我らに捕えられし戦士や騎士は、すべて鎧の騎士に変わるであろう。おまえたちは自分の親兄弟と戦わねばならなくなるのだ」

そして大魔道は甲高い笑い声を残して姿を消した。

新たな決意

夜が明けた。悲しみと怒りに満ちた朝がやってきた。魔物に変わったアンガスによって殺された兵士は六人。そしてキメラの攻撃で命を落とした者は十数人に上っていた。

「やはり行くか？」

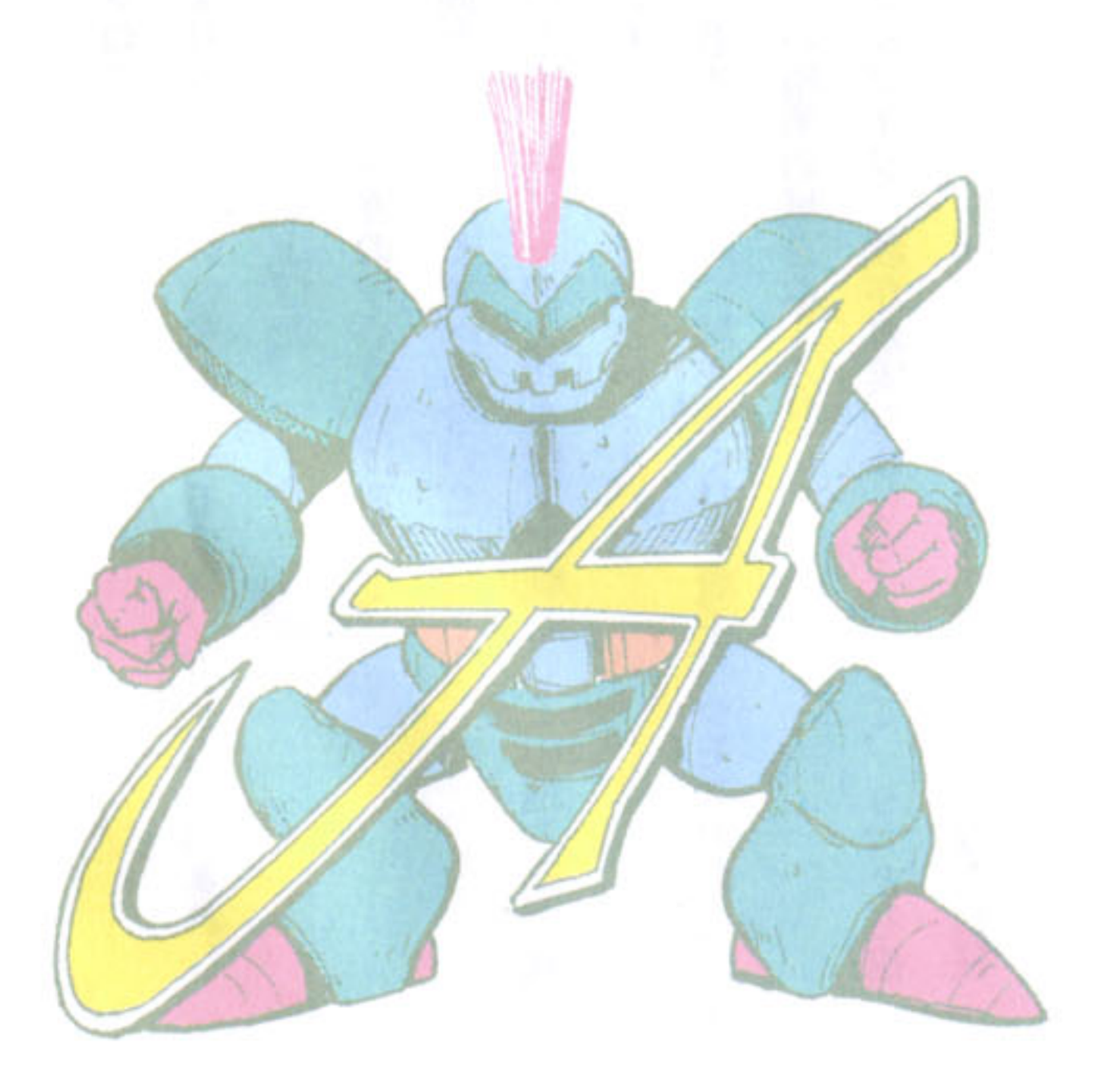
挨拶によったグレイに、近衛隊長のノブルがあきらめたように言った。まもなく編成されるであろう第二次討伐軍に参加するため、ラダトームに行くというグレイの言葉に、ノブルはなんとかここにとどまるよう説得していたのだ。だがグレイの決心は変わらなかった。

なんとしても弟の仇を討つ。グレイの思いはそのことだけだった。彼の胸中には竜王とカトゥサに対する凄まじい憎しみが渦巻いていたのだ。

「もう引き留めないよ。好きにするがいいさ。だが決して死に急ぐなよ」

そう言って寂しげに微笑むノブルに、ドグルとエリザのことを頼むと、グレイは彼の家を出た。街のあちこちで昨夜の襲撃で肉親を失った者たちがすすり泣く声がする。焼け跡からはまだうっすらと煙が上がり、そんな中を兵士の

一隊が走り抜けて行った。
「もう行かれますか？」
街外れでグレイを呼び止めたのはドグルだった。彼の後ろには黒い喪服をまとったエリザが立っていた。
「すまなかった……」
グレイは何か言おうとしたが言葉にならず、そのまま二人の前を足早に通り過ぎた。アンガスの葬儀は三日後に他の犠牲者と一緒に行われることが決まっていた。だがグレイは葬儀に参列する気持ちにはなれなかった。
「アンガス。おまえの葬式は竜王を倒した後だ。そのときこそ、うんと盛大なヤツをやってやるからな」
昨夜、ドグルの家の墓にアンガスを埋葬したグレイはそう心に誓ったのだ。
「ご無事で……」
背後から少女の声がした。
「無茶しちゃいけませんよ。かならず生きて帰ってください……」
涙声でドグルが叫び、戦士は振り返ると大きく手をふった。
「死ぬものか。なにがあろうと死んでたまるか。この先どのような戦いが待っていようとも俺は絶対に生き残ってやる。そしてこの手でカトゥサを、竜王の首をたたっ切ってやる」
グレイはそう自分に言い聞かせると歩みを早めた。去って行く戦士を見送るかのように北風が砂塵を巻き上げる。
今、アレフガルドは長くつらい冬の時代を迎えていた。



BOMB ROCK

爆弾岩・故郷への旅

爆弾岩

ネクロゴンドの奥地――

闇より生まれし影の魔王バラモスは、湖と岩に囲まれし地に立ち、空を見上げた。

「雲の流れが世界の中心を告げる……。

人間どもが近寄るすべもないこの地……。

闇へと通ずギアガの大穴を眼下に眺むるこの地こそ、我が城にもっともふさわしい……。

皆の者！　この地に城を築く!!　魔王バラモスの名にふさわしい暗黒の城をな……!!

エビルマージ。我が忠実なるしもべにして、もっとも信頼に値する魔司・エビルマージよ……。一切はそなたに任せる。魔王の居城、見事築いてみせよ！」

「はっ。このエビルマージにすべてお任せを……」

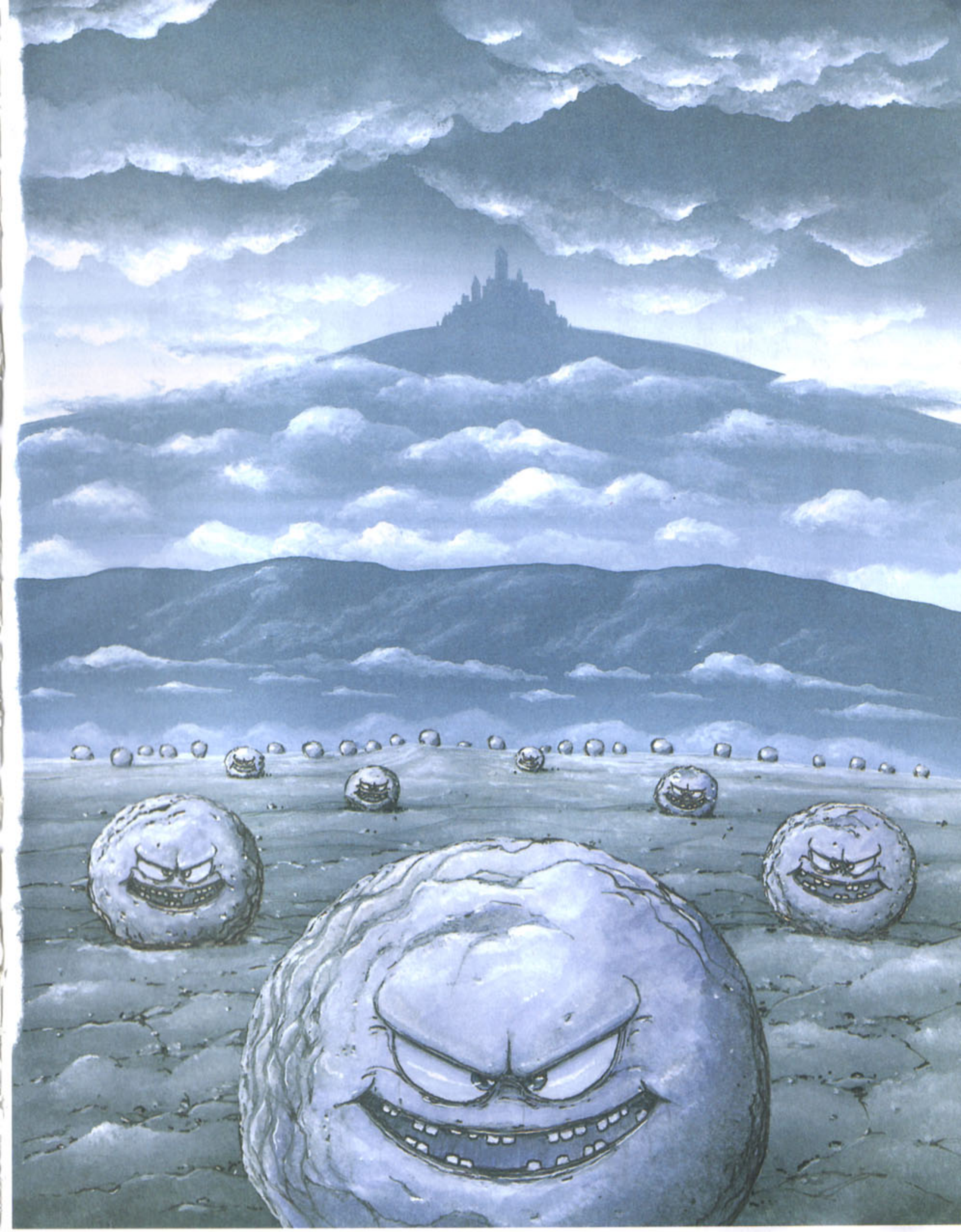
魔王の命を受けたエビルマージは、魔物どもの前に立ち、

「聞け、ものども！　暗黒の居城築くため、あまたの石が必要となった。そなたたちに命ず。魔王様の城となる石を集めてまいれ。――ゆけ！」

声高らかに令を飛ばした。

それに応えて幾百幾千の魔物が一斉に空へと飛び立ち、また、空を飛べぬ魔物たちは自らの足で移動を始め、散っ

て行った。
そしてしばらくの間、ネクロゴンドの地は時ならぬ騒がしさを迎えることとなる。
岩山のあちこちでは、トロルや動く石像、デストーカーら力自慢の魔物たちが、ツルハシをふるって岩を切り出している。呪文を使えるものたちは、ベギラマやイオナズンの連発でこれを手伝い、ベビーサタンやアントベア、火炎ムカデ、バーナバスといったあまり力を持たない魔物たちは、トロッコを使って石材を運搬する作業に従じている。ヘルコンドルやライオンヘッド、スカイドラゴンらがそれを持って湖を飛び、城の建設現場に石材を積み上げてゆく。傍らではホイミスライムが一心不乱にホイミを唱え続ける。
そんな状態が一月ほども続き、切り出された石材は新たな山となって積み重ねられていた。
「よし。これだけあれば十分であろう」
エビルマージは石材の山を眺め、満足そうにうなずくとなにやら呪文を唱え始めた。
「我と、我が王にして光りの世界を闇に変える者・魔王バラモス様の名においてそなたらに命ず。世界を征する偉大なる魔王の居城……その礎となり、柱となり、そなたらの力を持って、幾千の影を飲み込む暗黒の城となれ!!」
言葉と同時にサタンの掌から青白い閃光が走り、稲妻のごとき勢いで石材の山に注がれた。
そして、その光りに操られるかのように石材は宙に浮き、誰の手も借りることなく城を築き始めた。
昼も夜もなく石材は動き続け、やがて、暗黒の名にふさわしい城が出来上がった。
「……すばらしい。これぞ魔王バラモスの力を示すにふさわしい……。なんと荘厳で、なんと邪悪に満ちた城か……」
バラモスは出来上がった城を見て、上機嫌である。
「よくやったぞ、エビルマージ。褒めてとらす」
「はっ。ありがたきお言葉……」
エビルマージは傍らでスッと頭を下げる。
「ではさっそくこの暗黒の城に移るとしよう」
「玉座の間までご案内いたします、魔王様」
「うむ」
城の門を抜けたバラモスは、城陰に積まれた石材の山に目を止めた。
「あれは何じゃ?」



「この城を造りし石材にございますが、ほんの少し集めすぎました。後ほど処分してまいります」
「いや、よい。暗黒の城が出来た祝いじゃ。このわしがあの石材どもに命を与えてやろう」
言うが早いかバラモスの指先から稲妻がほとばしった！
それは、大音響を伴って石材を粉々に砕き、同時に一つ一つに命を与えていた。
「これは……！」
エビルマージが驚愕の声を洩らす。
「元が石材ゆえ、大した力も知恵もなく、自らの力で動くことすら叶わぬが、メガンテの呪文を与えておいた。城の警備の一端としてでも使うがよかろう。名は……そう、〝爆弾岩〟とでもつけよ」
これが、爆弾岩の誕生である。
エビルマージはさっそく爆弾岩を城の回りに配置した。
人間どもを寄せつけぬため、いわば地雷として生を受けた爆弾岩……。彼らは黙々と与えられた使命を遂行していた。
しかし……
「サタン様、あの爆弾岩どもをなんとかしてください！
人間どもを襲うならまだしも、我々魔物にすらメガンテかけてくるんですよ！　これじゃあ、危なくておちおち外を歩けませんよ!!」
お尻に焦げをつくったトロルが、エビルマージに陳情に来た。トロルだけではない。コングや動く石像、その他の魔物たちからも同じ訴えが続いている。
「……しかたがない。魔王様にご相談するか……」
エビルマージはため息をつきながら立ち上がった。

「……なに？　爆弾岩どもが……？」
「はい、魔王様。敵味方のみさかいなく通るものを襲い、メガンテを唱えるという話です。あまたの苦情がわたくしの所にまいっております」
「もとより、爆弾岩はろくに知恵を持っておらぬ。多分に敵・味方という区別が出来ぬのだろう……」
エビルマージの報告を聞いたバラモスはしばし考えた。
「――エビルマージ。爆弾岩の中より一つを選べ。そしてそれに知恵を与え、ヤツらの長とせい。さすればこの問題、解決するはずじゃ」
「御意」

かくして、爆弾岩の中から選ばれた一個は知恵をもらい、爆弾岩の長として城の警備にあたることとなった。この策のお陰で爆弾岩の暴発事件もなくなり、すべてが順調に動き出したかに見えた。

しかし、バラモスによって知恵をもらった爆弾岩の心の中には、いい知れぬ不満が湧き出しつつあった。

「オレ、ここ嫌いだ」

ことあるごとに爆弾岩は仲間に訴えていた。

「ここのどこが気に入らないんだ？　魔王様のお城の側は寒々(さむざむ)として邪悪に満ちていて、とても心が安らぐじゃないか」

「オレの生まれた山は美しかった。花は綺麗(きれい)だった。小川のせせらぎが心をなごませた。近くの子供たちはいつもオレの上に乗って遊んでいた。……でも、ここにはそれがない。ここはオレの故郷と違う。……ああ、オレは故郷に帰りたい……。こんなところで城を守るためだけに生き、自爆するだけなんてイヤだ。帰りたい、故郷に……。オレは故郷に帰りたい……!!」

「そんなこと言ったって、一人じゃ移動できない俺たちに何が出来るっていうんだ？　――俺たちにはこの土地が一番なんだよ。なっ」

仲間の言葉に爆弾岩は哀しそうに空を見上げ、それでも自力(じりき)で動こうと努力した。しかし、それも徒労(とろう)に終わり……

「でも、オレは故郷に帰りたい。帰りたいんだ、あの美しい故郷に……!!」

仲間たちの奇異の目を浴びながら、爆弾岩はただそれだけを思い、自力で移動しようという試(こころ)みを捨てなかった。

そして時は流れ、季節は巡り……、爆弾岩の一念が文字通り〝岩をも動かし〟たのか、一年もするころには爆弾岩はなんとか自力で移動することが出来るようになっていた。

「オレは故郷に帰る。ここには戻らない」

仲間たちにそう告げ、爆弾岩は故郷に向けて旅立った。

いくつもの山を越え、谷を越え、爆弾岩はゴロゴロと転がりながら一路故郷を目指していく。

「わぁっ！　爆弾岩だ!!」

「爆弾岩が凄(すご)い勢いで転がってくるよ～っ!!」

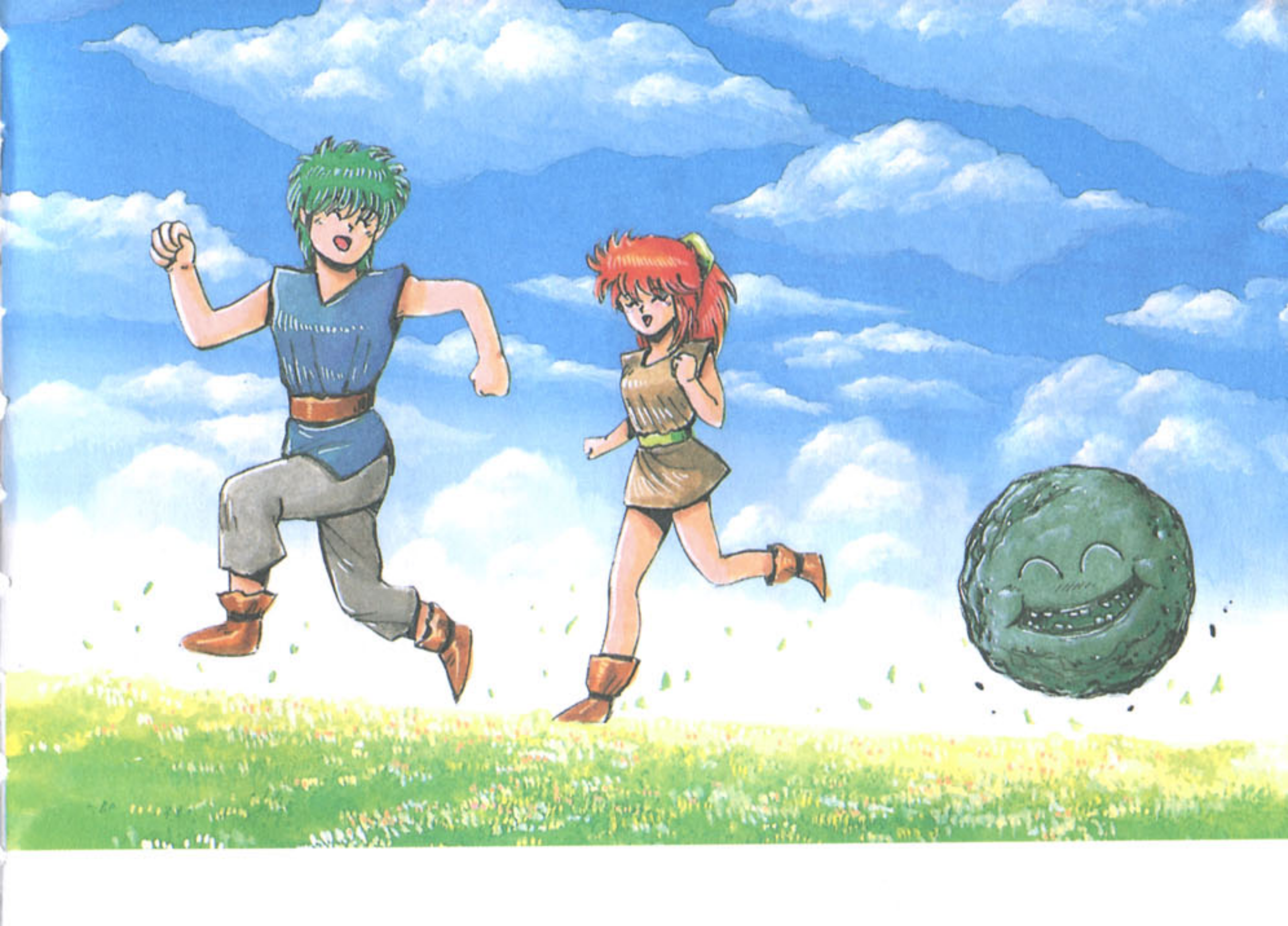
そんな彼の様子を見た人間たちは一様におののき、脅(おび)え、彼が通りすぎていくのを見守った。

やがて、爆弾岩の故郷・美しい山あいの村が遠くに見えてきた。

「あれだ！　あれがオレの故郷。オレの生まれた山。オレと共に育った子供たちの村……！」
爆弾岩は思わず立ち止まり、嬉しくなって村を眺める。
と、そこへ旅の四人づれが……。
「あら？　あれ、もしかして爆弾岩じゃない？」
「ホントだ。でもどうしてこんな土地に爆弾岩がいるんだ？」
「詳しくはわからんが、放っておくのは危険だな」
「よし、退治しよう」
四人づれは爆弾岩をぐるりと取り囲み、攻撃しようと身構えた。
爆弾岩はびっくりしてしまい、逃げるどころではない。
「人々を不安に落とし込む魔物め。覚悟しろ！」
戦士が剣を振り上げる！
爆弾岩は（もうここまでか……）と覚悟を決めた。
せっかくバラモスの城を抜け出し、長い旅を続け、故郷の山を目の前に見ながらここで果てるなんて……。
爆弾岩の目から、知らず知らずに涙がこぼれ落ちた。
「てやーッ!!」
戦士の剣がまさに振り下ろされる瞬間……！

「待って！　みんな待って！」
魔法使いの少女が声を上げた。
「……見て、この爆弾岩の目……」
「え？」
その言葉に、他の三人も爆弾岩の涙に気がついた。
「この爆弾岩さん、何か事情があるみたいなの……。聞いてあげましょうよ」

「……そうか。故郷にねぇ……」
「故郷って、いいもんだもんな」
「アリアハンの母さん、元気かな……」
爆弾岩の話を聞いた四人は、彼の話に一様に賛同し、彼に危害を加えないことを約束した。
「ねぇ、どうせならあたしたちでこの爆弾岩さんを送ってあげましょうよ。故郷の山の中まではムリだけど、近くの村へだったら平気でしょ？　ね！」
「よーし、じゃあ出発だ！」
こうして、旅の四人づれに爆弾岩を加えたパーティは、村を目指して進んでいった。
山間の村では、爆弾岩をつれた四人づれが現れたことで、



蜂の巣をつついたような大騒ぎ！

「冗談じゃない！　どんな事情があったって、こんな物騒な魔物を村に入れるわけにはいかないよ」

四人から話を聞いた村長が怒鳴った。

「そりゃまア、平和に暮らしたいって気持ちゃあ分からんこたないよ。だが何かのはずみでメガンテーッてなことをやられてみなよ……」

そう……どんなに豪胆（ごうたん）な人間でも、メガンテをつかう爆弾岩だけは恐いはずだ。

「それじゃあ、メガンテさえ使えなければ良いわけネ」

がっかりしている爆弾岩を見かねて、魔法使いが言った。

「あたしがマホトラの呪文でメガンテを使えないようにするわ。そんならいいでしょ？」

「ウーンそりゃまあ……」

と、いうわけで魔法の力をすっかりなくし、メガンテを使えなくなった爆弾岩は村に住みつくことになった。

「ワーイ、オニさんこちら」

ゴロ、ゴロ、ゴロ。

「そーら。つかまえるぞー！」
今日も村外れの原っぱで、彼は子供たちとおにごっこをして遊んでいる。今までは魔物や山賊なんかが出没するんでおかあさんたちに「駄目(だめ)っ！」と言われてた場所なんだけど、今はもうそんな心配はいらない。
昨日も馬に乗ったいかにも人相の悪い男たちが近くまできたが、彼の姿を見るなり逃げて行ってしまったのだ。
「ネェ、キミはホントに魔王に造られたの？」
やっとのことで転がりまわる爆弾岩をつかまえた男の子が聞いた。
「そうだよ。それまでのオレは、そこいらにあるただの岩だったんだ」
「フーン、でも良かったじゃん、そのおかげでこうして遊べるんだから」
確かに、生まれてきて良かった。
爆弾岩は心の中で、そうつぶやいた。
そして、こんなことならほかの仲間も、みんな連れて来ればよかったと思った。
そして、爆弾岩はその村の一員として、末長く幸せに暮らした。

モンスターワンポイントレッスン その2

人間が産みだした魔物

歩く金塊と呼ばれるゴールドマン。実は彼らは人間が産みだした魔物なのです。むかし、ドムドーラの西に金山がありました。
とても優秀な金山で、毎日たくさんの金塊が採掘されていました。しかし、金を運ぶとなるといろいろ面倒なコトがあります。第一重いので人手がいりますし、高価なものですので盗まれる心配もあります。そこで当時のアレフガルド王は、宮廷に仕える魔法使いに良い方法を考えるように命令しました。
魔法使いは考えぬいたあげく、金そのものに命を与えることを思いつきました。死者を復活させるザオリクの呪文を改良して、鉱物に生命を与える方法を発見したのです。巨大な人間の姿に組立てられた金塊は、魔法の力で動き出しました。これで簡単に移動させられますし、盗賊に襲われても安心です。
ところが……
「オレたち目的地についたらどうなるんだ？」
「そりゃ溶かされて指輪や冠になるんだヨ」
こうしてビックリした何人かが逃げ出してしまったというわけなのです。

MIMIC
宝箱に潜む恐怖

ミミック

魔物は飢えていた。ずっと、ずっと飢えていた。その身体にはもういくらも力は残っておらず、意識さえもうろうとし始めている。最後の獲物を仕留めてからいったいどれだけの時間が過ぎたろう？

魔物、ミミックにはそれがいつだか知る術はなかった。

ここは太陽の光が全くとどかない塔の中。

いまが夏なのか秋なのか、いや夜なのか昼なのかさえ分からない場所なのだ。ミミックはおぼろ気な記憶をたどって、遙か昔の出来事を思い出そうとしていた。

「むかし、そうむかしはこんなに飢えたことはなかった……」

獲物は豊富で仲間の数もずっとたくさんいたのだ。ミミックが生まれたのはこの塔のある大陸から遙か南、赤道を越えた凍てつく土地だった。

そしてその土地で、雪と寒風の高地でミミックたちは別の名前で呼ばれていたのだ。

「むかしの名は、むかしはなんと呼ばれていたっけ？」

だが彼の記録はあやふやで、断片的にしか過去は思い出せなかった。

彼らミミックの一族は、普通の獣や魔物とは全く違う方

法で繁殖する。
獲物を大量に仕留め、エネルギーが一定の量を越すと、彼らの身体は二つに分裂するのだ。どちらが親でも子でもなく。両方が全く同じ能力を、同じ記憶を備えている。
だが分裂による繁殖を繰り返すうち、ずっと過去の記憶は薄らぎ、やがてそれはぼんやりとした霧の彼方に埋もれてしまうのだ。
「そうだ。あの場所は良かった。いつも、いつも吹雪がうなり声をあげていた……」
ミミックは、そして別の名前で呼ばれていた過去の彼らは熱に弱かった。いや、そのことに気がついたのは、あの雪に覆われた岩山を離れた後だった。
そこには彼らだけでなく幾多の魔物が棲息していた。単眼の巨人が、凄まじい魔力を秘めた巨大な悪魔が、万年雪の積もったその場所の住人だった。
だが、あまりに環境に適応したミミックの先祖はその数を増やし過ぎたのだ。
そして何匹かが住み慣れた雪の大地を後にした。種族を生き長らえさせるための厳しい自然の摂理だった。
「そうだ。仲間だ！　あのころは仲間がいたんだ！」
記憶がよみがえりミミックは自分が孤独なのに気づいた。故郷を出たときはかなりの数がいた彼の仲間たちは、やがて次々と死んでいったのだ。人間に倒された仲間がいた。他の魔物との戦いに敗れた仲間がいた。
そして何より恐ろしかったのは外界の凄まじい熱気だった。何匹かの仲間が高温のため死んだとき、彼らは自分たちが熱に弱いのを知った。
そして数を減らした彼らはこの塔へたどりついたのだ。外にくらべて、石で造られた塔の内部はひんやりと心地良かった。だが、やはり故郷のようなわけにはいかなかった。
「そうだ！　ここに来たときはまだこんな箱の中に入っていなかったんだ！」
塔の中へ入って初めてこの箱を見つけたのは誰だったろう？　自分だったような気もするし、仲間の誰かだったようにも思える。だがともかく箱の中は、信じられないくらい心地良かったのだ。まるであの雪の高原のように……。
彼らには知る術もなかったが、箱には強力な太古の魔法がかけられていたのだ。冷気の攻撃呪文を改良した特殊な魔法が……。
むかし、遙かな超古代、この塔はとある大国の砦として

築かれたのだ。戦いに備えて塔には大量の食料が運び込まれた。だが、その頃この地方は今よりずっと気温が高く、食料の傷みが早かった。塩漬けの肉も乾燥した野菜もわずかのうちに腐ってしまったのだ。塔に住んでいた人々は対策に苦慮した。そして西の都から一人の魔道士を招いたのだ。魔道士は冷気の呪文を改良して腐敗を防ぐ呪法を編み出した。その呪文をほどこした箱の中は、数百年に渡って氷の溶けない温度に保たれるはずだった。

歳月が流れた。幾つもの戦争と動乱がこの地域を襲った。国はときに栄え、ときに衰退した。そしていつか塔は放棄され無人となった。

ミミックの一族がやって来たのはそれからしばらく後のことだったのだ。

塔に棲む鼠や蜘蛛、そして時折迷い込んで来る人間の精気を糧に彼らは生き延びて来た。

だが長い空腹はミミックの力を弱め、気力を萎えさせた。氷のような腕で獲物を締殺すことも、そしてすべての生き物の体液を凍てつかせる呪文を投げかけることも、もう思うに任せなくなっていた。

「今なら、まだ今のうちなら獲物を倒せる。力自慢の戦士でも、魔道に通じた祈禱士でも。今ならその全身を一瞬に凍らせ、息の根をとめることが出来る……」

と……そのとき、ミミックは微かな気配を感じた。

完全な静寂に満たされたこの塔の内部で、何かの気配が動いたのだ。

どうやらしばらくぶりにこの塔へ侵入者があったようだ。

「音がする。何か生き物のたてる音だ……」

やがて姿を現した侵入者はまだ若い人間の男だった。痩せていて、動きに油断がなく、目付きが鋭い。そして男はミミックの入った箱に気がつくと、ゆっくり近づいて来た。

「そうだ。もう少しだ。後は蓋を開けてさえくれれば……」

ミミックの全身に力がみなぎり、死の呪文をかけるために精神を集中させる。

「こんだけでっかい塔なのに、宝箱がろくにないってのはおかしいと思っていたんだよ。散々歩き回ったあげく、変てこな青い石一個じゃやってられねェもんな」

男は一人でブツブツと悪態を繰り返しながら箱に近づいて来る。

この男は盗賊だった。まだ駆け出しのコソ泥だった。仲間もおらず、腕力にも自信のない彼にとって、魔物の巣窟

になっているかも知れないこの塔に入るのはかなりの冒険だった。

「鍵はかかっていないようだが、まさか化け物が入ってることはないだろうな……」

古い塔や迷宮に置かれた宝箱には、魔物が化けたものが交じっている……。

男は以前、そんな話を聞いたことがあった。

「宝箱に化けた魔物なんて迷信さ……」

盗賊は思い切って箱の蓋に手をかけた。だがまだ蓋を開く決心はつかなかった。彼としては最大級の勇気を出して入った塔なのだ。それなのに今までに手に入ったのは、この下の階にあった青い石だけだった。

小さな半透明の石は壊れた宝箱に入っていたのだ。この男にとって今度がこの塔で開ける初めての宝箱だった。

「クソー、出るなら出てみろ！」

男は思い切って蓋を開いた。同時に飛び出したミミックが死の呪文を投げかける。

「ウワーッ！　で、出たァ！」

男は悲鳴を上げて尻餅をついた。青白い光が全身を包み、ゾッとするような悪寒が走る。

次の瞬間、青白い光がスーッと弱まり消えた。男の懐の中で何かが砕ける音がした。

驚いたのはミミックも同じだった。死の呪文は確かに獲物を捕らえたはずだった。だが相手はまだ生きていた。そして今度は外の空気が、致命的な熱気がミミックを襲った。力を、精神力を使い切った魔物は、その衝撃に耐えられなかった。

静寂が戻った。ゼーゼーという盗賊の息だけが聞こえる。

「脅かしやがって……」

男はフラフラと立ち上がり、呆然として今、自分を襲ったものに目をやった。

「なんでェこいつは？」

ミミック、いやミミックだったモノの死骸はすでに溶け始めていた。ほこりの積もった石畳の床には青白い染みがついてる。それはおぼろ気ながら人形の輪郭を備えていた。

男は恐る恐るミミックの入っていた宝箱を覗き込んだ。

「やっぱり空っぽかァ……」

気味悪そうにミミックの死骸のつけた染みを避け、男はその場を離れた。

悪態をつきながら男は塔を降りていった。後に残ったのは床の上の染み、空っぽの宝箱。
そして床にこぼれた青い石のかけらだけだった。

モンスターワンポイントレッスン その3

怪しい宝箱の中身

ミミックと外見が全く同じ魔物に、人食い箱というのがいます。この二種類は本当は全く別の魔物なのです。エ、そんなコト、一回戦ってみればすぐ分かるって……確かに強さが段違いですものネ。

ミミックの正体についてはこの本を読んだ人はもう知っているでしょうが、それでは人食い箱はどうして生まれたのでしょうか？

実はアノ中身は腐った死体なのです。

ゾンビ族の魔物である彼らは、時間がたつと本当に腐ってしまいます。そうなるともう人間の姿をとどめていることは出来ません。ドロドロの液体に変わって、動くことさえ出来なくなってしまうのです。

元は人間の彼らには、生前かなり賢かった者もいます。そういった連中は、手近に空っぽの宝箱があると潜り込んで人食い箱となったのです。

ミミックにしろ、人食い箱にしろ、あまり出会いたくない相手です。もし仲間にインパスの呪文を使える人がいなかったら、怪しい宝箱は開けない方が良いかもしれませんネ。

MUD DOLL
泥人形の秘密

泥人形

空はどこまでも澄みわたり、雲一つなかった。心地良い風が春の訪れを告げ、咲き乱れた花の上を名も知らぬ虫が飛びかっている。

ここはムーンブルクの西にあるほこらから、わずかに離れた平原である。北の海の彼方には、古代王国によって築かれた大灯台がそびえ立っている。

「のどかですねー」

先頭を行く少年が言った。

「世界に危機が迫ってるなんて嘘みたい」

まん中を歩く少女が額の汗を拭いながら答える。

「オレは腹が減ったよ」

一番後ろを行く少年の言葉に、少女が吹き出した。

「あんたって食欲しか頭にないの？　全く戦士ってのはどうしてこうなのかしら？」

そんな悪口も慣れっこらしくしんがりの少年は口笛を吹き始めた。

彼は見習いの戦士。少女は見習いの魔法使い、そしてもう一人の少年は見習いの僧侶だった。遙か南の国に恐ろしい魔物が現れ、世界を征服しようとしている。

そんな噂を聞いた三人は、親に内緒でこっそり旅に出た

のだ。

しばらくして先頭の少年が突然立ち止まった。

「どうかしたの？」

少女の声を片手で制して前方を指さす。

「何かいる……」

同時に目の前の草むらに茶色い塊が飛び出して来た。

「なんだこいつは？」

「やだー、気味悪い！」

「クソー、腹が減っているときに！」

勝手なことをいいながらもそれが武器を手に身構える。

現れたのは三人が見たこともない魔物だった。形はおおよそ人間だが、目も鼻も口もなく、動きはまるで糸操りの人形のようだ。

身体全体が土で出来ているらしく、歩くたびにペタペタと音がした。

全部で四匹の魔物は、踊るような足取りで近づいて来る。うなり声もたてず言葉も喋らないのが一層不気味だ。

「ヨォ、おまえら修業の中に魔物の勉強ってのもあったんだろう？　こいつらなんて名前なんだヨ？」

二人をかばうように前に出た少年が、剣を持つ手に力をこめながら尋ねた。
「ボクはこんな魔物知りませんヨ！」
「あたしだってこんな変なヤツに知り合いなんていないわヨ」
攻撃魔法と防御魔法の呪文を唱えながら、魔法使いの少女と僧侶の少年が言った。
すると、そのとき。魔物たちが不思議な動きを始めたのだ。手足をギクシャクと動かし、ピョン、ピョンと飛び跳ねる。それはまるで踊りを踊っているような感じだった。
「こ、こいつら人をバカにしてんのか！」
ムカッときた戦士が、一番手前にいた魔物に切りかかった。相手はヒョイと身体をかわすと、攻撃してくるでもなく踊りを続けている。
「ネ、ネェ。なんだかおかしいわヨ」
魔法による攻撃をかけようとしていた少女の顔色が変わった。
「ボ、ボクもなんだか気分が……」
「オイ、どうしたんだヨ？」
戦士の少年が仲間を振り返った。そしてその隙に、魔物たちはピョンピョン飛びながら姿を消してしまった。
「なんなんだ？　なんのために出てきやがったんだ！」
剣を鞘におさめながら少年はブツブツと文句を言った。
僧侶と魔法使いは青い顔をして地面に座りこんでしまっている。
「マ、マジックパワーをとられちゃったみたい……」
「ボクもなんだか力が抜けちゃって……」
「まったくだらしないんだから」
口ではそう言ったものの、戦士の少年も顔色を変えていた。
「ともかくこんなトコに長居は無用ですよ。いま他の魔物に襲われたら、ボクら何の魔法も使えないんですから」
僧侶の言葉に戦士の少年もことの重大さを理解した。たとえ見習いとはいえ、彼ら三人の組み合わせは非常に理にかなったものだった。治癒呪文を操る僧侶に、攻撃魔法の使える魔法使い。そして力での戦闘が得意な戦士の組み合わせは、いままでも何匹かの魔物を倒してきた。それが魔法が全く使えないとなれば……
「そりゃァ、おまえさんたちは運が良かったんじゃよ」
年配の商人は三人が食事をするのを見ながら言った。目

の前の敷物の上に、見る見る空っぽのカップや皿が積み上げられていく。みんな凄い食欲だった。

泥人形に襲われてから三人は必死で逃げ、ドラゴンの角にほど近い平原で商人の幌馬車と出会ったのだ。

泥人形の不思議な踊りで、マジックパワーはおろか精神力まで吸い取られた二人は、最初歩くことも出来ず、戦士の少年がおぶったり抱きかかえたりしてやって来たのだ。

「おじさんはあいつらがなんだか知ってるの？」

やっと回復した少女が尋ねる。

「マ、知ってるといえば知ってるがの……」

「教えてください。あいつらはなんなんです？」

「なんだって魔法の力を吸い取ったりするんだい？」

三人が口々に尋ね、商人は当惑で黙り込んだ。そして……

「実はのウ、あんたらが襲われたという場所からさほど遠くない岩山に、恐ろしい魔物が巣くっておるんじゃヨ」

「恐ろしい……？」

「魔物……？」

「そうじゃ。何時ごろからは知らんが、強大な魔力を持った魔物が住みついたんじゃ。なんでもそいつは世界を征服しようとしているらしいんじゃ」

そしてその魔物は、手下の泥人形を操って、魔法を使える人間から魔力を吸い取っているというのだ。

「魔物の正体はわからないんですか？」

「わからん。なんという名前なのか、どんな姿をしているのか、皆目見当がつかんのじゃ」

「魔力を集めてる目的はなんなんですか？　あの泥人形のヤツは魔力は吸い取るくせに、自分じゃ魔法は使えないみたいだったぜ」

戦士の少年が、たった一つ残った鳥の唐揚げに手をのばしながら聞いた。

「どうやら魔物は、大量の魔力で天変地異を起こす気らしいんじゃ。火山を噴火させ、地震を起こし、人間の世界をめちゃくちゃに破壊する計画らしいんじゃよ」

商人はそれぞれの前に置かれたカップに、暖めたミルクをそそぎながら答えた。

「今までも、何十人もの戦士や魔法使いが魔物を退治に向かったそうじゃが、結局一人も戻ってはこんかったちゅう話じゃ」

カップを持つ三人の手が同時に止まった。

「もっと南の方にいるって聞いていたのに……」

「意外と早く出会うことができましたネ……」
「クソー、そうと知ってりゃ、あの泥人形どもの後をつけたのに……」
二人は手に手に武器を持つと立ち上がった。
「まさかおまえさんたち、魔物を退治に……」
「そうです。ボクらは世界征服を狙っている魔物を退治するために旅に出たんです！」
「悪いことは言わん！　無茶なことはやめなされ」
商人は必死で止めようとしたが、三人は言うことを聞かなかった。
「しょうがない。どうしても行くというならコレをやろう」
そういって差し出したのは、根っこが輪になっている不思議な草だった。
「こいつは消え去り草といっての、姿を消すことの出来る魔法の草じゃ。魔物の住処に忍び込むときにでも使えば、きっと役に立つじゃろ」
「でもこれって売り物なんじゃないの？」
「オレたち、ろくに金持ってないゼ」
「かまわんヨ。わしはこの先のドラゴンの角と呼ばれる塔の北にある、ルプガナという名の街に行くんじゃ。首尾よく魔物を退治したら訪ねておくれ」
「ありがとう、おじさん」
「魔物はきっとあたしたちの手で倒します」
「安心して待っててくれヨ」
三人はそう言って出発した。馬車のそばに立った商人は、いつまでも若者たちを見送っていた。

やがて、さっきの場所まで引き返した三人組は、運良く五匹の泥人形を発見し、後を追った。魔物たちは相変わらず踊るような足取りで、ピョンピョンと進んで行く。
「どこまで行くのかしら？」
「あのおじさんはどっか近くの岩山に住処があるって言ってたよな」
「岩山ってあれかナ？」
戦士が指さしたのは、頂上が不気味な黒雲に覆われた岩山だった。雲の中からはときどきゴロゴロと雷鳴が聞こえて来る。
「やっぱりそうよ。洞窟があるワ！」
「ヤツらはあの洞窟に入って行くゼ」
三人は洞窟の近くの茂みに身体を隠すと、様子を見るこ

とにした。泥人形はかなりの数がいるらしく、三匹か、四匹、ときには五匹ずつの組になって洞窟を出入りしている。

「これでは見つからずに中に入るのは無理ですね」

「バカね、あたしたちには、おじさんがくれた消え去り草があるじゃない」

三人はさっそく消え去り草の根をしぼってその汁を身体にふりかけた。

「見えなくなったワ！」

「凄いや。これなら見つからずに行けますネ」

「急ごうゼ！」

最初のうちは真っ暗だった洞窟の中は、先へ進むにつれてボンヤリと明るくなっていった。

「見て！　岩が光ってる」

「苔ですネ、岩肌についた苔が光っているんです」

「シッ、声をたてると気づかれるゼ」

洞窟は右に曲がったり、左に曲がったりしながらどこまでも続いている。幸い、一本道なので迷うことはなさそうだ。

「どこまで続くのかしら？」

「ネ、なんか聞こえません？」

「ほんとうだ、話し声がする」

泥人形は口がきけない。つまり、聞こえてくる声のヌシが恐るべき魔物なのだ。

三人は緊張に震えながらも、武器を手に先へと進んだ。やがて通路は終わり、目の前がパッと明るくなった。そこは、岩山の内部をくりぬいて造られたドーム型の空洞だった。壁には何本もの松明がかかげられ、あの泥人形が五十匹以上ならんでいる。

「ここが敵の本拠地ってわけか！」

「でも泥人形しかいませんヨ」

「黙って！　出て来たみたいヨ」

空洞の一番奥、今まで気がつかなかった場所に扉があり、そこから何匹かの魔物が出て来たのだ。

「アレが世界征服をしようって魔物か……」

「変なかっこ……」

それは見たことのない姿をした魔物だった。背丈は人間の大人より少し大きいぐらいで、身体は真っ黒なロープでスッポリと覆われている。そして頭は不釣り合いに小さくて、濃いピンク色だ。

「あたし、あの顔どっかで見たことがある」

「そう言えばボクも……」

三人が息を殺して見守るなか、魔物たちは泥人形の前に立った。すると、泥人形はまるでなにかを差し出すような格好で、両手を前に出したのだ。黒いローブがフワフワとたなびき、ピンク色の頭についた大きな目玉が光った。

「魔力を吸い取ってるんだワ！」

やがて全部の泥人形が、五匹の魔物に、貯えた魔力（マジックパワー）を吸い取られた。

「ゴクロウサン。サア、マタマジックパワーヲ、アツメテキテオクレ」

変に高音の、まるで人間の子供か女の子のような声で、魔物は泥人形に話しかけた。すると泥人形たちはその言葉が理解出来たらしく、ゾロゾロと空洞を出ていったのだ。相変わらず無言で動きはギクシャクしているが、なんだか身体は軽くなったようだ。

「サテト、ミンナ、マジックパワーガ、マンタンニナッタラ、ショウバイニイクゾ」

一匹の魔物がそう言うと、残った連中もキャピキャピと笑うような声をあげる。そして黒いローブがバサッと音を立てて床に落ちた。

「なによこいつら！」

「べ、ベホマスライムじゃないですか？」

「なんだってこんな連中が？」

三人はポカンと口を開けて、衣装の下から現れた魔物の本体を見つめていた。

プカプカと空中に浮かんだピンク色の頭から、何本もの触手が垂れ下がっている。なんのことはない、ローブの中はほとんど空っぽだったのだ。

「こいつらが恐るべき魔物？」

「天変地異を起こすってか？」

「世界征服するの？」

ア然としている三人の前で、ベホマスライムたちは何やら相談を始めた。

「コノマエ、グリズリーノ、ケガヲナオシテ五〇ゴールドモウカッタ」

「アタイハ、ウミデ、マーマンヲナオシテ、百ゴールド」

どうやらベホマスライムたちは、呪文で魔物たちの怪我を直すのを商売にしているようだ。今度はどこへ出かけるか話し始めた魔物たちを見て、少女がため息をついた。

「ひょっとしてあたしたち、こいつらと戦わなくちゃいけないの？」

「ボクはどっちかと言うと遠慮したいですネ。だいたい勇者を目指す人間の戦う相手じゃありませんヨ」

「オレも抜ける。こんな連中やっつけたって自慢にゃなんないモン」

こうして三人はまたこっそりと洞窟を抜け出すと、ルプガナにはよらず南へと向かった。

あの商人に話しても、絶対信じてもらえないと思ったからだ。

「きっと今までやって来た人たちも、同じ気持ちから帰らなかったのネ」

魔法使いはそういうと後ろを振り返った。遠くに見える岩山の上には相変わらず黒雲がかかり、雷鳴が轟いていた。

この後、三人が本当の「恐るべき魔物」を退治出来たのかは誰も知らない。だが岩山の近くでは、魔法を使える旅人を見つけては、泥人形たちが不思議な踊りを踊り続けているという。

泥人形は役立たず？

泥人形はもともと一番下級の魔物でした。力はあまりありませんし、大した知能もありません。けれど泥をこねるだけで大量に造れるので、ハーゴンの神殿で召使いとして使われていたのです。

「大神官様、泥人形をお使いに出したら途中雨で溶けてしまいました。なんとかなりませんか？」

「大神官様、わたしは連中に水くみをやらせたのですが、やっぱり溶けてしまいました」

泥人形に対する苦情が多いので、ハーゴンも困りました。

「なんとかならんか？　手下どもがうるさくてかなわん」

ハーゴンの一番下の部下である魔道士が、そう言われてさっそく対策を考えました。

まず水に強くするにはどうしたら良いでしょう。表面をなんとか加工出来ないでしょうか？

駄目です。防水塗料を塗ると関節が詰まって動けなくなってしまいます。水を通さない油紙を貼り付けたらどうでしょうか？　これはうまくいきましたが、手間がかかって全部の泥人形に貼るのは無理でした。

「エーイ！　使えんヤツだ」

目の前に立った泥人形は何を言われても黙ったままです。彼らには口がないのです。

「ウンともスンとも返事もしやがらない。おまえたちのせいで、オレはこんなに苦労しているんだソ」

カンシャクを起こした魔道士は手にした杖を振り上げました。バリバリバリッ！

ものすごい火炎が杖の先から放たれました。

「とと、しまった。うっかりメラミをかけちまった」

ところが炎に焼かれた泥人形の表面は、溶けるどころかキレイなブルーに変わっているではありませんか。

「アレレ？　どうなっちまったんダ？」

たたいてみるとコンコンと堅そうな音がします。

「なるほど。茶碗や皿を焼くのと同じことが起こったんだ。これで水に濡れても大丈夫だソ」

こうして城にいた泥人形の半数が、パペットマンと名付けられた新しい魔物に改造されたのです。

GOLEM

メルキドの守護神ゴーレム

ゴーレム

風向きが変わった。

南から北へと吹いていた風が、反対方向に吹き始めた。ほんの一月前まで緑の草原だった砂漠に砂塵が舞い、上空には暗灰色の雲が渦巻いている。

彼方にそびえる巨大な城門と、その前に立ちふさがった岩の巨人目がけて、数百の魔物の群れ——ドラゴンと鎧の騎士からなる大部隊が襲撃を開始した。

「行け！　突っ込め！　ゴーレムを倒せ！」

後方で指揮を執っていた魔将、悪魔の騎士が戦斧を振り回して号令する。

ここ、アレフガルド南方の要所、城塞都市メルキドは、襲って来た竜王配下の大軍団によって、かつてなかった危機に直面していた。

この街の太守であるポルポト侯爵は、大軍を率いて首都ラダトームに向かっていた。今頃は国王ラルス八世の軍と合流して、竜王の城の出現したイシュタル島への進軍を開始しているはずである。

そしてメルキドは竜王直衛の六魔将の内、悪魔、死神の両騎士による猛攻を受けていたのである。

ほとんどの兵士がポルポト侯と行動をともにした今、街

の守りについているのはわずかな残留騎士団だけであった。無論、太守ポルポト侯がわずかな手勢しか残さなかったのには理由があった。

一つには、全市を取り囲む堅牢無比な城塞の存在である。数百年の歳月をかけて築いて来た大城塞はメルキド市民の誇りだった。

むかし。神話と言っても過言でない遙かなむかし、このアレフガルドの大地は今と同じように悪の大魔王によって征服されかかった。

そして異界より現れてこの大魔王を倒した勇者、ロトはこの地の人々にこう告げたという……

「いつの日か新たな魔王この地に現れん。富みを貯え城塞を築け。平和と安楽に慣れ、怠惰と倦怠の道を歩むなかれ」

そしてこの地の人々は予言に従った。

代を経るごとに城塞はより高くより頑丈になり、他国の人々はメルキドを不可侵都市と呼ぶようになった。

そしてポルポト侯と市民たちが頼りにしたモノがもう一つ、それはかつて善の大魔道士によって生み出された岩の巨人、ゴーレムであった。ロトの勇者が魔道士に与えた、生ある石を元に造られたと伝えられるゴーレムは、これまでも何度かメルキドの危機を救って来たのだ。

そしてそのことはまた、竜王がメルキド攻略にやっきとなる理由でもあった。

「不可侵都市と呼ばれるメルキドが陥落し、無敵と言われるゴーレムが倒れれば、人間どもはおじけをふるうに違いない。ラダトームと同様、メルキドの攻撃には全力をつくすのじゃ」

こうして六人の将軍の内、二人が指揮を執る大攻撃作戦が開始されたのだ。

ところがゴーレムの力は、二人の魔将の思惑を遙かに越えたものであった。

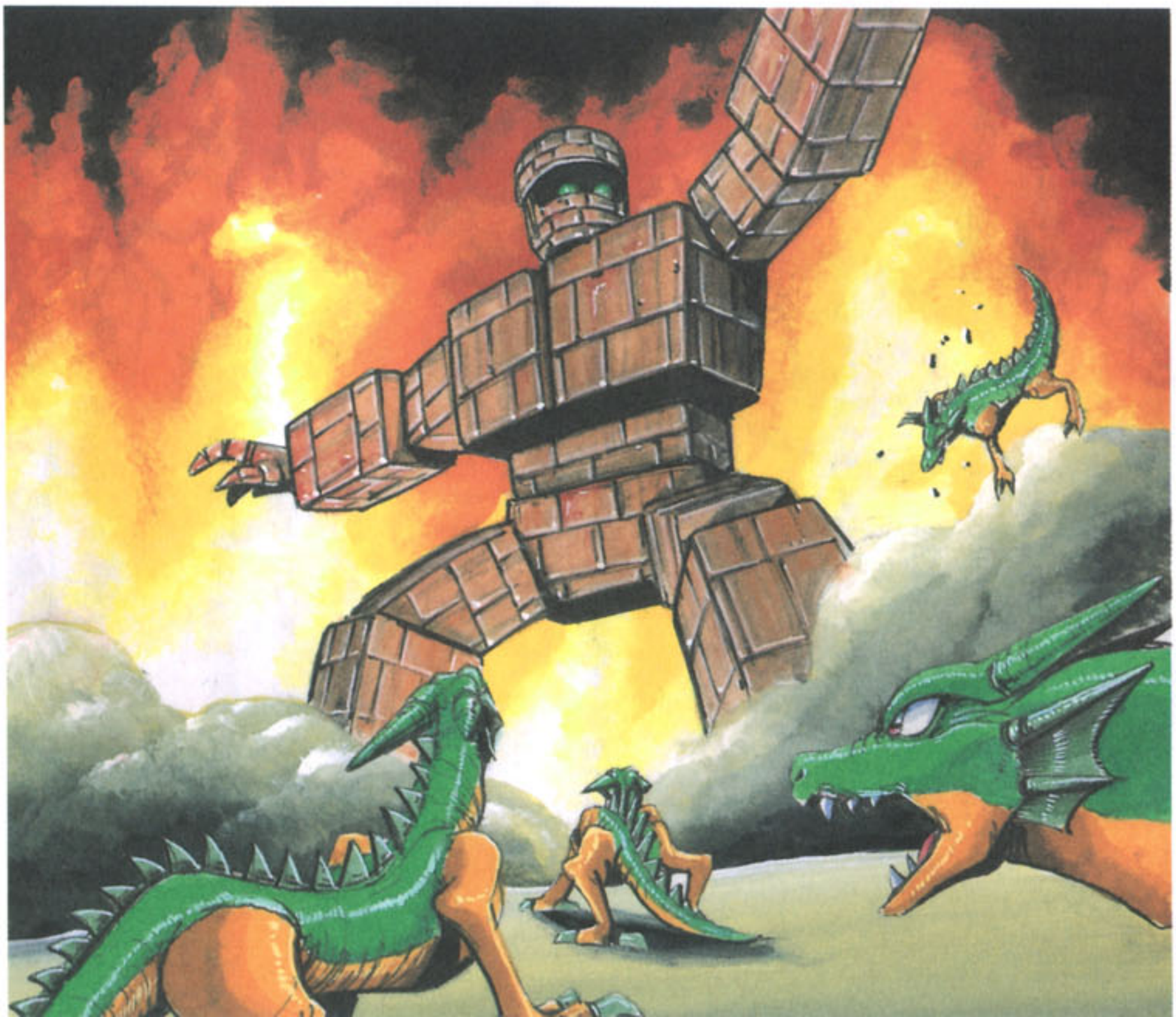
昨日は死神の騎士が指揮する死霊、骸骨などの騎士部隊が全滅し、今日もまた……

ブォーッ！ ドラゴンの吐き出す紅蓮の炎が巨人をつつんだ。

だが、岩で出来たゴーレムの身体が、炎に燃えることはなかった。巨人は意外な素早さでドラゴン部隊に接近すると、手前にいた一匹を大木のような足で蹴り上げた。背中から振り落とされた鎧の騎士を踏み潰し、ゴーレムはその

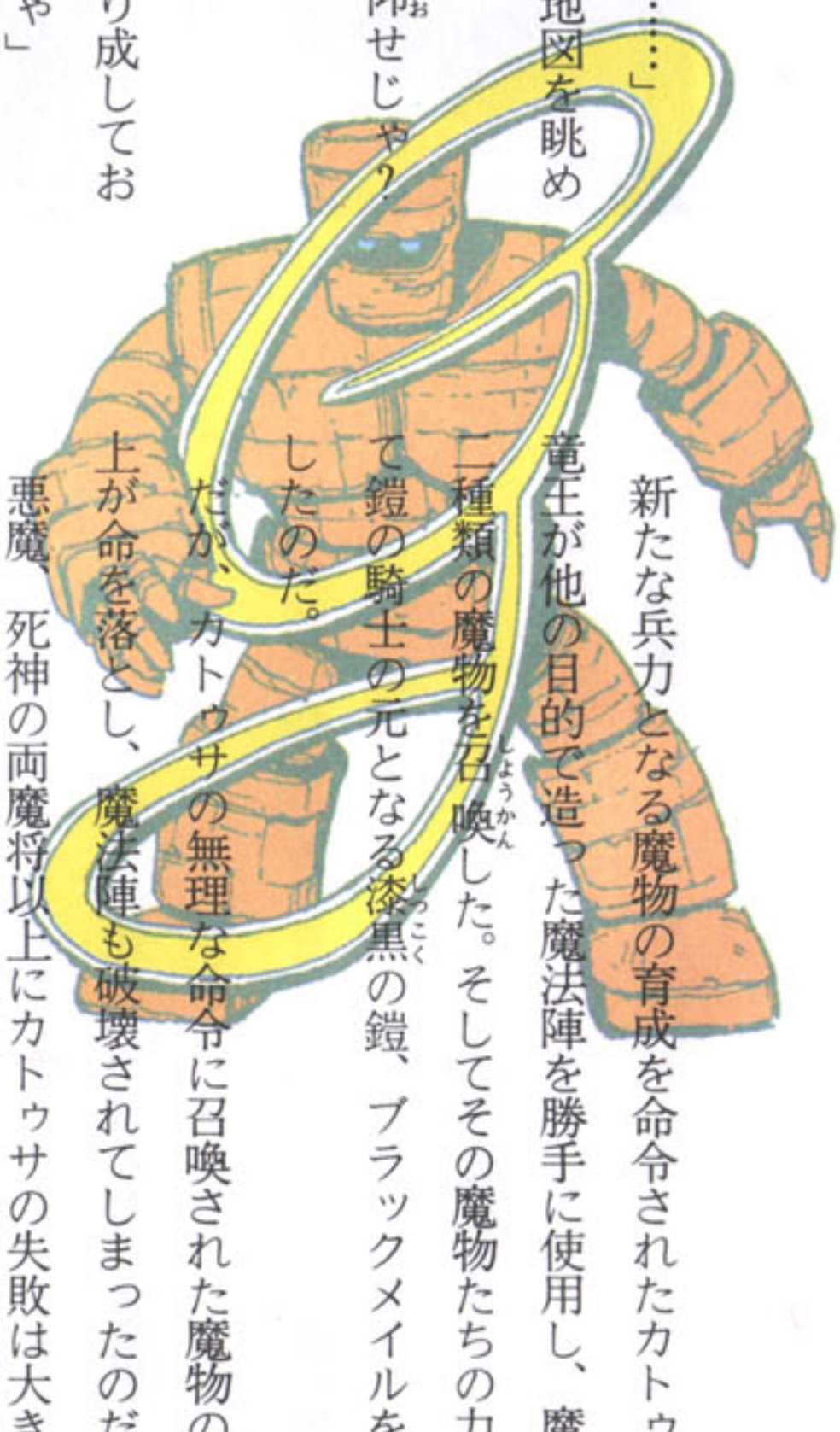
まま敵陣の真っ直中に踊り込んだ。
悲鳴が交錯し、魔物の血を全身に浴びた巨人の雄叫びが砂漠の空に響き渡った。
「エーイ怯むな。何があってもゴーレムを殺すのだ」
悪魔の騎士の号令に、残ったドラゴンたちが一勢に突撃を開始する……。

天幕の中は重苦しい沈黙に満たされていた。
中央に置かれた机をはさんで、悪魔、死神の両魔将が無言で座り込んでいる。
既に日は落ち、砂漠の空には毒々しいまでに赤い下弦の月が輝いていた。
昼間の無謀な攻撃で、三百のドラゴンと同数の鎧の騎士からなる部隊は全滅してしまったのである。
この知らせはもう竜王の耳に届いていることだろう。
「人間の造った巨人なぞ我が歩兵部隊だけでも……」
作戦会議の席上、そう言ってゴーレムを笑い飛ばしたのは死神の騎士であった。
「メルキドの城壁がどのように堅固でも、我が輩のドラゴン部隊なら一撃で……」



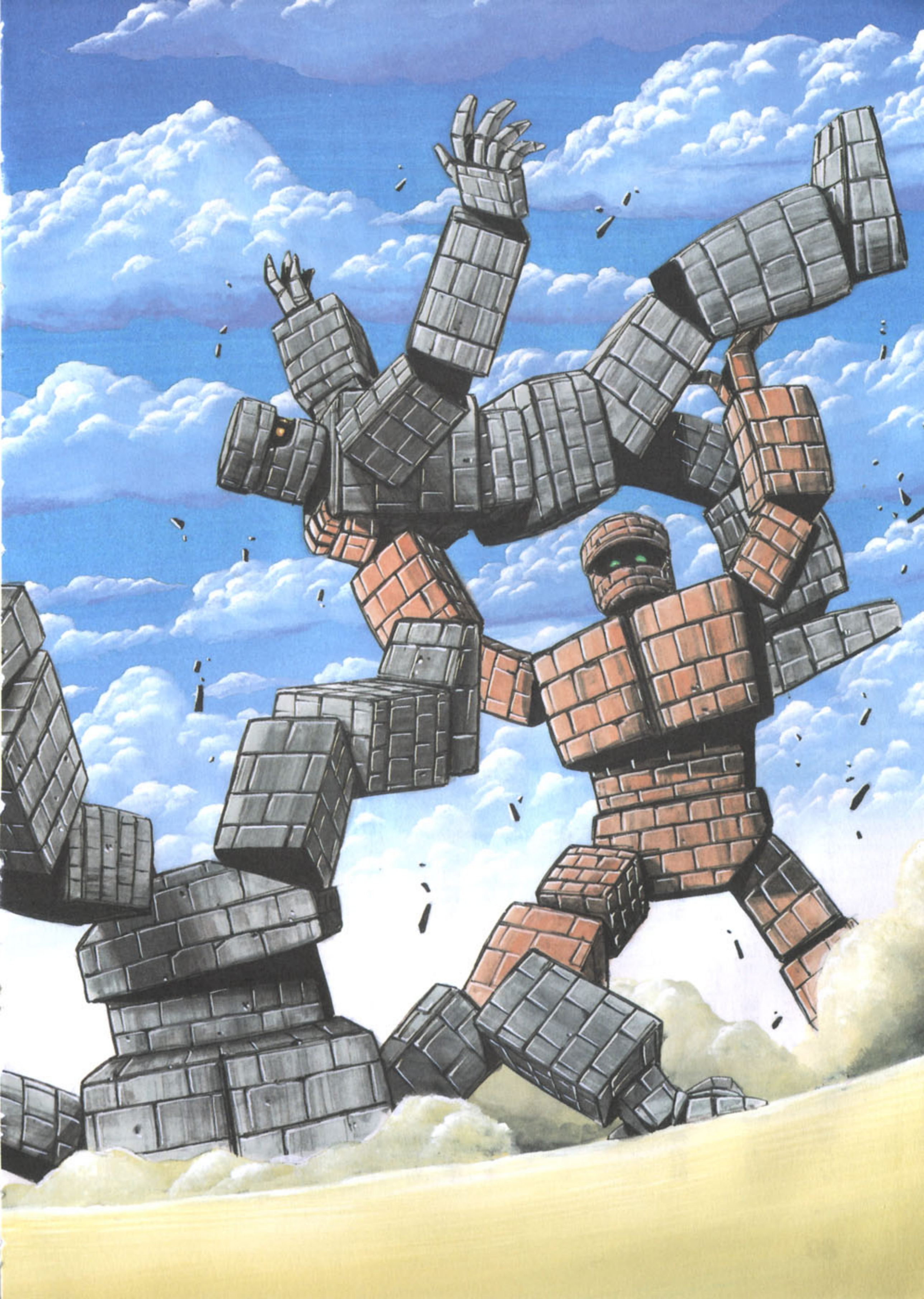
竜王と他の魔将たちに断言したのは悪魔の騎士だった。
それがたったの二日で全滅してしまったのだ。
敵同様、味方にも冷酷な竜王が黙って済ませるはずはなかった。
「だいぶお困りのようじゃのう……」
わずかな空気の揺らめきとともに低く、くぐもった声が響いた。
「何者！」
二人の魔将軍が武器を手に振り向く。
そこに立っていたのは黄金色の法衣（ローブ）をまとい、手には宝玉（ほうぎょく）のついた杖を持った一人の魔道士だった。
「カトゥサではないか。いつの間に……」
悪魔の騎士がけげんそうに言った。
この魔物こそ、竜王の知恵袋と言われる大魔道カトゥサである。
「まったく、わしが苦労を重ねて造り上げた鎧の騎士を無駄死にさせおって」
カトゥサは二人の魔将の間に割り込むように腰を下ろすと、机の上の地図に目をやった。
「不可侵（ふかしん）都市メルキド。噂にたがわぬ堅固な守りじゃ。そ

れにあの巨人の力。いやいや大したモンじゃて……」
大魔道はまるで他人ごとのようにメルキドの地図を眺めている。
「もったいぶるなカトゥサ！　陛下には何と仰せじゃ？　わしらのことを言いつかって来たのであろう」
悪魔の騎士がたまりかねて叫んだ。
「ご心配めされるな。陛下にはわしがうまく執り成しておいた。二人ともせいぜい叱責程度で済むはずじゃ」
大魔道は、二人の魔将を鋭い目でにらむと話し始めた。
「陛下には、ゴーレムの力を侮ったは貴公らばかりの責任にあらずとのお考え、ドラゴンと鎧の騎士を失ったは確かに大きな損失なれど、そのことは不問に付すとの仰せじゃ」
そして竜王は二人の魔将をメルキド攻略の任務から外し、新たにその指揮をカトゥサに委ねたと言うのだ。
「お二人はいったん陛下の元に戻り、まもなく攻め寄せるであろう人間どもの軍勢を迎え討てとのご命令じゃ」
カトゥサは有無を言わさぬ口調でいった。
大魔道は黙っていたが、昼間、ドラゴンとともに全滅した鎧の騎士を生み出すにあたり、彼もまた大きな失敗をし竜王の怒りをかっていたのだ。



新たな兵力となる魔物の育成を命令されたカトゥサは、竜王が他の目的で造った魔法陣を勝手に使用し、魔界から二種類の魔物を召喚した。そしてその魔物たちの力を使って鎧の騎士の元となる漆黒の鎧、ブラックメイルを造り出したのだ。
だが、カトゥサの無理な命令に召喚された魔物の半分以上が命を落とし、魔法陣も破壊されてしまったのだ。
悪魔、死神の両魔将以上にカトゥサの失敗は大きかったのである。
「だが我らが引き上げた後、メルキドは、ゴーレムはどうするのじゃ？　いかにおぬしの魔力が強大でも、あの巨人には歯が立つまいぞ」
死神の騎士の言葉にカトゥサはニヤリと笑った。
「心配無用。明日の朝には新たな軍勢が到着しよう。あのゴーレムを葬るにはうってつけの魔物がのゥ」
夜が明けた。どんよりと曇った陰鬱な朝だった。
「なんだアレは？」
天幕の外で見張りに立っていた死霊の騎士の一人が、北の地平を指さした。彼方から近づいて来る巨大な影に、メ

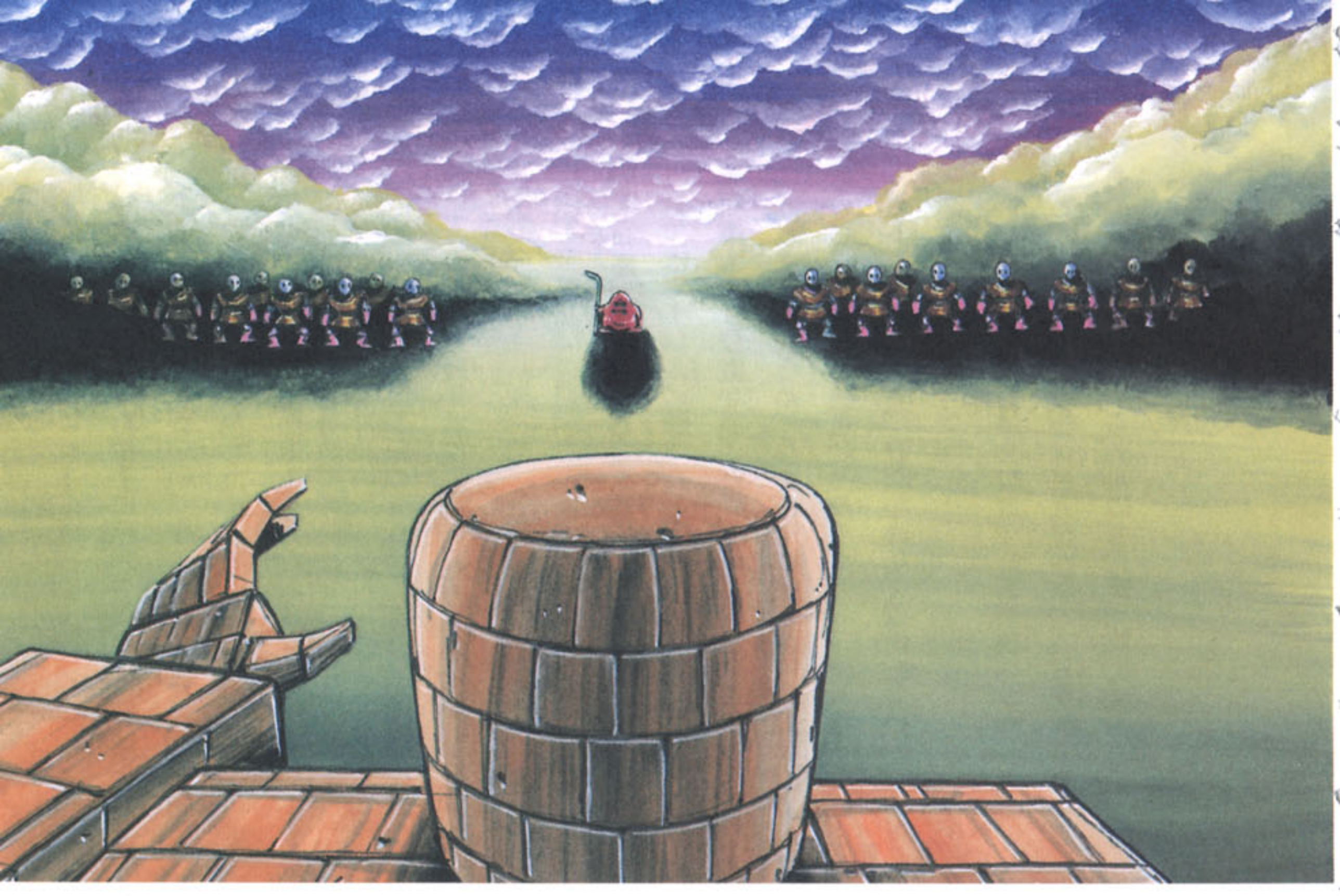
ルキドの城壁の上からもどよめきが上がった。
やがて姿を現したのは、ゴーレムと同じぐらいの大きさの巨人の群れだった。
竜王が城塞攻略のために生み出した魔物、ストーンマンである。
真っ黒な岩の巨人の接近に、城門の前に立つゴーレムがうなり声をあげる。
「こ、これはいったい……」
天幕から出て来た死神の騎士が言葉に詰まった。
「いかなゴーレムといえども、これだけの数のストーンマンを相手にしてはひとたまりもあるまい。メルキドが陥落すれば次はラダトームじゃ」
カトウサはそう言うと、ストーンマン部隊の指揮を執るべくドラゴンの背にまたがった。
万一この戦いに敗れるようなことがあれば、竜王は絶対に彼を許さないだろう。
百体のストーンマン軍団の最後尾。数匹のドラゴンと、控えとして残した十体のストーンマンに守られた大魔道は、手にした杖を振り下ろした。
「行け！　今こそメルキドとゴーレムの伝説に終止符を打つのじゃ！」
大魔道の命令を受け、ストーンマン部隊は突撃を開始した。砂塵があがり、凄まじい地響きとともに先頭を行く三体のストーンマンがゴーレムに襲いかかった。岩と岩とのぶつかり合う鈍い音が響き、善悪ふたつの巨人は激突した。
ガオーッ！　雄叫びをあげるとゴーレムは正面の敵に拳を振り下ろす。
真っ黒な身体に白いひび割れが走り、ストーンマンがガクッと膝をついた。ゴーレムはそのまま前進すると、右から来たストーマンに両腕をのばした。あっという間に相手を抱え上げ、さっき殴りつけたストーンマン目がけて叩きつける。
バギッ！　二体の魔物の身体が砕ける音が響き、ゴーレムは間髪を入れず三体目の敵に挑みかかった。
「いいゾ！　頑張れ！」
城壁の上から歓声があがる。だが悪魔の騎士や死神の騎士と違い、カトウサの指揮は冷静だった。
「一度に三体一組でかかるのじゃ。城塞の方は放っておけばよい。ゴーレムさえ倒せば後は何とでもなるワ」
ストーンマンたちは、大魔道の指揮に従い三体一組とな



って休みなくゴーレムに襲いかかった。
だが、カトゥサもまた二人の魔将と同様に、ゴーレムの力を侮っていたのだ。最初に攻撃をかけた三体はたちまちバラバラにされ破片が砂の上に飛び散った。
ゴーレムはそのまま後方の敵に向かって突っ込むと、手近にいた一体を力まかせに抱え上げた。
そしてそのままもがき暴れるストーンマンを、敵の真っ直中に向かって放り投げたのだ。
轟音とともに、四体のストーンマンが粉微塵となって砂漠に破片をさらした。ゴーレムはひるむ相手の中から逃げ遅れた一体を捕まえると空中高く放り上げた。
頭から砂漠に突っ込んだストーンマンは、上半身が砂に埋もれジタバタともがいている。
その突き出した下半身を、向き直ったゴーレムは力まかせに蹴り上げた。
ガズーンッ！
頭と胸を砂の中に残したまま、魔物の下半身は木端微塵に砕け散った。
日の出とともに始まった戦いは、夕闇が迫るころになっても終わらなかった。

夜の帳に包まれた砂漠で、巨人同士の戦いはいつ果てるともなく続けられていた。
二日目の朝。ゴーレムはまだ戦っていた。
黄色い砂上のいたるところには、真っ黒なストーンマンの破片が転がっている。
そして再び、メルキドに夜がやって来た。
大魔道は残った十体のストーンマンに突撃を命じた。
カトゥサは死を覚悟していた。
暗闇の中、どこから差すとも知れぬわずかな光りが、大魔道の法衣を照らしていた。
その肩は恐怖のために小刻みに震え、噛みしめた唇に血の気はなかった。
「カトゥサよ……」
闇を貫くような不気味な声がした。
人間ならとても耐えられぬほどの血の臭いが辺りに満ち、ゼーゼーという息づかいがカトゥサの恐怖に拍車をかける。
ここ、竜王の居城の最深部。謁見の間に呼び出された大魔道は主と向かい合っていた。
「フレイムとブリザードを無駄死にさせ、我が魔法陣を破壊せしめた。あまつさえ今度はストーンマンを失ったと言

うのか……」
竜王は何の感情も表さず話し続け、そのことが大魔道の恐怖を一層大きなものにしていた。
最後の突撃を敢行した十体のストーンマンとドラゴンもゴーレムの力の前に全滅し、カトゥサは死を覚悟してこの場に赴いたのである。
「本来ならとても許せぬ失態。騎士軍団を失った死神、ドラゴン部隊を失った悪魔、両魔将共々、厳罰に処せねばならぬところじゃ」
竜王はそう言うと言葉を切り、ジッと部下の表情を窺った。
「だがカトゥサよ、これまでの戦功に免じ、今一度だけ機会を与えよう」
竜王はそう言うと玉座を立ち、信じられぬ成り行きに呆然としているカトゥサを促すと謁見の間を離れた。
薄暗い回廊を抜け、静まり返った城内を竜王は無言で進んで行った。主の目指す場所がどこなのか、カトゥサには見当もつかなかった。
砂漠に動くものの姿はなかった。騎士部隊とドラゴン、そして鎧の騎士とストーンマンの無残な屍だけがその姿を砂上にとどめている。
そして、城塞都市は勝戦に湧きかえっているようだった。歓声は砂漠を越え、二人の魔将が陣を構えた場所まで聞こえて来る。
天幕の中では悪魔、死神の両魔将がイライラと歩き回っていた。
「どうする？」
沈黙に耐え切れず悪魔の騎士が尋ねた。
「引き上げるか？」
死神の騎士は答えず、悪魔の騎士が言葉を続ける。
「いや、それはまずかろう。まだ撤退命令が出ておらん」
死神の騎士がそう言った時、天幕の張がサッと開いた。
「カトゥサ！」
「貴公無事だったか？」
大魔道の姿に二人の魔将は驚きの声を上げた。二人とも、カトゥサが処刑されたと思っていたのである。
「陛下から新たな軍勢をお預かりした」
大魔道は何の感情も表さず言った。
「今から攻撃を開始する。お二人はここで見ておられるが

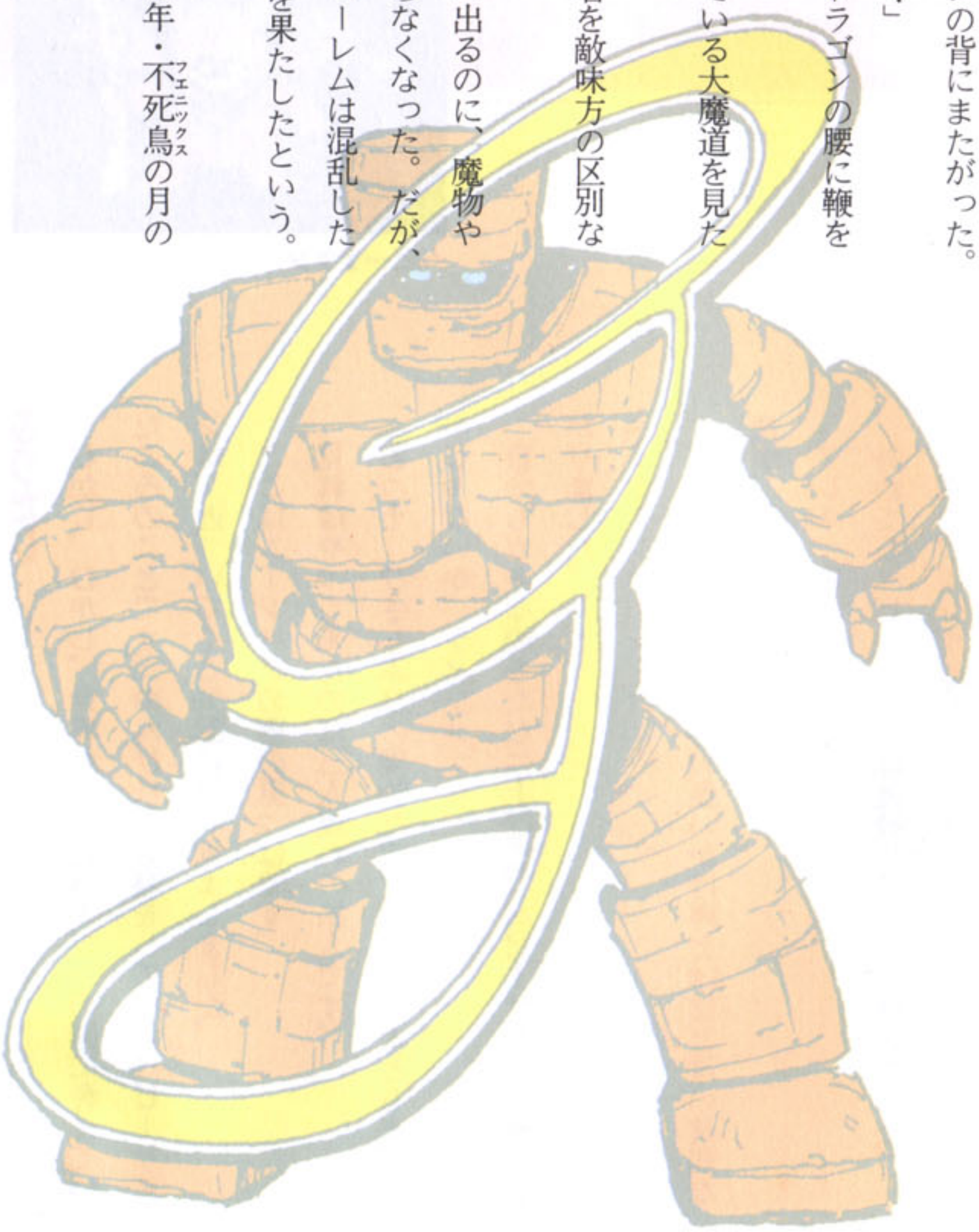


よかろう」
「新たな兵だと？」
「いったいそれは？」
仲間の問いに答えずカトゥサは天幕を出て行った。やがて砂漠に姿を現したのは死霊の騎士と骸骨を中心とする、総勢五十ばかりの集団だった。
「無茶な！　陛下は何を考えておられるのだ」
「死ねということか、カトゥサに……」
魔将たちが見守る前で、カトゥサに率いられた軍勢はゆっくりとメルキドに近づいて行った。
敵の接近に、相変わらず城門の前に立っていたゴーレムが低いうなりをあげた。
「あの魔物は？」
死神の騎士が指さした。
最前列の死霊の騎士が左右に別れ、その間から姿を見せたのは魔将たちが全く知らない魔物だった。
背丈は人間の子供ほどで、赤くずんぐりとした胴体に短い手足がついている。片手に身体と不釣り合いに大きな杖を持った魔物は恐れるふうもなくゴーレムに近づいて行った。

岩の巨人も見慣れぬ相手に戸惑ったように身構える。
「人間どもよ。驚くがいい。今こそ我ら魔界の者の知恵に、真の恐怖を知るのじゃ」
前を行く魔物、鬼面道士を見ながらカトウサがつぶやいた。
竜王の城。その地下深く造られた新たな魔法陣を使って、彼はこの魔物を異界から召喚したのだ。
カトウサにとってはこれが最後の作戦だった。
竜王は魔法陣の使用を再度許し、呼びたければどんな魔物も召喚出来る力をカトウサに与えたのである。
力ではゴーレムに勝てぬと悟った大魔道は思案のあげく鬼面道士を呼び寄せることに決めたのだ。
「メルキドの奴らめ、自らが造り出した巨人によって滅びるのじゃ。さぞや満足じゃろう」
カトウサは勝利を、計画の成功を確信していた。
「グオーッ！」
近づいて来た鬼面道士にゴーレムが襲いかかった。
と、次の瞬間。魔物は巨人に向かって杖を突き出すと、その身体からは信じられぬほどの声で叫んだのだ。
「メダパニ〜〜〜〜〜〜」

地の底から響くような鬼面道士の呪文がゴーレムを直撃した。巨人の全身がブルブルと震え硬直したように動きが止まる。
すべての生き物を混乱させるメダパニの法。それを操る鬼面道士を使ってゴーレムを狂わせ、そして巨人自らの手でメルキドを破壊させるのが、カトウサの作戦だったのだ。
ところが、術にかかるやすぐにメルキドを襲うかと思われたゴーレムは、その場に立ち尽くすとピクリとも動かなくなった。
「なにをしておる、呪文じゃ！　メダパニをもっと唱えるのじゃ」
思惑の外れたカトウサに命令された鬼面道士は、あたふたとゴーレムに近づいた。
すると、今まで何の反応もなく立っていたゴーレムが突然、鬼面道士に襲いかかったのだ。
動きの鈍い魔物はたちまち巨人に捻り潰された。
「ウオー」
そのときメルキドの城門が開いた。ゴーレムが無事だと考えた人間たちが攻撃に出たのだ。
ところが巨人はクルッと向きをかえると、今度は人間に

向かってその巨大な腕を延ばしたのだ。
「イカン！　引け、引け！」
先頭の兵士が叫び、軍勢は慌てて城内に引き返した。
「混乱しても街を守る本能だけは残っていたか……」
カトウサはきびすをかえすとドラゴンの背にまたがった。
「しまいじゃ。何もかも終わったわ……」
大魔道はガックリとうなだれると、ドラゴンの腰に鞭を入れた。
この後、竜王の城に戻ってから生きている大魔道を見た者は誰もいない。
混乱したゴーレムは、城壁に近づく者を敵味方の区別なく襲い続けた。
メルキドの人々は長い年月、街の外へ出るのに、魔物や獣のうろつく南の森を通らなくてはならなくなった。だが、この後も何度か攻め寄せた竜王軍を、ゴーレムは混乱したまま撃退し、メルキドの守護神の役目を果たしたという。
時にアレフガルド暦一三四八年・竜の年・不死鳥の月の出来事であった……。



BABY SATAN
悪魔族出世双六

ベビーサタン

ふりだし

むかし、むかし、世界が大神官ハーゴンの影に脅えていたころのことです。のんびりと昼寝をしていたベビーサタンは、近づいてくる気配に目を覚ましました。

ここはムーンペタの南の原っぱです。

見ればやって来たのは三人連れの旅人です。

「おっ！　ひさしぶりの獲物だぞ。それも三人ともまだガキじゃないか、シメシメ」

自分もガキなのをたなに上げて、ベビーサタンは襲いかかりました。

「イオナジューン！」

ぶしゅ、ぶしゅ、威勢の良いかけ声とはほど遠い貧弱な炎が、指の先で燃えています。

「アレ？　変だな。こんなハズじゃ」

あわてるベビーサタンは連続して呪文を唱(とな)えました。

「ベギラゴーン！　マヒャドー！　そんでもってジャラキー」

なにもおこりません。

「ナーニ、この子？」

「見たところ魔物のようですが……」

「ヘェー、こりゃ悪魔の赤ちゃんだヨ」

すっかり意気消沈したベビーサタンをとり囲んで、三人は勝手なことを言っています。

「でもサ、悪魔の赤ちゃんて地下迷路(ダンジョン)とかにいるんじゃない？」

「ともかく、殺すのもかわいそうですネ」

「なぁ坊や、相手をして欲しかったら、もうちょい強くなってからにしろよ」

恐くてブルブル震えているベビーサタンを残して、三人はスタスタと行ってしまいました。

「クソー、あいつらよってたかってバカにしやがって。今に見てろよ、オイラだって、オイラだって、大悪魔になってやるゥ！」

ベビーサタンの怒鳴る声が平原にむなしくこだまします。

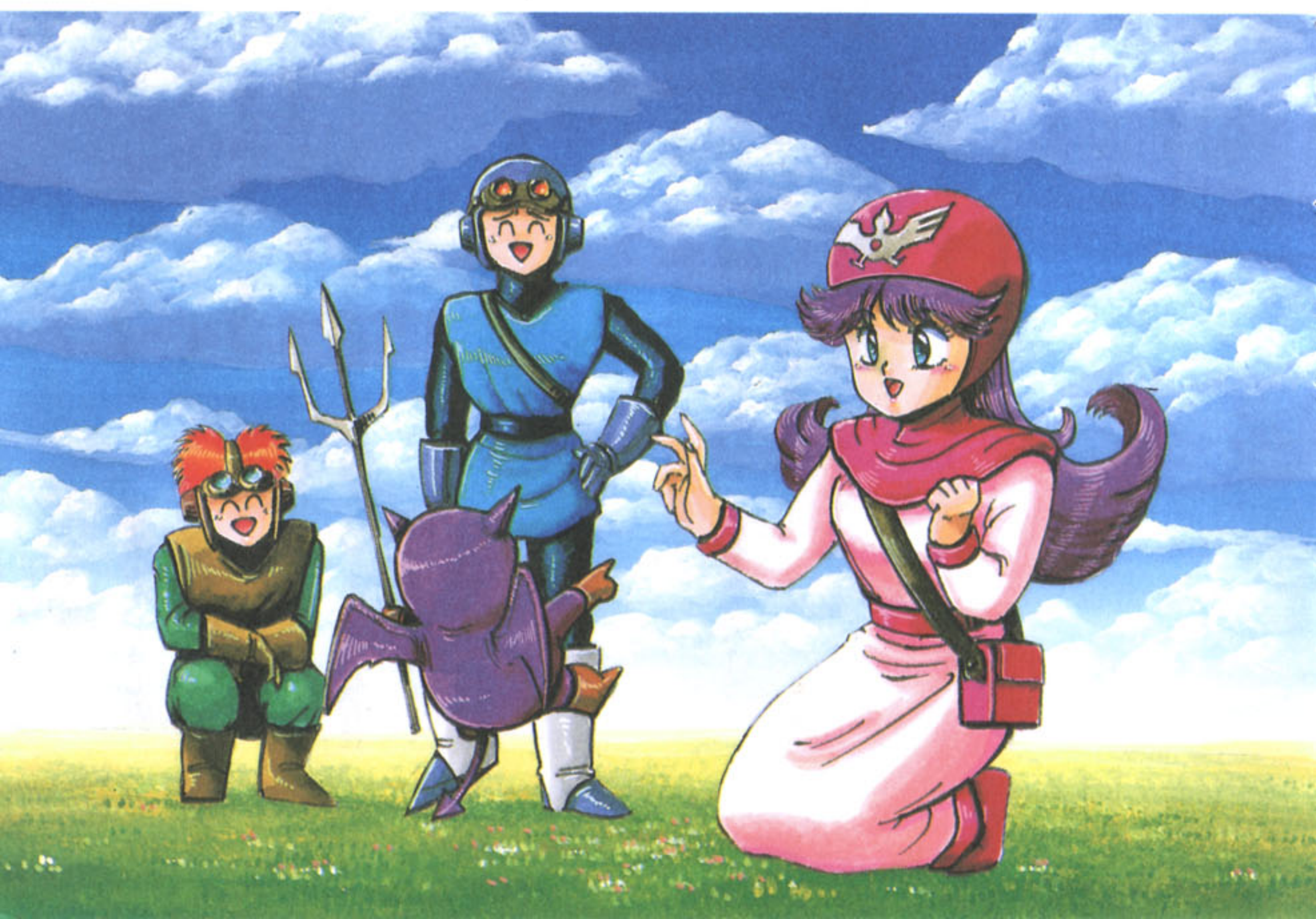
ベビーサタン

泣きながら家に帰ったベビーサタンは、さっそく呪文の勉強をすることにしました。

「婆ちゃんの本がたしかこのへんに……」

物置きをガサゴソと捜します。

「あった！　この魔法の本を読めばオイラだって……」



お婆さんの魔法おばばがむかし使った本を広げました。
「ペッペッ、すごいホコリだな……」
羊皮紙で造られた本を見ながら、ベビーサタンはハッと気がつきました。
「オイラ字が読めなかったんだ……」
しかたありません。こうなったら読み書きの勉強からするほかなさそうです。
その夜、箒に乗って帰って来た魔法おばばに、ベビーサタンは昼間のことを話して字を教えてくれるよう頼みました。
「フムフム、それは良い心がけじゃ」
おばばはさっそく文字を教えてくれました。

ミニデーモン

数週間がたちました。文字を覚えたベビーサタンは、魔法の本を読んで「メラミ」の呪文が使えるようになりました。身体も少しですが大きくなったようです。
「さすが我が孫。おまえには才能があるようじゃ。実力はすでにミニデーモンを名乗ってもよいほどになっておる。このうえは、しっかりした師匠について修行するがエエ」
魔法おばばはそう言うと、ミニデーモンになったベビーサタン（ああややこしい）に、一通の手紙を渡しました。
「東の山にワシの古い友だちのエビルマージが住んでおる。この手紙を見せれば弟子にしてくれよう」
可愛い子には旅をさせろ（この場合は孫ですが……）ともかくそんな諺通り、魔法おばばはミニデーモンを修行に出すことにしたのです。

グレムリン

東の山に住んでいたエビルマージは、手紙を見るとすぐに弟子にしてくれました。
ほんとうは本人も退屈していたのです。
「ワシの修行は厳しく手荒いがついてこれるかな？」
「ハイ、お爺さんオイラ頑張ります」
「お爺さんではない。師匠と呼べ！」
ビシバシ!! 最初から怒られてしまいました。
「お師匠様、まずどんな修行をすればいいんですか？」
明くる日、やる気満々のミニデーモンはエビルマージに聞きました。
「まずは座禅じゃ」
「座禅？」

「そうじゃ。わしが良いと言うまで目をつむって一個所にジーッと座っておるんじゃ」
「なーんだ。それならかんたんだぁ」
と、喜んだのもつかの間。エビルマージはポンポンと手を打ちました。すると、となりの部屋からお化け蟻食(ありくい)が四匹入って来たではありませんか。
「サァ、ミニデーモンよ。この蟻食たちの上で座禅を組むのじゃ」
「ソ、そんなァ。こいつらの背中にはあんなトゲがいっぱい生えてるじゃないですかァ……」
「バカモーン！ それだから修行の効果があるんじゃ」
「チキショー！ こんなひどい目に合うのもあの三人が悪いんだ」
ミニデーモンは痛さをこらえて、必死にお化け蟻食の背中に座り続けました。
「あれからひと月。よくぞ座禅を続けた。今日からはグレムリンを名乗るがよい」
喜ぶミニデーモンに、エビルマージは手鏡を見せました。驚いたことに、身体(からだ)の色も黒から綺麗(きれい)な薄紫に変わっています。それに羽もなんだか立派になった感じです。

ベビル

明くる日。グレムリンとなったミニデーモンのベビーサタン（ほんとにややこしい）を連れて、エビルマージは家の裏にある大きな土蔵に向かいました。薄暗い土蔵の中には、古びた本が山のように積み上げてあります。
「お師匠様、今度は？」
口のききかたもだいぶ大人っぽくなったグレムリンが尋ねます。
「ウム、今度は我らが魔族の聖典である魔道書、ネクロノミコンの写本(しゃほん)をするのじゃ」
写本とは、元になる本を全部手で書き写すことなのです。
「それなら簡単です。なんてったってわたしは読み書きが得意ですから」
「じゃが写本をしておる間は断食(だんじき)じゃゾ」
断食と聞いて育ち盛りのグレムリンはちょっとあわてましたが……
「平気ですとも、本の一冊や二冊。どの本ですか？ さっそく始めますよ」
「どの本と言われても困る。ここにあるのがネクロノミコ

ン全壱万弐千五百六拾七冊じゃ」

「ヒェー！」

グレムリンはショックでひっくり返りました。

「イヤなら修行はここでおしまい。おまえは一生グレムリンのままじゃ」

「それだったら、パーッとまとめてコピーかなんかで？」

「バカモーン。ありがたい聖典をなんと心得る！」

「やります。あの三人にはグレムリンの力じゃ勝てないかもしれません。わたしはもっと強くなりたいんです！」

暗い土蔵にこもったグレムリンは、来る日も来る日もネクロノミコンを写しました。

「……ったく、どこのドイツだこんな長いの書きやがったのは」

季節が移り、エビルマージの家の庭先にうぐいすが鳴くころ……

「オ、お師匠様～、終わりました～」

ガリガリに痩せて骨と皮ばかりになったグレムリンが、這いずりながら土蔵を出て来ました。なんと身体の色が薄紫から暗い赤に変わっています。

「アッパレ！　アッパレ！　これで今日からおまえは立派

なベビルじゃ。さっそく書き写したネクロノミコンを本屋に売りつけ、ご馳走を食わせてやろう」

アークデーモン

ベビルになったグレムリンのミニデーモンの元、ベビーサタン(もうやめた)は、それからもつらい修行を次々とこなしていきました。

「さて、ベビルよ。今度は修行をかねてワシの使いをしてほしいんじゃ。この手紙をロンダルキアの雪原におわす我らが盟主、大神官ハーゴン様にとどけてくれ」

「あの〜お言葉ですが、そんな簡単でいいんですか?」

さすがに修行の成果で疑い深くなっているベビルは尋ねました。

「フォッ、フォッ、フォッ。だいぶ賢くなったようじゃの。たしかに空からロンダルキアに行ったんでは修行にならん。ペルポイの街の西の秘密の迷路を使うのじゃ。しかも目隠しをしてな」

「メ、目隠し? すると地図なんかは?」

「トーゼン使っちゃいかん」

なかばヤケになったベビルは迷路に挑みました。

「このバカ、どこを見て歩いてるんだ」バキー!

「コラー、危ないじゃないか気をつけろ!」ボカッ!

「キャー! なによこの子、人が着替えしてるとこ入って来て。ベギラマ!」

目隠しをしているので、あっちにぶつかりこっちで魔物にどやされ、おまけに無数に仕掛けられた落とし穴にも、片っ端から落ちてしまいました。

「クソー。こんな迷路造りやがったのはいったい誰なんだ? 見つけたら絶対にぶち殺してやるからな!」

コブだらけのアザだらけ、ベビルは半死半生でロンダルキアにあるハーゴンの神殿にたどりつきました。

「大神官ハーゴン様。これはわたくしの師匠、エビルマージからの書状にございます」

「ウム。遠路ご苦労。さっそく読ませてもらうゾ。ナニナニ、そちを昇進させろとナ……」

手紙には、もしベビルが無事にハーゴンの元へ到着したら、アークデーモンに昇進させてほしいと書かれていたのです。

アークデーモンと言えば悪魔族の最高位です。ベビルは飛び上がって喜びました。

そしてそのまま地上にはもどらず、神殿の警備の任務についたのです。身体はベビーサタンだったときの数十倍の大きさになり、背中の羽の一はばたきで並みの魔物なら吹き飛ばされてしまうほどの力も身につきました。

ベリアル

「さてアークデーモンよ……」

ある日のこと、大神官ハーゴンは、アークデーモンとなったベビルのグレムリンの元、ミニデーモンのベビーサタン（もうホントにやめよう）を呼ぶと言いました。

「聞けばおまえは数々の修行を経てここまで来たというではないか、どうじゃ、ここはもう一頑張りして悪魔族の最高位を目指してはみんか？」

「と、おおせられますと、アークデーモンが一番上の位ではなかったのですか？」

言い回しもすっかり大悪魔の貫禄が備わったアークデーモンは、怪げんそうに尋ねました。

「実はここ数百年にわたってふさわしい者がおらんので、空席になっておったのじゃが……」

ハーゴンの話では、アークデーモンの上にはベリアルという位があるのだそうです。

「おまえにその気があるのなら最後の修行をしてはみぬか？」

「やります」

アークデーモンはキッパリと答えました。

「わたくしが修行を始めたのはある人間に復讐するためでした。しかし今はそんなことはどうでもよくなっております。ただここまで来た以上、自分の限界を確かめねば気がすみません」

なんと！　長い修行はギャグのキャラクターだったベビーサタンを、熱血根性路線のアークデーモンへと変えてしまっていたのです。

「立派な心掛けじゃ！　さすが悪魔族随一の強者。だがこの修行は今までのものと比べて命賭けじゃぞ……」

今度の、最後の修行はこのロンダルキアにある滝に打たれるというものでした。滝と言っても地上にあるような普通の滝ではありません。ハーゴンに支配されたこの土地では、なんと有機王水の滝がゴーゴーと音をたてて流れ落ちていたのです。

「アノー、有機王水っていいますと……？」

さすがに不安になったアークデーモンが尋ねました。
「有機王水とはな、酸のなかでも一番強力なヤツなんじゃ。硝酸と塩酸の化合したもので、鋼鉄で造られた巨船もまたたく間に溶かしてしまう力を持っておる。どうじゃ。それでもこの修行をやってみる気があるか？」
ハーゴンの説明に、アークデーモンは覚悟を決めるとうなずきました。
「ここまで来た以上、後へはひけません。こうなったからにはベリアルの位を目指したく存じます」
ゴーゴー、もの凄い音をたてて滝が流れ落ちています。ここはハーゴンの神殿の裏にある有機王水の滝壺です。
「暗黒の邪神よ、死と悪を司どる魔界の神々よ！　我に力をあたえたまえ」
アークデーモンは身体を焼きつくす強烈な有機王水の刺激に耐えながら、必死で祈りました。やがて彼の身体の色は微妙に変化していきました。紫色だった胴体は金色に、白っぽかったおなかは鮮やかなブルーに変わりました。そして、背中の翼も赤からブルーへと変化したのです。
「オオ！　ついに新しいベリアルの誕生じゃ！」
大神官ハーゴンも興奮して叫びました。

あがり

こうしてベビーサタンは悪魔族の最高位ベリアルとなり、ハーゴン神殿の守備隊長となったのです。
「これより先、この城の守りに関する指示はすべてベリアルより受けるのじゃ。わしは世界制覇のための計画を立てねばならんのでナ」
ハーゴンはそう言い残して姿を消しました。
「おめでとうございます、ベリアル様」
「とうとう魔物として最高の位に出世なさいましたね」
昨日までは同僚だったアークデーモンや悪魔神官、そしてアトラスやバズズといった魔物たちが次々と祝いの言葉を告げました。
ベリアルは感激していました。思えば故郷を出てから幾年月、つらく苦しい様々な修行をつんでここまで来たのです。
と、そのとき……
「た、大変でございます、ベリアル様！」
騒がしい足音とともに、このロンダルキアと地上とをつなぐ地下迷路を守備していたオークキングが飛びこんできました。

「エーイ、ナニごとだ？　騒々しい!!」
「めでたい宴席に無礼だゾ！」
魔物たちは口々にオークキングをしかりました。
「とてつもなく強い人間が三人、この神殿を目指してやって来ます。すでに地下迷路は突破されました」
「何者じゃ、いったい？」
悪魔神官が怒りに震えながら尋ねました。
「ローレシアとサマルトリアの二人の王子、それに先頃滅ぼしましたムーンブルクの王女の、三人でございます……」
オークキングは息も絶えだえにそう言うと、ガクッと膝をつきました。
「皆の者、配置につけ。ハーゴン様をお守りするのじゃ！」
ベリアルは立ち上がって叫びました。魔物たちは一勢に持ち場に散っていきます。
「ロトの血をひくとかほざいているガキどもか、運の悪い奴らヨ」
ベリアルはそうつぶやくとゆっくりと階段を上り、神殿の上部へと向かいました。
ベリアルの部屋は六階にあります。この上、つまり七階がハーゴンの部屋なのです。
やがてギガンテスや悪魔神官、そしてアトラスといった魔物たちの戦死の知らせがとどき始めました。攻めこんで来た三人は、予想のほか強いようです。
「これで万一バズズが敗れるようなことになれば……」
ベリアルはニヤッと笑うと、指をポキポキならして立ち上がりました。
やがて階下からバズズの悲鳴が聞こえ、続いて三人の若者たちが階段を上がって来ました。
「ヌ!?　奴らは？」
そうです、この若者たちこそ、ベリアルがまだベビーサタンだったとき出会った三人組だったのです。
「フフフッ、運命とは皮肉なものよ。ムーンペタでの情(なさけ)が、きさまらの命取りになろうとはな」
ベリアルは三つ又の矛(ほこ)を構えると、三人に向かって突進しました……
しかし、ベビーサタンがベリアルに出世したように、あの三人組も、それはそれは強くなっていたのでした。
運命とは、ホンに皮肉なものでございます。

CHIMERA

合成魔獣異聞

キメラ

荒れ狂う大海を渡り、絶望の淵を越え、果てしない闇の世界を進むこと幾千日。そこにそびえ立つのはすべての悪を支配する魔の城塞……。

ここでは今しも新しい生命が誕生しようとしていた。悪魔神官——ドルバの指揮のもと、祈禱師や魔道士たちの祈りが低く響き続けている。

悪魔獣の合成——それが大魔王ゾーマから与えられた彼らの使命だった。

ドルバは配下を使って、様々な合成魔獣を試みていた。

ライオンとガルーダを組み合わせ、ベギラマの使えるライオンヘッドを。

アンデッドマン三匹を合成し、複数攻撃の出来るガイコツ剣士を。

ドラゴンと大海亀を組み合わせ、亀の守備力とドラゴンの攻撃力を合わせ持つガメゴンロードを。

お化けキノコに鬼面道士の魔力を持たせたマージマタンゴ。

サイの力と兎の繁殖力を兼ね備えた一角兎。

三体のギガンテスを合成させた究極の巨人族、アトラス。

だがどれもこれも完全な成功とは言えなかった。

ライオンヘッドはライオンとしての習性が残ってしまい、空腹のときしか人間を襲おうとはしなかった。

三匹のアンデッドマンを使用したのに、ガイコツ剣士は二回しか攻撃出来ないし、ガメゴンロードは亀の母体のお陰で動きが非常に鈍い魔物になってしまった。

一角兎（いっかくうさぎ）などは単に角のついた大きな兎にすぎない魔物だった。

マージマタンゴは湿気の多い所でしか活動出来なかったし、アトラスにいたっては生産コストがかかり過ぎ、完成したのは一体きりだった。

「なにを手間取っておるのだ、悪魔神官ドルバ。もっと有益な合成魔獣を造るのだ！」

ゾーマの言葉に連日連夜、ドルバと配下たちは働いた。

「まったく、オレなんか今日で二月（ふたつき）も休みなしだぜ」

「おたがい様よ。オレだって満足に寝てもいないんだから……」

部下たちの不平はつのり、ドルバは焦（あせ）り始めた。

そして今日……

「出来た！　出来たぞ！　ヘルコンドルの素早さと飛行能力、そしてキングコブラの生命力と猛毒を合わせ持つ魔物

の誕生だ！」
悪魔神官ドルバの前には、禿げ鷹の頭に蛇の胴体、見事な翼を持つ一匹の魔物が立っていた。
「すぐにテストを」
キメラと名付けられたこの青い魔物の力は、果たしてどの程度のものなのか？
ドルバと部下たちの手によって様々な試験が続けられた。
「飛行能力……合格です」
「守備力及び攻撃力……マズマズでしょう」
「繁殖力はかなりのものがあります」
「残念ながらキングコブラの持っていた毒は消えてしまったようです」
ドルバは手にした羊皮紙に、羽ペンで次々とテスト結果を記入していった。
「ウーム。毒性を失ったのは残念だが、こいつにはそれを補って余りある長所がある。まずは成功と言ってよかろう」
部下たちがワーッと歓声をあげた。
「これで休める」
「とにかく寝られる」
全員が手を取り合って喜んでいた。

「なるほどキメラか……確かに合成魔獣にふさわしい姿よ、でかしたドルバ。さっそく大量生産に入れ！」
ゾーマの命令のもと、ただちに無数のキメラが産み出された。
「クソー、せっかく休めると思ったのに……」
「今度は大量生産のノルマでこき使われるとはナ」
部下たちの不平を余所に、ドルバは大満足だった。
「まてよ……ヘルコンドルより強い極楽鳥と、キングコブラより強いバシリスクの組み合わせならどうなるだろう？」
結果は……これもまた上々だった。ラリホーの魔法の使える、メイジキメラが誕生したのだ。
「ウーム、今度も良く出来ておる。さすがじゃドルバ」
ゾーマは上機嫌でメイジキメラの生産を許した。
数カ月後……
合成魔獣の生産を終え、休養を取っていたドルバは大魔王から急な呼び出しを受けた。
「そなたを呼び寄せたのはほかでもない。余は先日、アークマージめにキメラとメイジキメラを使い、空の魔軍を編

成するよう命じたのじゃ。この城の守りのためにの……」
「それはよいお考えで……」
ドルバは大魔王の言葉に不吉なものを感じて答えた。
「ところがじゃ。あやつら、アークマージめの命令に従うどころか、群れをなして飛ぶことすら出来ぬと言うではないか、いったいこれはどうなっておるのじゃ？」
ゾーマの問いに、ドルバの顔から血の気が引いた。
「……おそれながら……」
悪魔神官は必死で考えをまとめると釈明した。
つまり、キメラは姿こそ鳥類に近いが、習性は蛇そのものだったのだ。群れをなして獲物を襲う蛇がいるだろうか？
つまりキメラによる軍団を作り、編隊を組ませ空から人間を襲おうというゾーマのもくろみは、完全に無理な注文だったのだ。
「それでは全く役に立たんではないか！」
ゾーマの怒鳴り声にドルバは平伏した。
「これまでの失敗とは訳がちがうゾ。すでに数百のキメラが完成しておるのだ。いまさら駄目でした、で通ると思うのか？」

大魔王の右手が空を切り、同時に玉座の横に巨大な砂時計が出現した。
砂時計は見えない力に操られ空中でクルリと回転する。
「この砂が落ち切る前にキメラどもをなんとかするんじゃ。もし出来ぬときは……」
サラサラと落ちる砂を横目で見てゾーマは言葉を続けた。
「どうなるかはそちも分かっておろう。成功するまで目通りかなわぬ！　さがれ！」
ゾーマの逆鱗に触れた悪魔神官ドルバは、必死に打開策を講じようとした。
「ようはキメラどもの中に、群れを率いるだけの統率力のあるものを造れば良いのだが……」
だが理屈で分かっていても作業は困難で、期限までにはとても間に合いそうもなかった。
どんな種類の魔物を組み合わせても、蛇の性質は根強くとても消し去ることが出来なかったのである。
そしてそんなドルバをあざ笑うかのように、玉座の横に置かれた砂時計の砂はサラサラと落ちていった。
「ドルバ様の命運も尽きたようだナ」

「次の悪魔神官には誰がなるのだろう？」
部下の魔物たちは勝手な想像をし、高位の祈禱師の中には、あからさまにゾーマに自分を売り込む者まで現れ始めた。
「なんということだ。俺は今までなんのために努力を重ねて来たというのだ？　部下たちの不平にも耳をかさず全力で仕事に打ち込んで来たのはなんのためだったのだ……」
ドルバは不可能と言われた数多くの仕事を超人的な努力の末、成功させて来た。出世を妬むライバルに妨害されたこともあった。過重な労働に部下たちには嫌われた。それもこれもゾーマの世界征服のためではなかったのか……。
「大魔王様の性格からして、今度失敗すれば間違いなく……」
粛正、抹殺という不吉な言葉がドルバの脳裏をよぎり、彼はゾクッと背中を震わせた。
「……魔物たちのような下等なものだから、蛇の性質に負けてしまうのだ。我々修業を積んだ神官族なら……」
失敗すれば死は免れないのだ。それならいっそ……覚悟を決めたドルバは、部下たちを遠ざけ一人、魔獣合成装置の前に立った。
そして……
「なに？　ドルバが自らを魔獣と化したとな！」
さすがのゾーマも思わず腰を浮かして、報告に来た魔物に問いかけた。
「ハイ。悪魔神官様はピンク色の巨大なキメラに変身されました。ほかのキメラどももおとなしく従っておりまする」
窓から見上げればドルバだった巨大なキメラを先頭に、数百のメイジキメラとキメラたちは見事な編隊を組んで、大空を飛び回っていた。
「見事じゃ！　さすがドルバ、お主を今日からスターキメラと名付けようゾ！　サァ下りてこい」
しかしスターキメラは一声叫ぶと、城塞の上でグルリと弧を描き、そのままいずこともなく飛び去っていった。後に無数のキメラとメイジキメラを従えて……。
合成魔獣キメラ……
今その誕生の謎を知る者は少ない――。

SLIME
スライム年代記

スライム

広大なアレフガルド大陸の中央部。
緑豊かな草原に囲まれて美しい山がそびえていました。
この山と周囲の草原にはたった一種類の生き物しか住んでいません。
アレフガルドで一番ありふれた生き物……。
そうです。ここはスライムの国なのです。
そして今、一匹のスライムが草原から山の方に向かって進んで行きました。
大きさは人間の赤ん坊の頭ぐらい、どうやらまだ子供のようです。
やがてそのスライムは山の中腹にある洞窟(どうくつ)の中へと入って行きました。
中には何がいるのでしょう？
真っ暗で鼻をつまれても分かりません。
もっともスライムには鼻はありませんからその心配はいりませんが……。
「誰じゃナ」
暗闇の中から声がしました。
「これは珍しいおまえのような子供がワシを訪ねて来るとは、いったい何の用じゃナ？」
現れたのは普通のスライムの十倍以上もある巨大なスライムでした。
どうやらだいぶお爺(じい)さんのようです。
「こんにちは。ボクおじいさんに相談があって来たんです」
子供のスライムはピョコンと頭を下げると言いました。
かなり思いつめた様子です。
「何か困ったことが起きたのかナ？」
「実はボク、スライムやめて転職したいんです……」
「転職じゃと！　おもしろいことを言う子じゃナ。しかし何でそんなことを考えたんじゃ？」
「だってボクたちスライムは、いつだって人間やほかの魔物にいじめられてるでしょ？　この前だって原っぱの向こうまで薬草をとりに行ったら、ドラキーに邪魔されたんです。あいつらボクらがこの世の中で一番弱い生き物だって言うんです」
「ホホウ、スライムが一番弱い生き物とナ、それでおまえは何と答えたんじゃ？」
「ボクはそんなコト絶対ないって言いました。そしたらあいつら、だったらスライムより弱い生き物ってなんだって聞くんです……」

子供のスライムはそこまで話すと、くやしそうに目を閉じました。
「なるほど。そしておまえは答えることが出来んかったと言うわけか……」
「そうなんです。考えてみたらボクらより弱い生き物なんていませんよネ」
「たしかに戦う力という点からだけ見れば、ワシらが一番弱いかも知れん。だが生き物の価値というのは、けっしてケンカの強い弱いだけで決まるものでもないと思うがノ」
「だってボクたちは魔法も使えないし、身体だってちっちゃいし……」
子供のスライムは、よほどドラキーにバカにされたのがくやしかったのでしょう。
泣きべそをかいています。
「だから他の魔物になりたいと言うんじゃナ？」
「そうなんです。ウーンと強くて魔法も使える魔物になって、あいつらみんなやっつけてやりたいんです！」
「たしかにワシらスライムはこのアレフガルドの中で一番弱い魔物かも知れん。身体も小さく、力もない。おまえさんの言う通り魔法も使えん。じゃがワシは、スライムこそが一番偉大な魔物じゃと思っとるヨ」
意外な答えに、子供のスライムは目をパチクリさせています。
「どうして？　どうして一番弱いボクたちが偉大なんですか？」
「それはワシらスライム族には限りない可能性があるからじゃ」
長老スライムは自信たっぷりに答えました。
「だがそれをおまえに教えるには、まず我がスライム族の歴史から話さねばなるまい」
「ボクたちの歴史？」
「そうじゃ。おまえは父さんたちから、どのくらいむかしのことまで聞いておるかナ？」
「そんなくわしくは知りません」
子供のスライムは親から聞かされた自分たちの歴史を、一生懸命思い出しながら答えました。
スライムはこのアレフガルドのまん中、つまりこの地方で誕生した魔物です。
ずっとむかし。
スライムは、この土地にあった小さな湖で生まれました。

そして、子供のスライムが知る限りさして変わらない生活を続けてきました。

「フーム、それじゃおまえは、我々がずっと長いこと大した進化もせずに生きて来たと考えておるんじゃナ？」

「違うんですか？」

長老スライムは幼い同族の答えに少し寂しそうに笑うと、自分たちの長い歴史を話し始めました。

最初。スライムも人間や他の生き物と同じように、水の中で生まれました。

場所はちょうどこの辺です。

そのころ、ここには大きな湖があり、スライム族はその中で誕生しました。

初めは目に見えないくらい小さかったスライムも、やがて爪の先ぐらいの大きさになりました。

形も今とほとんど変わらず、色もきれいな水色です。

そのころのスライムは単細胞生物。つまり身体全体が一つの細胞で出来ていたのです。

子供を産む代わりに、ある程度成長すると身体が二つに分かれます。

「キ、キミは誰だ!?」

「と、言われても、困るな……ボクは君だ」

「君がボクだとするとボクは誰だ？」

「君はキミじゃないか」

「そうか、ボクがキミなのか」

順調に進化を続けたスライムたちは、そのうち雄と雌とに分かれました。今と変わらないもの凄い繁殖力です。

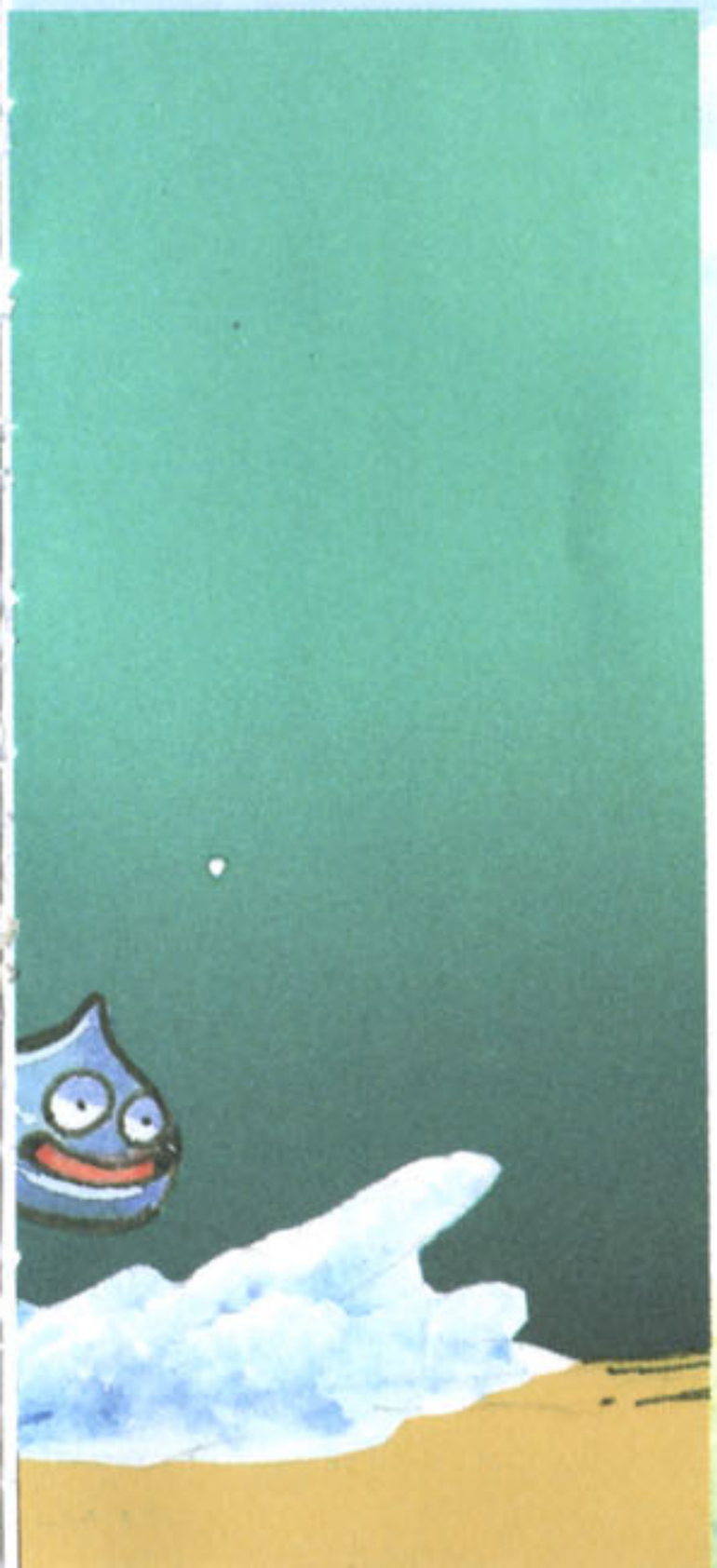
「アナタ、喜んでまた赤ちゃんヨ」

「ヒエー、いっぱいいるナ」

「十七つ子なの、どの子もみんなアナタそっくり」

「ウーン、これでわが家も三五七人家族か」

普通の生き物ならここで多細胞生物、つまり人間やほかの動物のようにたくさんの細胞から身体を作るようになるのですが、スライムたちは相変わらず一個の細胞のまま、身体だけをドンドン大きくしていったのでした。



そして今とほとんど変わらない大きさになりました。
「すいません。ちょっと通してください」
「あ、そこ、気をつけてくださいな。うちの赤ちゃんたちが寝てますから」
どんどん、どんどん子どもが生まれ、その子たちもアッと言う間に大人になってしまうのです。
たちまち湖の中はスライムでいっぱいになってしまいました。
こうなったらもう陸に上がるしかありません。
「ウワッ！　熱い」
「ヒエーッ！　身体が溶けちゃうヨ」
湖面から顔を出した何匹かがたちまち死んでしまいました。
しかし、陸に上がるのをあきらめる訳にはいきません。
何度も何度も挑戦しては失敗し、少しずつ暑さに慣れていきました。
そして何世代か後、ついに陸で暮らせるスライムが生まれました。
やがて陸の生活に慣れたスライムたちは、さらに増えていったのです。
「ここもせまくなっちゃったネ」

「食べられる草もなくなっちゃったヨ」
「このままじゃみんなお腹が減って死んじゃうワ」
「ヨーシ！　ボクは新しい土地を探すゾ」
「アタシも行く」
「ボクも」
こうして元気のいい数百匹が湖のそばを離れ、新しい土地を探すことになったのです。
でもどっちに行けばいいんでしょう？
「ほかの場所ってドコへ行けばいいんだ？」
「南さ！　このまえ旅のデスフラッターが話しているのを聞いたんだけど、あっちの草原は暖かくって住み心地がいいんだって」
「アタシも南へ行く。暖かいの好き」
「そうかなぁ、僕の聞いた話じゃ、北の海の方にはここよりずっと広い草原があるっていうヨ」
「ちょっと待ってヨ。
東の方がエサがいっぱいって話も……」
「みんなに言ってんだヨ。西の方が絶対にいいヨ」
「南だってば！」
「北がいいヨ」
「東だよ。ひがしっ！」
などと、もめている間にも赤ちゃんはどんどん生まれて来ます。とうとう湖のそばの草原は、スライムたちであふれてしまいました。
「ボク、南に行くゾ」
「ワタシは、西」
「北、北に行く」
「東、東に決まってるじゃないか」
こうしてスライムたちは四つの集団に分かれると、それぞれの目的地を目指して大移動を開始したのです。

南

洞窟の魔法おばば

最初に出発したのは南に向かうスライムたちでした。
ワイワイ、ガヤガヤ。おしゃべりをしたり遊んだり。ともかく先へと進みます。
やがて、彼らの前には大きな草原が広がっていました。
「すごい！　ご馳走の大草原ダ」
辺り一面見わたす限り緑の草が生えています。数が少なければ問題はなかったのですが、この集団は東西南北の四つに分かれたグループの中で一番数が多かったのです。
「アレ？　このヘン昨日は草がいっぱいあったのに……」
「ボクがさっき食べちゃったヨ」
「ヒドイ！　せっかく今日の朝ご飯にしようと思ってたのに」
やがて見渡す限りの草原も、まばらに草の生えた荒れ地に変わってしまったのです。
そして草の少なくなった場所で生まれた子供たちが、小さな虫を食べ始めました。
「コ、コラ、この子は。いくらお腹がへったからって、虫なんか食べるんじゃありません」
「だっておとといからナンにも食べてないんだモン」
「そういえばアタシも三日も食事をしてないワ」
「お母さんも食べてごらんヨ。おいしいヨ」
こうして完全な草食から雑食へと変化したスライムたちは、飢死にだけはまぬがれたのです。
ところが……
「ナ、ナンダこの赤ちゃん、ちっともボクに似てないソ」
「ホント、ワタシとも違う」
「とぼけるな。この浮気スライム！」
あちこちでオレンジ色のスライム赤ちゃんが生まれたのです。
いたるところで夫婦ゲンカが始まりました。
どうも身体の色が変わったのは食事のせいのようです。
「普通のスライムじゃない。こりゃもう新スライムだ」
こうして新種のスライムベスが誕生したのです。
そしてちょうどそのころ、スライムたちの場所から程近い岩山の洞窟に、真っ赤な服の魔物が集まっていました。
尖った鼻に鋭い目、手には箒を持っています。
彼女たちは魔女一族の魔法おばばでした。

「サテサテ。今日も疲れたのウ」
「ほんに一日働き詰めじゃ」
この時代、世界征服をくわだてた魔王の手下になっていたおばばたちは、救急看護婦部隊に配属されていました。仲間の魔物がピンチになったら箒に乗って空から救援に駆けつけるのです。
「あたしゃ、今日だけで五十回もベホイミを唱えたぞい」
「ナンノ、あたしだって百回近くバシルーラを使ったんじゃ」
人使い、イヤ、おばば使いの荒い魔王のせいで、みんなクタクタです。
「コリャ。なんとか人数を増やさんと、みんな参ってしまうぞい」
「じゃがワシらの一族もそう数はおらんしなァ」
「どうじゃろう？　あたしらに代わって働いてくれる魔物を創っては……」
「そんなコトが出来るんかい？」
仲間の言葉に一人のおばばがニヤリと笑いました。
「この近くの草原に、スライムとかいうちっこい魔物が住み着いておる。連中をなんとかして改造するんじゃ」
話が決まるとおばばたちはすぐに行動を開始しました。

箒にまたがって洞窟を飛び出します。
そんなことはまったく知らないスライムとスライムベスは、今日ものんびりと日なたボッコをしていました。彼らはお腹がいっぱいの時はたいていそうしているのです。
「オーイ、なんか空を飛んでるゾ」
「ホントだ。赤いのが飛んで来る」
のんきなコトを言っているあいだに、おばばたちは急降下して来ました。
「ラリホ――ッ」
「レレレッ？　なんだか眠くなっちゃった」
Zzzzzz
イビキをたてて眠りはじめたスライムとスライムベスを、魔法おばばたちは簡単に捕まえてしまいました。
「ずいぶんとたくさんいるのう」
「とても全部は連れて行けんぞい」
「ナーニ、百匹もおれば充分じゃろう」
眠っているスライムたちを袋につめ、魔法おばばの集団は箒にまたがりました。
「こいつはけっこう重たいのウ」
箒はヨタヨタと離陸して岩山へと帰って行きました。

残されたスライムたちはまだナニも知らずに眠っています。
しばらくして……
「おや？　うちの家族が減ってるゾ」
「うちのとうさんもいなくなってる」
「誰かアタシの赤ちゃん知らない？」
大騒ぎになりました。
「きっとあの赤いのが連れてってしまったんだ」
「きっと食べられちゃうんだワ」
けれど相手がどこから来たかも分からないスライムとスライムベスには、どうすることも出来ません。
「ともかく、これからは昼寝をするときは見張りをたてよう」
「そうだ、誰かが起きて見張っていればいいんだ」
こうしてこれ以後スライムは、昼寝のとき交代で見張りをするようになったのです。
サテ、魔法おばばに連れて行かれた連中はどうなったのでしょう？
「目を覚ましたらもういっぺんラリホーをかけるんじゃゾ」
「逃げ出されたら面倒じゃ」

洞窟にもどったおばばたちはそんなことを言いながら、スライムを袋から取り出しました。
洞窟の奥、そこにはたくさんの壺が並んでいます。
魔法おばばが薬草をしまっておく壺です。
「準備は出来たかい？」
「ああ、言われた通り秘伝のタレをこさえて壺に入れてある」
洞窟に残っていたおばばの一人が大きな柄杓で中身をかき混ぜながら答えました。壺の中身はドロドロの液体です。
魔法おばばたちはいったいナニをする気なのでしょう？
「秘伝書に書かれていた通り、シャーマン族の面の皮に極楽鳥の羽、それにオークキングの牙が入れてある。ソレにワシの爪の垢もナ」
ウヒヒヒ、柄杓から手を放してオババは不気味に笑いました。
どれも回復の呪文を使う魔物です。
「よいか、完全に中に入れてしまってはいかんぞい。フタをするようにスライムどもを壺の上にのせるんじゃ」
液体が口まで入った壺の上にスライムを乗せました。
「なんだか冷たいなァ……」

お尻にピチャピチャと水が当たり、一匹が目を覚ました。

「ラリホーッ」

「ムニャムニャ」

呪文をかけられ、また眠ってしまいます。

数日後。下半身から染み込んだ秘伝のタレの作用で、スライムたちに変化が起こり始めました。

なんと白っぽい触手が生えてきたのです。

「効いたゾ、効いたゾ、さすがは魔女族秘伝のタレじゃわい」

そうです。秘伝のタレとは、回復の呪文を使えるようになる薬液なのです。

スライムとスライムベスの下側から、まるで球根の水栽培のように触手が延びてきたのです。

「赤いのと青いのとで、どの程度違いが出るかのウ？」

「それはこれからのお楽しみじゃ」

二日後。壺の上に置かれたスライムとスライムベスの身体はすっかり変わってしまいました。白い触手が何本も生え、フワフワと空中に浮くようになっていたのです。

「どうじゃ？　ナニか回復の呪文を唱えてみい」

キョトンとして宙に浮いている青いスライムに、魔法おばばが言いました。
「まだ寝ぼけておるようじゃの」
おばばは、箒の柄でいきなりスライムの頭を叩きました。
「イタタタッ、ホイミッ！」
「上等、上等、して赤い方はどうじゃ？　なんとか言うてみい」
こちらも半分寝ぼけているようです。
「それじゃこいつで試してみるか」
連れて来たのはポイズントードでした。
どうも元気がないようです。
「このカエルめ、間抜けなことに自分の毒にあたって死にかけておったんじゃが」
毒消し草で命だけは取りとめたのですが、体力はほとんど残っていないのです。
「ほれほれ、カエルを助けてやらんかい」
おばばの声にスライムベスは目を開けました。
ポイズントードはゼーゼーと肩で息をしています。
「ベホマッ！」
驚くことにカエルの魔物はいきなり跳ねると、元気よく飛び出して行きました。
「オオッ！　素晴らしい」
魔法おばばたちは大喜びです。
こうして魔法おばばの手によって改造されたスライムとスライムベスは、全く新しい種族となったのです。
青いスライムはホイミスライムに、赤いスライムベスはベホマスライムへと変わりました。
そしてこの後、何匹かがおばばたちのもとを逃れ野性にもどったということです。
しかし、かわいそうに逃げられなかったものは魔王の手下として使われ、人間との戦いの中で命を落としていきました。

西 試練の砂漠

スライムとスライムベスが、ホイミスライムとベホマスライムに改造されているちょうどそのころ、西へ向かったグループは黄色い砂漠に到着していました。

「ナンダここは!? 食べるモンなんかなんにもないじゃないか」

「まわりは砂とでっかい岩ばかりだ」

「おまけに太陽はギラギラ。とてつもなく熱いヨ」

「だれだ、西はいいとこだなんて言ったのは!?」

「責任者、出てこーい」

なんと言っても後の祭りです。

「困った、困った。食べ物は全然ないし。子どもたちだけはどんどん生まれてくるし。いったいどうすればいいんだろ?」

引き返そうにも、最初の湖からはあまりに遠くまで来てしまいました。

「それに戻ったって食べ物がないのは解決するわけじゃないしナァ」

「でもここにいるぐらいなら前の場所の方がましさ!」

「だいたい西へ行こうって言い出したスライムくんが悪いんだよ」

「そんなコト言ったって、自分だってこっちがいいと思うから来たんだろ」

お腹が減ってイライラし始めたスライムたちは、あちこちで言い合いをしています。

「もうダメ。わたしお腹が減って死んじゃいそう」

「せっかくここまで来たのに……」

「とにかくここにはいられないナ」

グルッと辺りを見回すと遠くに山が見えました。

「あの山へ行こう。ここよりは食べ物があるはずだ」

山の上の方は雪が積もっているのか、まっ白です。

ゾロゾロ、ゾロゾロ。

スライムたちは照りつける太陽の下を進んで行きました。

途中かなりの仲間が倒れましたが、なんとか半数以上が山のふもとにたどり着きました。まばらな草と貧弱な木々がスライムたちをむかえてくれました。

「ワーイ、草がアルゾ!」

「それに木ノ実もなってるヨ」

けどやはり食べ物は足りません。
「しょうがない、もうちょっと上の方へ行ってみようよ」
「アソコに道らしいものがあるヨ」
見れば、かなりの広さの山道が頂上へとのびています。
なんとか元気がでたスライムたちは、上へ上へと登って行きました。
「ぺっ、ぺっ。ここいらの葉っぱは硬いなァ」
「わがまま言うなヨ。チョッピリでも食べ物があるだけましじゃないか」
「それにここは砂漠にくらべてずっと涼しいしネ」
ところが登るにつれて涼しいどころではなくなってきました。
岩や木の影には、去年の冬にふった雪がまだ残っています。
初めての寒さにスライムたちは、ガタガタ震えながら進んで行きました。
山の頂上に近づくにつれ、草はほとんどなくなっていきます。
そして木々は、葉が針の様に細い針葉樹ばかりです。
「寒いよう、身体が凍っちゃうヨー」
「来るんじゃなかったヨー」
またまた不平が出はじめたころ、一匹が妙な物を見つけました。
「なんだいこれは？」
「丸くってキラキラしてるけど食べ物じゃないネ」
それは人間の使う金貨でした。
でもなんでこんな場所に落ちているのでしょう？
「ウワッ！　ひどい」
一匹が大きな声で叫びました。
目の前はスライムたちが登ってきた道と、横からのびて来た道が重なる十字路のような場所でした。何台もの馬車が横倒しになり、荷物がいっぱい転がっています。
「いったい何があったの？」
みんな頭をひねっています。
実はこの道は、山の両側にある二つの街を結ぶ街道だったのです。
転がっている馬車と荷物は、片方の街からもう一方へ移動するキャラバンのものでした。
でも大事な荷物をほっぽって、人間はどこへ行ってしまったのでしょうか？

「オーイ！　こっちにもおもしろいモンがあったゾ」
一匹がほどけた荷物の中から不思議な物を発見しました。
かなり厚みのあるきれで作られたソレは、身かわしの服と呼ばれる人間の防具でした。しかしもちろんスライムたちにそんなコトはわかりません。
「フワフワしてあったかいヤ」
中にもぐり込んだ一匹が言いました。
「イイナ、イイナ。僕も探そっと」
我も我もと全員が散乱した荷物を調べます。
「こっちは剣が入ってたヨ」
「こっちにはカブトが入ってるヨ」
「あったぞ、この箱は全部あの、〝フワフワあったか〟と同じだ」
引きずり出した身かわしの服は、なんとか全員がもぐり込むだけの数がありました。

「ちょっと動きにくいけど、これなら寒くないネ」
「気のせいかな？　動きにくいどころか素早くなったような気がするゾ」
これで寒さがしのげます。
「それじゃソロソロ出発するよ」
一匹がそう声をかけました。そのときです……
「ネエ？　なんかいま聞こえなかった？」
「そう言えばどこかで声がするネ」
風向きのせいでしょうか、道の左側から誰かの声が聞こえます。硬い葉を茂らせた立木のすぐ奥は険しい崖になっているというのに、いったい誰がいるのでしょうか？
「ボクちょっと見てくるネ」
最初に身かわしの服を発見した一匹が、様子を見に行きました。
「ネエ。ネエ。このすぐ先の洞窟から声がするよ」

「声がするってことはナニか生き物がいるってコトで……」
「生き物がいるってことは……」
「食べ物があるかも知れない！」
ここ数日間、満足な食事をしていないスライムたちは洞窟に入ってみることにしました。中はかなりの広さです。
「やっぱり生き物の声だ……」
「いや、これは歌だヨ」
そうです、洞窟の奥で何者かが歌っているようです。
「ホーヤレホ、どっこいせ」
「仕事はとってもきびしいが、やらぬと魔王に叱られるっ」
どうやら、中で誰かが働いているようです。
スライムたちはさらに奥へと進んで行きました。
地面はかなりの急勾配で下がり始め、温度がだんだんと低くなっていきます。
「コレを着てて良かったネ」
「ホント、ホント。このきれがなかったら凍えているところだ」
「シッ！　声をたてると見つかっちゃうヨ」
かなりの距離を進むと正面に明かりが見えました。巨大な影がいくつも動いています。
なんと！　そこにいたのは巨人族のトロルでした。五人のトロルがツルハシで岩肌を掘っています。
「うーん、硬い岩ダ」
「こいつさえ崩せばきっと銀の石がたくさん取れるのに」
「早くしないとまた魔王さまに叱られるぞ」
実はこの山は、ミスリルという鉱石が取れる山だったのです。
精錬するととても丈夫な金属になるミスリルを、人間も魔物も血眼になって捜していました。
人間の鍛冶屋はミスリルから水鏡の盾や光の剣を造ります。
そして魔物の鍛冶屋は、ガイコツ剣士の剣や悪魔の騎士の斧を造るのです。
「これじゃ時間がかかりすぎる」
トロルの一人がツルハシを投げ捨てて言いました。
「そうだ、魔法の玉はまだ残ってたか？」
「アト三つあるけど、使うのか？」
トロルたちは硬い岩を魔法の玉、つまり爆薬を使ってふっとばすつもりのようです。

スライムたちはジッと動かずに彼らの様子を見守っていました。

「この前みたいに人間が来ると面倒だ。早く掘り出しちまった方がイイだろう」

「おまえがあんなにデッカイ声で歌うからじゃないか」

「ナニを言いやがる、歌でも歌わなきゃ仕事やってられっかい」

どうやらあのキャラバンを襲ったのはこいつらの仕業(しわざ)のようです。

人間は殺されたか……食べられてしまったに違いありません。隠れていたスライムたちは恐ろしくなってしまいましたが、ヘタに動けば見つかってしまいます。

「サァ、魔法の玉を三発しかければふっ飛ぶだろう」

カチカチ、火打ち石の音が響きました。

「隠れろっ！」

導火線に火がつき巨人たちが岩影に隠れます。

シュル、シュル、シュルッ……

ドッカーン！

大爆発が起こりました。どうやら三発は多すぎたようです。

岩が崩れ、その奥から銀色の液体が流れ出しました。

「なんだコリャ？」

「ぎ、銀の石が溶けちまった」

いくら魔法の玉でも鉱石を溶かすだけの熱は出ません。

トロルたちは知らなかったのですが、この山は休火山。つまりいまは眠っている火山だったのです。

ミスリルを求めて下へ下へと掘り進んだトロルたちはマグマの熱で溶けた鉱脈を掘り当ててしまったのでした。

「グワワッ！　熱い」

「た、助けてくれー」

さすがのトロルも灼熱(しゃくねつ)したミスリルを浴びてはたまりません。大火傷(やけど)をしてあっけなく死んでしまいました。

「ピエー。こ、こっちに流れてくるぞ！」

「早く逃げろ」

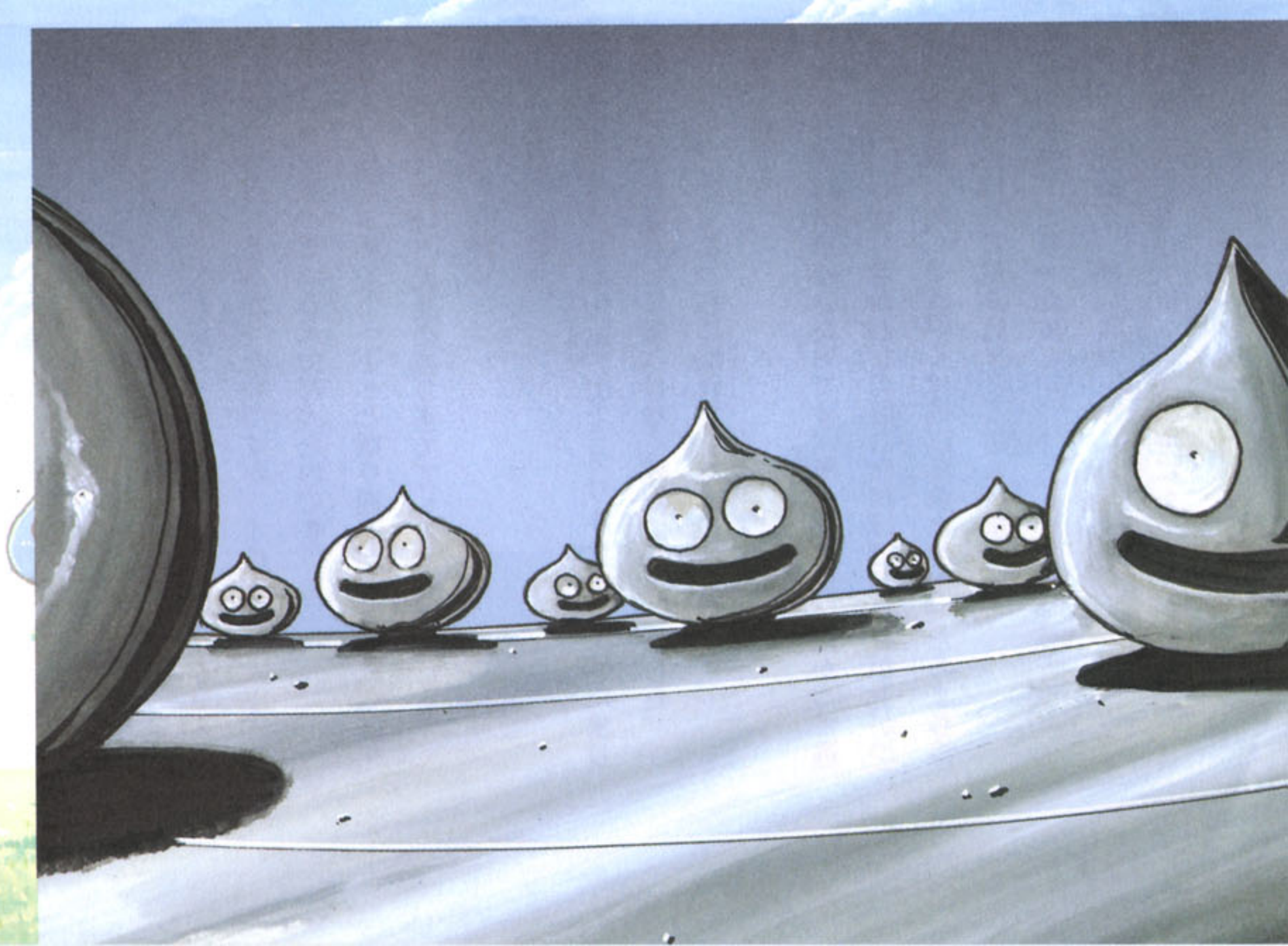
慌てたのはスライムたちです。懸命に出口に向かって逃げました。しかし身かわしの服のおかげで素早さが上がっているとはいえ、そう早くは逃げられません。たちまち溶けた金属の流れに飲み込まれてしまいました。

「アチチチ、こりゃたまらん」

「ヒー、死ぬ！　熱いよォ」

スライムたちは大慌てで服の中にもぐりました。

スッポリ全身が入ってしまったのです。
みかわしの服のおかげで熱をしゃだんし、なんとか死なずにすんだようです。
やがて流れ出たミスリルは冷えて固まりました。洞窟の床がまるで鏡を張ったように光っています。そしてその所々に、ポコッと出っぱった部分がたくさんありました。
スライムたちです。
彼らもいっしょに固まってしまったのです。
「オーイ、みんな大丈夫かァ？」
「こっちは大丈夫だヨー」
「ボクも生きてるゾー」
なんと運の良いことに全員助かったようでした。
「だけど身体が動かないゼ」
「こっちなんか逆立ちしたまんま固まっちまったい」
ひっくり返った一匹が怒鳴りました。
「まってろ、ボクがなんとか……」
ピキピキ……ピキーン。
一番力の強いのが必死で身体をミスリル銀の床からはがします。
「いま助けてあげるからネ」



キーン、体当たりして、次々と仲間の身体をはずしていきます。

こうして他のスライムたちもなんとかミスリル銀の床から離れることができたのです。

「イヤー　みんなきれいになっちゃったナ」

「ホントだ。ピカピカ光ってるゾ」

命拾いしたスライムたちはゾロゾロと洞窟を出て行きました。

「それにしてもビックリしたネ」

「ボクはもうダメかと思ったヨ」

こうして身かわしの服で素早さが上がったスライムたちは、溶けたミスリルを浴びたことで丈夫な皮膚も身につけたのです。彼らの体質は子孫へと伝わり、やがて全く新しいスライム、たぐいまれな素早さと金属の身体を持ったメタルスライムが誕生するのです。

北　強敵との出会い

北に向かった集団は途中、仲間の数を更に増やしていきました。

こちらに進もうと言い出したスライムの考えた通り、広大な草原が続いていたからです。

「やっぱり北へ向かったのは正解だったネ」

「そうともボクの勘に狂いはないサ」

ところが世の中はそれほど甘くはありません。

草食動物、つまりスライムたちのように草を食べる生き物が多いところには必ず彼らを餌(えさ)としているものがいるのです。

「グワオーッ」

突然巨大な魔物が現れました。

鋭い爪と大きな牙(きば)を持つサーベルタイガーです。

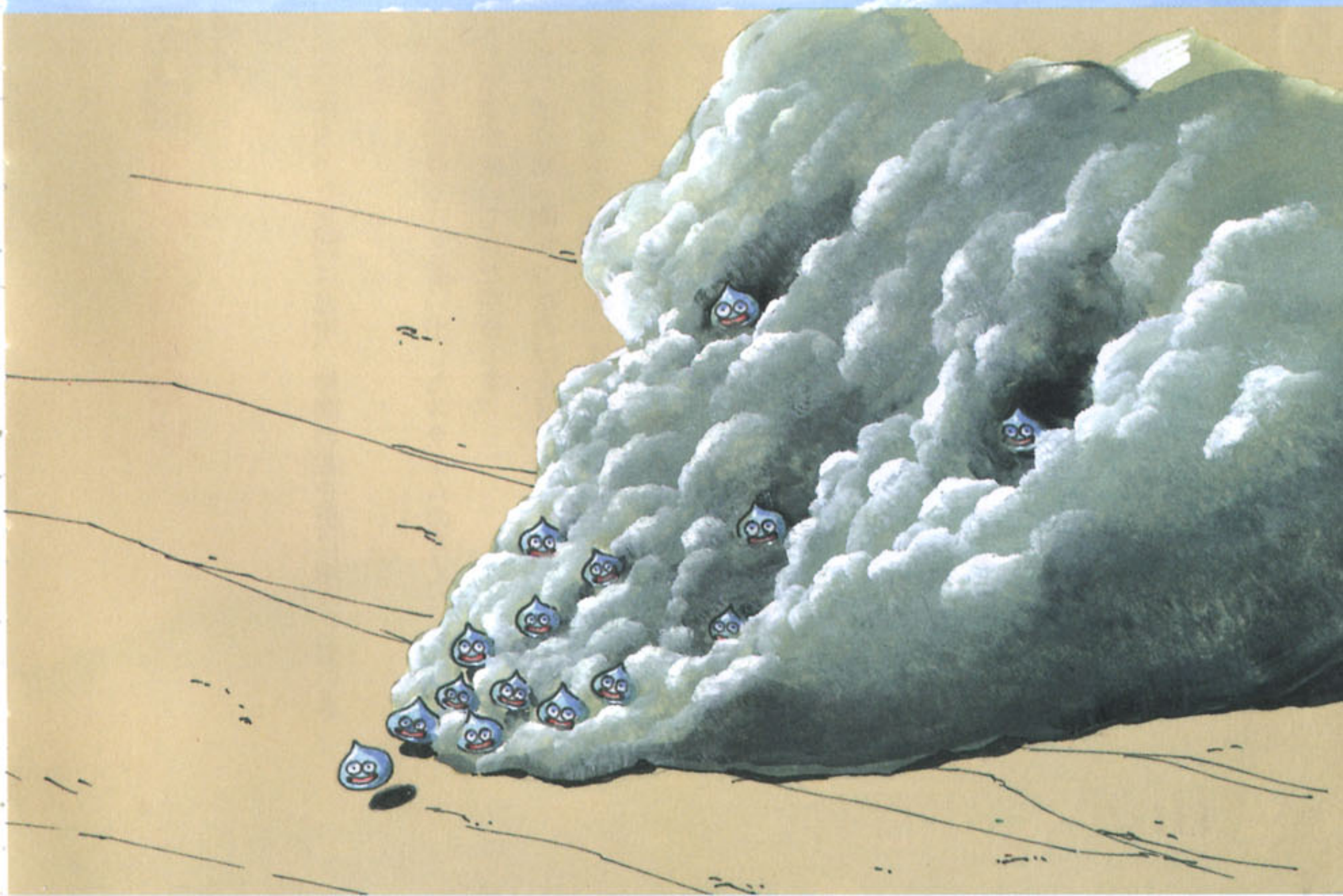
「キャー、かみつかれた！」

「助けてくれっ！」

「ボクたちの方が数が多いんだ。怖がるコトなんかないゾ」

何匹かが必死に体勢を立てなおそうとしましたが、いっ

たんパニックを起こしたら収拾がつきません。
「だめだコリャ」
「しょうがない、こうなったら逃げよう」
スライムの群れは懸命に走りました。
やがて広大な草原も終わりました。
行く手には赤土の大地が続いています。
「あっちはひどい所みたいだネ」
「やっぱり戻ろうか？」
でも雌や子どもたちはすっかりおびえてしまって動こうとはしません。
生まれて初めて凶悪な魔物に襲われたのが、よほどショックだったのでしょう。
「ともかくこのまま北へ進もう」
草原に戻ることをあきらめたスライムたちは荒れ地を北へと向かいました。
しかしどこまで行っても食べ物の豊富な場所は見つかりませんでした。
群れの動きがだんだんと遅くなっていきます。
「みんな元気を出すんダ！　この先にはきっと素晴らしい土地があるに違いない」



「きっとそうだ。みんな急ごう」
誰かがそう言ったのをきっかけに集団の移動速度が上がりました。
最初は少し早足になった程度でしたが、やがて全員が走り出します。
もう移動なんて呼べるスピードではありません。
暴走です。
空腹と過密状態でストレスのたまったスライムたちは、すさまじい速さで走り始めました。
小さな池は彼らが通った後、小さなくぼみに変わりました。
水は、全部スライムが飲んでしまったからです。
ほんのわずかに生えた草はアッと言う間に食べつくされ、小さな草原は小さな砂漠に変わりました。
途中、強い魔物の住む土地も通りましたが、スライムたちの中に誰も犠牲者はでませんでした。
暴走集団のあまりの勢いにみんな恐れをなしたのです。
「遠くから何か来る」
ヤリを手にした二人連れがスライムの大群を発見しました。

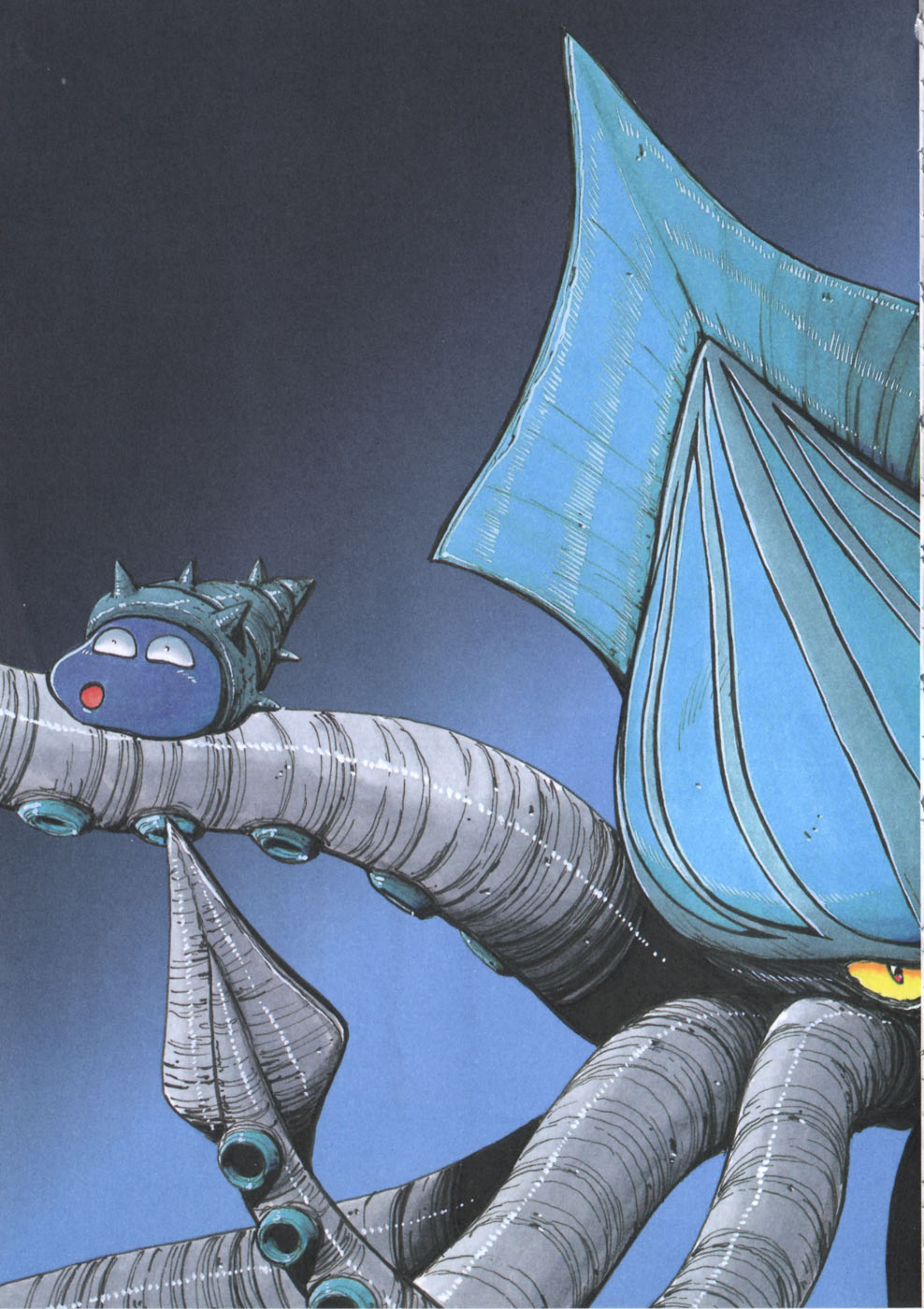
近くの村の狩人(かりゅうど)のようです。
「アレ水色の生き物、弱い。石ぶつけると逃げる。心配ない」
「でもすごい数。とてもたくさん」
「水色の生き物たくさん来る。石たくさんぶつける。心配ない」
ドドドドッ
かわいそうに狩人は踏みつぶされてしまいました。
こうして何十日もの間、スライムの集団は走り続けたのです。
「オ、オイ！　止まれ。前にはもう地面がないゾ」
先頭を行く何匹かがあわてました。
目の前は切り立った崖(がけ)になっていたのです。
「そ、そんな無理を言われても、後ろからドンドン来るんだから無理だよオ」
「押さないでくれ！　落ちる。落っこっちゃうヨー」
ドドドドッ！
ドボーン！
押しあいへしあい、とうとうスライムたちは崖から下へ、海の中へと落ちて行きました。

「ウワーッ」
「グブグブ、く、苦しい……」
運の悪い何匹かがたちまち溺れ死んでしまいました。
「た、助けてくれ。ボクは泳げないんだ」
「ワタシだって水の中へ入るの初めてだモン」
なんとか海面に浮かび上がったスライムたちも、いっぱい塩水を飲んでうめいています。
「ボクのヒイおじいさんは泳ぎがうまかったらしいがなア」
「アタイのヒイヒイおばあさんだって湖の中で暮らしていたのよ」
陸上に適応して何世代も経ったスライム族は、泳ぎをすっかり忘れていたのです。
かわいそうに北へ旅立ったスライムの半分以上が、このとき死んでしまったのです。
しかし集団の数は半端なモノではありません。
しぶとく泳ぎを覚えたスライムもかなりいたのです。
「ああ、陸に戻りたいなァ……」
「あの崖を登るなんてとても無理だヨ」
「しょうがない。こうなったらご先祖様のように水の中で暮らそうヨ」
こうしてスライムたちはなんとか海で生活を始めたのです。
そして崖から落ちて三日目には新しい世代が誕生しました。
「見てアナタ、子どもたちったら泳ぐのがとっても上手ヨ」
「ホントだ、たいしたモンだなア」
新しい世代は完全に海の生活に適応したのです。
海草やプランクトン、そして小魚が彼らの新しい食べ物になったのです。
「ここも住んでみればイイトコだネ」
「そうだネ」
しかし海にも凶暴な生き物はいたのです。
「ナ、ナンだ、あのでっかいハサミのある魔物は？」
「今日一日だけで仲間が百匹も食べられちゃったゾ」
この海域にスライムがいることを知ったガニラスの群れが襲って来たのでした。
「あいつら飯どきになるとやってくるネ」
「きっとボクたちを主食にする気なんダ」
「ウーン、せめてオヤツぐらいにしてくれないと」

のんきなコトを言っている間にも仲間がドンドン食べられていきます。
「坊やそんなトコで遊んでると恐いカニに食べられちゃうわヨ」
「平気だい！　あいつが来たら貝殻の中に隠れるモン」
「貝殻！」
「うん、あっちの珊瑚礁にいっぱい落っこってるんダ。いまキレイな貝殻に入って歩くのがはやってるんだヨ」
スライムの子どもたちは持主のいない巻貝に入って、ガニラスの目を逃れることを考えついたのでした。
そして大人のスライムたちも段々この方法を真似するようになっていったのです。
「どうだい。ボクの見つけてきた貝、すてきだろ」
「ボクの方が大きくってかっこいいぞ」
そんなことをしている内、最初から殻を背負った赤ちゃんスライムが生まれ始めました。
小魚やプランクトンといったカルシウムの豊富な餌が原因のようです。
「なかなか用意のイイ赤ちゃんだネ、最初から殻をしょってるヨ」
「ほんとダ。それにこの殻はヘタな貝よりずっと丈夫そうだヨ」
こうして海中生活に適応したスライム。
マリンスライムの第一世代が誕生したのです。
「これで、もうでっかいカニに襲われても大丈夫だネ」
「そうとも。あんなハサミもう恐くないサ」
数の増えたマリンスライムの一部がさらに深い場所へと移動して行きました。
しかしここにはガニラス以上に手ごわい相手がいたのです。
「ヒエー！　なんだあの足オバケは？」
「あのでっかいカニより強そう!!」
今度襲って来たのは大イカ族の大王イカでした。
ガニラスよりずっと力のある大王イカが相手では、マリンスライムの硬い殻も役に立たなかったのです。
「なんてことだ、せっかく新しい場所を見つけたのに、あのイカのオバケのせいで仲間が半分になっちゃったゾ」
「このままじゃ全滅だァ」
マリンスライムたちはなんとか敵の目を逃れようと頑張りましたが、ガニラスと違い動きの素早い大王イカが相手

ではうまくいきません。
「グワォーッ！」
「ヒエーッ！　またあいつだ。みんな早く逃げろっ」
大人たちは素早く砂にもぐったり海草のしげみに隠れました。
したが、子供が一匹逃げ遅れてしまいました。
「坊やあぶないっ」
「早く隠れろっ！」
子供は必死で大王イカから逃れようと泳ぎました。
けれどスピードが違いすぎます。
とうとう追いつかれてしまいました。
後ろは珊瑚の森です。
トゲトゲがたくさん生えていてとても中には入れません。
「あーっもうダメだ」
遠くから見ていた大人たちは思わず目を閉じて祈りました。

「あの子の身体(からだ)がウーンと丈夫でありますよう」
「イカが心臓マヒで死にますように」
ともかくみんな一心に子どものマリンスライムが助かるよう念じたのです。
もちろん本人も必死で祈っていました。
もう祈るしか方法がなかったのです。
「こんなとき岩みたいに硬いカラがあったらなア。ボクのカラ、うんと強くなれっ！」
マリンスライム全員の思念が子供に集まります。
そのとき、大きいイカの吸盤のついた触手が振り下ろされました。
バチーン！
普通なら即死している力です。
マリンスライムの子どもは、ポーンと飛ばされてしまいました。



ところが命に別状はなかったのです。
かなりの衝撃を受けましたが、意識ははっきりしています。
「アレ？　ヘンだな……」
考えている場合ではありません。
獲物がまだ生きているのを知った大王イカが近づいてきます。
「坊や、いまのうちに逃げるんダ！」
大人たちの声に、マリンスライムの子供は急いで砂の中に潜りました。
大王イカはしばらく回りをうろついていましたが、やがてあきらめ、帰って行きました。
「よくまあ無事だったネ」
「いったい何が起こったんだい？」
大人たちは口々に尋ねました。
「わかんない。ただカラが丈夫になりますようにってお祈りしただけなんだけど」
「そういえばボクたちも一心に祈ったね。きっと、その思いが神さまに通じたんだ」
こうしてマリンスライムたちは思念で守備力をアップさせることを覚えたのです。

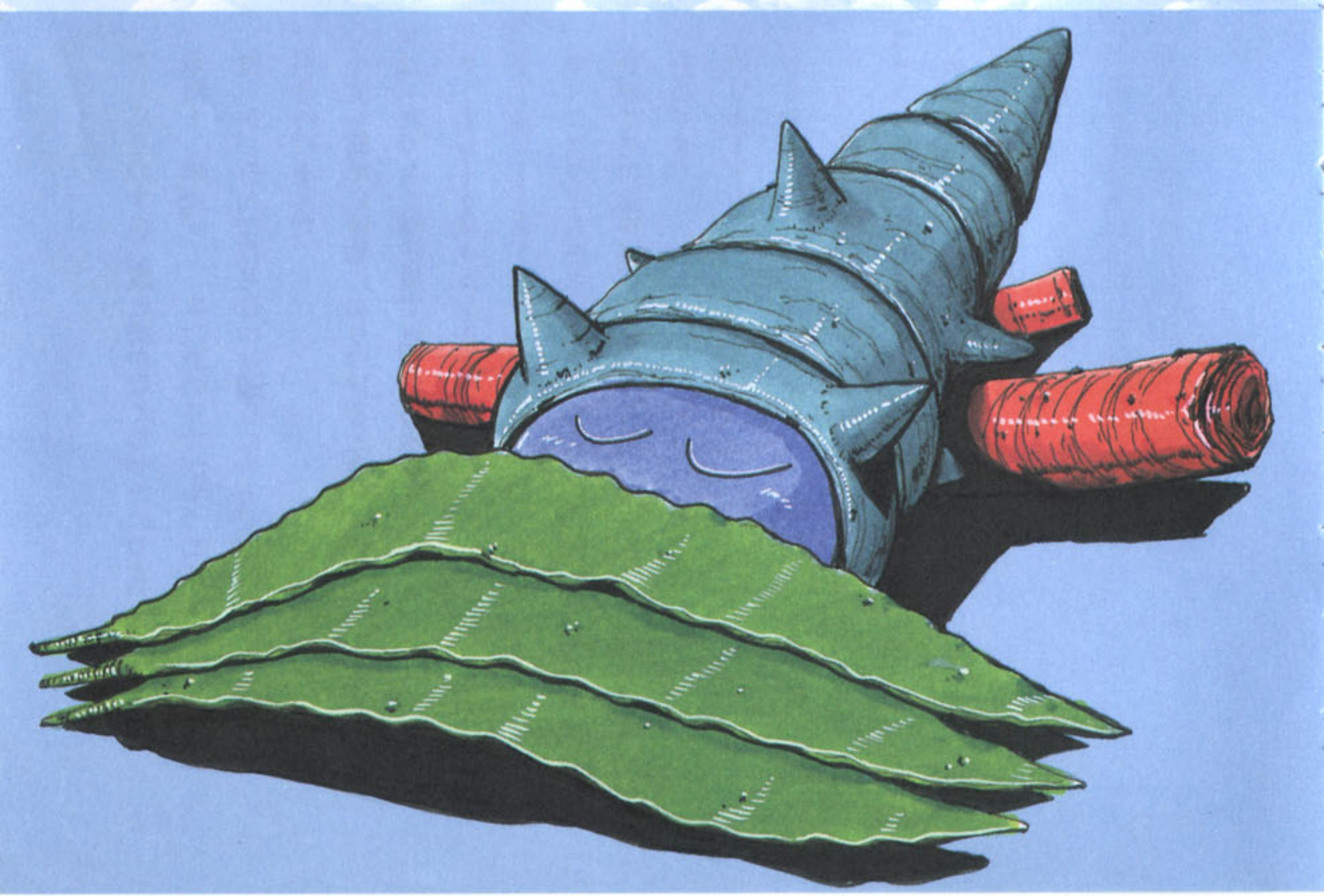
後(のち)にスクルトと呼ばれる呪文の始まりでした。
大王イカの脅威をスクルトの呪文で切り抜けたマリンスライムたちは、その後さらに数を増やしていきました。
やがて新しい場所もマリンスライムでいっぱいになってしまいました。
若いマリンスライムたちは考え、大人たちに提案しました。
「僕たち群れを離れるヨ。このままじゃまた食べ物がなくなっちゃう」
「ナニを言う、ワシら経験豊富な大人が旅に出る」
「じいちゃん。
そういうのを年寄りの冷や水って言うんだヨ」
「ナニをこの青二才！」
「ママアア、おじいさん。
ここはひとつ彼らの言うことを聞いて」
「イヤじゃ。ワシは絶対に旅に出る」
結局、若いマリンスライムの半数が群れを離れることになりました。
そして最後までついて行くと言い張っていた老スライムが相談役という形で参加したのです。
「だんだん深い場所に来たネ」

「アア、少し息が苦しくなってきたヨ」
「でもこの辺りの方が前いた場所よりエサがたくさんあるヨ」
マリンスライムたちはちょっぴり強くなった水圧にはすぐになれました。
そして新しい場所で生活を始めたのです。
前よりずっとカルシウムの多い食事をするようになった彼らの殻はとても丈夫になりました。
普通の魚に狙われたぐらいなら、スクルトの呪文も必要ありません。
しかしこの海域には、ガニラスや大王イカよりもっと恐ろしい敵がいたのです。
「アレッ？　なんか来たソ」
遠くからすごいスピードで泳いで来たのは人魚族の怪物、マーマンでした。
「スクルトッ！」
一番近いところにいた何匹かが久しぶりに守備力をあげる呪文を唱えました。
ところが……
「ルカナンッ！」

「アリャリャ？」
せっかく上げた守備力をマーマンのルカナンの呪文で下げられて、マリンスライムはたちまち餌食にされてしまったのです。
「ここはワシにまかせておまえたちは逃げるんじゃ」
そう言って前に出たのは無理やりこの集団に加わったあの老スライムでした。
「じいちゃん。どうした？」
「ボケが来たかな」
「うるさい！　ワシはずっとスクルトの呪文を攻撃に応用する方法を考えていたのじゃ」
そう言うなり老スライムはマーマンの前に出ました。
じっと目をつぶって念をこらします。
「ヒャド！」
ピキーン！
どうやら老人の考えた呪文は、温度を下げる力があるようです。
マーマンの周囲の海水が、凍りつき始めました。
「オイ、ボクたちもやってみよう」
「ヨーシ、ヒャド！」

「ヒャド」
ヒャドの連発にたまりかねたマーマンは逃げ出しました。
「やったゾ、おじいちゃん、すごい」
「いまごろおだてても遅いワイ」
こうして攻撃と防御、二つの呪文を使えるようになったマリンスライムは、前にも増してその数を増やして行きました。
ところがそれからしばらくして……
「ン？　なんだかまたでっかいヤツが来たゾ」
「ナーニ、ボクたちにはヒャドの呪文があるサ」
「イカだ！　あのイカの化物だ」
マリンスライムたちはいっせいにヒャドを唱(とな)えました。
ところが今度の相手にはまったく効果がありません。
そいつは大王イカよりずっと大きくて強い魔物、テンタクルスだったのです。
「ウワワッ!?　ヒャドがきかないゾ」
「しょうがない、スクルトで防御力を上げよう」
「ボクしばらく使わなかったんで忘れちゃったヨ」
ヒャドが全くきかないテンタクルスは、アッという間にマリンスライムたちに襲いかかりました。
「グエッ！」
「ぎゃっ！」
「助けてくれーッ！」
数百匹が餌食となり、満腹になったテンタクルスは意気揚々(ようよう)と引き上げて行きます。
「とんでもナイことになっちゃった」
「マリンスライム族最大の危機ダ」
主だったマリンスライムたちは緊急会議を開きました。
「だいたい、しばらく使わなかったからって、スクルトを忘れちゃうとは情けナイ」
「イヤイヤ、たとえスクルトが使えたって、アイツの力じゃ意味がないだろう」
「やはりここは引っ越しするしかないかも」
「新しい呪文を考えようよ。パルプンテとか」
いろんな意見が出ますが、ちっともまとまりません。
「バカモン！　おまえらソレでも名誉あるスライムの一族か！」
突然怒鳴ったのはヒャドを最初に使ったあの老スライムでした。
彼は以来ずっと具合が悪くて、巣の中でジッとしていた

のでした。
どうやらもう長くはないようです。
ポカンとしている仲間たちをにらみつけると老スライムは、ゆっくりと話し始めました。
「よいか、思い起こせば幾年月。我ら一族が故郷の草原を離れて以来、様々な苦難に出会ってきた。だが、一度としてあきらめたりしたことはなかったのじゃ。イヤイヤ、もしご先祖様が一度でもあきらめたりしていれば、ワシらの今日はなかったはずじゃ」
シーンとして聞き入っている仲間の顔を見ながら、老人は話しを続けます。
「もとよりワシら一族は非力じゃ。力で敵を倒すなど思いもよらん。それに相手がアノ図体(ずうたい)ではヒャド以上の攻撃呪文を覚えたとしてもさして効き目はあるまい」
「だったらいったいどうすれば……」
「だから考えろと言っておるんじゃ。本来スライム族は温和な生き物じゃ。相手を殺したり傷つけたりする必要はあるまい。ようはこっちが無事ならソレで良いはずじゃろう？」
「そりゃまア、確かに」



「なにも、あのイカを反対に食べちゃおうってんじゃないんですから」
「耳をすませてみればよい。こうしてる間にも新しい命は育っているんじゃゾ」
聞こえてきたのは、珊瑚礁の影で子供たちを寝かしつけているおかあさんスライムの声です。
「おやすみ坊や〜〜〜〜、おやすみ嬢ちゃん〜〜〜、珊瑚のまくらにワカメのフトン。お目々が覚めたらオヤツをあげよ」
「そうか！　分かったゾ。ヤツを、あのイカを眠らせちゃえばいいんだ」
若いマリンスライムが勢いよく言いました。
「そうじゃ。ワシはおまえたちにそのことに気づいてほしかったんじゃ。ワシらスライム族の最大の武器は、旺盛な繁殖力とおのれの望む能力を必ず手に入れる素晴らしい適応性じゃ」
老スライムは満足そうに言いました。
「サア、後の工夫はおまえたちの仕事じゃ。ワシはもう休む、しばらくぶりに長話をしたら疲れたワイ」
そう言うと老スライムはゆっくりと目を閉じました。

そしてそのまま二度と動かなくなったのです。
「来た！　来たゾ！　またあのイカがやってきた」
「ヨーシ、みんな打ち合わせ通りにやるぞ。引き付けるだけ引き付けるんだ」
今度も簡単に獲物にありつけると考えていたテンタクルスは、まったく無防備で近づいて来ます。
「ネ〜ムレ〜〜〜ネ〜ムレ〜〜〜」
「ネ〜ムレ〜〜〜ネ〜ムレ〜〜〜」
マリンスライムたちは声をそろえて歌い始めました。
やがてその歌声は、言葉から新しい呪文へと変化して行ったのです。
「ラリホ〜〜〜」
「ラリホ〜〜〜」
フッと動きを止めたテンタクルスの身体が、前後左右にユラユラとゆれだしました。
やがて巨大な魔物はスヤスヤと眠ってしまったのです。
「やった！　これでもう安心だ」
「でもコイツどうするんだ？」
「このままじゃいつか目を覚ましちゃうヨ」
「ヨーシ　ボクが……」

元気の良いのが一匹、テンタクルスの周りをすごい勢いで泳ぎまわりました。
「どうだい、足をみんな縛ってやったゾ」
「コレで動けないネ」
こんなことが何度か続くと、さすがのテンタクルスもマリンスライムを襲わなくなりました。
こうしてまたラリホーの使える新しいスライム。
スライムつむりが誕生したのです。
マリンスライムとスライムつむりはその後もドンドン数を増やし、世界中の海に広がって行きました。

モンスターワンポイントレッスン その5

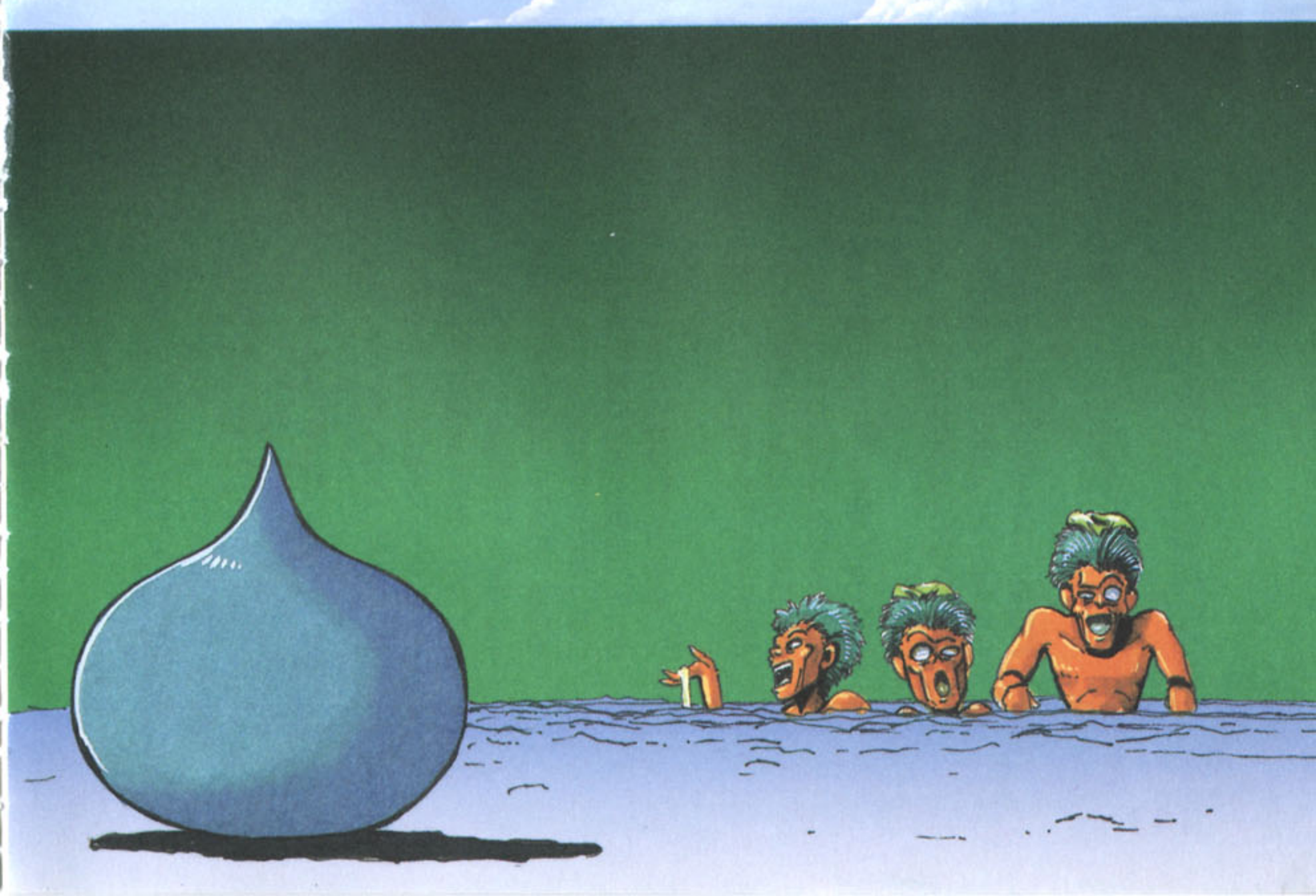
はぐれメタルとまだらくもいと

アレフガルドを旅していると、はぐれメタルの群生地に出くわすことがあります。
彼らは決して凶暴な魔物ではありませんが、縄張り意識が大変強く、運が悪いとギラの一勢攻撃を受けてしまいます。火炎系、電撃系、そして冷気系とほとんどの呪文が効果がないので、熟練した武闘家か高位の魔法使いでもいないと、撃退するにはかなり苦労するでしょう。
そのうえはぐれメタルはやられそうになると、とんでもない素早さで逃げてしまいます。
彼らが隠し持っている貴重な品物目当てに戦って、悔しい思いをした人も多いのではないでしょうか。
そんなとき、旅慣れた冒険者はまだらくもいとを使うのです。コレを投げつければさすがのはぐれメタルも素早さが下がり、自由に動くことが出来ません。
ぜひ一度試してごらんなさい。

東

毒の沼地そして天界へ……

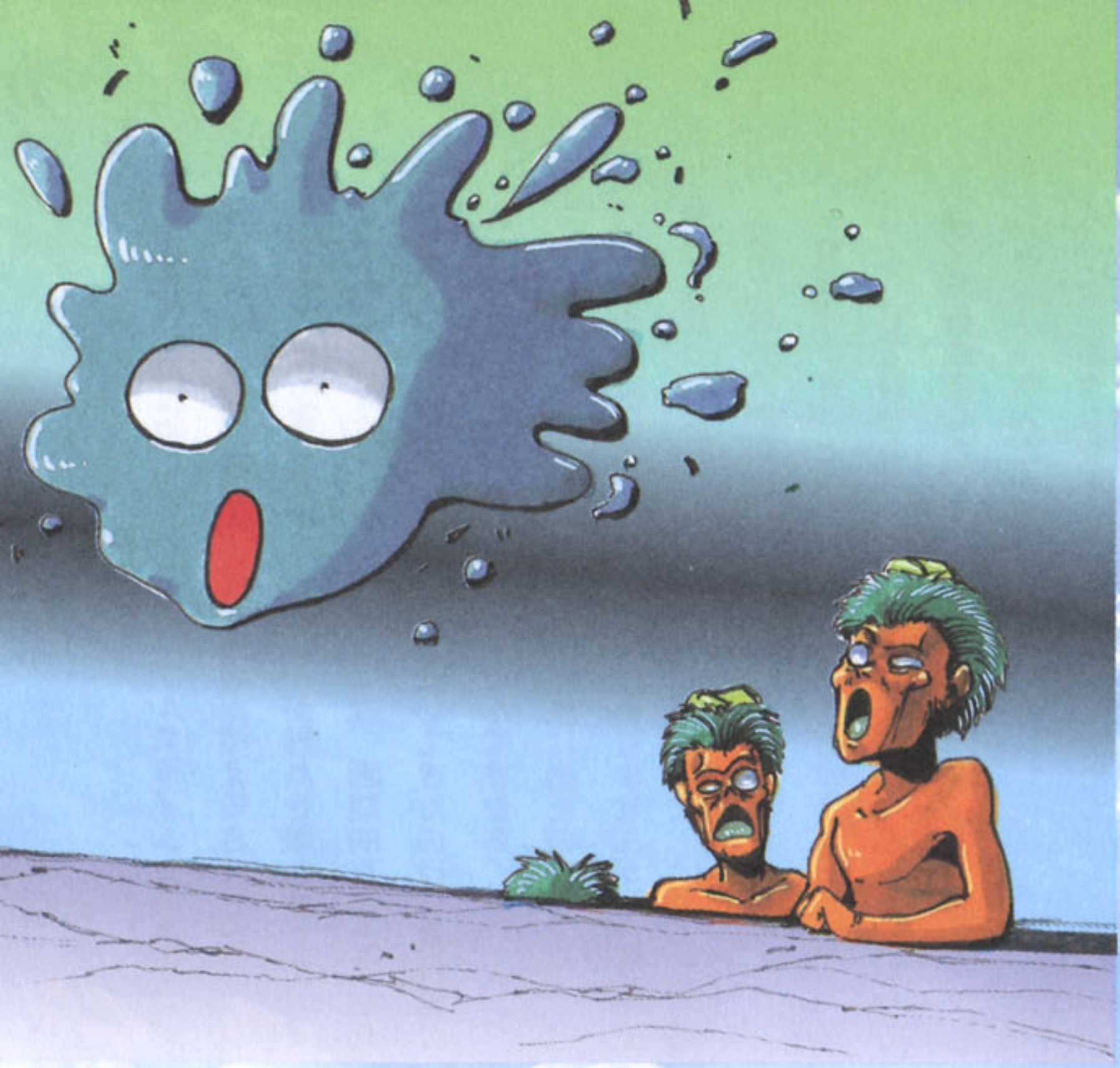
東に向かったのは四つの中で一番小さな集団でした。
どうも東の方は雰囲気が良くなかったからです。
遙(はる)か彼方には険しい山々がそびえ、不気味な黒雲が立ちこめています。
山はモクモクと煙を吐き出しています。
真っ黒な地面は岩のように堅く、草は一本も見あたりません。
あるのは灰色の枯れ木だけです。
もちろん葉っぱなんかありません。
「やっぱし引き返そうヨ。とても暮らせる場所じゃないヨ」
「ここまで来て後戻りはできないヨ」
「そうさ。ナーニ、先の方へ行けばきっといい場所がみつかるサ」
ところが進むにつれて状況は悪くなる一方でした。
「ネエ？　なんか変な臭いがしない？」
「そういえばボクもさっきから気になってたんだ」
スライムたちは臭いのする方へ進んで行きました。



やがてブクブクと泡立つ緑色の沼地が見えて来ました。
「だ、誰か沼の中にいるヨ」
驚いたことに沼には三匹の魔物がつかっていたのです。
「イイ湯だな、ハハン」
歌を歌っています。
「アノー、ソコで何をしているんですか？」
一匹のスライムが沼の中の魔物に尋ねました。
「ナニって……オレたちのことかい？」
ドンヨリとした目を向けたのは腐った死体でした。
「ソコってもしかして毒の沼地じゃないんですか？」
「毒？　ココが……？」
どうも頭があんまり良くないようです。
「ココに入っているとなァ……」
腐った死体は口をモゴモゴさせて言葉をさがしています。
「つまり、ココに入っているとなァ……」
「だからソン中に入ってるとどうなるんですか？」
一匹がシビレを切らして怒鳴りました。
しかし相手は相変わらずのんびりと考えています。
「なんだなァ、ココに入ってると身体が丈夫になるんだなァ」

「ソイデ、なんか新しい力もつくって話なんだなァ」
どうやらナニかしら良いコトがあるようです。
「ズッとそこにいるんですか？」
「んだァ、かれこれ十日は入ってるかなァ」
腐った死体は頭に乗せたボロボロのきれで顔をふきながら答えました。
「十日？」
「そんなに長いあいだナンにも食べないで？」
「お腹へらないの？」
「ボクたちここにいれば腹減らない」
腐った死体は沼の水で顔をあらいながら言いました。
「お腹が減らないって？」
「てことは食事をしなくてイイんだ！」
「ボク入ろっと！」
一匹が飛び込みました。
「あたしも」
「待て、ボクが先！」
ドボン、ドボン
スライムたちは我先に沼に飛び込みました。
ところが……

「ゲゲッ！　気持ちが悪い」
「この沼のドコが身体にいいんだヨ？」
お腹が減らなくなるなんてことはありませんでしたが、その代わりに食欲が全くなくなりました。
実はここは本当に毒の沼だったのです。腐った死体は毒々ゾンビになるために入っていたのでした。
「ネェ、全然いいことなんかないじゃない」
「そうだヨ、ボクなんだか身体が溶けてきたような気がする」
スライムたちは腐った死体をにらみました。
「ンなコト言うたって、おまえらまだ沼の毒エキスをちゃんと吸い込んでないからいけねえんだヨ。しっかり鼻から吸い込んで胸に溜めてみい」
深呼吸をしろと言われてもスライムには鼻がありません。しょうがないので腹式呼吸で、口から沼の毒気を吸い込みます。
「ウー、ますます気分が悪くなってきた」
「吐き気がするっ」
みんなフラフラです。
「マダマダ、そんなモンじゃ駄目だァ、もっといっぱい吸い込まにゃ効き目がないゾ」
腐った死体はスーハーと息をしてみせます。
別にスライムたちをだますつもりではないのです。
彼らは本当にココが身体にいいと信じているのでした。
「ウウウッ、く、苦しいっ！」
真似をしたスライムがお腹をパンパンに膨らませてうめきました。
そして次の瞬間……
パーン！
なんと、スライムの身体が弾けてしまったのです。
毒気で弱くなっていた皮膚が、吸い込んだ空気の圧力で裂けてしまったのです。
パーン！　パーン！
続けざまにまわりのスライムも破裂してしまいます。腐った死体はドンヨリとした目をむいてながめていました。
「なんとまぁ情ない連中だー」
責任なんてモノは少しも感じていません。やはり頭まで腐った相手の言うことを聞くべきではなかったのです。
しかし身体が弾けてもスライムたちは死にませんでした。
すっかり平べったくなった姿のまま生きていたのです。



「フーン、コイツら根性あるんだなァ」
腐った死体が感心して言いました。
「どうなったんだ、ボクたち？」
「身体が破裂したみたいだけど……」
「ヒエー、みんなひどいカッコになっちゃってるよ」

「形だけじゃないゾ、色までヘンテコな緑色ダ」
しゃべるたんびに身体から毒の水が飛び散ります。
「だけどさっきまでと違って苦しくないや」
「ホントだ！　なんか調子いいや」
こうしてまた新しいスライム、バブルスライムが誕生したのです。
毒の沼地に適応した彼らは、その後この場所で暮らし始めました。
食料は沼のほとりに育つ毒の苔（こけ）です。
そして新しい一族は順調に数を増やしていきました。
なんと言ってもこんな場所ですので、バブルスライムを餌（えさ）にするような敵は全くいないのです。
「ここの苔も食べあきちゃったナ」
「贅沢（ぜいたく）いうなよ。食べ物があるだけでも幸せじゃないか」
「そうだヨ。パパやママはここまで来る間にずいぶんひもじい思いをしたって言うヨ」
ここへ来てから生まれたバブルスライムたちには、旅の苦労が分かるはずもありません。
「ボク、冒険の旅に出たいナ」
「アタシも行きたい」

平凡な毎日に退屈した若いバブルスライムたちの中に、だんだんと冒険の旅に出たがる者が増えてきました。
そしてとうとうある日、何匹かが群れを離れました。
でもこれはスライム族にとっては、画期的なことでした。
なぜって、いままで彼らが移動してきたのは、食料難というやむをえない事情からだったんですから。
それが今度は純粋な好奇心から旅に出たのです。
姿形や能力が変わったわけではありませんが、コレも立派な進化と言えるかもしれません。
「ボクはあの煙を出している山に行ってみたいナ」
「賛成！　きっと何かおもしろいことがあるヨ」
こうして緑色のバブルスライムたちは、火山に向かって進んで行きました。
「ネエ？　なんだか息苦しくない？」
「ウン、ボクもなんか苦しくなってきた」
「ガマン、ガマン。冒険ってのはつらく苦しいもんなんだよ」
けれど進めば進むほど息苦しくなるのはなぜでしょう？
「なんか身体がだるいなア」
「アタシ、もう動けない」

毒の沼地にすっかり適応したバブルスライムは、きれいな空気の中では生きられなくなっていたのです。
「みんな、あそこに沼があるヨ」
先頭を進んでいた一匹が嬉しそうに叫びました。
前の沼地に比べればずっと小さいけれど、やはり緑色の沼でした。
「ワーイ、これで一息つけるゾ」
バブルスライムたちは先をあらそうように沼に飛び込みました。
そのときです。
沼の向こうの岩影から誰かが顔をのぞかせました。
「あなたがたは誰？　どうして毒の沼に入っても平気なの？」
声をかけたのは妖精の少女でした。白い衣装の袖で口と鼻を覆いながら沼地に近づいて来ます。
「あのですネ、つまりそのボクらはスライムの一族、バブルスライムって……」
初めて見る妖精の美しさに、一匹がすっかりあがって答えました。
「そうでしたの。スライムに新しい種族が増えているとは

聞いていたけれど、まさか毒の沼地で暮らせるようになっているとは……」

ここに来るまでの事情を聞いた妖精は、そう言うと黙って何事か考えています。

「アノー、何か心配ごとでもあるんですか？」

「ボクらでお役に立てるならナンでも言ってください」

バブルスライムたちが口々に言いました。

「ほんとう？」

妖精は信じられない様子でした。

親切な魔物なんている訳がないと思っていたからです。

「実はさっきその沼の中に大事なものを落としてしまったの……」

「大事なもの？」

「この沼に？」

「そんならボクが……」

言うより早く一匹が沼の底に潜りました。

「あわてんぼうだな。

アイツは何を探すのかも聞かないで行っちゃった」

「落し物って何なんですか？」

妖精が探しているのは小さな金の鏡でした。

修理に出してあったホビットの鍛冶屋から持って帰る途中、この沼に落としてしまったのです。

「あった、あった。大事なモノってコレでしょ？」

上がって来たバブルスライムがくわえていたのは汚い銅のメダルでした。

「ごめんなさい、ソレじゃないんです……」

「……ッタク、もういいヨ。

ボクが探して来る」

「安心してください。

ボクが絶対見つけます」

結局、全員が潜ってしまいました。

「駄目だ！ 見つからない」

「けっこう深いヨ、この沼」

何時間も交代で探しましたが、鏡は見つかりません。

「もうけっこうですワ」

息を切らしているバブルスライムたちを見て、妖精が言いました。

「そうだネ、ボクもう疲れちゃったヨ」

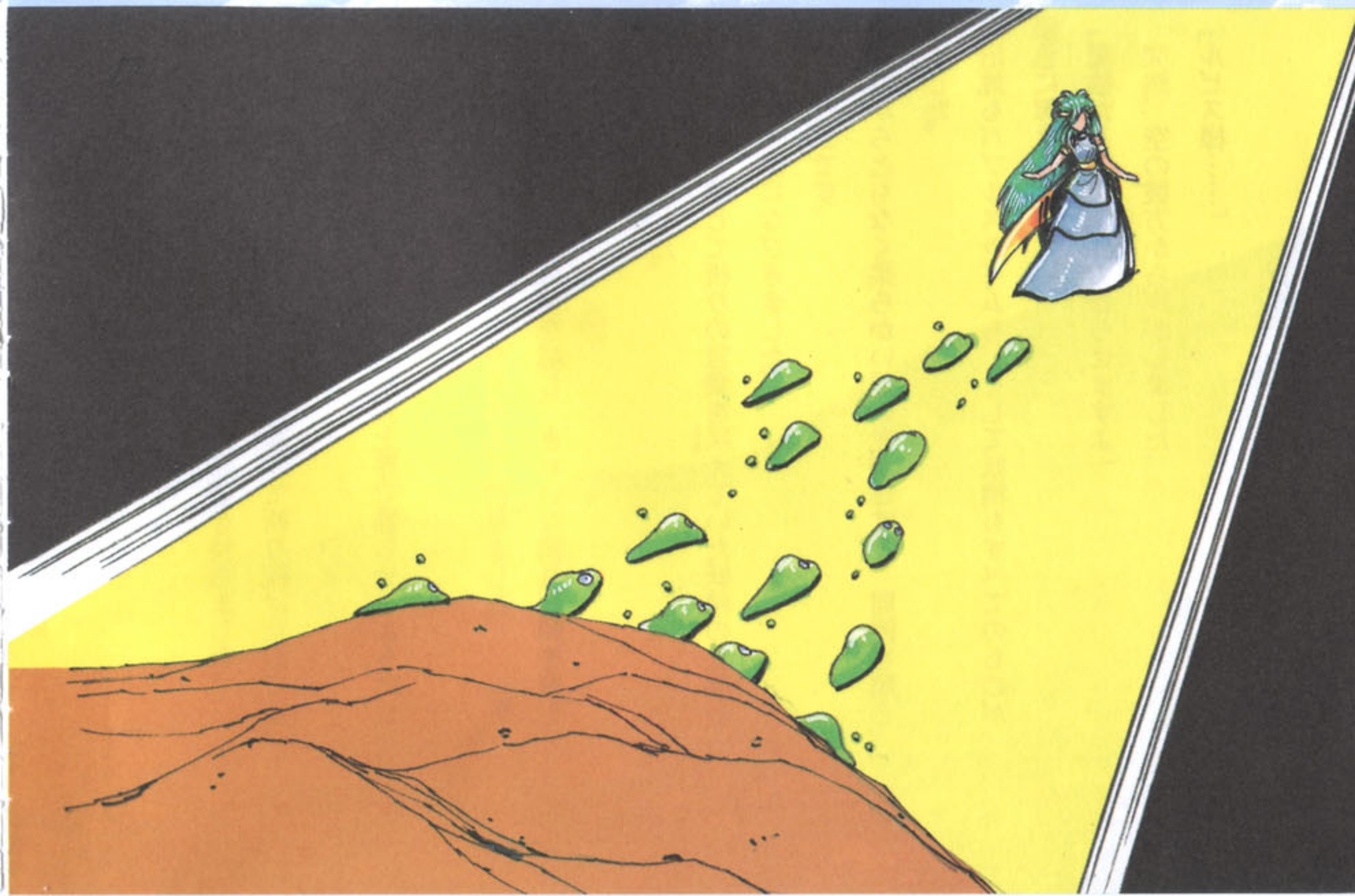
最初に早合点して飛び込んだ一匹がうなずきます。

「でもこのお姉さん困ってるヨ」

「そうだネ、頼まれたコトは最後までやらなくっちゃいけないよネ」
しかし丸一日かかっても誰も鏡を発見出来ません。
みんなほんとうに疲れてきました。
「ヨーシ、今度こそボクが……」
そう言いながらリーダー格の一匹が勢いよく潜りました。
「ボクももう一回行ってみる」
「アタシも」
また全員が飛び込みました。
……今度はみんな、なかなか戻って来ません。
「大丈夫かしら……」
残された妖精が沼をのぞき込みながらつぶやきました。
ここに来たとき頭の上にあった太陽は、もう沈みかけています。
プクプク、泡が立ちました……
ザバン、ザバン、ザバン、
水音とともにバブルスライムたちが顔を出しました。
「ネ？　これでしょ、鏡って」
一匹がしっかりと金の鏡をくわえています。
「そう！　それです。よかったワ」
鏡を受け取った妖精は大喜びです。
「ナニかお礼がしたいんですけど……」
「お礼だなんてとんでもナイ」
「そうですヨ。別にたいしたことした訳じゃないんですから」
「でも、それじゃあんまり……」
妖精はどうしてもお礼がしたいと言いました。
「何か望みがありますか？　わたしに出来ることならなんでもかなえてあげますヨ」
「望みですか……」
今度はバブルスライムたちが考え込んでしまいました。
「それじゃあなたがいる世界について教えてください。ボクらは新しい世界が知りたくて冒険の旅に出たんです」
「そんなことでいいのですか？」
そして妖精は天上界の話をバブルスライムたちに聞かせました。
みんな生まれて初めて知る異世界の暮らしに呆然(ぼうぜん)としています。
「天上界って素晴らしい……」
「ボク、天上界で暮らしてみたい」

「ボクたちを連れてってもらえませんか？」
突然そう言われて妖精もビックリしたようです。
「あなた方をですか……」
考え込んでしまった妖精を見て今度はバブルスライムたちがあわてました。
「イエイエ、無理とは言いません」
「そうですとも。どうせボクら毒の沼地以外では暮らせないんだし……」
「そうよネ、しょせんアタシたちは魔物だから……」
バブルスライムたちは顔を見合わせため息をつきました。
ほんとうはみんな天上界で暮らしたいのです。
でも心の優しいバブルスライムたちは、妖精に無理を言う気にはなれなかったのです。
「アタシには……」
ジッと考えていた妖精は思い詰めた口調で言いました。
「アタシの力ではあなた方を天上界に連れて行くことは出来ません……。でもルビス様にお願いすればもしかして」
「願いを聞いてもらえるんですか？」
「そうです。みなさんの祈る心が一つになれば、きっとルビス様も応(こた)えてくれるかもしれません」
その言葉にバブルスライムたちは希望を持ちました。
みんなで空を見上げると必死になって祈り続けたのです。
「ルビス様、お願いします」
「ルビス様、どうかボクたちを天上界で暮らせるようにしてください」
バブルスライムたちは声をそろえて祈りました。
太陽は地平の彼方に姿を隠し、きれいな満月が顔を出しています。
風が出てきました。
ジッと目を閉じて祈りの言葉を唱(とな)えていた妖精の衣装がヒラヒラと風になびきました。
そのときです。
どこからともなく柔らかい銀の光がさすと、周囲を照らしました。
沼地もバブルスライムも、そして妖精もすべてのものが銀色に輝きます。
「魔物だとて天上界で暮らせますよ」
突然、空の彼方から声がしました。
「ルビス様……」

全員がハッとして空を見上げます。
「あなたがたのように心の優しい者たちなら、わたしは喜んでここへ迎えます」
「ほんとうですか？」
「ほんとうにボクたちが天上界に住めるんですか」
バブルスライムたちは興奮してピョンピョン飛び跳ねました。
「サァ、この光で身を清めるのです」
精霊ルビスの言葉と同時に、またあの光がさしました。
前以上に強い光にみんなあわてて目を閉じます。
銀色の光に照らされたバブルスライムの身体の色は、みるみる変わっていきました。
「レレッ！　ボクたち銀色になっちゃったゾ」
「それになんだか身体が軽くなったみたいだナ」
毒々しい緑色から銀色に変わったバブルスライムたちの身体がフワッと宙に浮きました。
「ウワーッ！　ボクたち空を飛んでるゾ」
一斉に歓声があがります。バブルスライムたちは妖精と一緒に光の中を、天上界へと登っていきました。
これ以後彼らははぐれメタルと名前を変え、精霊ルビス



の神殿の庭で暮らしたのです。

「こうして東西南北の四つの方向へと旅立ったスライムの集団は、様々な困難に打ち勝って、それぞれが新しいスライムとなったんじゃ」

長い長い話を終えたスライムの長老は、フッとため息をつくと言いました。

「すごいなあ、そんなにいっぱい仲間がいるなんて、ボクちっとも知らなかった」

「どうじゃ？　これでもまだスライムが取るに足らん生き物と思うのか？」

長老の言葉に子どものスライムはブンブンと身体を横にふりました。

「とんでもありません！　ボクの考えが間違っていました。これからはボクも仲間やご先祖様に負けないような立派なスライムになります」

「それを聞いてワシも安心じゃ。

さァ、日もだいぶ暮れたようじゃ。お母さんが心配するといかん。そろそろ帰りなさい」

「ハイ。今日はいろいろと教えていただいてありがとうございました」

ペコリと身体を下げて洞窟を出て行く幼い同族を見送って、巨大なスライムは嬉しそうに微笑んでいます。

「彼らの世代になったら、どんなスライムが現れることやら……」

スライムの長老はそう言うと一瞬顔を曇らせました。

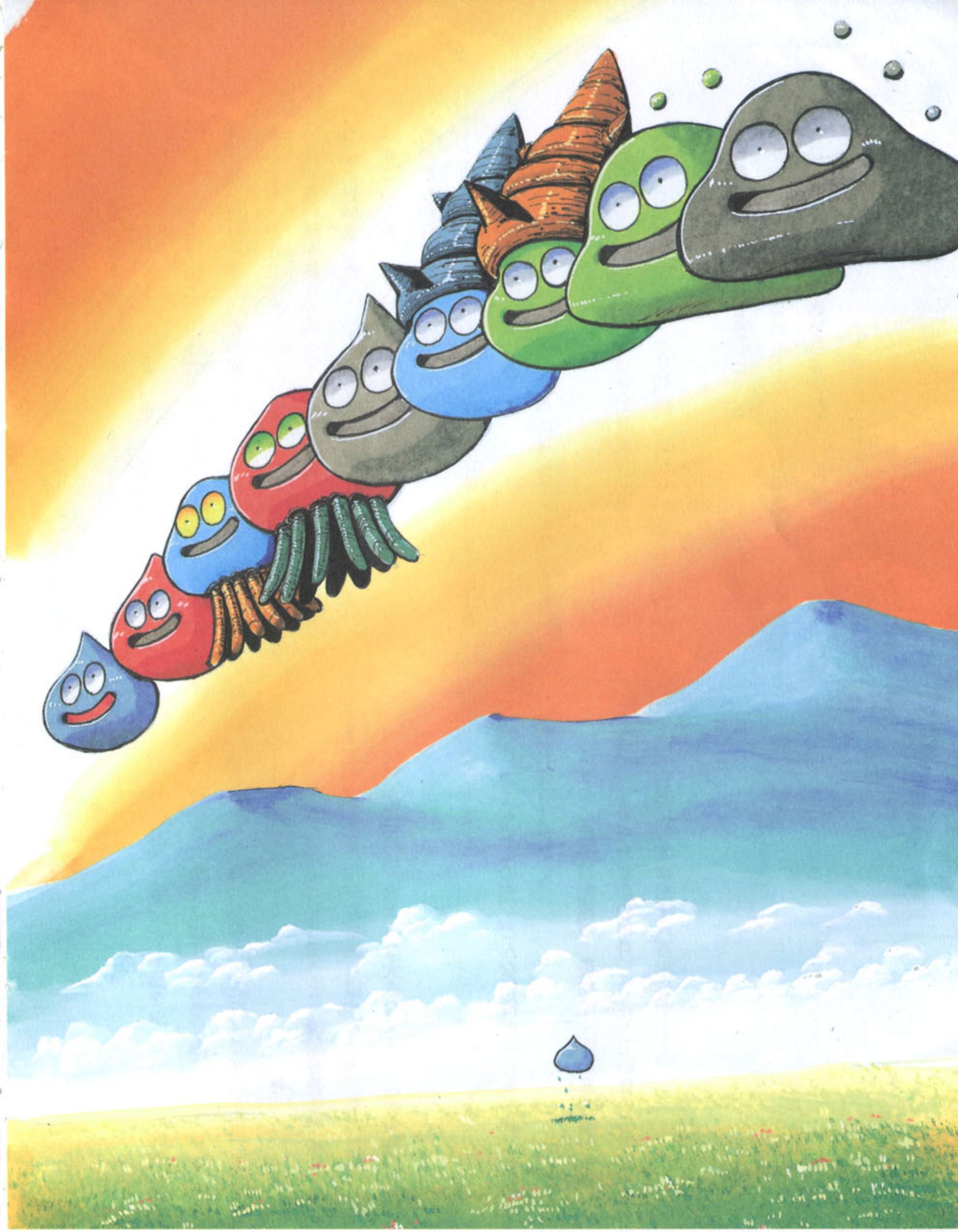
「だが悲しいかなワシは独りぼっちじゃ。もっとも、世界の何処かにはワシのような大きなスライムが大勢いるかも知れんがな」

そうです。

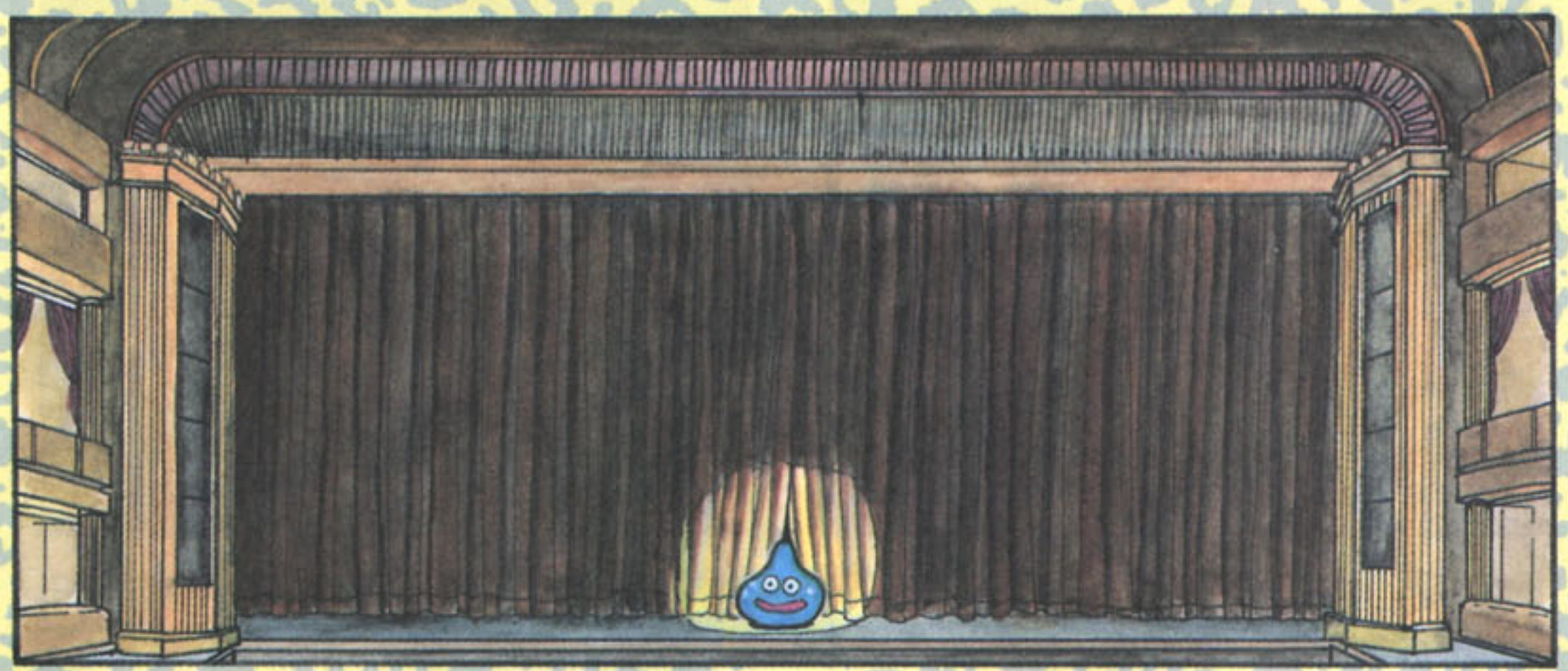
スライムにこの先、どんな新種が現れるか誰にも予想は出来ないはずです。

なぜなら彼等の先祖が、最初の一匹があの湖から地上に上がってまだわずかの年月しか経っていないのですから。

人間の暦にしてまだ千八百年しか……。



アレフガルド小劇場



キャスト

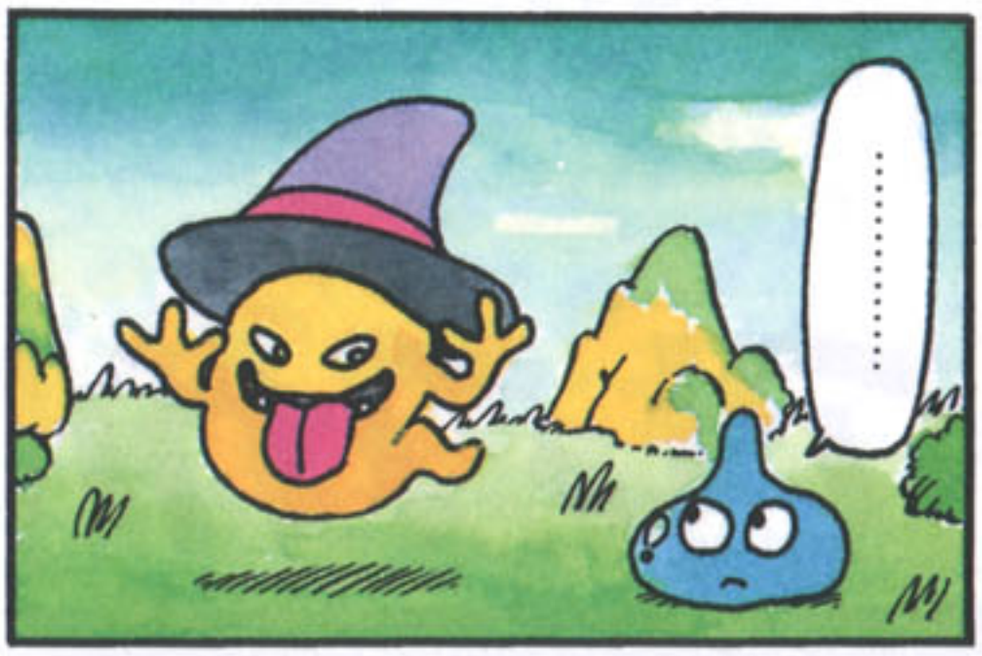
ゴースト
ゴールドマン
ローラ姫
ドロル
アレフ
マドハンド
商人
人面樹
甘い息をはくおじいさん
首狩族
ヒババンゴ
快傑大ねずみ
アークデーモン

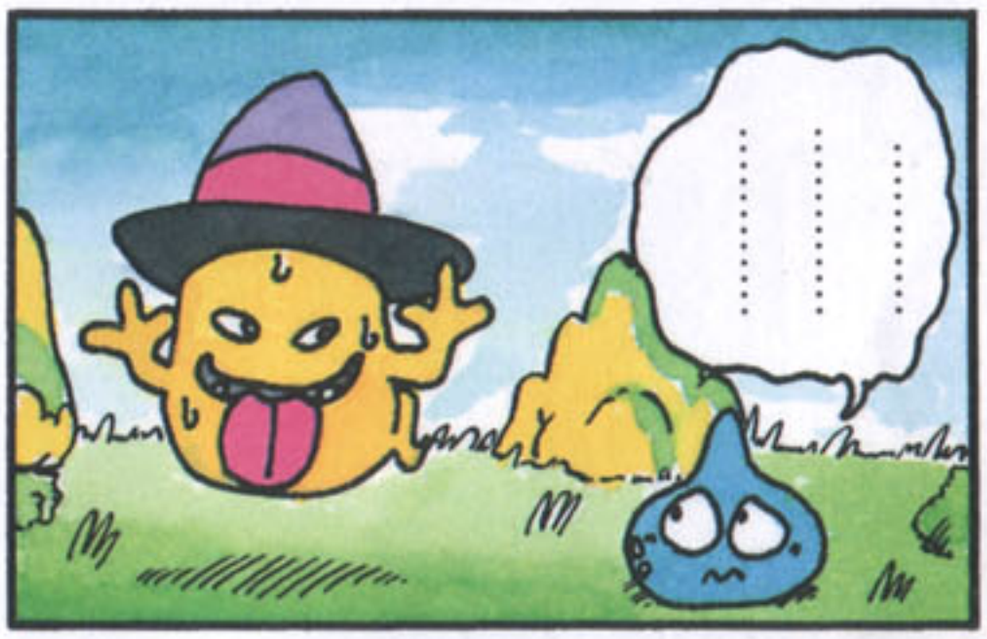
ホイミスライム
ドラキー
ダークアイ
メドーサボール
きとう師
フレイム
ブリザード
ローレシアの王子様
サマルトリアの王子様
ムーンブルクの王女様
スライム
ギガンテス
キラーマシーン

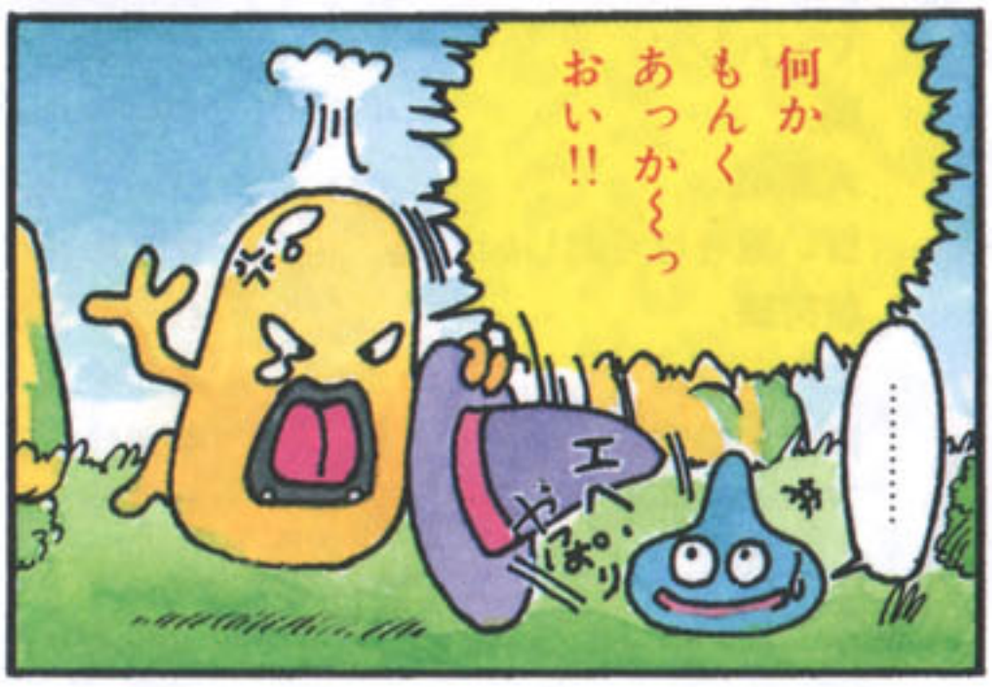
シルバーデビル
鬼面道士
勇者
魔法使い
ミミック
極楽鳥
爆弾岩
ドラゴン
戦士
僧侶
動く石像
賢者
ラダトームのみなさん

監督:栗本和博

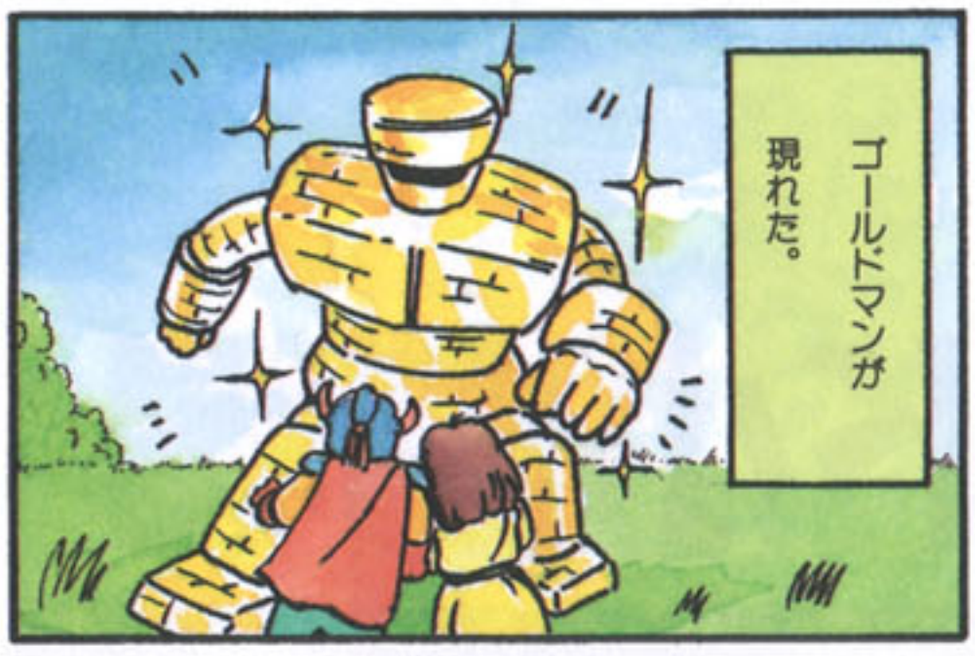
ゴーストハットの秘密



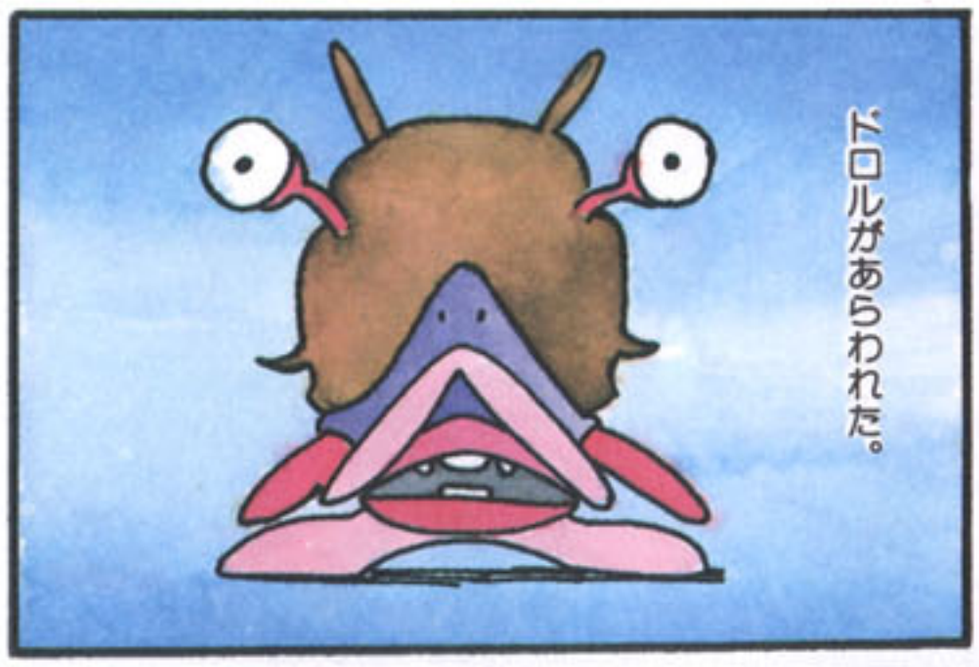




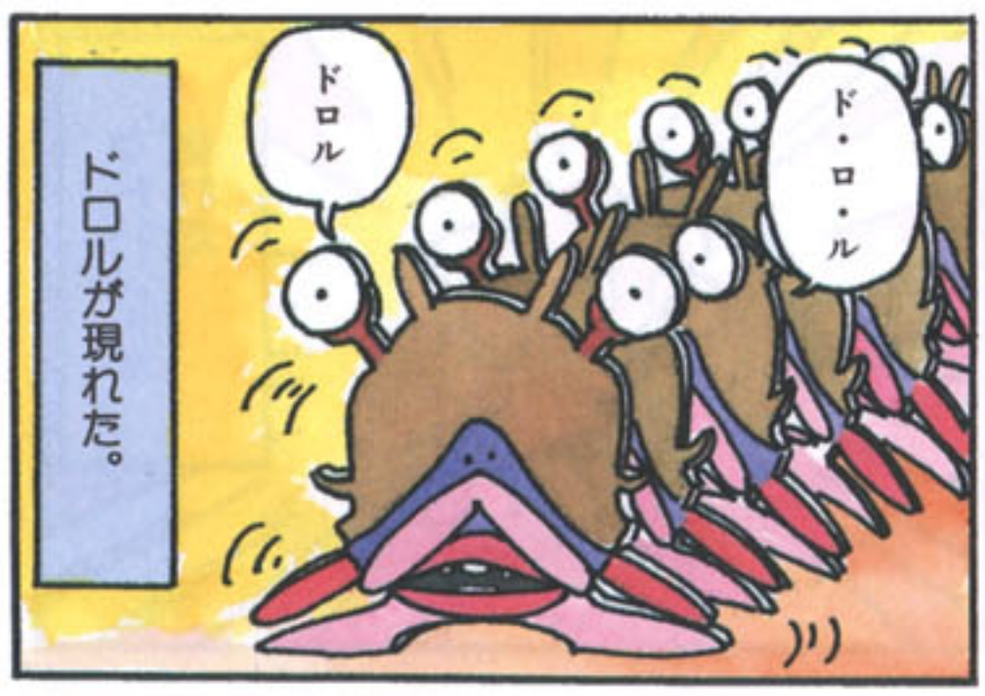
♡ラブリーゴールドマン

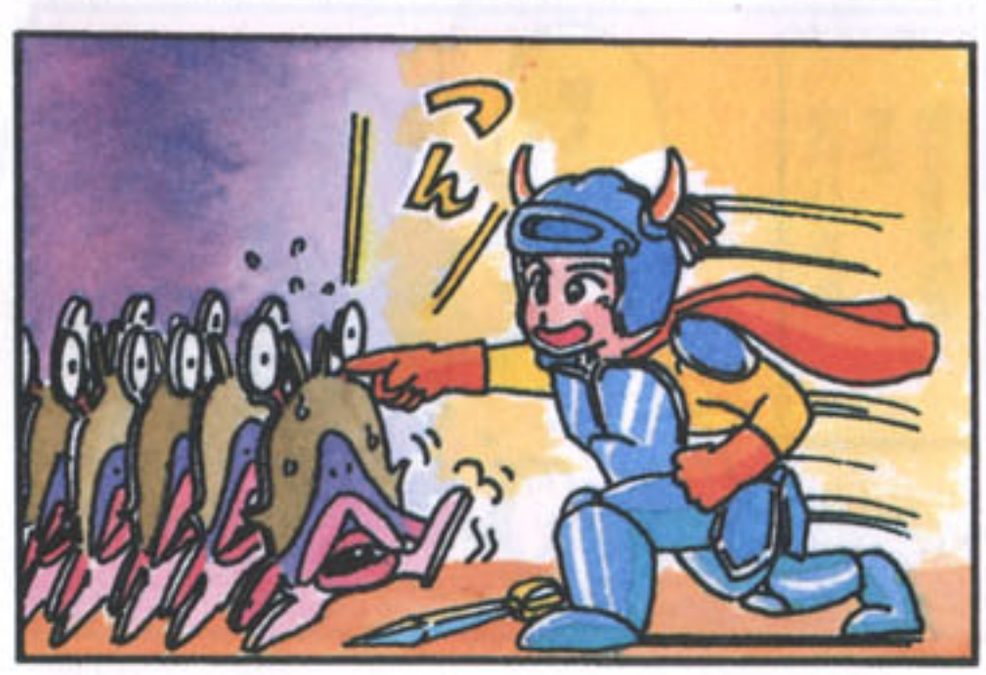


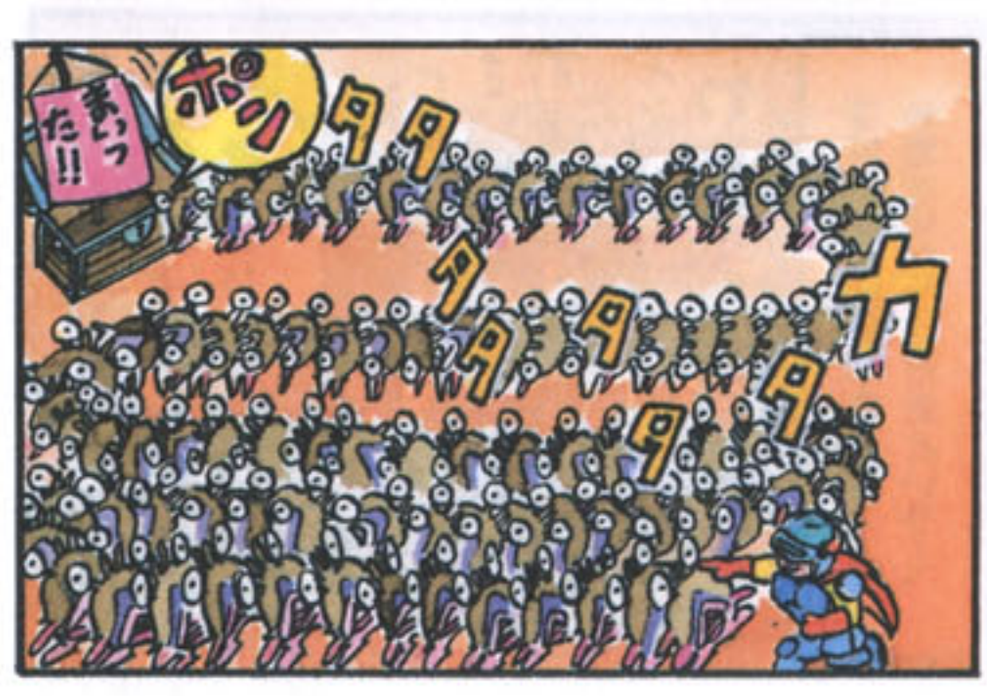
ドロルドロル…①



ドロルドロル…②

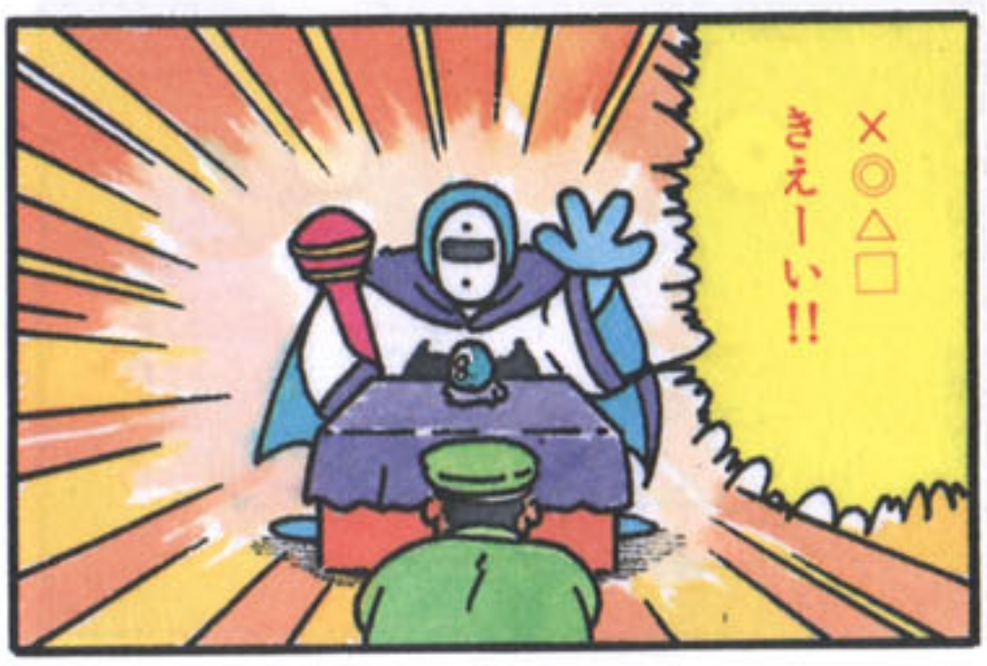


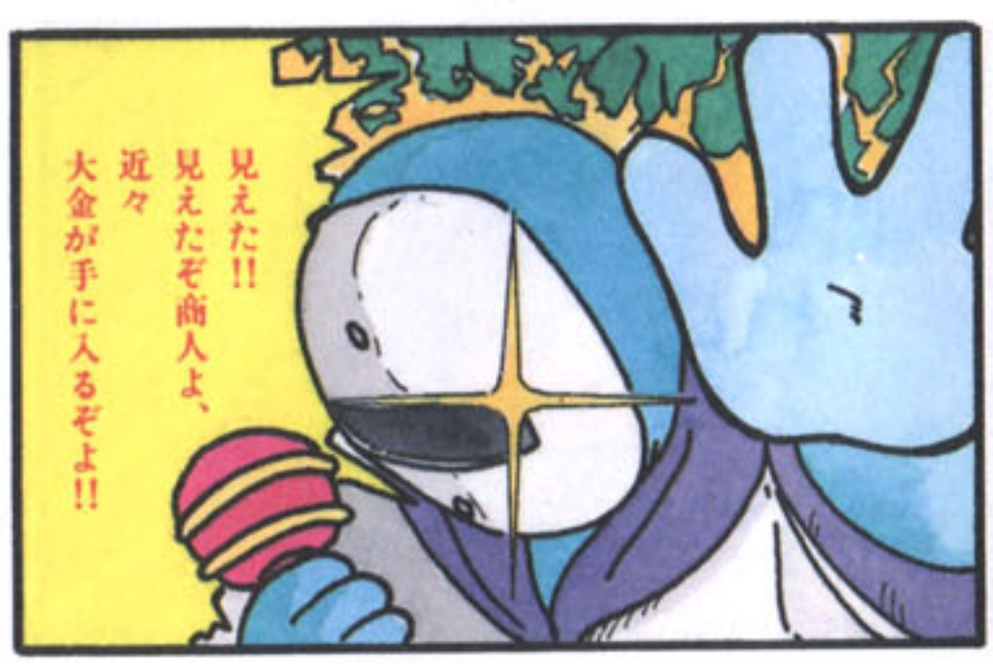


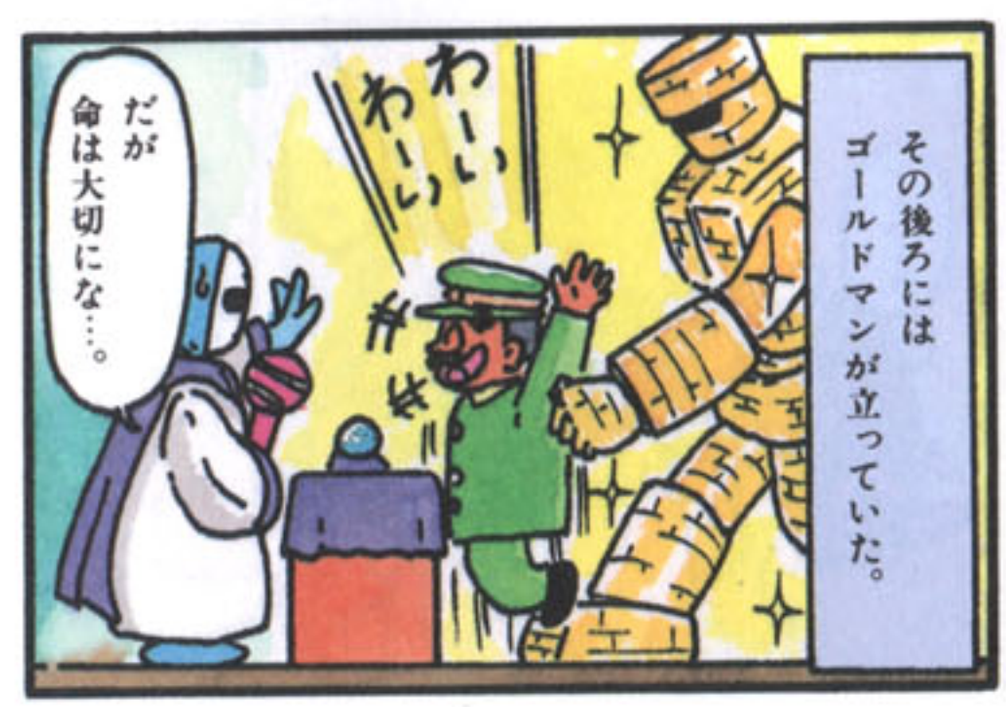


マドハンドのしゅーねん

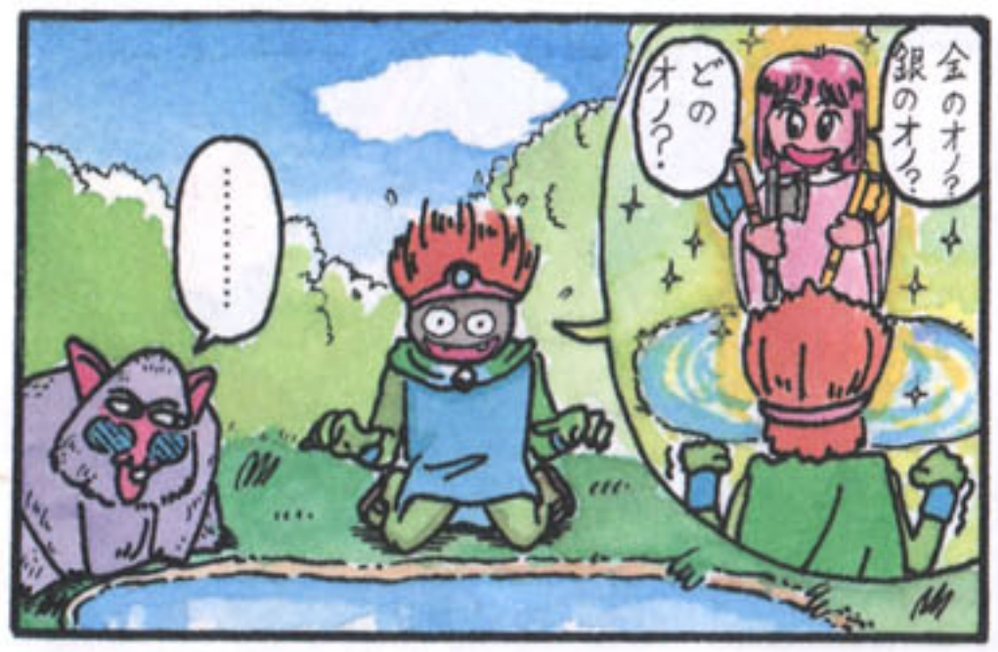
奥義！見えた見えた!!

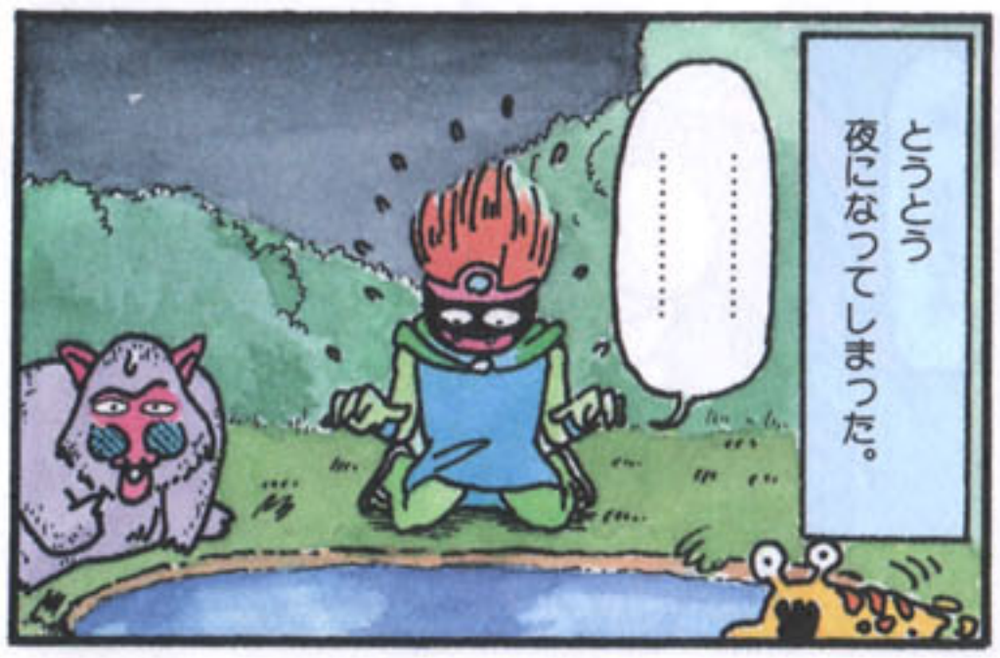


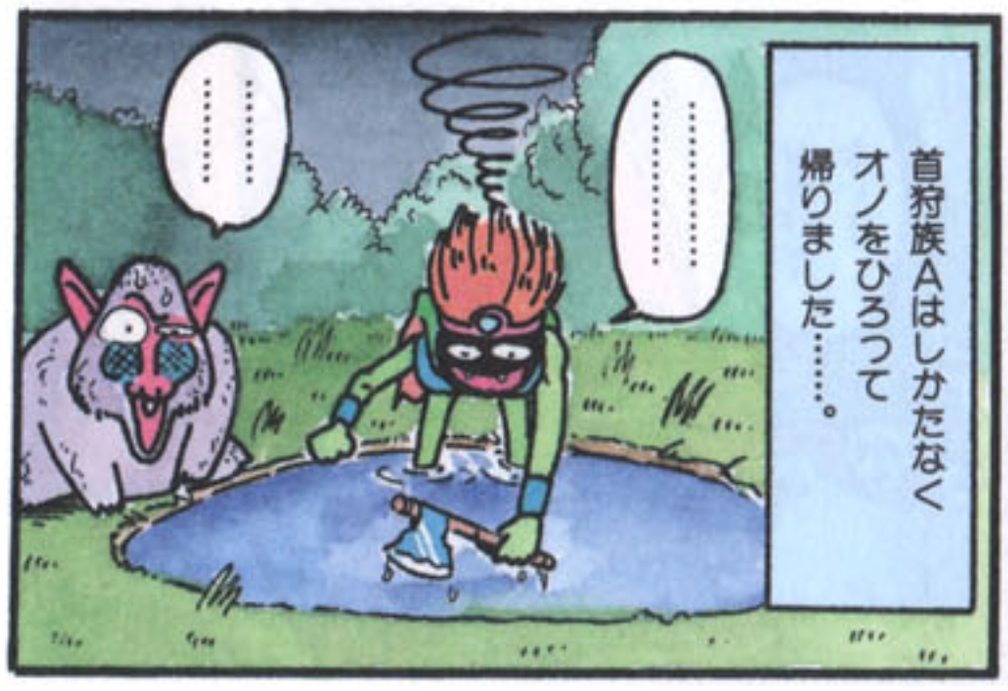




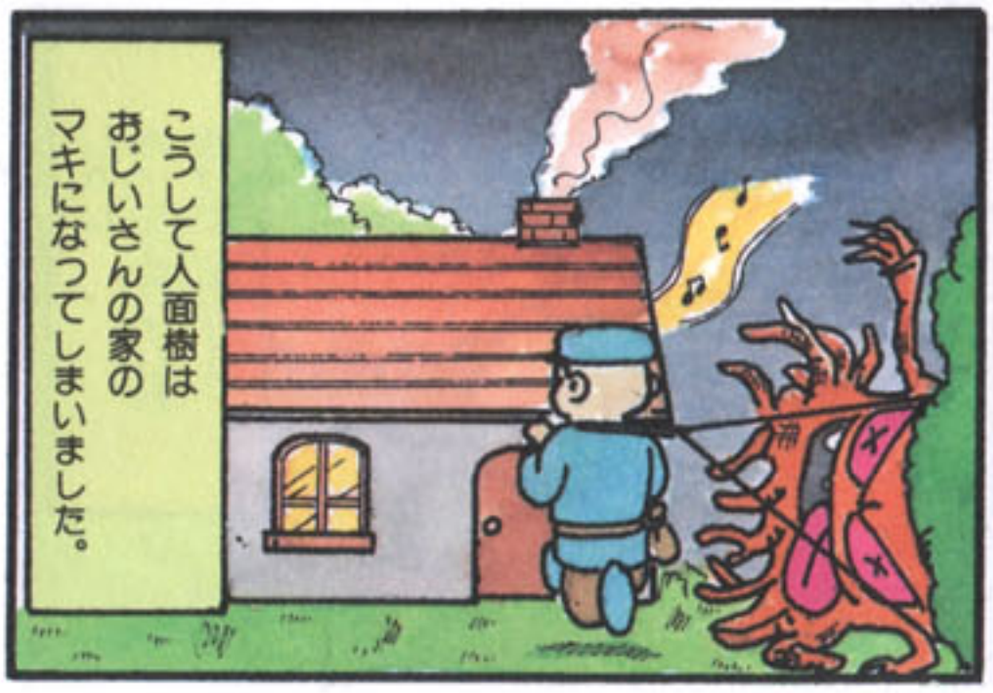
首狩族の野望



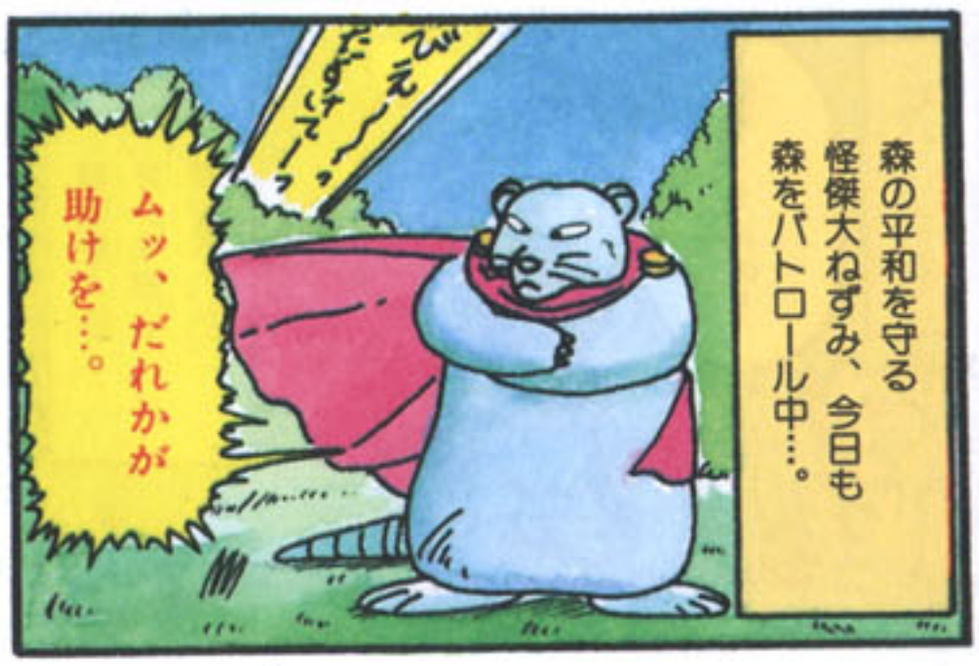


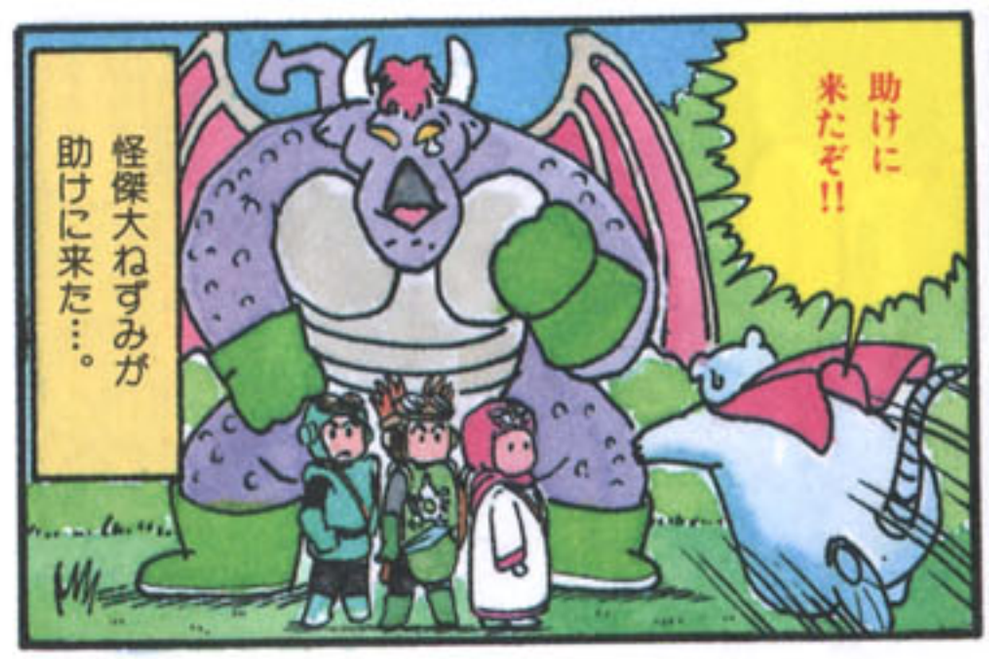


死闘！
おじいさんvs人面樹

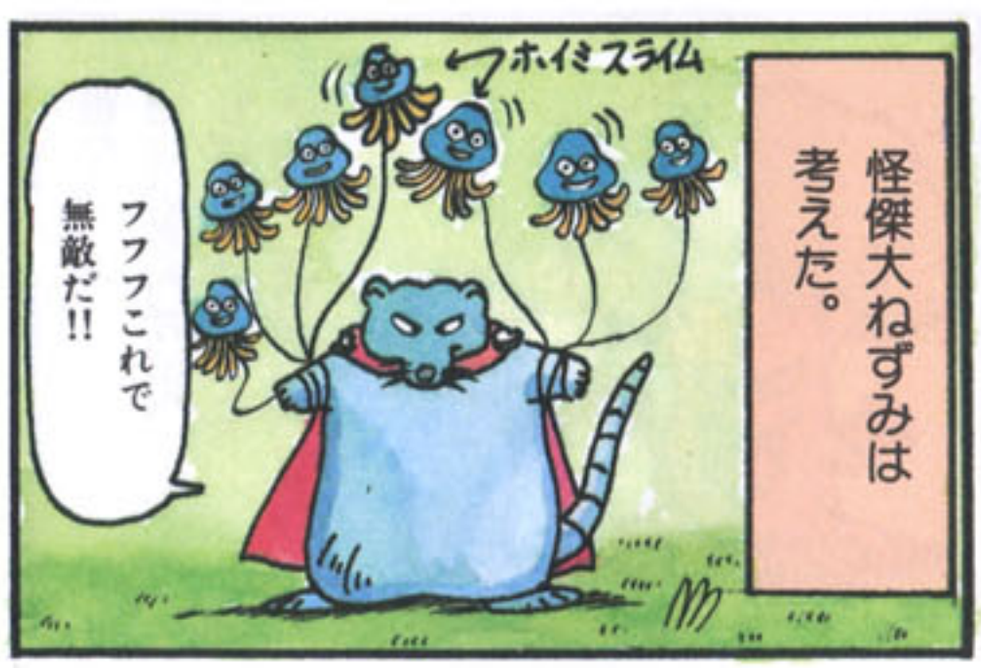


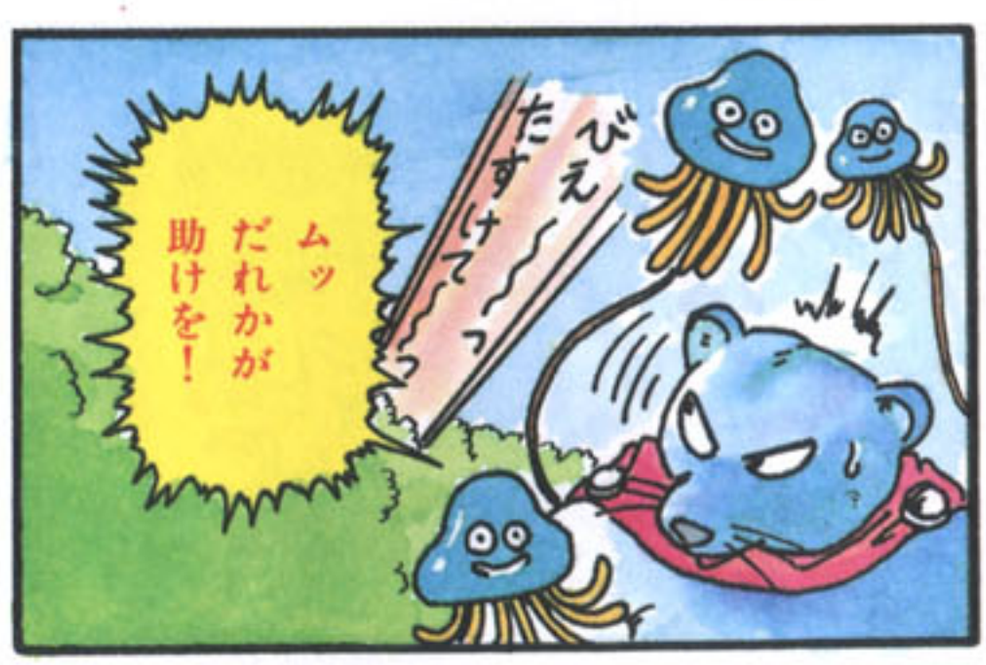
快傑大ねずみ ①





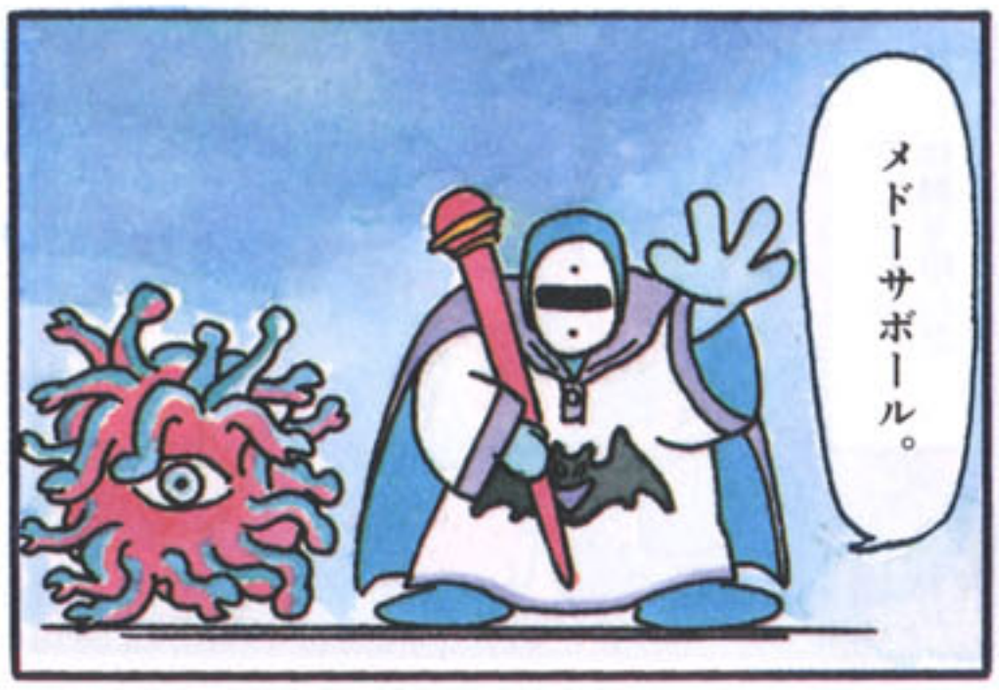
快傑大ねずみ ②

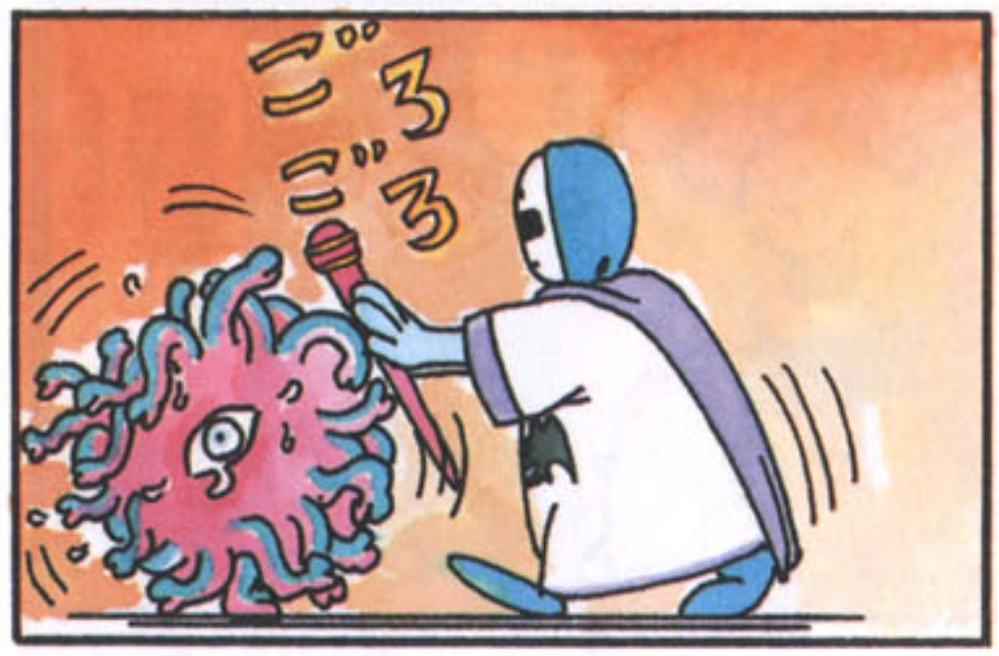


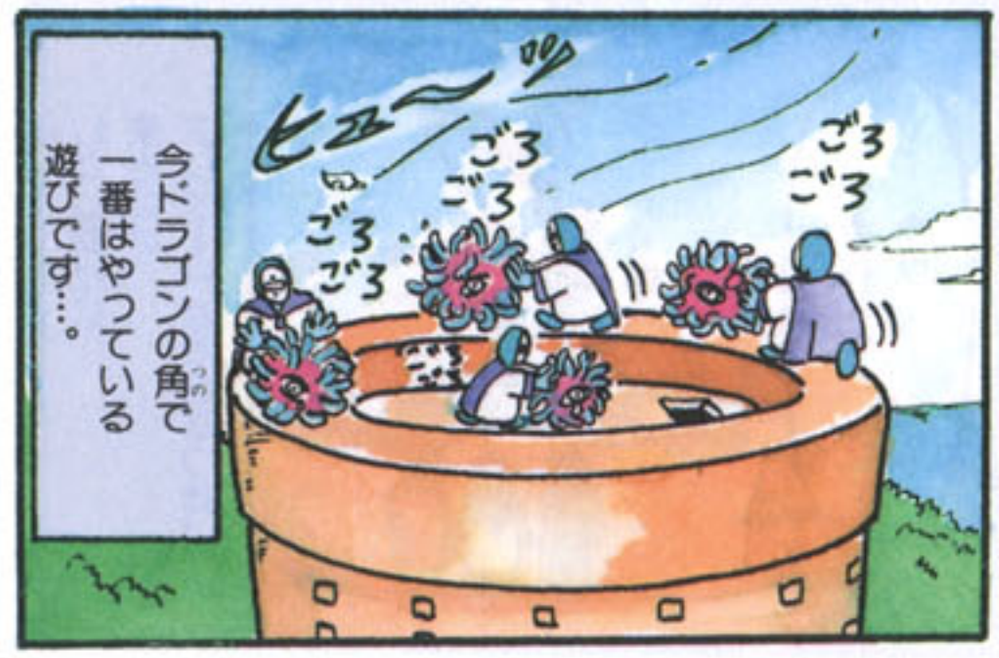


[redacted]

どうせオイラは メドーサボール…

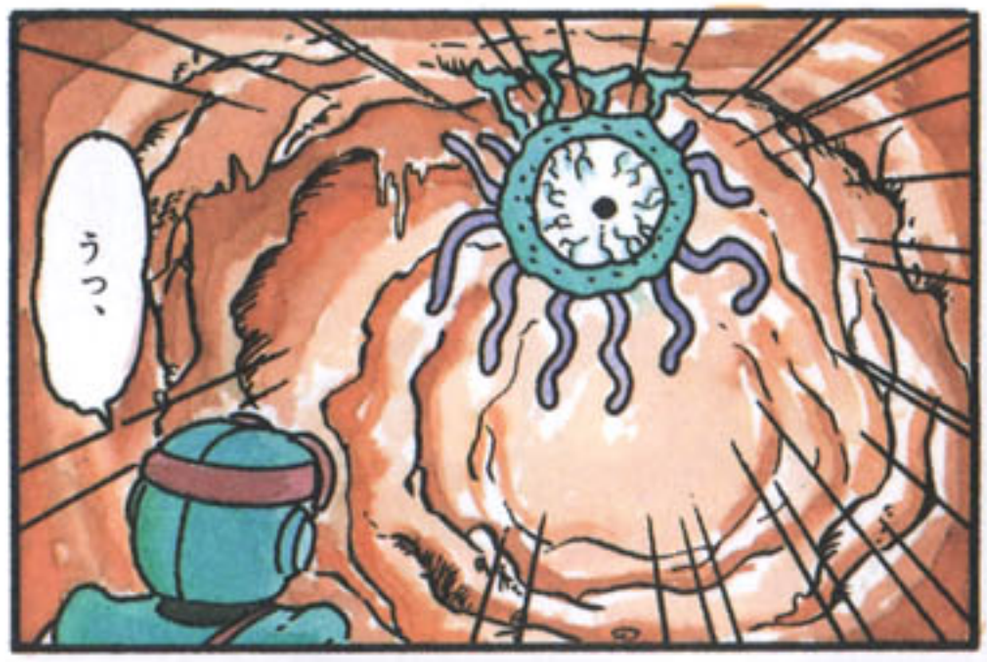


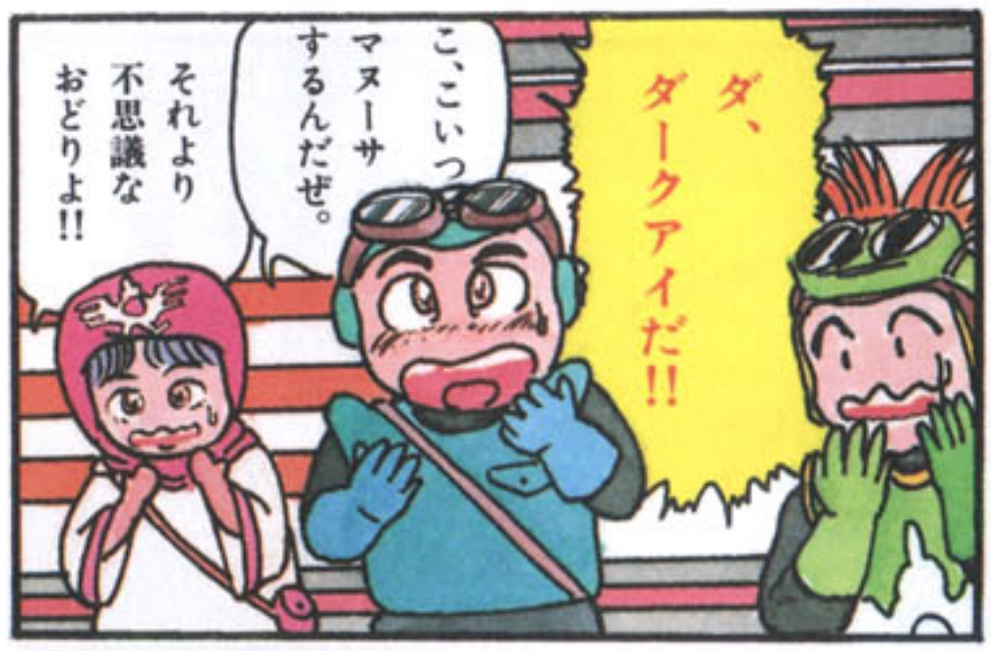


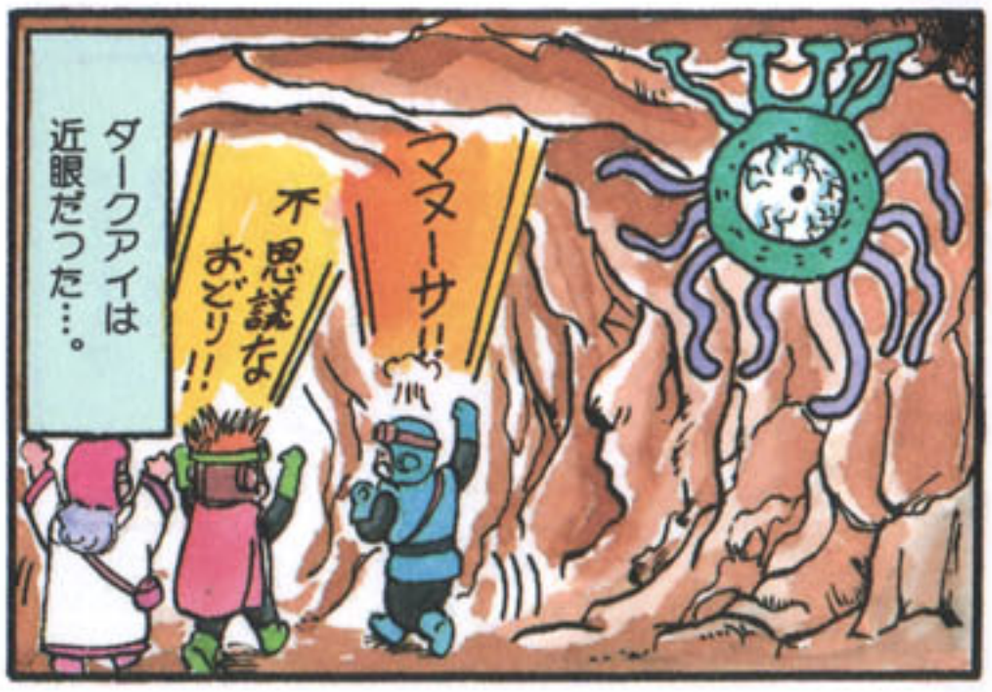


[redacted]

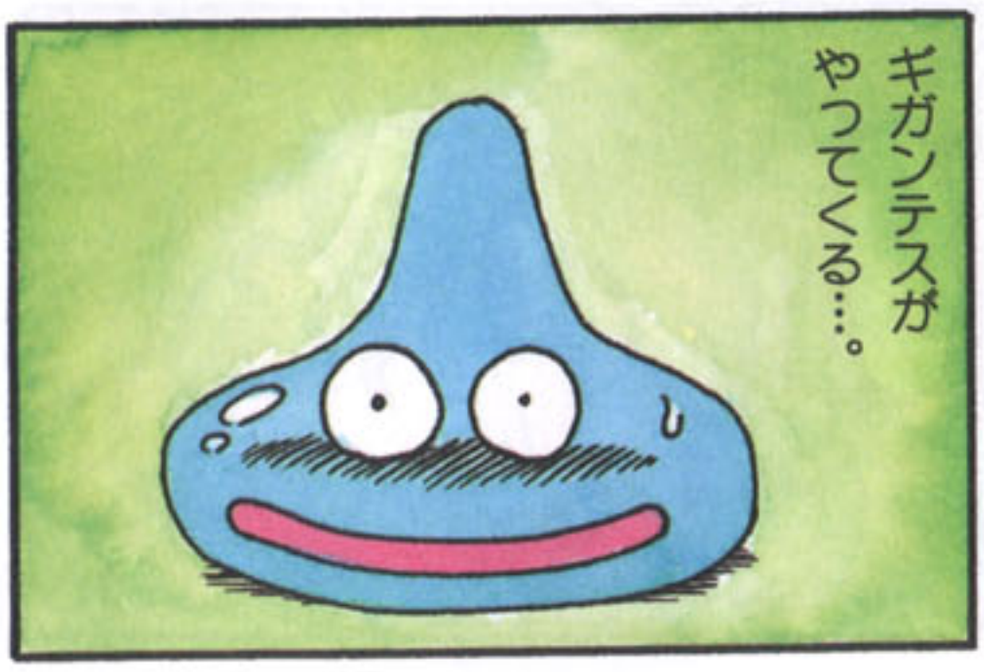
驚異の眼力 ダークアイ

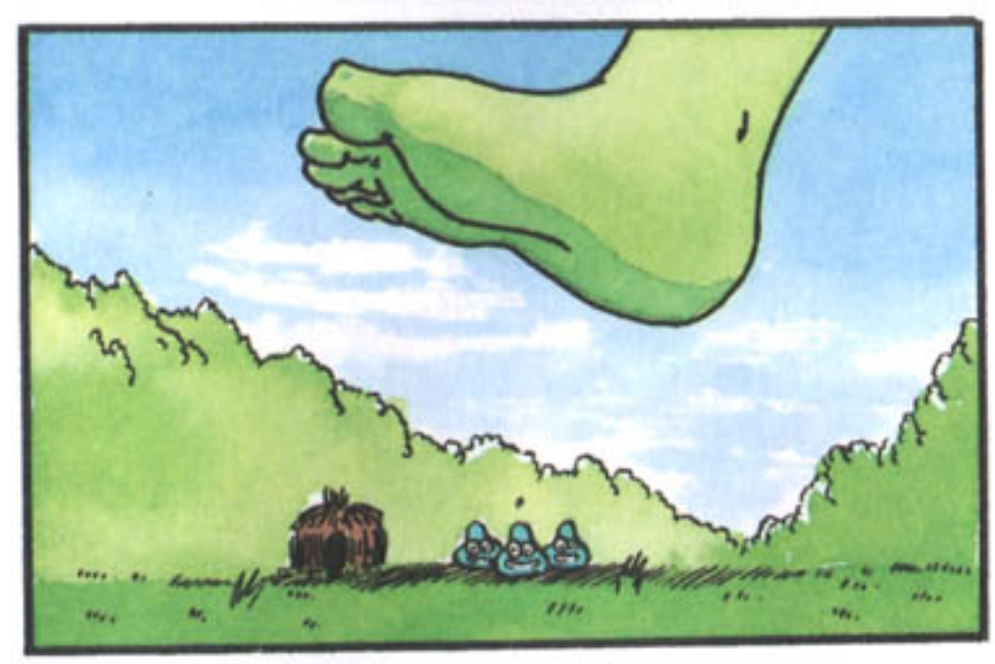


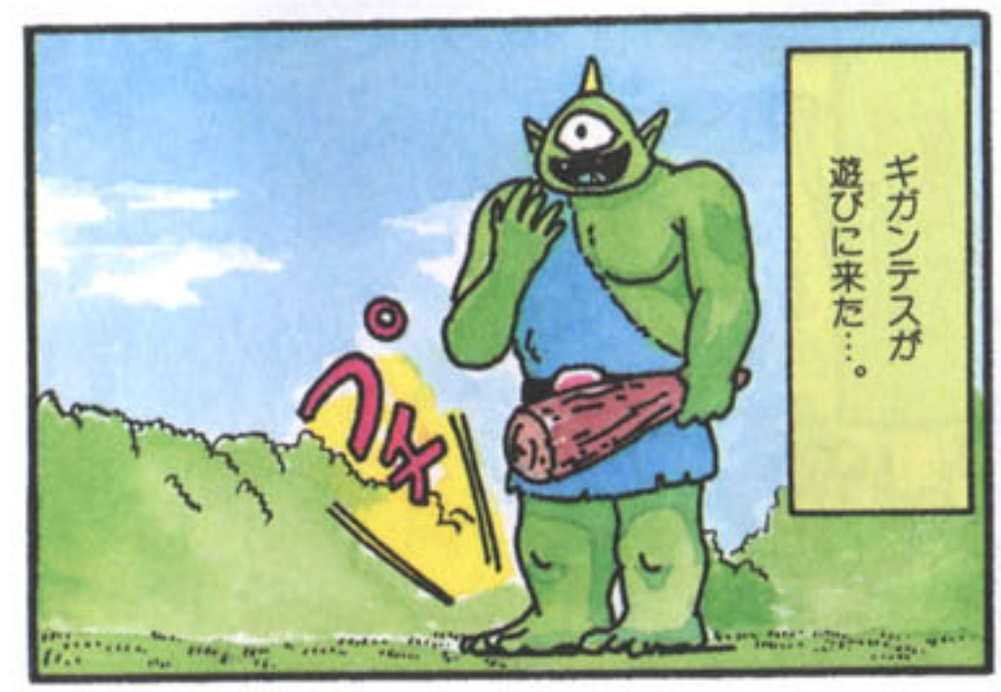




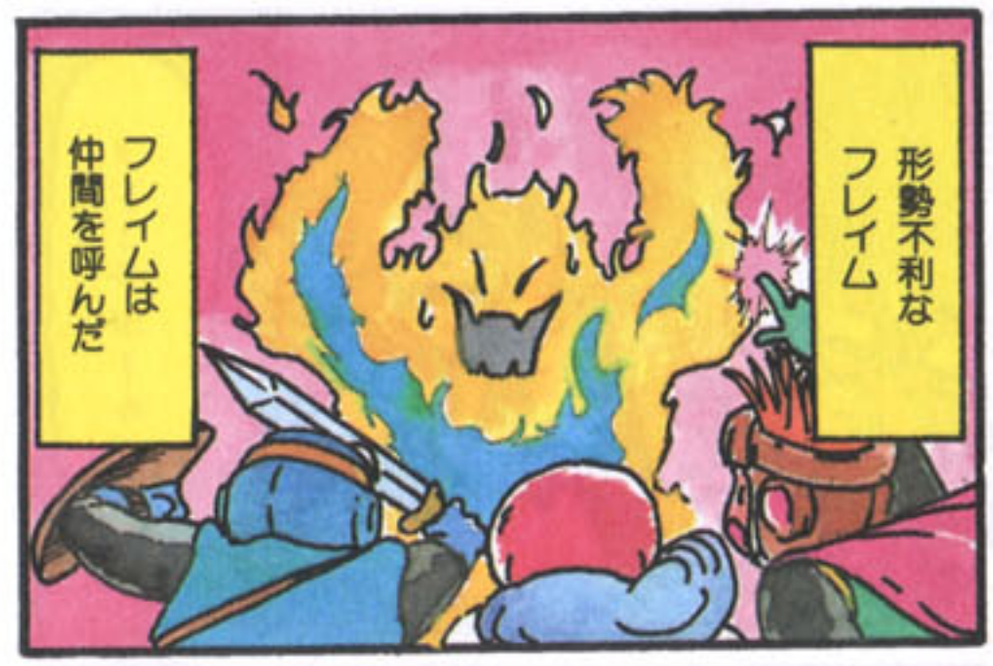
ギガンテスは お友達…

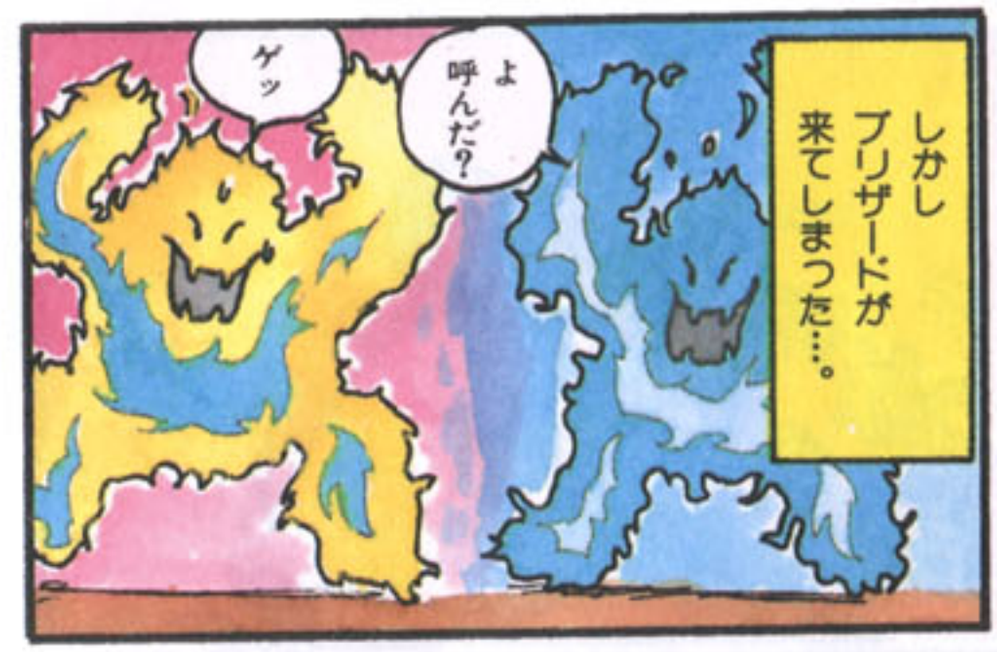




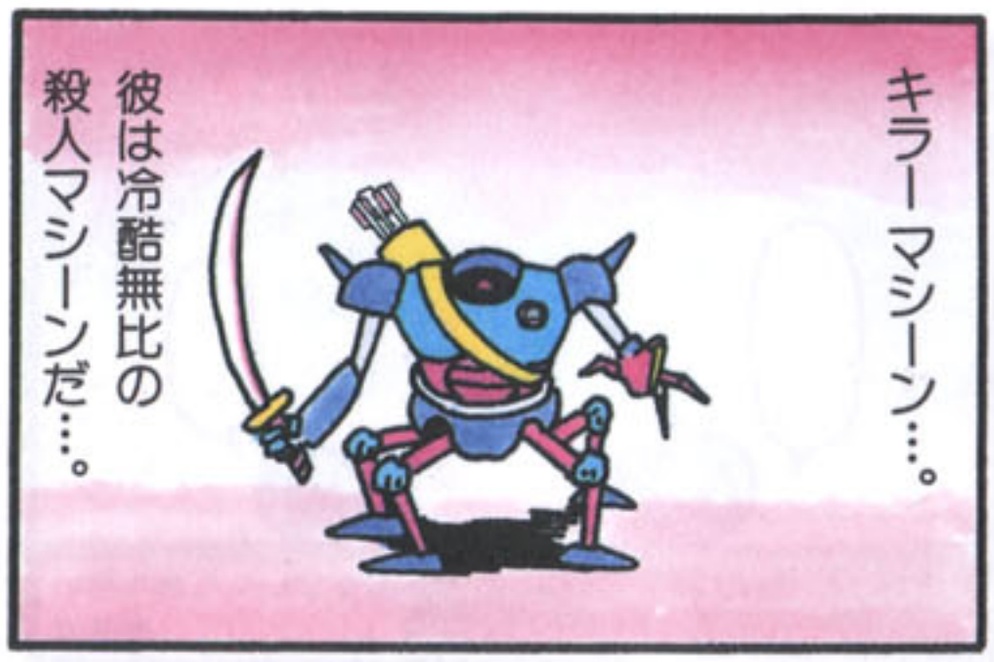


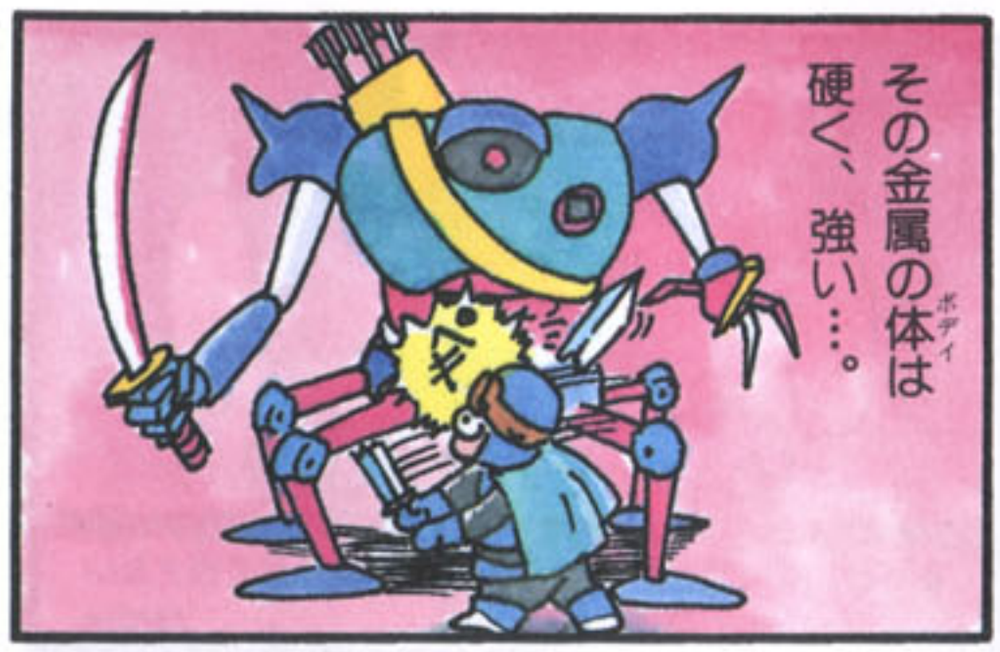
HELP ME! フレイム

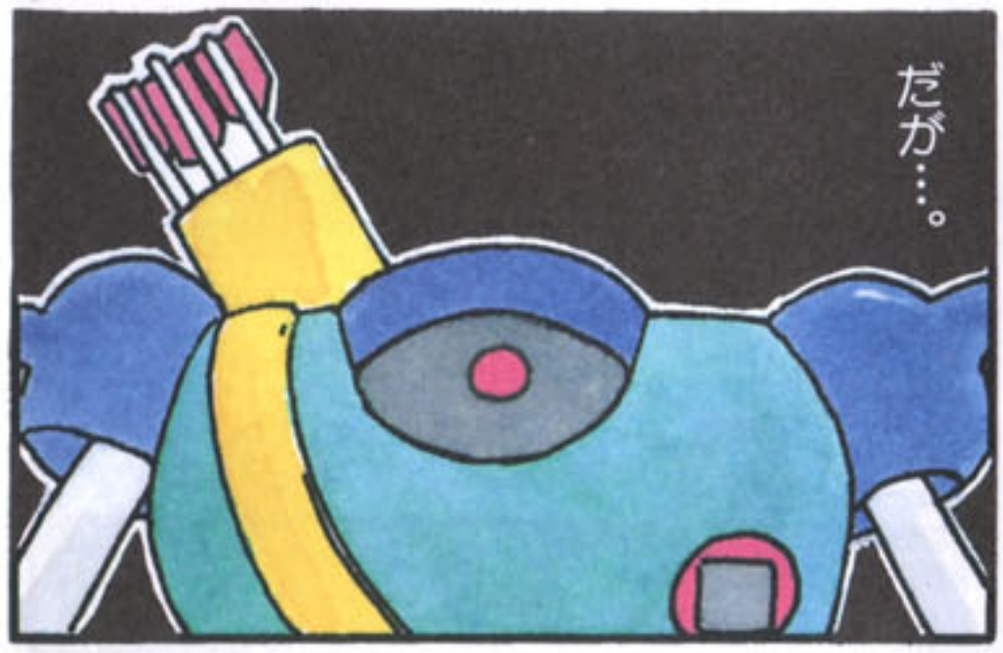




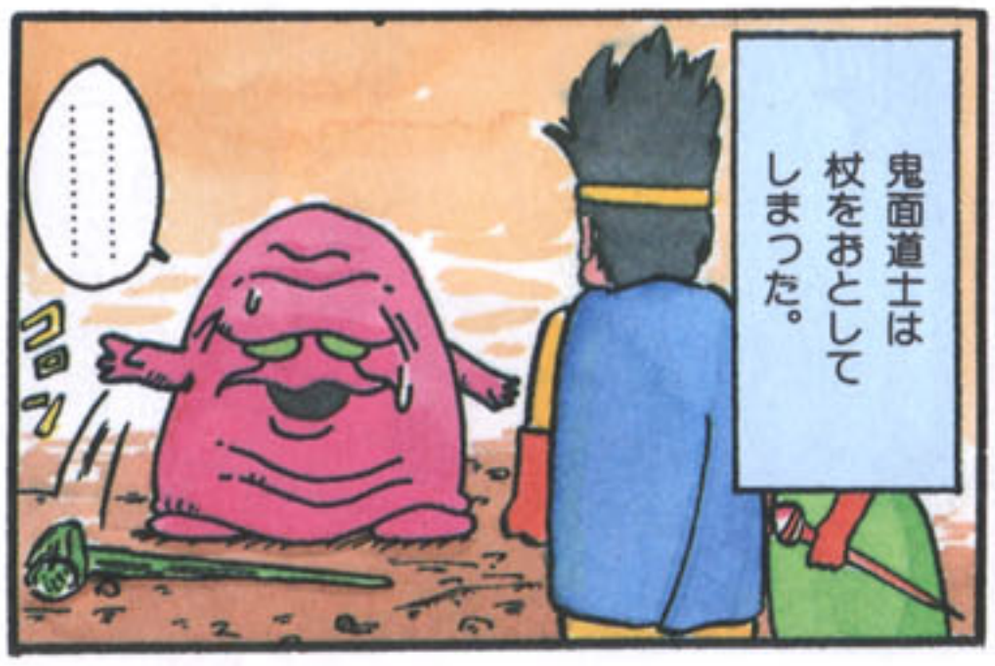
無敵の…!? キラーマシーン

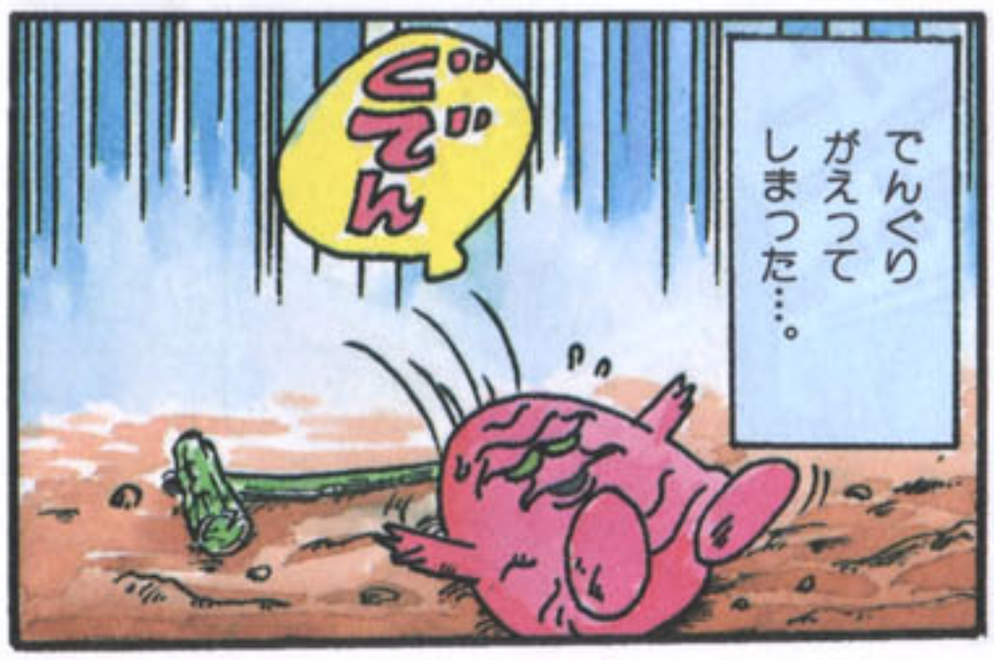




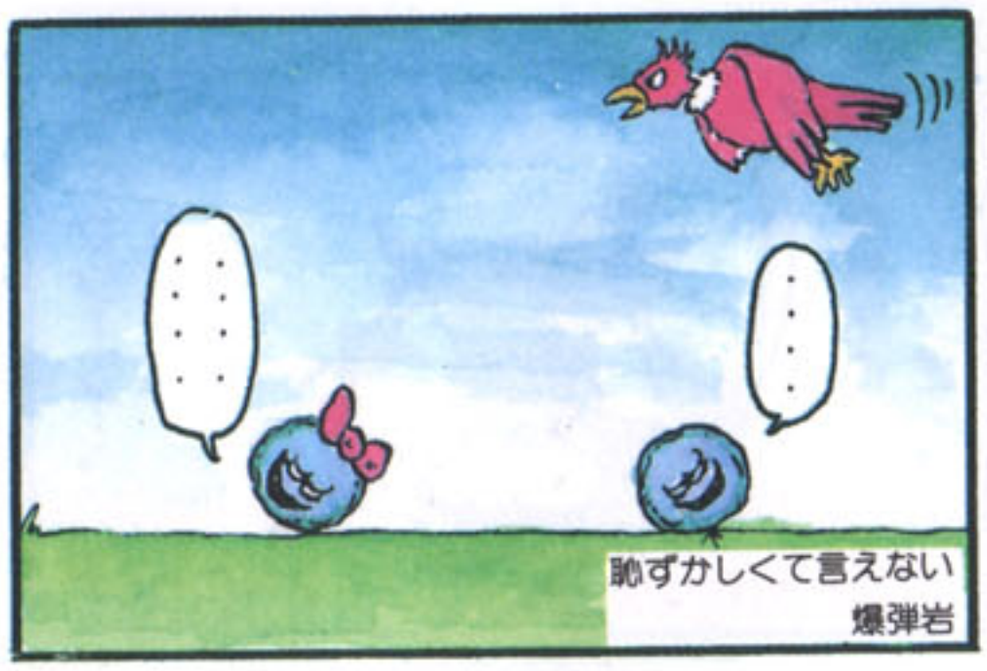


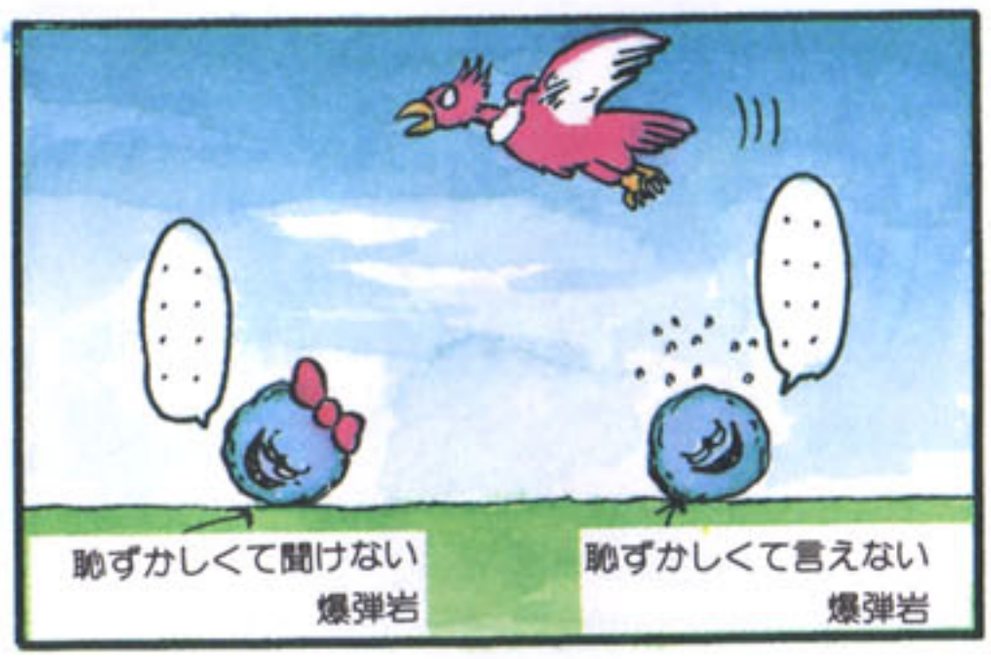
鬼面道士の悲喜劇



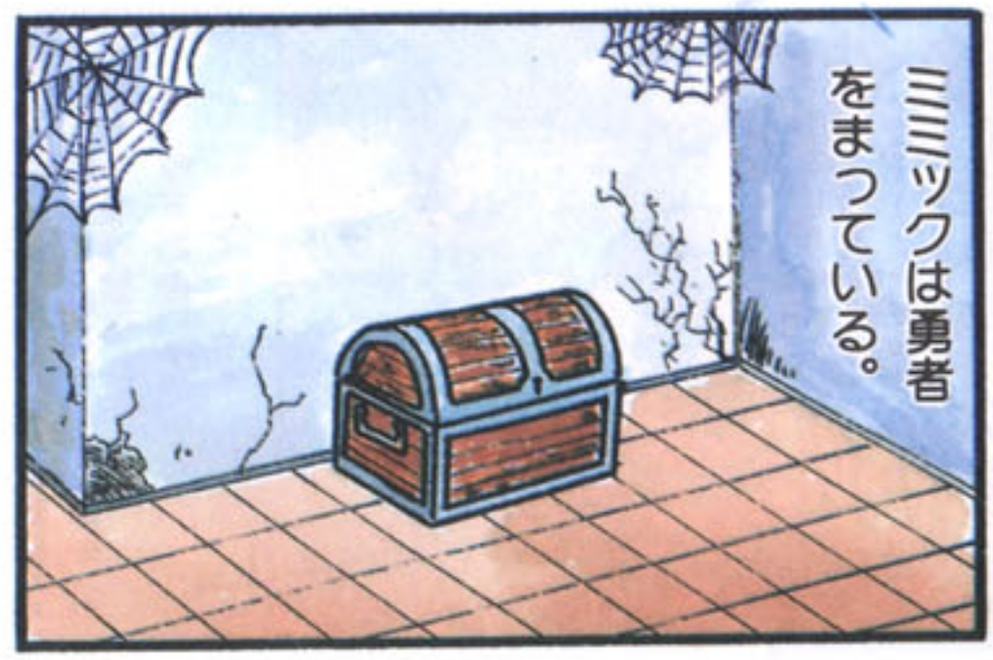


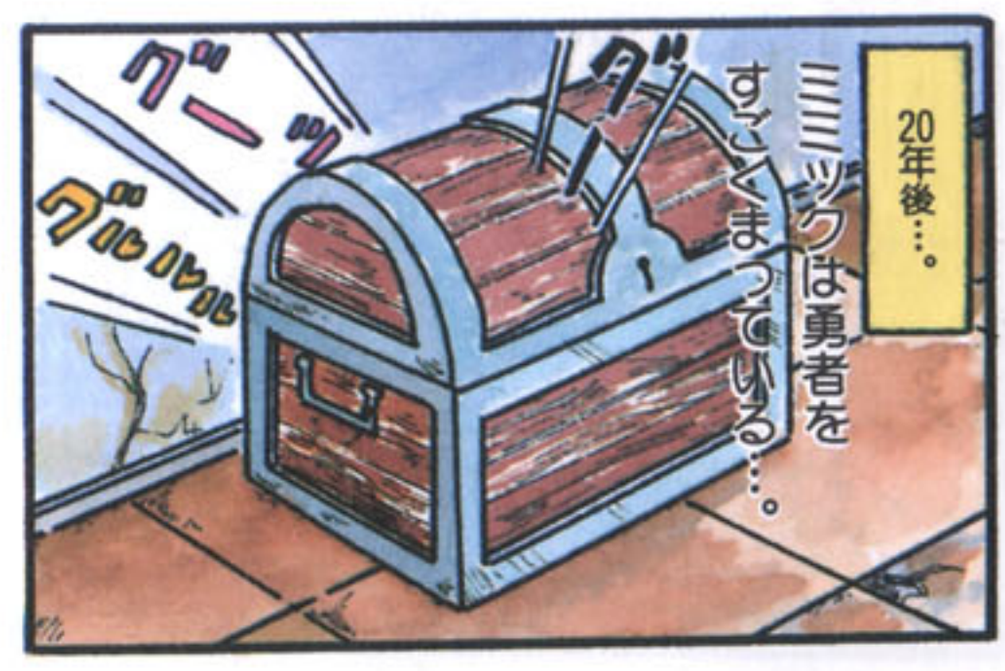
恋する爆弾岩

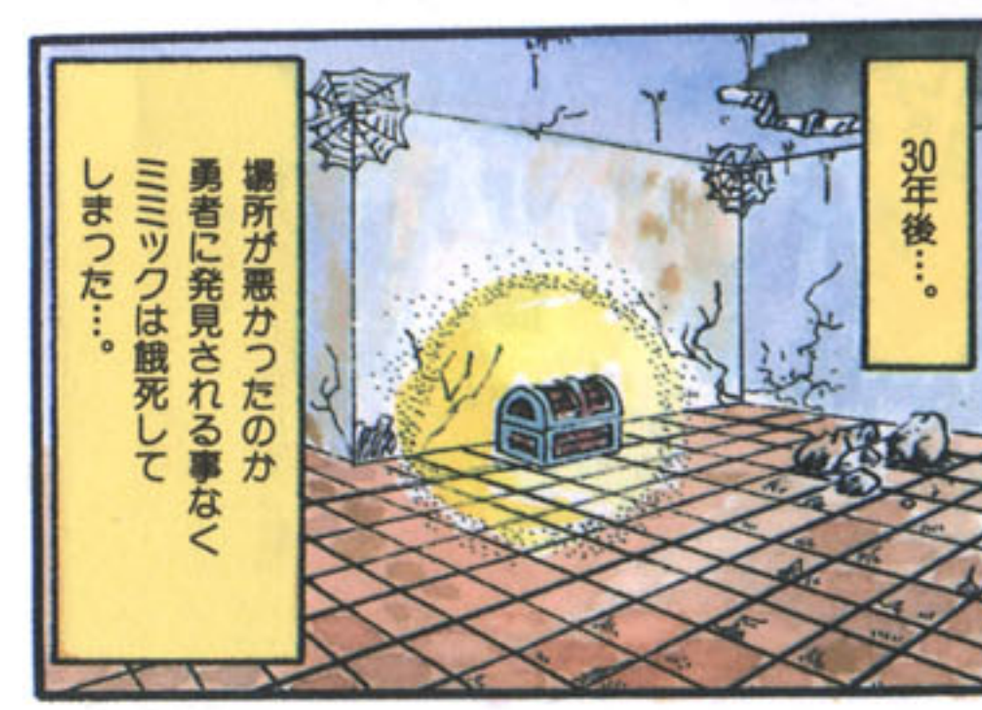




ミミックの一生

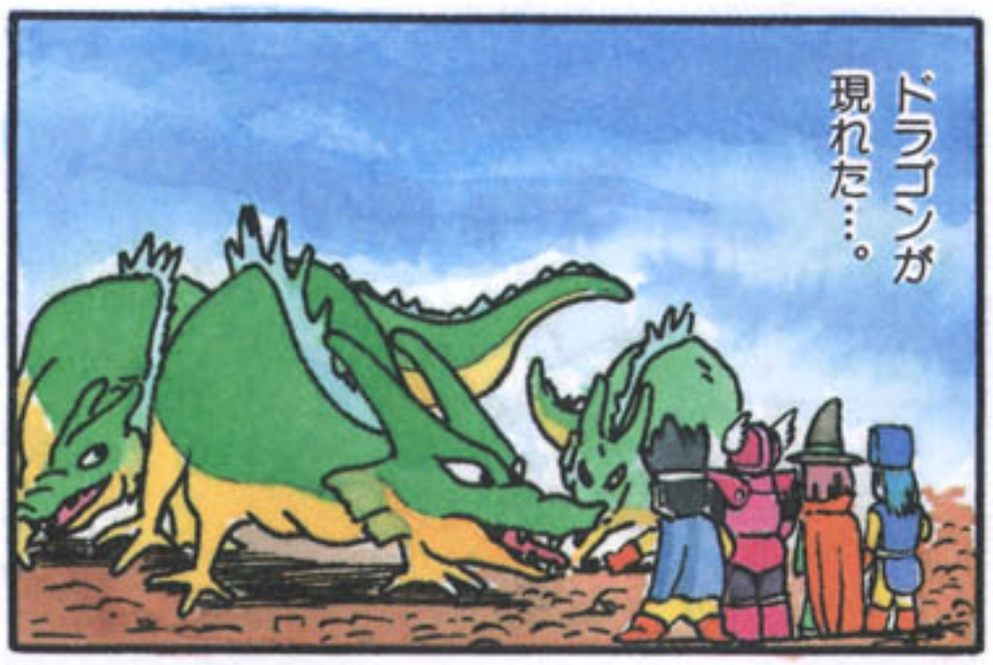


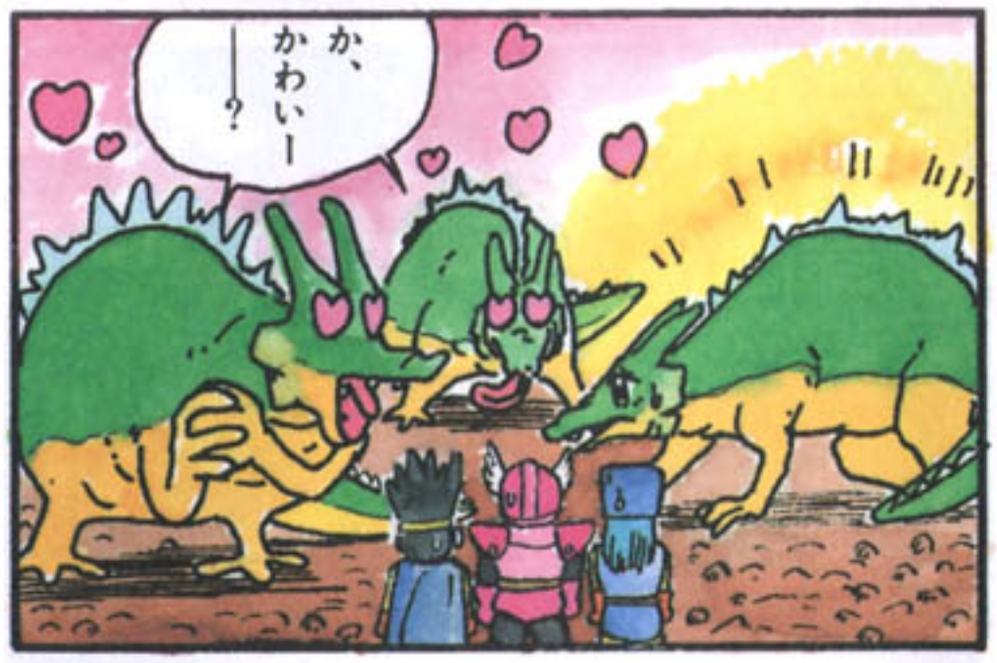


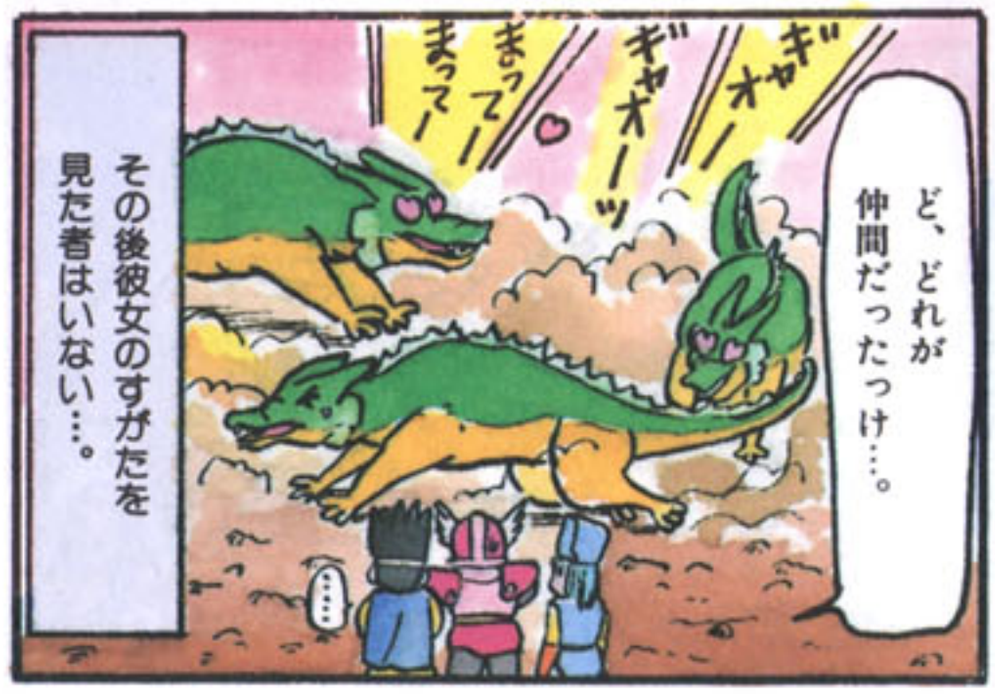


[redacted]

ドラゴラム

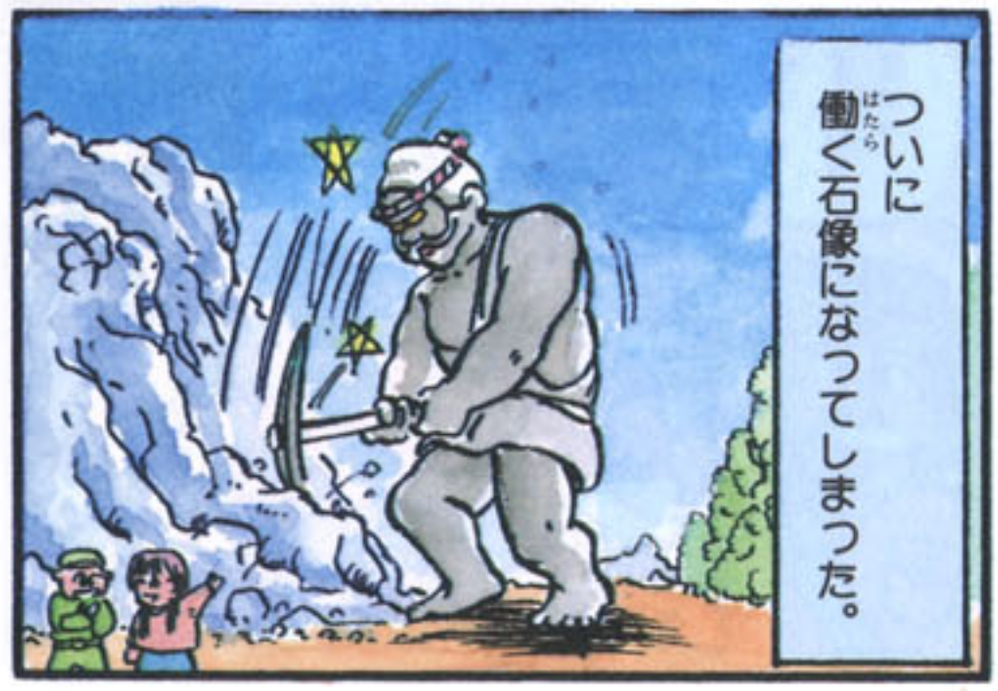




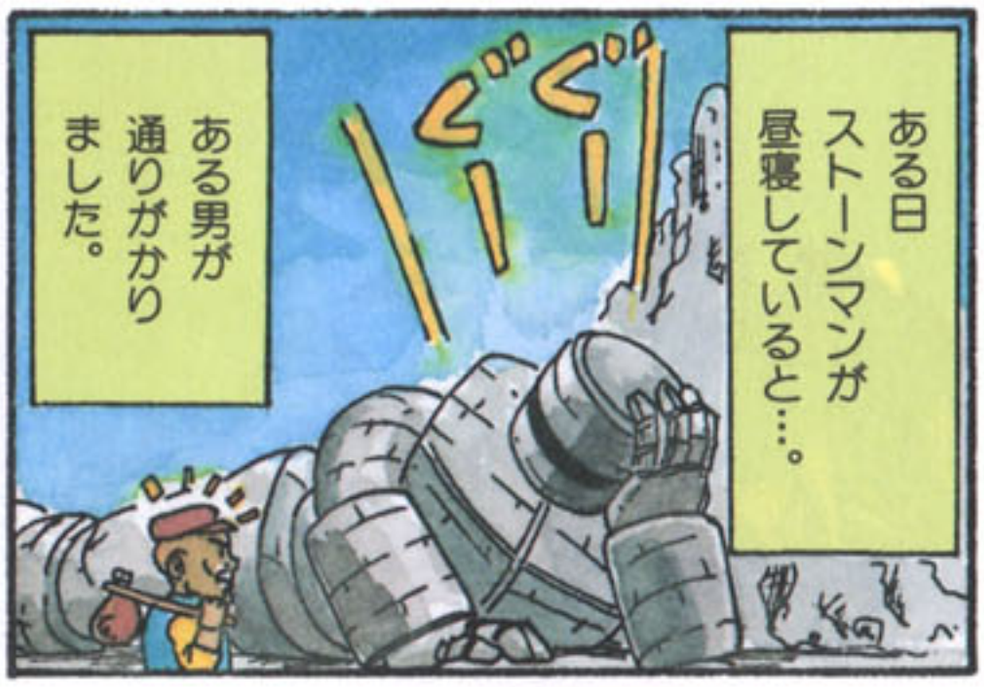


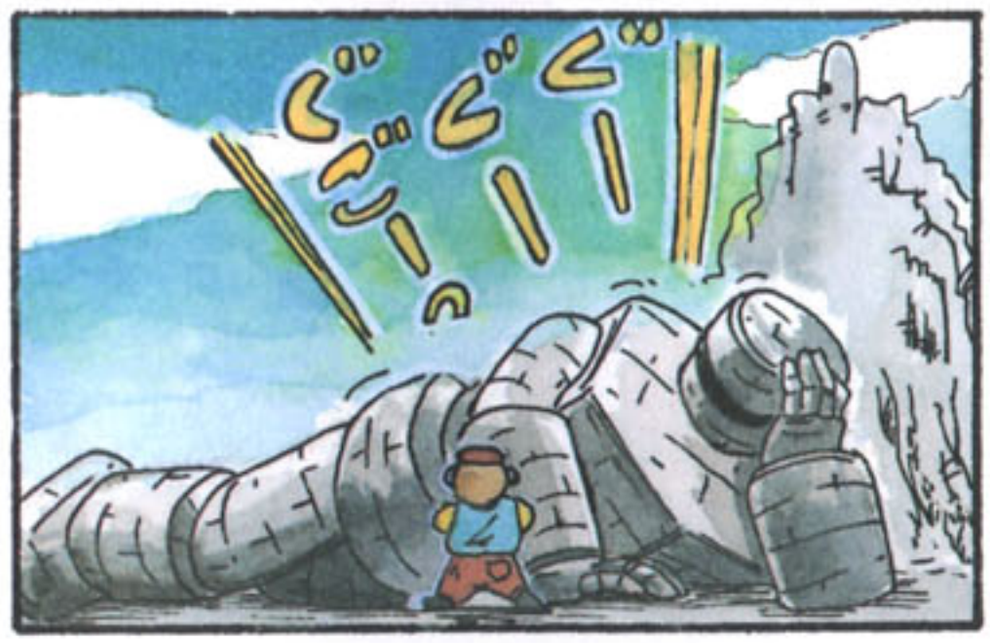
[redacted]

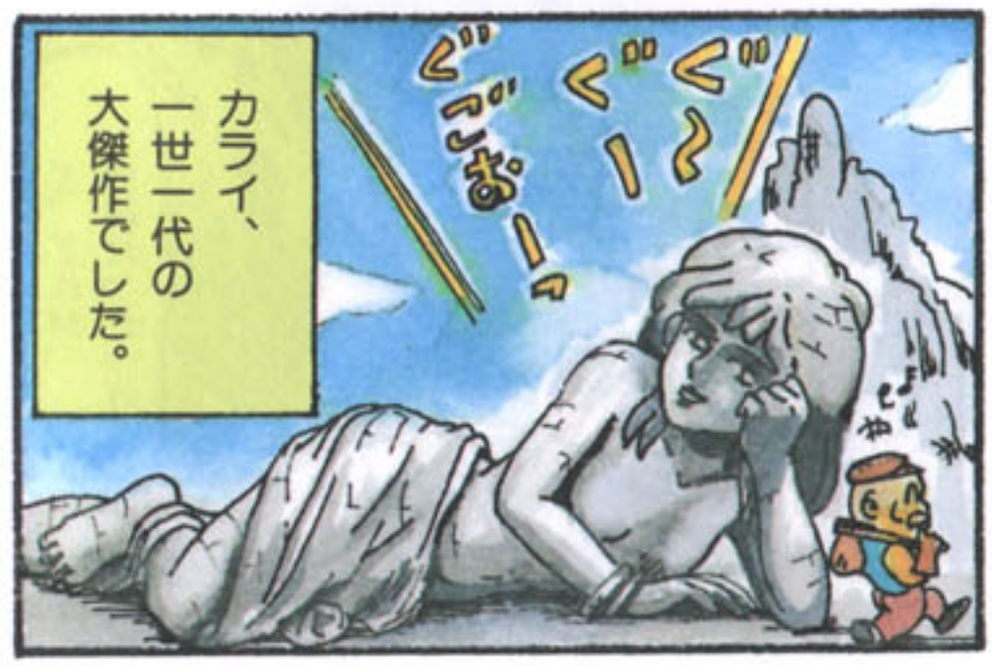
動く石像…



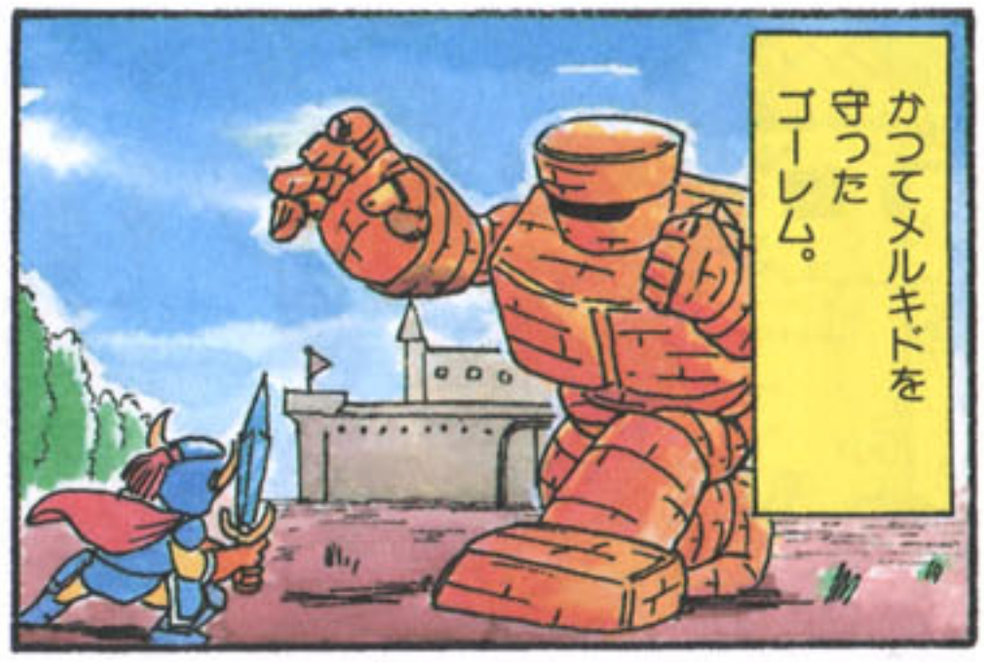
ストーンマンの伝説







ゴーレムよ永遠に



賢者ブレンドルの教養講座

アレフガルドの歴史
魔王軍団の編成

全三部

ワシの名はブレンドル、このアレフガルドで最も歴史に詳しい賢者ぢゃ。

今日は諸君らに魔界からの侵略者の編成、つまりやさしく言えば魔王たちの軍隊の仕組みについて教えでしんぜよう。なーに難しく考えるコトはない、アレフガルドでは三つの子供でも知っておるような話ぢゃ。国への土産話にするつもりで聞いていきなされ。

第一部 バラモスと大魔王ゾーマ——伝説の始まり……

まずゾーマとバラモス軍団の編成図をみてもらいたい。トップはもちろん大魔王ゾーマぢゃ。バラモスがゾーマの家来の一人に過ぎんちゅうことは、みんなも知っとるだろう。おそらくバラモスと同じような魔王が何人かおって、それぞれが別の世界の攻略に携わっておったんぢゃろうが、いまとなってはどんな連中がいたのかサッパリ分からん。なにせ何百年も昔のことぢゃからナ。

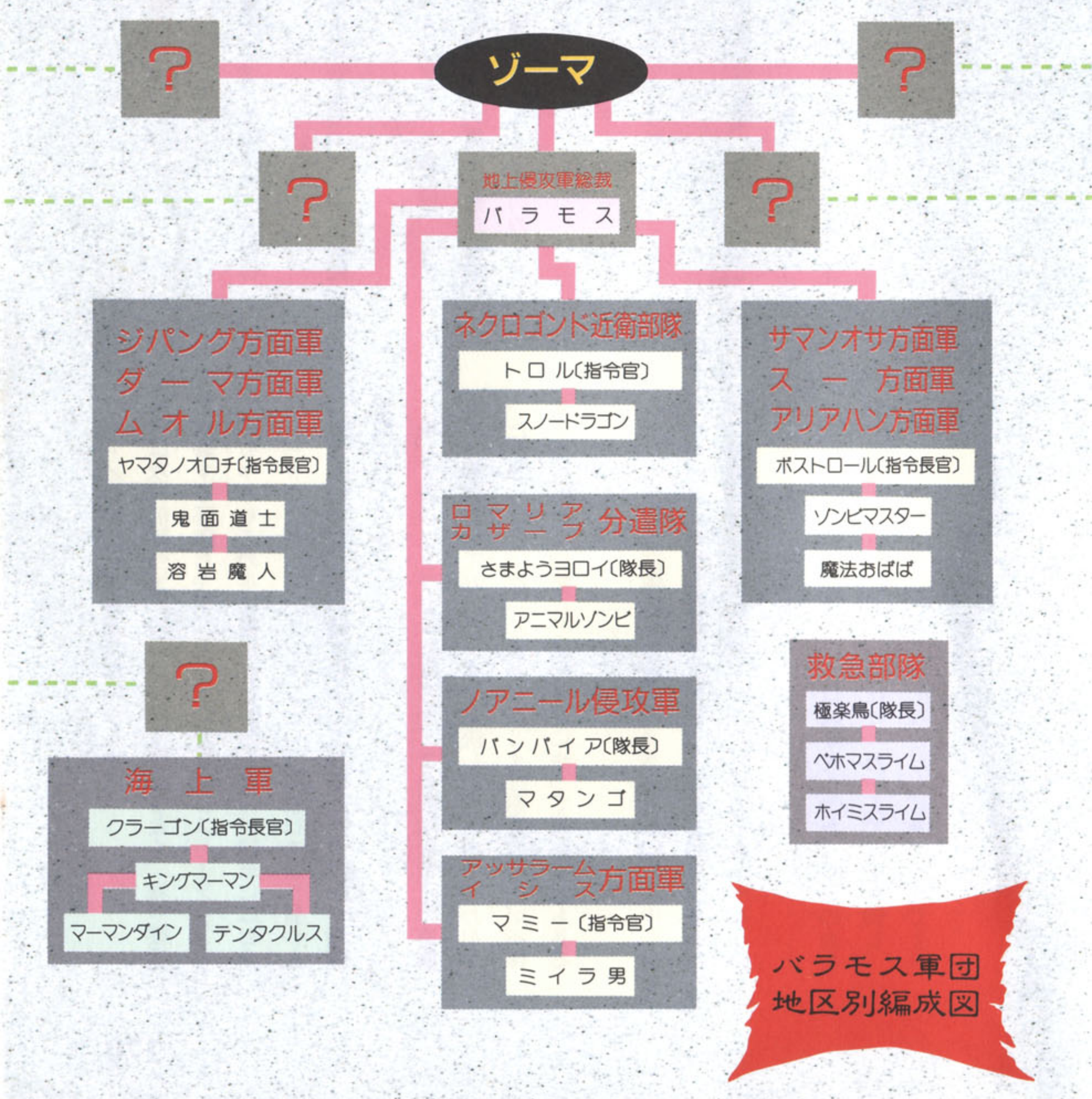
だがバラモスの軍団編成については、よオ分かっとる。ネクロゴンドにあったヤツの城で、命令書やらなにやら資料が発見されたんぢゃ。

中でもサマンオサのボストロールとジパングのヤマタノオロチは、地区指令官ということで別格の権限を与えられておったんぢゃ。二人とも支配じておる領域がびじょうに広いぢゃろ？　マ、それだけ力のある魔物だったんぢゃろうナ。

ロマリアからカザーブ地方は、ほんとうなら方面軍指令官を置くところなんぢゃろうが、この図だとただの分遣隊になっておろう？　実はこの地域にはカンダタとかいう強い盗賊がおって、みな行くのをいやがったらしいんぢゃ。かわいそうに下っ端の鎧族が派遣されたんぢゃが、きっとひどい目にあったろうナ。

サテ、バラモスとゾーマが勇者ロトによって倒されたずっとあとに現れたのが竜王ぢゃ。

こやつの軍団については第二部で話すことにしよう。


ゾーマ
?
?
?
?
地上侵攻軍総裁
バラモス
ジパング方面軍
ダーマ方面軍
ムオル方面軍
ヤマタノオロチ〔指令長官〕
鬼面道士
溶岩魔人
ネクロゴンド近衛部隊
トロル〔指令官〕
スノードラゴン
サマンオサ方面軍
スー方面軍
アリアハン方面軍
ポストロール〔指令長官〕
ソンビマスター
魔法おばば
ロマリア
カザーブ
分遣隊
さまようヨロイ〔隊長〕
アニマルゾンビ
救急部隊
極楽鳥〔隊長〕
ベホマスライム
ホイミスライム
ノアニール侵攻軍
バンパイア〔隊長〕
マタンゴ
?
海上軍
クラーゴン〔指令長官〕
キングマーマン
マーマンダイン
テンタクルス
アッサラーム
イシス
方面軍
マミー〔指令官〕
ミイラ男
バラモス軍団
地区別編成図

こちらもトップはもちろん竜王ぢゃ。その下に五人の将軍がおる。

もっともむかしは六人だったらしいんぢゃが、一人が死んでしまったのぢゃ。

この五人のなかで役目がはっきり決まっとるのは、スターキメラと大魔道の二人だけなんぢゃ。大魔道の魔法部隊、これはすぐに分かったぢゃろ。魔法を使える魔物のなかでも知力の高い連中の集まりなんぢゃ。

そして偵察部隊を指揮しておるのがスターキメラ。空から人間の様子を探ったり、時によっては攻撃したりする軍団ぢゃナ。

サテ次は強襲部隊ぢゃ。この部隊は悪魔、死神、そして影の騎士が交代で指揮をとるんぢゃ。兵隊の構成は時によって違うが、鎧(ヨロイ)の騎士だけはどんな場合も入っておる。連中は竜王軍の歩兵ぢゃからナ。

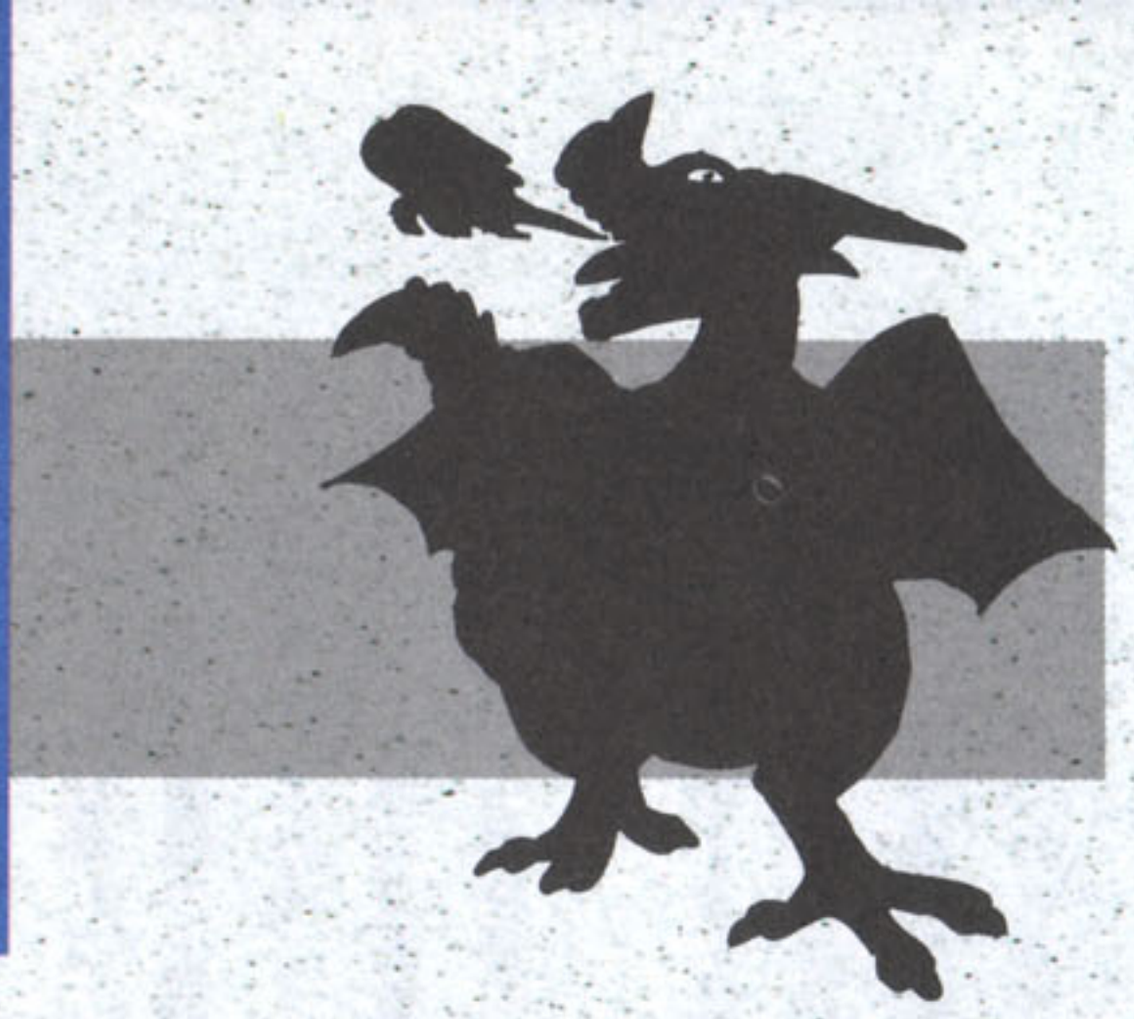
暗殺部隊も三人が交代でするのぢゃが、おもに影の騎士とその部下たちが作戦にあたっておったようぢゃノ。なにしろアノ連中が一番目だたないからナ。

次は攻城部隊ぢゃ。コレは読んで字のごとく、城や要塞を攻撃する部隊ぢゃナ。中心は怪力を誇るストーンマンぢゃ。もっともこの本に書かれた物語を読んだ諸君にはお分かりぢゃろうが、ストーンマンという魔物はあまり賢いとは言えんのでな、その時々によって将軍たちの誰かが指揮を取ったんぢゃ。

そして最後はドラゴン部隊ぢゃ。この部隊は竜王の直属ちゅう事になっておった。ぢゃが決して外に出て戦わなかったちゅうことはないんぢゃ。たとえば悪魔の騎士が指揮する攻城部隊に加勢してメルキドにやって来たこともあるんぢゃからナ。

そして正規の部隊以外に傭兵(ようへい)ちゅうのもあった。中心となったのはリカント族ぢゃ。ヤツら、なまじ知恵があるだけに始末が悪い。リムルダールの攻防戦のときはかなりの働きをしたそうぢゃヨ。

だが竜王の時代もそう長くは続かんかった。ロトの血をひく勇者が現れたんぢゃ。彼はたった一人で竜王を倒し、アレフガルドに平和をよみがえらしたんぢゃ。そしてその勇者がローラ姫と共に創ったのがローレシアの国ぢゃ。



アレフガルド征服軍グループ編成図

- 竜王
  - 直属親衛隊
    - ダースドラゴン
    - キースドラゴン
    - ドラゴン主戦部隊
  - 魔将軍グループ(六魔将)
    - 上級騎士団
      - 悪魔の騎士
      - 死神の騎士
      - 影の騎士
    - 大魔道
    - スターキメラ
    - ギガンテス(戦死)
    - (新編成)
    - (旧編成)
    - 暗殺部隊・強襲部隊
      - 死霊の騎士〔部隊長〕
      - 死霊
      - 鎧の騎士
      - ガイコツ
    - 攻城部隊
      - ストーンマン
    - 傭兵部隊
      - キラーリカント
      - リカントマムル
      - リカント
    - 魔法部隊
      - 魔道士
      - 魔法使い
    - 偵察部隊
      - メイジキメラ
      - キメラ
      - ドラキー族
    - 人間がつくったモンスター
      - ゴーレム
  - 魔王に操られる下級モンスターグループ
    - スライム
    - 大サソリ
    - ドロル
    - ゴースト
    - メーダ

勇者とローラ姫の子供たちは、サマルトリアとムーンブルクという二つの国を創ったんぢゃ。だが彼らの子孫の時代になって、またしても恐るべき敵が出現した。

邪神を奉じる大神官ハーゴンぢゃ。ヤツの軍団は今までの魔王とはちっとばかり違った編成になっておる。

右側の魔神族の方はいわゆる軍隊型の部隊構成ぢゃが、左の神官族グループの方は軍隊ではない。言ってみれば、新興宗教のような組織になっておるんぢゃヨ。

ピラミッド型の組織の上部には、悪魔神官を議長とする幹部会議がおかれておる。その下におる祈禱師(きとうし)や妖術師(ようじゅつし)と言った連中が、各地の支部を中心に布教活動を行っておったんぢゃナ。ヤツら最終目的は魔界から恐るべき邪神を呼ぶことだったんぢゃ。

ナニ？　悪魔を信じる宗教なんかに入信する者がおったのかぢゃと……。そこはソレ、連中のうまいところでナ、最初のうちは病気や怪我(けが)を直してやったりしてだんだんと信者を増やしていったんぢゃ。

だが中にはヤツらのたくらみに気づいた者もおった。ムーンブルクの王様ぢゃ。

ところが気の毒なことに、あの国はハーゴンの軍団によって皆殺しにされてしまったんぢゃヨ。たった一人の王女をのぞいてナ。

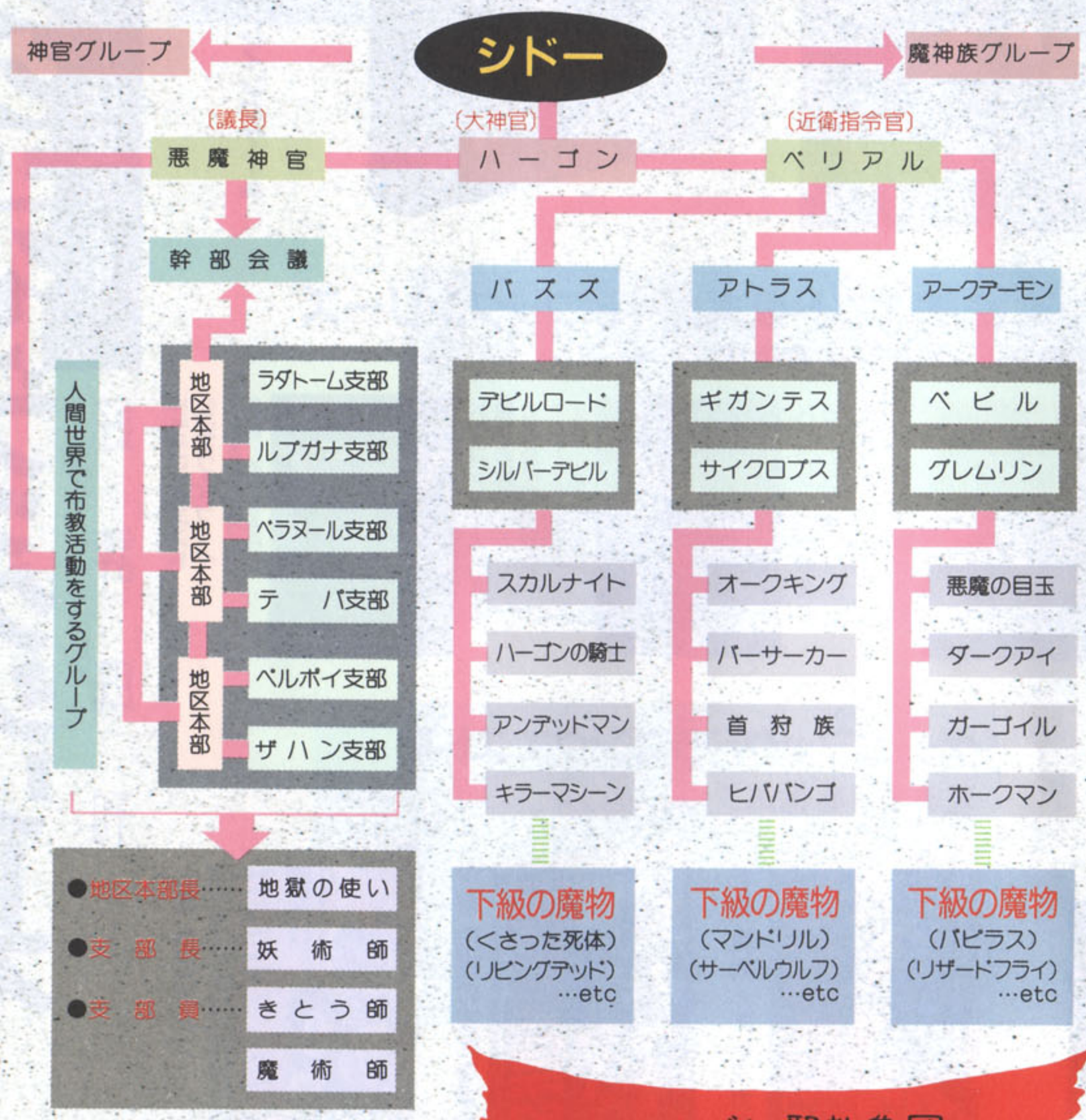
そこに現れたのがローレシアとサマルトリアの王子ぢゃ。そして、彼らとムーンブルクの王女との三人の力によって、邪教の信徒たちは壊滅するんぢゃ。無論、大神官ハーゴンもな。

サテ、こうして三人の魔王たちの作戦を見てきて、ナニか共通点に気づかなんだかナ？

そうぢゃ。方法こそ違え、世界を征服しようとした者どもはみな失敗したということぢゃ。

つまりワシが言いたいのは、たとえどんな力を持っておろうとも、悪は必ず滅びるということなんぢゃ。

それぢゃまた、暇があったらワシの講義を聴きに来てくれ、約束ぢゃソ。



ハーゴン邪教集団
グループ別系統図

ドラゴンクエストブックシリーズ

多彩な視点からロト伝説を追求

好評既刊

小説ドラゴンクエスト

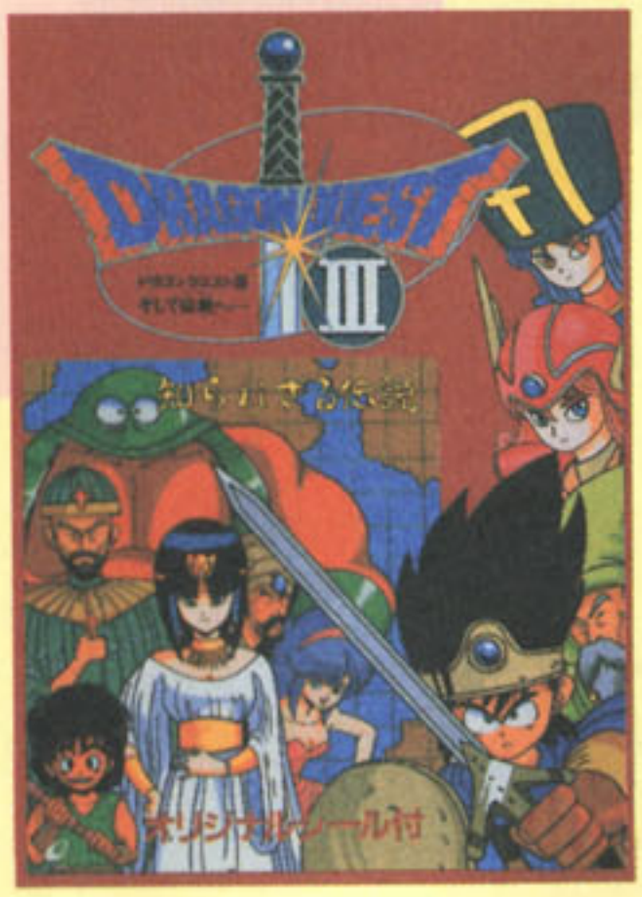
ファミコン史上最高にして最強のロールプレイングゲーム
「ドラゴンクエスト」待望の小説化

高屋敷英夫・著　いのまたむつみ・イラスト
豪華愛蔵本　定価1300円

ドラゴンクエストⅢ そして伝説へ…
知られざる伝説

美しいイラストでつづる
オリジナルストーリー15編

オールカラー・128ページ
A5判・定価700円



ドラゴンクエスト公式ガイドブックシリーズ

3冊そろって絶賛発売中！

ドラゴンクエスト 公式ガイドブック
オールカラー・96ページ
B6判・定価566円

ドラゴンクエストⅡ 悪霊の神々 公式ガイドブック
オールカラー・128ページ
B6判・定価597円

ドラゴンクエストⅢ そして伝説へ… 公式ガイドブック
オールカラー・192ページ
B6判・定価700円

ゲームブックドラゴンクエストⅢ

充実の3巻構成！　文庫判・定価各494円

上巻　勇者旅立つ

中巻　伝説の宝珠を求めて

下巻　決戦！アレフガルド

※定価は税込み価格です。

DRAGON QUEST WORLD GOODS
ドラゴンクエストワールドグッズ

▲ 海賊の宝箱
EP0023　29万8,000円
W90cm×H60cm×D60cm

◀メタルスライム（メタルフィギア）
EP0045　980円

●ドラクエ陶器人形シリーズ

極限までディテールを追求しながら、とってもあったかい手触り。
一つ一つに個性があらわれる手作り陶器人形。

①陶器人形勇者
EP0007　980円
②陶器人形戦士（男）
EP0008　980円
③陶器人形戦士（女）
EP0009　980円
④陶器人形魔法使（男）
EP0010　980円
⑤陶器人形魔法使（女）
EP0011　980円
⑥陶器人形僧侶（男）
EP0012　980円
⑦陶器人形僧侶（女）
EP0013　980円
⑧陶器人形ハーゴン
EP0047　1500円
⑨陶器人形スライム
EP0003　480円
⑩陶器人形ベビーサタン
EP0004　980円
⑪陶器人形アークデーモン
EP0005　1200円
⑫陶器人形ドラゴン
EP0006　1200円
⑬陶器人形スライムベス
EP0042　480円
⑭陶器人形爆弾岩
EP0043　580円
⑮陶器人形魔道士
EP0044　1200円

●ドラクエぬいぐるみシリーズ

もー、カワイクてカワイクて！　ドラクエ最高の人気物、スライムのハンドメイドのぬいぐるみ。他にもいろんなモンスターが登場する予定です。

①スライムぬいぐるみ
EP0001　3500円
W30cm×H27cm
②スライムベスぬいぐるみ
EP0002　3500円
③メタルスライムぬいぐるみ
EP0041　3900円
④ベビーサタンぬいぐるみ
EP0046　3200円
W20cm×H25cm

●通信販売をご希望の方は、住所・名前・電話番号・希望の商品名、数を明記し、代金と消費税３％分に送料・手数料４００円をそえ、株式会社エニックスまで現金書留でお申し込みください。
※送金額＝グッズ代金十グッズ代金合計×３％（消費税）＋400円（送料・手数料）

株式会社　エニックス
〒160 東京都新宿区西新宿7-5-25　西新宿木村屋ビル５Ｆ

●グッズの価格には、消費税３％分は含まれておりません。
●お求めは全国有名デパートで。
●「スライム」はツクダオリジナルの登録商標（24類）です。

ドラゴンクエスト　モンスター物語

原作　ゲームドラゴンクエストシリーズ
シナリオ　堀井雄二

制作
エニックス出版局
編集人　千田幸信
編集　保坂嘉弘
本文構成
ダイナミックプロ
横倉廣
早坂律子
イラスト
中沢数宣
コミック
栗本和博
レイアウト・デザイン
水野敏雄
水野康子
編集協力
苅部明子（ワークハウス）
編集スタッフ
藤枝伊司　（エニックス）
渡辺光比呂（エニックス）
星谷貴子　（エニックス）

1989年7月31日　初版第1刷発行
1989年8月28日　第2刷発行
発行人　福島康博
発行所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7－5－25
西新宿木村屋ビル5F　〒160
Tel 03-369-8982
印刷所　図書印刷
乱丁・落丁本はお取り替えいたします
©Enix 1989, Printed in Japan

ドラゴンクエスト　©エニックス 1986
ドラゴンクエストII悪霊の神々　©エニックス 1987
ドラゴンクエストIIIそして伝説へ…　©エニックス 1988

エニックスの本
好評既刊

●ドラゴンクエスト公式ガイドブックシリーズ

～ドラクエワールドの膨大なデータを
わかりやすく体系化。ファン必携のシリーズ

・ドラゴンクエストⅢそして伝説へ…公式ガイドブック
——B６判オールカラー・定価700円

・ドラゴンクエストⅡ 悪霊の神々 公式ガイドブック
——B６判オールカラー・定価597円

・ドラゴンクエスト 公式ガイドブック
——B６判オールカラー・定価566円

●ゲームブック ドラゴンクエストⅢ

～ドラクエⅢの感動と興奮をリアルに再現！
読むロールプレイングゲーム

上 勇者旅立つ……文庫判・定価494円
中 伝説の宝珠を求めて……文庫判・定価494円
下 決戦／アレフガルド……文庫判・定価494円

●ドラゴンクエストⅢ～知られざる伝説

～美しいイラストでつづるオリジナル
ストーリーブック。人気キャラ総登場！
——A５判オールカラー・定価700円

●小説ドラゴンクエスト

～ファンタジー小説の決定版！
永遠に語り継がれるロト英雄伝説・第一章
——四六判豪華愛蔵本・定価1300円

（定価はすべて消費税を含んだ価格です。）

ドラゴンクエスト物語

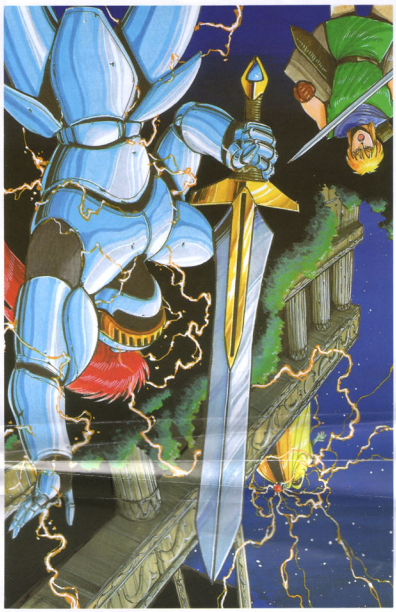
DRAGON QUEST

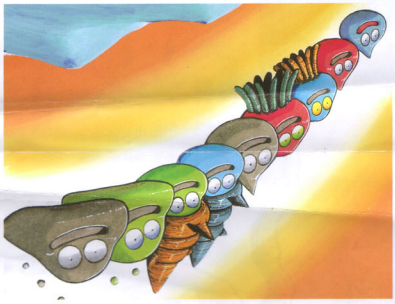
エニックス

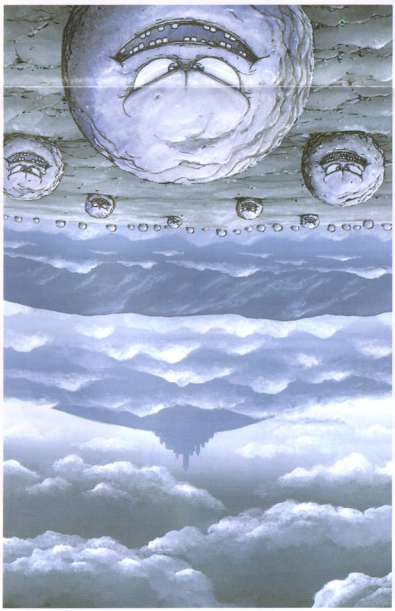
ISBN4-900527-08-4 C0093 P980E

定価980円
(本体951円税29円)

ENIX







ドラゴンクエストワールド

モンスター分類図

魔界系

スライム系
- スライム属
  - メタルスライム
  - スライムベス
  - スライム
  - ペホマスライム
  - ホイミスライム
  - スライムつむり
  - マリンスライム
  - はぐれメタル
  - バブルスライム

翼竜系
- ドラキー属
  - タホドラキー
  - メイジドラキー
  - ドラキーマ
  - ドラキー
- ホーク属
  - ガーゴイル
  - ホークマン
- パピラス属
  - メイジパピラス
  - パピラス

ゴースト系
- シャドー属
  - 魔王の影
  - ホロゴースト
  - シャドー
- 死神属
  - 死神
  - ゆうれい
- ゴーズ属
  - ヘルゴースト
  - メトロゴースト
  - ゴーズト

スモッグ系
- ギズモ属
  - フロストギズモ
  - ヒートギズモ
  - ギズモ
- スモーク属
  - ガスト
  - スモーク
- 精霊属
  - ブリザード
  - フレイム

ドロル系
- ドロル属
  - ドロルメイジ
  - ドロル

ドルイド系
- ドルイド属
  - 鬼面道士
  - 幻術師
  - ドルイド

ドラゴン系
- ドラゴン属
  - ダースドラゴン
  - キースドラゴン
  - ドラゴン
- ヒドラ属
  - やまたのおろち
  - キングヒドラ
  - ヒドラ
- 飛竜属
  - スノードラゴン
  - スカイドラゴン

ナイト系
- ガイコツ属
  - ソードイド
    地獄の騎士
    ガイコツ剣士
  - ハーゴンの騎士
    スカルナイト
    アンデッドマン
  - 影の騎士　死霊
    死霊の騎士　ガイコツ
- ヨロイ属
  - 死神の騎士　キラーアーマー
    悪魔の騎士　地獄のヨロイ
    ヨロイの騎士　さまようヨロイ

マーメイド系
- マーマン属
  - キングマーマン
  - マーマンダイン
  - マーマン

その他
- フクロ属
  - 盗る宝石
  - 笑い袋
- ミミック属
  - ミミック
  - 人喰い箱
- マシン属
  - キラーマシーン
  - メタルハンター
- ?
  - 怪しい影
    (他の魔物が(化けている)

魔人系
- デーモン属
  - ベリアル
  - アークデーモン
- デビル属
  - バズズ
  - デビルロード
  - シルバーデビル
- サタン属
  - バルログ
  - サタンパピー
- 小悪魔属
  - ベビル
  - グレムリン
  - ミニデーモン
  - ベビーサタン

巨人系
- トロル属
  - トロルキング
  - ポストロール
  - トロル
- 巨人属
  - アトラス
  - ギガンテス
  - サイクロプス

岩石系
- 石像属
  - 大魔人
    動く石像
- 鉱石属
  - ストーンマン
  - ゴールドマン
- 爆弾岩属
  - 爆弾岩
- 土魔属
  - 氷河魔人
  - 溶岩魔人
- 泥人形属
  - パペットマン
  - 泥人形

魔界・自然界の混合系

混合魔獣系
- 蝙蝠属
  - キャットバット
  - キャットフライ
- 目玉属
  - ダークアイ
  - 悪魔の目玉
- キメラ属
  - スターキメラ
  - メイジキメラ
  - キメラ
- メドーサ属
  - ゴーゴンヘッド
  - メドーサボール
- ガメゴン属
  - ガメゴンロード
  - ガメゴン
- ガルゴン属
  - マントゴーア
  - ラゴンヌ
  - ライオンヘッド

アンデッドアニマル系
- 死竜属
  - バラモスゾンビ
- 死犬属
  - ドラゴンゾンビ
  - スカルゴン
- デスジャッカル
  - バリゲドッグ
  - アニマルゾンビ

アンデッド系
- ゾンビ属
  - グール　リビングデッド
  - 毒ゾンビ　腐った死体
- ミイラ属
  - マミー
  - ミイラ男
- 吸血属
  - バーナバス
  - バンパイヤ
  - こうもり男

人造魔獣系
- ゴーレム属
  - ゴーレム

自然界系

虫系

多足類
- カニ属
  - ガニラス
  - 地獄のハサミ
  - 軍隊ガニ
- サソリ属
  - 死のサソリ
  - 鉄のサソリ
  - 大サソリ
- イモムシ属
  - 火炎ムカデ
  - 毒イモムシ
  - キャタピラー
- ムカデ属
  - カブトムカデ
  - ヨロイムカデ
- メーダ属
  - メーダロード
  - メーダ

昆虫類
- チョウ属
  - しびれアゲハ
  - 人喰い蝶
  - 人面蝶
- アリ属
  - ラリホーアント
  - 軍隊アリ
  - アイアンアント
- ブラウン属
  - ドラゴンフライ
  - リザードフライ
  - ハンターフライ
  - キラービー
  - さそりバチ

人間系
- 魔道属
  - アークマージ
  - エビルマージ
  - 大魔道
  - 魔道士
  - 魔法使い
  - 魔法おばば
  - 魔女
- 神官属
  - 悪霊神官
  - 地獄の使い
  - 妖精僧
  - きとう師
  - 魔術師
- 呪術属
  - マクロベータ
  - ゾンビマスター
  - シャーマン
  - バーサーカー
  - 闘技士
- 殺人鬼属
  - エリミネーター
  - デスストーカー
  - 殺人鬼

軟体系
- イカ属
  - クラーゴン
  - ヒドラクルス
  - 大ダイオ
- タコ属
  - ウミウシ
  - 大オメクジ
- カニ属
  - しびれクラゲ

植物系
- ウツボ属
  - ウドラー
  - 人面樹
- 食人花属
  - ポイズンキッス
  - マンイーター
- ハンド属
  - ブラッドハンド
  - マドハンド
- キノコ属
  - マージマタンゴ
  - マタンゴ
  - お化けキノコ

動物系

木乳類
- ウサギ属
  - アルミラージ
  - 一角ウサギ
- ネズミ属
  - お化けネズミ
  - 大ネズミ
  - 山ネズミ
- アリクイ属
  - アントベア
  - お化けアリクイ
  - 大アリクイ
- オーク属
  - オークキング
  - ゴールドオーク
  - オーク
- ホーン属
  - ビッグホーン
  - ゴートドン
  - マッドオックス
- 牙獣属
  - キラータイガー
  - サーベルウルフ
- クマ属
  - 豪傑グマ
  - グリズリー
- ゾウ属
  - キラーリカント
  - リカントマム
  - リカント
- サル属
  - コング
  - キラーエイプ
  - 暴れザル
- ヒバンゴ属
  - ブーン
  - マンドリル

八虫類
- コブラ属
  - バシリスク
  - キングコブラ

両生類
- ガマ属
  - 大王ガマ
  - ポイズントード
  - フロッガー

鳥類
- カラス属
  - デスフラッター
  - 大ガラス
- タカ属
  - アカイライ
  - デッドペッカー
  - 大クチバシ
- 魔鳥属
  - 極楽鳥
  - ヘルコンドル
  - ガルーダ